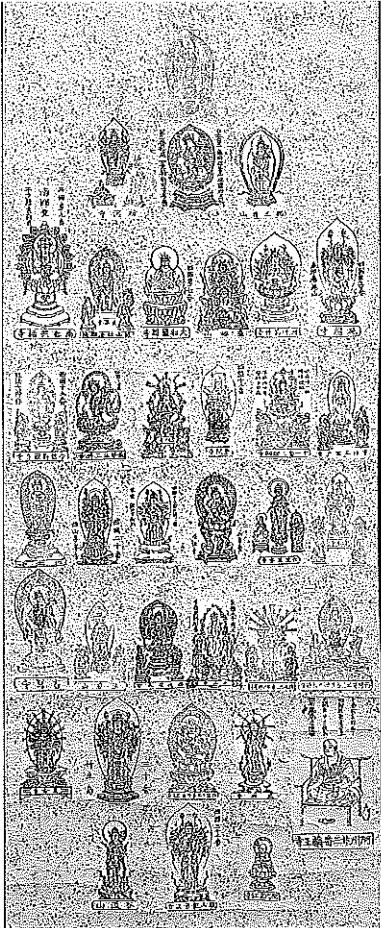
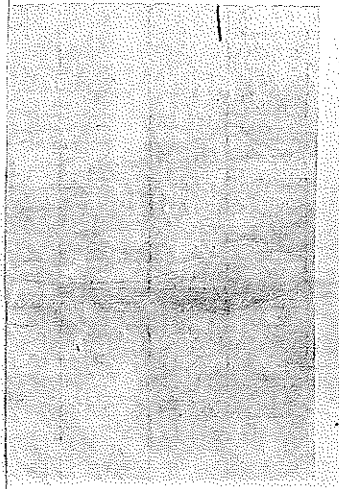


図版一 西国三十三所順礼細見絵図 愛知県安城市・本證寺蔵



図版二 西国三十三所本尊像貼交図 愛知県安城市・本證寺蔵





西園巡禮之拾と普陀落  
傳記之序  
經曰首在靈山妙法華今在  
西寸廣河蒲池妙法華不親觀  
世音之利益因一神云々

日月のあもふのさかたきま  
ある一花を月とあもふ  
夏小今法く死人身とあもふ  
文天祥日神代まきまあもふ  
西園めぐり一花を月とあもふ  
心えとあもふ花を月とあもふ

西園巡禮之拾と普陀落の序  
てありて一花を月とあもふ  
終ひの一花を月とあもふ  
此津津津と拾と普陀落とあもふ  
の序とあもふ一花を月とあもふ  
一花を月とあもふ一花を月とあもふ  
一花を月とあもふ一花を月とあもふ  
一花を月とあもふ一花を月とあもふ

普陀落傳記之序  
一花を月とあもふ一花を月とあもふ  
一花を月とあもふ一花を月とあもふ  
一花を月とあもふ一花を月とあもふ  
一花を月とあもふ一花を月とあもふ  
一花を月とあもふ一花を月とあもふ

西園巡禮之拾と普陀落  
傳記之序  
一花を月とあもふ一花を月とあもふ  
一花を月とあもふ一花を月とあもふ  
一花を月とあもふ一花を月とあもふ  
一花を月とあもふ一花を月とあもふ



西酒須禮

春之序

善法傳記

善法傳記

于小觀世主御長八尺

初春の序... 善法傳記... 于小觀世主御長八尺

# 『西国順礼 普陀洛伝記』

——翻刻と解題——

小山正文

## はじめに

洋の東西を問わず宗教的聖地霊地を巡礼する風習は、古今きわめて盛んである。仏教徒ならばそれは釈尊の四大仏跡（誕生地ルンビニー、成道地ブツダガヤ、初転法輪地サルナート、涅槃地クシナガラ）であり、日本の場合であれば熊野、伊勢へ詣でることをはじめ西国、坂東、父秩の三十三所観音霊場、四国の弘法大師八十八所、はたまた法然上人や親鸞聖人の二十五霊場や二十四輩などの遺跡巡拝が、それにあたるものとして全国的にも大変よく知られている。わけでも西国三十三所観音霊場巡礼は、その歴史と伝統に他の追隨を許さない古さと重みと深い信仰があり、ために三十三札所の由来や利益、案内等を記した文献や地図（図版一）の類も、ほかの霊場巡りのものにくらべ質・量とも格段に遺存度

が高い。それにつき手近にある『国書総目録』第二巻・第三巻、『古典籍総合目録』第一巻、『西国三十三所観音霊場の美術』（一九八七年四月大阪市立美術館・毎日新聞社編集発行）、『西国三十三所霊場寺院の総合的研究』（一九九〇年二月 浅野清編・中央公論美術出版発行）、『西国三十三所—観音霊場の美術—』（一九九五年九月 東武美術館・京都文化博物館・日本経済新聞社編集発行）等々からメモした西国関係の文献類だけでも百点をはるかに越えており、その『道中記』にいたっては「少しく名称を変えて凡そ六十種にも及ぶとされている」（上掲『霊場の美術』二二二ページ）ほか略縁起や本尊（図版二）、寺境の刷物類まで含めれば、まさにそれは汗牛充棟ただらぬものがあるといわなければならない。いまここに全文翻刻しようとする『西国順礼三十三所普陀洛伝記』三十巻もそのひとつであることはいままでもないが、数ある西国関係の文献からあえて本書を選んだ理由は、まず第一に成立年代と編

著者が明確であること。第二に本書の内容を談じた人物が時宗僧であること。第三に巻数からみてもわかるごとく西国関係の現存史料中最大規模のものであること。第四に写本でのみ伝わり版本も活字本も存しないこと。第五に本書はすでに上掲二大目録にも登載されているにもかかわらず、従来まったく注目されなかったことなどによる。以下に本書の成立年代や談者・筆者につき概観し、あわせて管見に入った諸本の概要を記しておきたいとおもう。<sup>註1</sup>

## 『普陀洛伝記』の成立

『西国順礼三十三所普陀洛伝記』（以下『普陀洛伝記』と略称する）は、文字通り紀州那智山（和歌山青岸渡寺）に始まり美濃谷汲山（岐阜華厳寺）に終る西国三十三所観音霊場寺院の縁起、因縁、由緒、来歴、伝記、伝説、利生譚<sup>りしょうたん</sup>および御詠歌<sup>ごえいか</sup>とその釈文などを集大成するもので、全三十巻からなり、類書の中でも最大規模を誇ると共に、その成立年代もすぐあとで触れるごとく比較的早いことが注目されるのである。このような『普陀洛伝記』成立の事情については、その序文（図版三・四）にあらまし次のごとくあって、明瞭に知ることができる。すなわち「過去・未来・現在の三世に妙法花・阿弥陀・観世音があって、その利益は同一牀であると経にいわれている。踏み分けて山に登るふもとの道は多いが、どれもみな同じ高根の月を心にながめることとなる。いまこゝに

受け難き人身を受け、堯・舜のようなよき時代に逢ったことは、前世からの因縁のしからしむるところであろう。おおけなき恵みの道は広く、山川万里どこまで行っても乗馬・舟楫の便があり、夜盗の憂いもない日本国である。このようなときにこそ観世音菩薩の淨利三十三所を順拝すれば、悪業の罪が除かれ来世は善所に生まれるであろう。そういう縁になればとて、昌阿和尚が四条道場で寛延二年八月一日より九月十八日までの四十八日間、西国三十三所霊場寺院にまつわる法談をなされ、同時に了随和尚の説法も行なわれたことである。本書はその阿和尚の説法を拝聴した自分が、覚えてあるほんの十分の一ほどを書きつづり、同志の人にうなずかせんとするものである」というこのような序文より明らかな通り、『普陀洛伝記』は今より二百五十年前の江戸時代中期寛延二年（一七四九）に四条道場で、昌阿が法談した随が説法した内容を書きまとめたものであることが判明する。四条道場はいまもなく京都の四條大路北、東京極大路東に昭和三年（一九二八）まで存在した時宗四條派本山錦綾山豊国院大平興国金蓮寺の<sup>註2</sup>ことで、同寺の住持は代々浄阿を称したから、昌阿は浄阿の音通にほかならない。問題はその昌阿浄阿が第何代目の住持であるかだが、これについては京都金蓮寺に所蔵される『四條道場金蓮寺歴代世譜』の次の記事から、<sup>註3</sup>さいわい容易に特定できらる。

三十三代浄阿上人

三条東正栄寺ヨリ入山正徳二年辰三月形木相承当代不法ノ所業有之ニ付延享年中追放ニ相成候事

三十四代浄阿上人真順大和尚 明和八年二月十五日遷化

尼崎海岸寺ヨリ入山入山年月不詳

『普陀洛伝記』の寛延二年を右の『歴代世譜』に投じてみると次記のごとくになって、それを談じたのは金蓮寺第三十四代浄阿真順であったと明確に断定することができるであろう。

正徳二年（一七一二） 三十三代浄阿形木相承

延享元年（一七四四）

延享五年（一七四八）

延享年中三十三代浄阿追放

寛延二年（一七四九） 『普陀洛伝記』法談

明和八年（一七七二） 三十四代浄阿真順遷化

由緒ある金蓮寺を追放されるにいたった前代の浄阿は恵観という人であったが、その経緯については金井清光博士が名著『一遍と時衆教団』で明らかにしておられる。<sup>註</sup>すなわち、

徳川時代になって三十二代浄阿唯称が病身であったので、元文二年三条橋東の浄土宗正栄寺恵観が師資の契約を結んで三十三代浄阿となり、

後々のことを考えて金蓮寺を時宗・浄土宗・禅宗の三宗兼学にすることにし、四条派末寺と相談して元文四年九月付で約束書を作成した

（名古屋市鶴舞図書館蔵名古屋史資料熱田円福寺文書写本による）。その約束書には金蓮寺塔頭後松庵海

音、寿福庵観月、江州木ノ本浄信寺、泉州堺引接寺統伝、摂州尼崎海岸寺、同善通寺、同放光寺、同正福寺、摂州大和田光明寺、江州小柿常勝寺、江州守山守善寺、同阿弥陀寺、同繕村仏眼寺、濃州表佐阿弥陀寺、京都東山宝福寺の連印があり、これらの寺院とこの約束書を預った尾張熱田円福寺とが当時の四条派の有力末寺であった。ところが恵観は、金蓮寺の三宗兼学とは名目だけで、実質的には鎮西流に改宗し江戸増上寺の支配下に入ろうとしたことが判明したため、円福寺など末寺が騒ぎ出し、触頭浅草日輪寺を通して寺社奉行に訴え、恵観を金蓮寺から引退させるといふ事件があった（上）。

というものであったが、真順はこの事件直後の入寺まもないときに『普陀洛伝記』を談じている事実注目しておきたいとおもう。『歴代世譜』によれば真順は兵庫豊尼崎市の海岸寺より入寺したというが、同寺は福島県会津若松市弘長寺所蔵の『時宗四条派下寺院牒』にも「一撰津国河辺郡尼崎寺町海岸寺」とみえる金蓮寺の有力末寺であった。<sup>註</sup>しかし幕末明治期に廃寺となったのか今は存在しないようである。それについても真順が、弥陀の四十八願になぞらえて四十八日間、西国三十三所霊場寺院の伝記を談じた背景には、相当深い観音信仰と多くの寺院縁起を持

ち合わせていたにちがいがなく、おそらく真順自身がなんども西国巡礼をなしとげていたものとおもわれる。

ところで、『普陀洛伝記』はこのように時宗僧が談じた関係もあって、観音信仰からめ阿弥陀念仏信仰を勧める箇所も少なくはないが、思ったほど時宗色は濃厚でない。それはすでに指摘されているごとく、近世初期に三十三所寺院に坊を構え霊場信仰を支えていた多くの時宗系勧進聖集団や山伏修験者たちが、山内から一掃されて久しいためにそうした面が色濃く出ているのかも知れない。しかしなおこの時期に時宗僧が西国三十三所の伝記を談じたという背景には、かつての時衆と霊場寺院がよく結びついていた歴史事実が存してのことで、まことに興味深い点といえよう。なお真順と共に説法を行なった了随については知るところがないが、『普陀洛伝記』におけるかれの説法というのは、西方極楽浄土往生ことのほか強調する御詠歌の釈文部分が、内容的にみてそれに当るものと考えられ、了随もやはり時宗僧であったと推定される。さて、それでは昌阿・浄阿・真順の法談ならびに了随の説法を聞き書きし、『普陀洛伝記』という大部な書物にまとめたのは誰であったのかといえ、それは実見できた『普陀洛伝記』の七本の写本中、愛知県安城市本證寺藏甲・乙二本〔図版三・四〕の序文あとに記されている「華洛川原／圓通庵夢齋諱誌之」（甲本）・「花洛河東／圓通庵夢齋／諱誌之」（乙本）とある夢齋なる人物をそれに当て、可であろう。残念ながら夢齋についても京都鴨川東の円通庵に住した落飾者らしい姿が想い浮ぶ程

度で、確たる史料を持合せない。ただ『国書総目録』第三卷六三九ページに「西国順礼歌図解さいこくじゆんれいとうたずかい 一冊 ㊦歌話 ㊧円通山主霊注 ㊨寛政元刊 ㊩東博・雲泉」とみえる書名、著者名が何となく『普陀洛伝記』に近いものを覚えるのだが、寛延二年（一七四九）と寛政元年（一七八九）とでは四十年ものひらきがあり、同一人物とすることに躊躇させられるから、夢齋については今後の課題としたい。

### 『普陀洛伝記』の写本

最後に管見に入った『普陀洛伝記』の諸本を紹介しておく。『普陀洛伝記』はすでに記したごとく版本・活字本がないので、その本文は写本でみるほかないが、現在のところ完本・欠本を含め九本の存在がわかっている。いずれの本も全三十巻の漢字まじりひらかな本で、内容的に若干の字句の相違はあるものの異本というべきものはない。たゞ写すにさし多いものは二十八冊、少ないのは七冊とまちまちで、うち十五冊本が二部存するので、そこらが標準的な写本冊数であろうか。実見した七本はいずれも十九世紀半ば以降の幕末期写本ばかりで、『普陀洛伝記』はこの時期なぜか集中的に写伝されたことがうかがわれて興味深い。いづれにしても『普陀洛伝記』は、寛延二年の成立後百二十年でいったんその流布の歴史を閉じ、二百五十年後のこんにち再浮上しようとしているものとも評することができよう。



さて、管見に入った九本の写本というのは、①東京都千代田区永田町の国立国会図書館蔵本〔請求記号181-188〕、②同品川区豊町の国文学研究資料館蔵本〔請求記号ヤ6-3-1-7〕、③大阪市北区中之島の大阪府立中之島図書館蔵本〔請求記号136-12〕、④京都市北区小山上総町の大谷大学図書館蔵本〔請求記号余大1849-1-5〕、⑤愛知県安城市野寺町の本證寺蔵甲本〔図版三〇〕、⑥同乙本〔図版四〕、⑦同丙本〔図版五〕、⑧京都の雲泉文庫杉浦氏旧蔵本、⑨浅野図書館蔵本で、以下各本につき知るところを記しておく。

①は縦二三・五センチ、横十六・七センチの袋綴八冊本で、半葉八行、一行十九字内外の手慣れた筆による気持のいい写本である。各冊内題下に押される丸印より、国会図書館の前身に当る帝国図書館への購求が明治三十二年（一八九九）十一月七日のことと知られ、入館後十五冊本から八冊本へ改装を受けている。したがって該本には改装前と改装後のふたつの表紙があり、前者の原表紙は青刷毛目に黄緑で松葉と熊手模様の刷ったものとなっており、それに銀鉄線下絵網目の烏ノ子紙題簽を左に貼り、「西國順禮 普陀洛傳記卷ノ卷」等の外題を墨書する。後者の現表紙は赤茶色紙表紙で「西國順禮 帝囯図書館蔵」の浮出型押があり、左上に貼られた二重郭刷楮紙の題簽には「西國順禮 普陀洛傳記一、二」等としたため。紙数は旧第一冊四十八枚、以下旧第十五冊まで四十九枚、五十一枚、四十八枚、四十七枚、三十九枚、四十一枚、三十八枚、五十枚、三十一枚、四十五枚、四十二枚、四十八枚、四十三枚、六十枚となってお

り料紙は楮紙である。漢字の多くにふりかなが付され全体に読みやすく他本の誤りも正す点の多い善本で、今回翻刻の底本としたゆえんもそこにある。書写者ならびに書写の年代を明記するところがないが、おそらく江戸末期十九世紀半ばころの写本であろう。

②は昭和六十二年（一九八七）三月発行の『国文学研究資料館蔵和古書目録1972-1986』に「西國順禮 三十三所普陀洛伝記 西國順禮三拾三所普陀洛傳記（内、外） 西國順禮三十三所普陀洛傳記（内、序首） 普陀洛傳記（内、尾） 写 7冊 半 印」山城国北笠置森治〔請求記号〕ヤ6 3 1-7」とみえるものに当る。縦二十四・二センチ、横十六・八センチの袋綴本で、半葉十二行、一行三十二字前後のかなり

字詰密な写本である。その文字はスピード感のある達筆で書かれていて、速筆の割には誤字脱字のすくない善本であり、①と共に『普陀洛伝記』の有力な写本のひとつといえよう。外題、内題、首題、尾題等は『館蔵目録』の通りで、第一冊は巻一より巻四まで三十九枚、第二冊は巻五より巻八まで四十四枚、第三冊は巻九より巻十三まで五十枚、第四冊は巻十四より巻十七まで四十三枚、第五冊は巻十八より巻二十一まで四十三枚、第六冊は巻二十二より巻二十五まで五十四枚、そして第七冊は巻二十六より最終巻三十まで五十五枚を数える。①と同じく料紙は楮紙で、やはり十九世紀中ごろ江戸末期の写しとみられる。各冊はじめに押される「山城國ノ森治ノ北笠置」の黒円印（径三・一センチ）は、旧所蔵者印とも貸本屋印ともみることができが、いずれにしても該写本が京都

方面にかつてあった事実を示す点で注意すべき印といえよう。国文学資料館へは昭和四十九年（一九七四）八月十九日に入っている。

③は閲覧カードから明治四十年（一九〇七）十二月十五日に七十五錢で中之島図書館へ納まったことが知られる十四冊本で、各冊巻頭上部に「住友蔵書」の朱角印がみられる。おそらく住友財閥の前身住友家に伝えられていた写本なのであるが、同家の祖政友は江戸初期に京都で葉種商および書林を兼業したというから、こうした『普陀洛伝記』の写本も蔵書となっても不思議はない。しかし紙質も粗悪な楮紙で筆風も『普陀洛伝記』に共通する江戸末期的な感じのものであるから、住友家の蔵本となったのは比較的新しいことに属しよう。縦二十一・四センチ、横十五・四センチ。袋綴本。第一冊は惣目録・巻一・巻二を二十八葉に、第二冊は巻三・巻四を二十九葉に、第三冊は巻五・巻六・巻七を三十六葉に、第四冊は巻八を四十八葉に、第五冊は巻九・巻十・巻十一・巻十二・巻十三を五十一葉に、第六冊は巻十四・巻十五を二十五葉に、第七冊は巻十六を三十四葉に、第八冊は巻十七・巻十八を三十五葉に、第九冊は巻十九・巻二十・巻二十一を四十四葉に、第十冊は巻二十二・巻二十三を三十七葉に、第十一冊は巻二十四を二十七葉に、第十二冊は巻二十五・巻二十六を三十葉に、第十三冊は巻二十七・巻二十八・巻二十九を三十七葉に、第十四冊は巻三十・巻三十一・巻三十二・巻三十三を三十一葉にそれぞれ写す。半葉八行、一行の字詰も②の国文学資料館本と同様かなり密である。表紙はやゝ厚手の粗末な紙製品で、それに題簽を

貼り「普陀洛傳記惣目録第二二」等の書名を墨書する。

④は元来十五冊本であったが、今は第一冊の巻一・二のみを存し残りの十四冊二十八巻は行方不明となっている。残存の第一冊は縦二二・八センチ、横十六・一センチの袋綴本で、後補の現紙けんかみ表紙に貼られた題簽には「西國願禮三十三所 普陀洛傳記卷の式」とあるが、元表紙もとの外題には「西國願禮三十三所 觀世音傳記 卷之巻」と書かれている。『普陀洛伝記』を『觀世音伝記』と記すのは今のところこの④のみである。普陀洛はいうまでもなく梵語の *Pratyak* からきている觀世音菩薩の住むインド南海岸の山の名で、チベット・中国・日本では転じて觀音の応現地にも使用するから、右の題名も決して誤っていないが、やはり後人の賢さかしらによる改題とみるべきものであろう。本文と共紙とものこの元表紙は元裏表紙と共に後補の現表紙表裏ひょうりにのりづけされているため透かしてみないと読めない状態となっている。本文は半葉八行、一行二十字前後で紙数四十枚を数えるが、共紙ともの元表紙表裏各一枚づつを加えると四十二枚となる。十五冊、八行、二十字前後の構成は①と似ており、本文も悪くないので不明の他冊が再出現することを願わずにはおれない一本である。江戸時代最末期の写本であろう。

⑤〔図版三〕は全三十巻を八冊に写す袋綴本で、序文の部分を除く本文は半葉八行。その大きさは縦二十四・一センチ、横十七・一センチを計測する。紙製の表紙には各冊左に「普陀落伝記」としたゝめた黄色紙の題簽が貼附され、その直下に「巻」より「八」の冊数、および右下に

「八冊之内」の文字を置く。これらはいずれも本文と同筆である。第一冊の紙数は百七枚で巻一より巻四までを写す。以下第二冊九十三枚自巻五至巻八、第三冊九十六枚自巻九至巻十二、第四冊八十三枚自巻十三至巻十六、第五冊六十九枚自巻十七至巻二十、第六冊六十三枚自巻二十一至巻二十三、第七冊九十一枚自巻二十四至巻二十七、第八冊八十五枚自巻二十八至巻三十となっており全巻一筆である。その筆者は第一・二・六・八冊目の各奥書より三崎（三崎）の猶女（直女）という年わずか十三歳の女性とわかり、まことに興趣そゝられものを覚えるが、とてもその年齢の筆致とはおもえない達筆ぶりである。しかし、誤字、脱字、見誤りによる誤写も見受けられ年齢相応の写本と評することもできようか。

「三崎（三崎とも）」は姓名もしくは地名であろうし、「猶女（直女とも）」はナオジヨと読むのであろうが、彼女がいつ写したかについては、それを明示する肝心の第八冊奥書が抹消されてしまっている。しかしその奥書は「普陀洛傳記 八冊／慶應四年（この行抹消）／正月吉日／三崎直女写之」と読めるので、江戸最末期慶應四年（一八六八）の写本であることがわかる。筆風、楮紙の紙質からもその点は十分首肯できるものがある。周知のように同年正月三日に鳥羽・伏見の戦が始まり、九月八日に明治と改元、翌同二年（一八六九）五月十八日五稜郭の戦で、あの戊辰戦争も終息に向うが、こうした激動の前夜にこの本は名もなき信心深いひとりの女性によって写されたのである。数ある『普陀洛伝記』の中でもこの本のみが筆者と書写年次がわかる貴重な写本で、以後『普

陀洛伝記』は筆写された形跡もないまま忘れ去られた格好となって、現代にまでできてしまった感が深いともいえるのである。

⑥〔図版四〕は元来二十八冊からなる現存最多冊の写本で、はじめ十三冊を前編、残り十五冊を後編とする特殊な巻立をもつ。いま後編の第一・二・四・五・十二冊目の計五冊を欠くが、縦二十二・四センチ、横十五・七センチの袋綴本で、半葉八行、一行十八字内外で、漢字には多くふりかなをつける。薄手の楮紙に書かれるその文字はあまり達筆とはいえず幕末期の写本であろう。各冊表裏の厚手表紙は雲竜紋様を型押しで浮き出しにした立派なもので、その左に蓮華をあしらった棹取り付の題簽を貼付するが、題簽の文字「西國願禮 普陀洛傳記」は、他本のごとく墨書ではなく版木印刷となっている点が注目される。各冊の葉数は次のとおりで、欠本分を含めるとその総計は六百五十枚近くを数えるものとなる。前編第一冊二十二枚、第二冊二十一枚、第三冊二十一枚、第四冊二十三枚、第五冊二十二枚、第六冊二十二枚、第七冊二十一枚、第八冊二十五枚、第九冊二十一枚、第十冊二十三枚、第十一冊十八枚、第十二冊二十四枚、第十三冊二十一枚、後編第三冊二十八枚、第六冊二十五枚、第七冊二十一枚、第八冊十九枚、第九冊二十三枚、第十冊二十四枚、第十一冊二十二枚、第十三冊二十六枚、第十四冊二十四枚、第十五冊三十一枚。⑥はこのように前後編にわけると巻立や表紙を立派にし題簽を印刷しているなどの特色のほかに旧所蔵者を示す黒印、朱印がいくつかが押捺されていることも注目すべきであろう。印は全部で九種類ありは

とんど各冊にみられる。まず仮に(イ)とする角黒印(一・九×一・五センチ)は、最後後編第十五冊目の表紙裏と大尾直下の二ヶ所に押されているが、墨が薄いために印文の判断は不可能である。しかし全部で十種類の中最初に捺された可能性があり、特に大尾下にそれが認められる事実は、ことによると筆写印かも知れず、あるいはいちばんはじめにこれを所持した人の印であった可能性もあろう。判断不能なのがかえすがえすも残念というほかない。(ロ)もやはり最終冊の表紙うらにたゞ一ヶ所押される角黒印(三・一×二・六センチ)で、「京富小路／俵屋治衛／都三條上」と読め、同人の印は右を略した(イ)「俵治」の角黒印(二・三×一・一センチ)が、前編第一冊と不明の五冊を除く二十二冊の巻頭にそれぞれみえるが、(ロ)を含めすべて(二)丸黒印(径二・六センチ)で抹消されている。京富小路三条上ルの俵屋治衛から所有が移ったからにちがいない。俵屋が宝暦五年(一七五五)創業という京銘菓雲竜のそれとすれば、厚手表裏表紙の浮出型押雲竜紋も納得いくものがあるも確かなことはわからない。(ウ)・(イ)が(二)によって抹消されたあと(ホ)「近徳」(二・四×一・四センチ)なる角黒印と(ニ)羽の鳥を彫った竹製の朱丸印(最大径二・一センチ)が同時に押されたようである。全冊に押印されているので、あるいは貸本屋の印でもあろうか。その後この本は倭志貴耳梨之里の柏堂書庫に納まったことが全冊のおもて表紙裏に押される(ト)「倭志貴縣／柏堂書庫／耳梨之里」という朱角印(三・八×三・八センチ)とうら表紙裏に置かれる(フ)「倭志貴縣耳梨之里」(五・一×

〇・九センチ)、(リ)柏堂書庫「(三・四×一・四センチ)の同じく長方形朱印よりわかる。倭は大和で現在の奈良県とおもわれ、志貴縣は今の樞原市あたりであろうか。耳梨之里は畝傍山・香具山と共に大和三山のある耳成山付近のことかとも想像するが、柏堂書庫は寡聞にして知らない。なお⑥にはこれ以外に後編第七冊の表紙裏貼中にも「万御」らしき二文字が、わずかにみえる(ヌ)黒印(約三・〇×一・九センチ)があるも、これは書冊そのものと関係なく料紙に最初から押されていた覚え印かも知れない。ちなみにこの印の横には「一写早」かとも読める本文とは異筆の墨書があり、こうした異筆の墨書はすぐ前の第六冊目最末尾にも「加藤仁俊」と書かれているものが目につく。後者はことによるとこの本が一時期加藤仁俊なる人の所有物であったことを示すのかも知れないものゝ、いずれも本文と直接関係なさそうな文字である。⑥において貴重な点は序文の終りに『普陀洛伝記』の編者が円通庵夢斎であった事実を明記していることで、この記載をみるのは実にこれとさきの⑤だけで、他本になぜ記されていないのか不思議でならない。しいて『普陀洛伝記』の系統をわけると、夢斎の記載有無をひとつのポイントに置くこともできるかも知れないであろう。いずれにしても⑥は特色豊かな写本だけに欠本の五冊がかえすがえすも惜しまれてならない。

⑦「図版五」は『普陀洛伝記』の巻二十一から巻二十四の四巻分に相当する端本一冊で、札所番号でいうと二十番善峰寺、二十一番穴穂寺、二十二番総持寺、二十三番勝尾寺、二十四番中山寺の五ヶ寺分である。

縦二十三・七センチ、横十七・二センチの仮袋綴で、紙数百三枚を数える。第一葉表を表紙とし中央に「西國顯微 普陀洛傳記」と大きく墨書する。本文は半葉八行、一行二十字内外で他本に比し濁点が多く日立ち、やはり江戸末期の写本であることがわかる。一冊の枚数が百枚をこえているので、全巻このペースで写されたものとするならば六〇七冊本になっていたであろうと想像され、他冊の出現がこいねがわれないならぬ写本のひとつである。

⑧と⑨は所在の確認ができておらず詳細は不明の状況にある。⑧は『国書総目録』に「雲泉（寛延二写一〇冊）」とあって、あたかも寛延二年成立当初の原本であるかのごとき記載がされているが、編著者夢齋の名を出していないので原本ではなからう。おそらく典拠の『雲泉莊山誌』が『普陀洛伝記』の序文より、その成立が寛延二年と記したのを『国書総目録』は右のごとく示したにすぎないものとおもわれる。

⑨は同じく『国書総目録』に「三冊」と出ているが、冊数からみて端本の可能性が高い。所蔵は旧浅野とあり、その浅野図書館は『国書総目録』の「図書館・文庫一覧（昭和五十七年九月調べ）」によれば、「○戦災その他で焼失または所在不明のもの」となっているから、今はもう残念ながら存在しないであろう。

## おわりに

以上の九本が目下知られる『普陀洛伝記』の写本である。通覧していることは、書風に共通性があり江戸時代末期の十九世紀半ばごろによく写伝されたことがわかること。現在みることでできる完本は、①・②・③・⑤の四本であること。⑤・⑥の二本から『普陀洛伝記』の編著者が京都円通庵の夢齋であったことがわかり、この記載の有無が写本の系統をたどる上で重要なこと。写本間にたとえば第六巻の七番札所岡寺に登場する義淵大僧止の寺が、底本の①では東福寺となっているのに対し②・③・⑥は東大寺、⑤は興福寺というふうに相違するが、こうした点も写本の系統を考える場合無視しがたいこと。書名の文字につき順札・巡礼、三十三所・三十三処・三拾三所・卅三所・参拾参所、普陀洛伝記・普陀落伝記・観世音伝記と写本によってさまざまに記されるが、深く拘泥する要はなく、内容的にみても本書には異本といわれるようなものはまったく存在しないこと等々である。

近年、西国三十三番札所めぐりはなかなか盛んなものがある。しかしただ単に物見遊山の気分での集印に終るだけでは空しい。各札所の観音伝記を十分知った上で巡礼してこそ利益も広大というものであろう。そうした点でこの『普陀洛伝記』は、たとえ江戸時代中期の成立とはいえ京都四条道場金蓮寺第三十四代浄阿真順なる時宗僧が談じたものとし

て大変興味深く、またその収められる膨大な説話も、古代・中世にまで原話がさかのぼれるものも見受けられて非常に貴重視されるのではないかと考える。

翻刻にあたっては安城市在住の鈴木美保子さん、同朋大学の渡辺信和氏、国立国会図書館の間島由美子さんにひとかたならぬお世話になった。記して満腔の謝意を表する次第である。

註

- 1 『西国順礼三十三所普陀落伝記』については、すでにその大要を左記の拙稿で述べたが、新たな写本も出てきたので、今回の翻刻を機に重複するところあるも本稿を草することとした。  
 小山正文、『西国巡礼三拾三処普陀落伝記』—四條道場金蓮寺淨阿真順法談本—（『時宗教学年報』二二） 一九九四年三月。  
 2 時宗教学研究所編『時宗辞典』 一九八九年三月 時宗宗務所教学部 一二八ページ。  
 今井雅晴編『一遍辞典』 一九八九年九月 東京堂出版 一三三三ページ。  
 3 金井清光『一遍と時衆教団』 一九七五年三月 角川書店 四四三ページ。  
 4 同右 同ページ掲載図版。  
 5 同右 同ページ掲載図版。  
 6 吉井敏幸『西国三十三所の成立と巡礼寺院の庶民化』（浅野清編『西国三十三所霊場寺院の総合的研究』所収） 一九九〇年二月 中央公論美術出版。  
 7 甲本の川原⇨河原町より、乙本の河東⇨鴨川東の方がよいようにおもわれる。なお京都市の上京区・左京区・伏見区に円通寺を名乗る寺が、現在三ヶ寺あるも円通庵との関係は不明である。  
 8 杉浦丘園氏の『雲泉莊山誌』は、(一)『慶長年間刊行本』、(二)『江戸時代之

書目』、(三)『石門心学関係図書及資料』（附別冊二冊）、(四)『家藏慶長以前紀年金石類』、(五)『家藏看板図譜』、(六)『すゝろく』（未定稿）、(七)『家藏祇園会に関する資料及文献』、(八)『家藏松会板之書目』の八卷十冊からなり、昭和三年（一九二八）の刊行だが、その後杉浦氏の雲泉文庫はどうなったのか詳細は不明である。

9

④の大谷大学図書館蔵本も含めれば五本になる。

この場合本数からみて東大寺を採用すべきであろう。おもうに岡寺の義淵はじめ元興寺へ入り唯識・法相をひろめた人として有名であったから、元興寺衰退後の法相本山といえば興福寺ということになり、さらに京都で生まれた『普陀落伝記』は、東大寺と興福寺の寺名より名付けられた東福寺と書かれるに至ったものと推考される。

11

『西国順礼 普陀落伝記』がいちばん多いので、これが多分正式の題名ともわれる。

12

『普陀落伝記』の最後に十種の功德があげられていることをおもいあわせたい。

西国三十三所

第一番	那智山	青岸渡寺	和歌山県	二一頁	第二番	補陀洛山	總持寺	大阪府	一九二頁
第二番	紀三井山	金剛宝寺護国院	和歌山県	二五頁	第三番	応頂山	勝尾寺	大阪府	一九九頁
第三番	風猛山	粉河寺	和歌山県	三〇頁	第四番	紫雲山	中山寺	兵庫県	二一一頁
第四番	槇尾山	施福寺	大阪府	三八頁	第五番	御嶽山	清水寺	兵庫県	二二五頁
第五番	紫雲山	葛井寺	大阪府	四三頁	第六番	法華山	一乗寺	兵庫県	二三三頁
第六番	壺阪山	南法華寺	奈良県	五二頁	第七番	書写山	円教寺	兵庫県	二三五頁
第七番	東光山	岡寺龍蓋寺	奈良県	五七頁	第八番	成相山	成相寺	京都府	二四一頁
第八番	豊山	長谷寺	奈良県	六二頁	第九番	青葉山	松尾寺	京都府	二四四頁
第九番		興福寺南円堂	奈良県	七九頁	第一〇番	敝金山	竹生島宝殿寺	滋賀県	二四八頁
第一〇番	明星山	三室戸寺	京都府	八五頁	第一一番	姨綺耶山	長命寺	滋賀県	二五二頁
第一一番	深雪山	醍醐寺	京都府	九一頁	第一二番	織山	観音正寺	滋賀県	二五六頁
第一二番	岩間山	正法寺	滋賀県	九六頁	第一三番	谷汲山	華厳寺	岐阜県	二五八頁
第一三番	石光山	石山寺	滋賀県	一〇八頁					
第一四番	長等山	三井寺園城寺	滋賀県	一二七頁					
第一五番	新那智山	今熊野観音寺	京都府	一三五頁					
第一六番	音羽山	清水寺	京都府	一三八頁					
第一七番	補陀洛山	六波羅蜜寺	京都府	一五四頁					
第一八番	紫雲山	六角堂頂法寺	京都府	一六四頁					

凡例

一、本書は、国立国会図書館蔵本『西国順礼三十三所普陀洛伝記』（図書請求記号I8117188）を翻刻したものである。

二、翻刻にあたっては、底本の書式・体裁など、出来る限り原本の面目を逸しないように再現することを旨とした。意の通じない処、誤字等もそのままとし、注記を施さなかった。

三、変体仮名、旧字体、略字、俗字、異体文字等については、変体仮名は通行の文字に、また旧字体以下は新字体、通行の字体に極力改めた。

四、本文中には一部差別的表現がみられるが、歴史資料としてそのままとした。

西国順礼三十三所 普陀洛伝記 卷ノ壹

(1オ) 西国順礼三十三所 普陀洛伝記序

経きやうにいわく昔しやう在ざい靈りやう山せん妙めう法ぽう花け今こん在ざい西  
方ほう名めう阿あ弥み陀た婆ば示し現げん觀くわん世せ音おん三さん世せ利り  
益やく同どう一いつ躰たいわけのぼるふもとの道みちは多おほ

けれとおなじ高たか根ねの月つきをこそは心こころにかゝる  
なれかしこも今受かたき人身じんしんをうけ  
殊ことさら堯ぎやう天てん舜しん日じつの御代みよに逢あふ事

(1ウ)

まことに前因ぜんいんのしからしむる所かおほけ  
なきをおんめくみのみちみち広く山やま川がは万ま里り  
のはてにいたるまで乘しやう馬ば舟しゆう橋きやうのたより  
ありて夜よるゆくにも白浪はくろう狼ろう狽たいのうれぬ

(2オ)

なし此時しやうに乗のりして救世きうせ大士だいしの淨利じやうり三さん十じゆ  
三所さんしよを順しゆん拜はいせは悪業あくごうのつみをははふき来ら  
世善せぜん所の縁えんともなりなんかしと昌阿しやうあ和尚おしやう  
四し条じやう道場だうじやうにおゐて寛延くわんえん二に巳年し八月あち朔日しやくにち  
より九月十八日くわんげふじゆちゆうじちまで四十八夜の間の法  
談だんならひに了りやう随和ずいわ尚しやうの説法せっぽう有りしあ



(3オ)

らまし覚へし十分の一を書つゝり同  
志の人に黙頭せんといふ事しかり

惣目録

卷ノ壹

西国三十三所順礼の由来

花山院三十三所の観世音御順礼

卷ノ貳

一番紀州室の郡那智山観世音

附り生仏上人滝にて荒行の事

二番紀伊国紀三井寺観世音

附り厄病神の絵馬の事

卷ノ参

三番紀州那賀郡かさし村粉川寺観世音

附り渋川郡左太夫箸筒の事

卷ノ四

四番和泉国巻の尾寺仙樂院観世音

附り観世音仮に南方より来り給ふ事

五番河内国藤井寺観世音

(4オ)

附り藤井安元地獄へ落る事

卷ノ五

出雲坊観世音の利生を蒙る事

六番大和国壺坂観世音

附り座頭沢都不思議の事

卷ノ六

七番大和の国岡寺観世音

附り長門国青野百姓娘破舟に逢事

八番大和の国長谷寺観世音

卷ノ七

長谷寺観世音御利生の事

附り廊下ならびに瓦の事

卷ノ八

長谷寺未来の鐘の因縁の事

九番南都興福寺南円堂観世音

附り西国三十三所靈験に有利生の事

卷ノ九

十番山城の国宇治の三室戸観世音

附り同国久我の庄西方寺本尊の事

并 弥陀次郎といふ寺の事

十一番山城の国上の醍醐観世音

(3ウ)

卷ノ十

地藏尊御利生之事

十二番近江国岩間寺觀世音

卷ノ十一

雷の説の事

附り猫の怪異の事

卷ノ十二

十三番近江国石山寺觀世音

卷ノ十三

石山寺觀世音御利生の事

附り尊弁僧都説法の事

卷ノ十四

奈良海道念仏石の因縁之事

十四番近江国三井寺觀世音

卷ノ十五

祇園精舎のかねの事

附り俵藤太秀郷か事

十五番山城国今熊野觀世音

附り大仏三十三間堂の事

并 滝口横笛か事

卷ノ十六

(6ウ)

(6オ)

(5ウ)

十六番山城の国清水寺觀世音

附り田村將軍伽藍建立之事

并 鈴鹿山鬼丸の事

卷ノ十七

盛久觀世音の御利生を蒙る事

附り景清牢やふりの事

卷ノ十八

十七番山城国六波羅密寺觀世音

附り空也上人由来の事

并 六斎念仏の起りの事

鉢叩のゆらいの事

脇立地藏尊奇瑞の事

卷ノ十九

十八番山城の国六角堂頂法寺觀世音

附り聖徳太子諸国御順見の事

卷ノ二十

十九番京の草堂行願寺觀世音

附り鹿の子を愛して死する事

并 岡崎村大工觀音を信じ難を免る事

卷ノ廿一

二十番山城国善峯寺觀世音

(7ウ)

(7オ)

(8オ)

附り宇都宮蓮生坊か事

并 火車来迎の事

卷ノ廿式

二十一 番丹波の国穴穂観世音

附り観世音身替りに立給ふ事

并 蓮華比丘尼物語りの事

卷ノ廿三

二十式 番撰津の国惣持寺観世音

附り亀に乗給ふ子細の事

(8ウ)

卷ノ廿四

二十三 番撰津の国勝尾寺観世音

附り清和帝勝尾寺へ御幸の事

卷ノ廿五

播磨の国教心入道か事

二十四 番撰津国中山寺観世おん

附り利生さまの事

卷ノ廿六

中山日あけの如來の事

附り美女御前の事

卷ノ廿七

廿五番播磨の国新清水観世音

(8オ)

附り飼犬の恩を忘れぬ事

廿六番播磨の国法花寺観世音

附り法道上人飛鉢の行の事

卷ノ廿八

廿七番播磨の国書写寺観世音

附り和歌三神の硯の事

廿八番丹波国成相寺観世おん

附り三しうにくの事

并 功德多少に寄らざる事

卷ノ廿九

廿九番若狭の国松尾寺観世音

附り惣太夫女護嶋へ吹流さるゝ事

三十番近江の国浅井郡湖中竹生嶋観世音

附り巨勢の金岡神像を写す事

卷ノ三十

三十一 番近江の国長命寺観世おん

附り白髭大明神弘法大師と問答之事

三十二 番近江国神崎郡観音寺観世音

附り人魚の説の事

并 八百比丘尼若狭風土記の事

三十三 番美濃国谷汲華厳寺観世音

(10ウ)

(10オ)

(9ウ)

附り奥州永井文殊の事

并 順礼十の徳ある事

惣目録畢

(11オ) 西国順礼 普陀洛伝記 卷の巻  
三十三所

目録

一 西国三十三所順礼の由来

一 花山院三十三所の観音御順礼

(12オ) 普陀洛伝記 卷の巻

西国三十三所順礼の由来

抑西国三十三所順礼といふ事はいつ  
のころより始まりて功德は何ほどの

事そと尋ぬるにむかし 聖武帝の

神龜年中大和国初瀬寺の開山

徳道上人と申はちどう兼備のた

つとき名僧にておはせしかあるとき頓

死し給ふにあやしげなる官人二人

(13オ)

上人の前にきたりてわれは焰魔  
王よりの使なり上人をともしひ申

へしとの仰によつてまいりたりと有

ければ上人有かたや焰魔王よりの御

めしとあるに辞退申へきいわれなし

早々に参るべし案内をし給へとのた

まへばしからはとて式人の官人さき

にたちて案内するにひやうくたる野

ばらをすき行にはるかむかふに鉄城

ありほどなくその所にいたりて見れ

は大門大殿ありてその結構さ金銀

珠玉をちりばめてひかりかやくあり

さま言葉にもべられすすなはち上

人を大殿に請し焰魔王出させ給ひ

て多みをふくませたまふに御かほばせ

美玉のごとく上人うやくしくいかなる

事によりてか召れつるそやとたつね

給ふに焰魔王のたまわくされはとよ

いま日本の地におめて救世観音の浄

土といふ霊地三十三所ありひとたび此

霊地をめぐるものは地ごくに落る事

(13ウ)

(14オ)

(14ウ)

(15オ)

なし観世音は三十三躰に身をわかち  
 縁にしたがひて末世の衆生をさいど  
 成し給ふにかゝる靈地なれどもかつ  
 て知る人もなくそのうへ善根を成  
 さす悪業をつくりて日々に死し来  
 たるもの極楽へとはゆくものな  
 く只地ごくへおち来るものゝ多き  
 事たとへは夕立の雨のことく我是を  
 なげきかなしめともみな我とわが身  
 にてつくるつみとがのむくひこゝろの  
 鬼にせめられる事こそ是非もなけ  
 れ何とそこの観音の浄土ある事  
 を衆生にしらしめ観世音の利益  
 をうけて地獄の苦げんをうけざる  
 やうとおもへども此事をつけ知らず  
 へきものなししかるに上人は誠に  
 ほさつともいふへき名僧なるに依て  
 観世音の浄土三十三所を知らせ末  
 世にひろめさせたまひなばその  
 利やくたとへ一とたひたりともこの  
 靈地をめくるともからは足のう

(15ウ)

(16オ)

(16ウ)

らより光明をはなちて一百三十六  
 地ごくをふみやふるのくどくあり  
 もしあやまつて地ごくにおとす  
 ものならばわれすなわち妄語  
 のつみにをちてそのものゝ身にかわ  
 りて地ごくのせめ苦をうくべし  
 三十三所はそこゝなりとおしへ  
 給ひ此事を知らせんためによびむ  
 かへたりと仰せけるに徳道上人はあり  
 がたくそんしさりながら末世の衆生  
 只うたかひのこゝろふかければこれ  
 をいかんかせんとなげきたまふに焰王  
 もげにさも有べき事なりとて宝  
 印を下し給われは上人焰王に謝し  
 奉りて玉殿をしりそきてたまふに  
 はしめ道びきたる二人の官人  
 出きたりて上人を娑婆世界へおくり  
 奉るさても上人は三日三夜のあいだ  
 死し居給ふといへともいまた身軀に  
 あたゝまり有るかゆへに御弟子も  
 しや蘇生たまふことの有らんかと葬

むりの事もせず守りい給ふに不し

きなるかな三日ありて蘇生した

まふ御弟子たちはよろこひあつ

まりいたわりかしたつき申に徳道上

人は右の御手をにぎり詰給ひてま

ことに焰王より御わたしありし石

の宝印を手にもつとおほしくて手

をひらき見たまへはありかたやまさしく

宝印手のうちにあり御弟子た

ちへこの程の次第を御ものかたり有り

てそれより徳道上人は御弟子を

つれられ西国三十三所順礼のせんだち

と成り給ふそも／＼日本にて観音堂

のはしまりは撰津国中山寺にして

聖徳太子の御建立なり此ゆへに

よりて中山観世音を一ばんとして

めくり給ふ彼焰王よりさつかり

たまひし宝印を石のから戸に入て

中山寺におさめたまふ観世音はかた

しげなくも十方諸菩薩の慈悲

をかためてもち給ふすなわち仏と

(17オ)

(17ウ)

(18オ)

申は慈悲の躰なり

仏とはなにをいわまのこけむしろ

たゝじひ心をほとけとはいふ

徳道上人焰王の御かほばせ美玉の

如しとの給ふまたとういきねん利益

ふつに奥州外かはま木村弥五兵衛蘇生

してめいどの物かたりいたせしに焰魔

王の御かほばせうつくしといひしと

ありしかればうつくしきにちかひなし

古今ゑんま王の像をつくるにこと

(18ウ)

ごとくすさましくおそろしきかたち

なりこれは己れおのれか見る所なり

たとへは悪人なればおのれにくきやつ

と白眼つけいかりたまふゆへおそろし

く見ゆるまた善人なればいかり給ふ

事あらずしてゑみをふくませたまふ

これ人間界にてもおなし事たとへは

きにいらぬものには自然と顔付悪し

く気にあふものにはうちとけはなし

をするそのことくなり

(19オ)

花山院御順礼

(19ウ)

三十三所順礼一ばんは中山寺成りしに  
那智山を一ばんとして中山てらの  
廿四番と番つけ入かわりたるをいかな  
るゆへそと尋ぬるに人皇六十五代花  
山院の帝紀州熊野へ御参詣より始ま  
る花山院は六十三代冷泉院御子にて  
御年十七才にて御位につかされたまひ  
御后は関白頼忠公の御むすめなり

(20オ)

しかるに藤はらの為光卿の御むすめ  
入内なざしめ弘徽殿におかれて  
御寵愛浅からすまことにひらきかゝる  
花につゆをそゝきし御よそほひ弘徽  
殿にまし／＼けるとてすなわち弘徽殿  
とは申せしなり其ころ大内裏とて殿  
舎の数も多くそのかまへ広大にして  
また女御更衣などいふ女官たちも三  
千人そなへり其中に弘徽殿は御寵愛  
ふかきにより御威勢日にましいまはは  
や日の本のうちに女といふものは弘  
徽殿にとゞまりたり三千の女官たち  
は日かけとなればとて弘徽殿御ひと

(21オ)

りを三千人の人々うらみたまへば  
何かはもつてたまるへき御年十七才に  
て御命終らせ給ふみかとの御なげき  
は申も中々おろかなりされども今は  
はやその面かけとても見へされは只明  
くれなげかせ給ふ折から粟田の関白道  
兼公のもたせ給へる扇子を御殿に  
わすれ置給ふ女官たちひろひとり  
てあちらこちらともてあるくを

(21ウ)

みかと御覽し付て取よせて御覽するに  
妻子珍宝及王位臨命終時不隨者と  
いふ大師経の文を書附たり誠に死すれば  
妻子といへともなふものなく宝も  
身につけず六道をわかれ／＼にゆく成る  
へし若きとて頼みなしくらいあれば  
とてのかれすゆめまほろしの浮世  
なりと御発心出来させ給ひ寛和二年  
六月廿三日の夜にいたり左中弁是成  
中納言よしかけ卿二人を御供につれさ  
せ給ふて内裏をはしのひいてさせ給ひ  
西洞院通り安部清明か家のまへを

(22オ)

通らせ給ふとてふと内を見入させ給ふに清明はあつさにやたへかねけん夜はふけぬれどいまたふしもせてすゝみ居たりしか空をなかめて大におとろき

天子位をのかれさせ給ふのよし天文に

あらわれたりとてあわてさわぎ内裏へ

参る花山院は此よしをきこし召てあら恐

ろしの清明やと仰られそこを立のかせ

給ひ山科の花山へ御いそぎ有て内裏

には清明かはせまいるによりはしめて

此事を知りこゝかしこと尋ね奉れとも

さらに御ゆくゑ知れすやうゝ明かたに

山科にましますよしは聞へけれとはや

夜の内に御くしをもおろさせたまひ御

名を入覚とかへさせたまひ左中弁是成中

納言よしかけも入道しそれより熊

野三所権現へ御参詣ましまさんとお

ほしめし綾羅錦繡の御しとねをすて

させ給ひ御草鞋に御つへかさにて

熊野にいたらせましましけるに三所権現

殊に感応ましゝて告させ給ふには法皇

(23ウ)

のこれまで御参詣まことに殊勝の御心さしを感じてつけ知らせ申なり今

日本の地に觀世音の淨三十三所あり

むかし大和の國初瀬寺の徳道上人

へ焰魔王より此浄土を一たび順礼したるものは地獄に落すまじとゑんま

王のちかひてしるしに宝印を徳道上人

へたまわりしを中山寺におさめてそれ

より觀音三十三所を順礼有けるかその

のちたへてめくるものあらず法皇今先

達となり給ひて觀音三十三所の浄土

をめぐりはしめ給ふへし案ない者

には河内の國國石川寺に仏眼上人といふ

名僧ありこれに尋ね給ふへしと御つ

けあれは法皇はあら有かたやさほど

霊場ならんには早々廻るへしとて河

内の國へ御いでましゝ石川寺仏眼上人

に御対面ありわれは花山法皇なり熊野

権現のおつげによりて来りいま日本に

三十三所の觀音の浄土有るを上人克

(24ウ)

これを知りたまふよく順礼の案内

(23オ)

(22ウ)

(23ウ)

(24オ)



を上人にたのめとある権げんの御

つげなりと仰有りければ上人はなみ

だをながし十善天子の御位をす

て有かたき御ころさしかなさらば

御供申べしとて仏眼上人は熊野

権現をも御供のためまつ一番に熊の

へ御参詣ましぬ是よりして那智

山一番にはなりたるなり仏が上人は

目より光明をはなちて経文を見給ふ

ほとの名僧なりこれによつて仏のま

なこと書て仏眼とは申せし也弘徽

殿は救世観音大土の変化なりかりに

弘徽殿とかたちをあらはし煩惱ほつ

ぼだい心の利益を成し色情より花

山院にぼだい心をおこらせまいらせ

観音の浄土の三十三所のかたを

しめさせたまふ今世となふるところ

の三十三所三十三首の御ゑい歌は

すなはち花山院法皇仏眼上人とめくり

たまふ時の御詠歌なり

(25オ)

(25ウ)

普陀洛伝記 巻の巻畢

(26オ) 西国願礼 普陀洛伝記 巻の弐  
三十三所

目録

一 壹番紀州室の郡那智山観世音

附り生仏上人滝にて荒行の事

一 貳番紀伊国紀三井寺観世音

附り厄病神の絵馬の事

(27オ) 普陀洛伝記 巻の弐

一 一番紀州室の郡那智山観世音

本尊如意輪観世音

御長老丈二臂の座像

(27ウ)

頃は人皇十七代仁徳天皇の御代に

してたかき屋にのほりてみれば煙り

たつ民のかまどはにきわひにけりと

御詠吟あそはせし御慈悲ふかき

聖王の御代なり其ころは仏法いまだ

日の本へわたらざるの時成るにこの

(28オ)

那智山にいつくよりか老僧一人  
米り給ひしを裸形上人と申せし  
なりはだか身に衣ばかり着てまし  
ませりゆへにはたかの形ちと書て裸  
形上人とは申せしなり天竺国は暑き所成る  
かゆへ羅漢たちみなくはだか身に  
衣ばかりを着て居給ふなりこの  
裸形上人は木食にて木の実斗

(28ウ)

りを食して木の実なき時は木の葉  
を食しい給ふなり其頃は仏ほう  
といふ事なければ仏といふ事をも  
出家といふ事をも知らず神国なれ  
は死火をきらひ死人有れば其家に  
外より三年かあいたは火を取かはせず  
つき合ならすかるかゆへに死人をきら  
ひ親にても年よればやかて死なるゝな  
らんとて前方に野山へつれゆきすて  
かゑりしかは野山にて大鷹の餌食  
となりはてたる事なり仏法なければ  
寺といふ事もなきゆへにいかほど大  
事にかけてたる御方にても其時分になれ

(29オ)

は野山に捨る事みなくかわる事なし生  
なから野山にすてられ居る心のあぢ  
きなきかなしさはいか斗そや仏法の渡  
りしは人皇三十代欽明天皇の御宇に  
はしめて百濟国より善光寺の御本  
尊を渡し仏とはいわずしてかねの人形と  
いひしなりそれより仏法ひろまりて今

(29ウ)

の世にては年よりたるとて野山にすつ  
る事もなく息ひきとるまでくすりをあた  
へ死すれば葬礼のいとなみあとくまで  
とむらゐぬるは仏法の徳と聖徳太子の  
御かけなりしかるに裸形上人は熊野  
那智山にて此所は仏法の霊場なりとて

(30オ)

那智の滝にむかひて千日行をつとめ給ふに  
滝つほより光明かゝやき水ふたつにわれけ  
れは一寸八分のゑんぶだごんの観世音あら  
われ給ふ裸形上人は有かたや是まことに  
末世の御本尊なりなかく衆生を濟度  
ましませと衣の袖をひろけて請給へは  
観音滝つほよりひらりと飛うつりたもふ  
それより其所に庵をむすひ観世音を

(30ウ)

守り奉りおわしますに仏法なけれ上人  
より外にたれ有て見むくものなくし  
て上人も限りある命なれば一生は守り奉  
り給ひぬれと往生の後は庵室もその  
まゝくちはてゝ觀世音も雨露にうたれ  
おわします後には觀世音も庵りも跡かた  
もなくうつもればてゝありしか其後

(31オ)

五百年の余も過て生仏上人と申せしたつ  
とき上人熊野へ參詣有しに權現の御告に  
なんじよくこそ来りたりむかし此所に靈仏  
有りて裸形上人といふ僧有てまもり奉  
るものもなくうつもれます其方は  
此仏にふかき縁あるものなればそも  
今まで爰に來らざるゆへにむなしく是迄  
過せしなりはやく此仏を守り奉つ  
れとの御つけ生仏上人は有かたき御告  
かなとそれよりして大願心をおこし  
權現の御つけにて此地中に靈仏おわし  
ます事を我よく知るといへとも何れの所に  
うつもれますやらん其所知れずわが  
しんゝをもつて此靈仏をいのり出し

(31ウ)

(32オ)

奉つれとの御事とおぼへたりとすさま  
じき那智の滝つほに飛り靈仏出  
させ給ひ拜み奉るまでは此滝をいつべ  
からすたとへ五体は粉に成つて死するとも  
いとふべきにあらすと三日三夜滝にうた  
れて祈り給ふに寒天のころなれば  
そつこんひへ通り氷のこくひへかた  
まりておほへす川下へなかれ給ふを童  
子一人天くたり上人を引あけて頭より  
足のうらまてなておろし給へは自然と  
五体あたゝまり人こゝちもつきかの天  
童にいかなる御方そと尋ね給へはなん  
じあまりにはげしき行法成るゆへ今  
たきに命おわる所をは梵天帝釈あわ  
れみ給ひてわれゝにあまくたりて助  
けよと梵天帝釈よりの御使ひなり  
左程にあらすして祈るへしとあれは上人  
あら有かたやさては帝釈天王の御めくみ  
によつて命をたすかり申たるかと  
手を合せて天童を拜み奉り夫より  
してひとつの岩に座をしめて靈仏

(32ウ)

(33オ)

を拜み奉る迄は此所たちさるへからすと  
たとへ此まゝ死するとも生かわり死に  
かわり祈り出すべしとそれよりまた  
七日七夜岩の上にていのり給ふ前後  
十日なりしかるに七日にまんする夜しん  
くれきくらくらきにたちまち光明  
かゝやき出る所ありさてはと其所に印を  
さし夜をあくるをまちてあたりの

(33ウ)

近き土民等をかたらひ岩をのけ土を掘  
けるに七尺はかり下より有かたや一寸八分  
のゑんふだごんの如意輪觀世音光り  
かゝやきおわしまし少しもけかれ損し  
給ふ事あらすま事に日のもとに仏法  
いまた渡らぬさきに出させ給ふ所の觀  
世音にてましますは人作にあらす正眞  
の觀世音おかみ奉る事の有かたや誠に  
末世の御本尊なり小仏なればすへの  
世にいたりまたもやうしない奉つらむ  
かと一丈の大仏の觀世音を造立し奉り  
御むねに小仏をおさめ奉りし所則  
生仏上人の開基なり

(34ウ)

御詠歌  
普陀洛やきしうつ浪に三熊野の  
那智の御山にひく滝津瀬  
普陀洛とは世界の南に觀世音の淨  
土有て其名をふだらくせんといふだ  
らくやは歌のよびかけなり西方極楽  
の左座觀音ましますば南のふだらく  
せんとはくわんをんの淨土にして角形水  
精のはへぬきの御山ありて觀世音れん  
ぜんとしてまします所なりすき通る水

(35オ)

精の御山にて峯にはこかねの御殿觀音  
二十八部衆のほさつたちまします此御山に  
打よする波の甚々微妙の音ありてり  
やつかう不思議の觀音妙智力といふ  
經文の音なり岸うつ波は三熊野の那  
智の御山にひく滝津せとは那智の  
たき凡夫の耳には只とうくとはかり聞  
へぬれと普陀洛山にうつ波に本同じく  
妙智力りやつかう不思議とさとの耳  
にはよく聞わけらるゝ事なり鳥類ち  
くるいのなく声にもみなわかち有れと

(35ウ)

も凡夫の耳にはわかちがたし唐土の

こうやてうといふ人はよく鳥のごゑをき  
きわけし不思議の事多し

那智の滝にて花山院へ竜神あら

われ給ひ如意宝珠と水精と兩穴

のほらの貝をさし上る文覚上人は

三七日滝にうたれ不動尊をおかみ

奉りもんをさづかる

式番紀伊国三井寺観世音

宝亀五年の建立護国院

と号するなり

紀州名草郡普陀洛山金剛本寺とは

号するなり本尊十二面観世音御たけ

壹尺貳寸開山はとうかう上人寺号金

剛本寺と有るに紀三井寺といふは此所に

ふしきの井三つ有りて此井より観世音

へ竜宮より竜燈あがる竜燈は松の大木

にかゝりて観音の前へあがるこの松を竜

燈の松といふ一つの井清浄水吉祥水養

老水とて三つ有り是によつて紀三井寺

といふ開山道光上人は撰津の国天王

(37オ)

寺に住たまふ名僧なり紀州熊野

へ参詣ありて天王寺へ下向のせつこの

今の紀三井寺の所にて日くれければ

家居とてもなき山中ゆへ大木のもとに

一夜をあかし給ふに夜はんのころ数千疋

の馬のあしおとおひたしく聞へければ

あやしき事におもひて見やり給ふにさ

らに目に見ゆるものもなししかれとも馬

の足音人声はそはちかく聞へける不思

義におもひ給ふに其中に大声にておや

ぢ／＼とよふまたうしろの方よりおいと

答ふこれもまた声はかりにてかたちは

なしげ物にやあらんと思ひ給ふに又おや

じ今夜は行申さるゝかとあるに老人の

事ゆへ足たゝずたのみにおもふ馬は足を損

じたるかゆへ今夜も得参らぬなり此段おか

しらへ宜敷御申上たのみ入るといふなるほど

御断は申へきなれば四五日もことほりにて

は其方のために成るまし何卒とて来ら

れよといふさやうにおもへとも足たゝず馬は

これも足をそんするせん方なしよろしく

(37ウ)

(36ウ)

(38ウ)

頼み申といふ然らはとてまた大勢の足  
おとして馳ゆきぬ上人はさて／＼ふしき  
の事かな宵に見しにこのあたりに一軒  
の家居もなくまた馬の居るへきところも  
見へさりしに何にても夜明て見るべし  
とおもひ給ふにほとなく東もしらみ横  
雲たな引しら／＼と明わたるにさらばと  
その辺をたつね見給へはしげりたる森の  
うちにちいさきほこらありさては此内に  
有る神なるへしとそはちかくよりに見れば  
馬を書たる絵馬前足の所板われて  
ふら／＼とはなれかゝりてありさてはこの  
絵馬の事成るへしさらはわれりやうじ  
してなをし置て心見るへしとそれ  
より人家に出てたくはつしてばんかた  
にまた山にかへり絵馬のそんしつくるひ  
今宵はいかゝ有らんとまち給ふにまた  
前夜のこつく馬の足おとおひたゝしくして  
出来りしか此前にて立とゝまり前の如く  
おやぢ／＼とよびければうしろより馬の  
足おとして立出たひ僧のかけにて馬の

(39ウ)

(40オ)

あしをなをしもらひしゆへにこよひはま  
いり申へきなりとうちつれ立てゆく音  
す扱七つ頃ともおもわるゝ頃戻りたりと  
見へて馬一疋のあし音くわた／＼とするゆへ  
に道光上人こへをかけ馬のあしを直したる  
たびそうなりいか成るものそすがたを  
あらはし見せられよとあれはおきな申  
ていわく御言葉のかゝらずとも是より  
して姿をあらわし御対面仕り御礼申  
上んと存するところなりとて八十斗  
の白髪たる老人あらわれたり道光  
上人見給ひいかさまその老躰にては  
馬なくてはなん義成るべしいか成る  
神にてましますそやと有ればおき  
なのいわく成ほとと神は神にてあれど  
も尤いやしき神にて候と申上人然ら  
は大勢の足おとしたるも神にて有か  
翁成ほとと神にて候われ／＼は皆疫病  
の神なりといふ然らはおかしらといふはい  
か成る神そおかしらは祇園午頭天王成る  
かやく病の神をすへてつかさとりたま

(40ウ)

(41オ)

ふりやう疫病やびびょうと申は十六万八千御座候そ  
の十六万八千の神々はいつかたへ行事ぞ  
と有れはお頭のさしつによつて三千世界  
を見めぐり邪見よみはういつのものとも

(41ウ)

に取つきけるなり然れとも念仏の行者  
にはとりつく事あたわす弥陀觀世音勢  
至し其外諸ほさつ念仏のきやうしやを  
守護しゆごしたまへはたとへ一村中疫病やびびょうをや  
みてふし居る其うちに交り居いても疫  
病をやむ氣つかひなし又たとひ鉄の  
箱のうちに居て用心をなすとも邪  
見けんのものには厄病やくびょう神通力をもつて  
いか成る所へもわけ入てとりつき

(42オ)

もとよりぎおん午頭天皇人をな  
やますにはあらず慈悲しひのふかきおん  
神なりたとへは公おみやげにその役やくの  
人をこしらへ置あしきものはとらへ  
て見せしめにとがめそれの政道せいどう  
ありて世を納め給ふことくれみな  
慈悲しひの方かたべんなりこのうへ道光どうこう  
上人じやうじんへ翁おきなか御ねかひ有りその子こさい

(42ウ)

は此身こゝろ昼夜じやうやに三度つゝ真黒まぐろにふす  
ほりくるしみあれこれをたすけまた  
未来成仏みらいぶついたし候やう御ねかひ申也  
といふ上人じやうじん未来成仏みらいぶつは何の望のぞみや  
有何あるに成る文ぶんをとなへ申べきやとた  
つね給へはわけて十一面觀音じゆんいちめんくわんおんこそ有り  
かたく候なり此大木を切り觀世おんの  
像ざうをつくり下され候て誠まことにわか成仏ぶつの

(43オ)

ため普門品ふもんひんを御となへ下さるへしといひ  
て翁おきなは見へす成にけり上人じやうじん此おもむ  
きを所のものに語り大木を切りすな  
わち觀音くわんおんの像ざうをつくり給ふ所の者あ  
りかたく思おもひりやうやく神のため又はな  
がく此所こゝにて濟度さいどし給ふの御木尊  
なりとて人々あつまり觀世音くわんせいおんの堂どう  
を建たりうしけるに道光どうこう上人じやうじん有夜夢あるよめ  
に彼翁かのおきな来りて上人じやうじんの御かけにて  
昼夜じやうや三度の苦くるしみをのがれ其うへ  
觀世音くわんせいおんのけんぞくと成りたり此事このことうた  
かわしくおもわゝほこらの内に我像わがざうあり  
是これをば草舟くさふねにのせたまへ南方なんぽうへゆくへ

(43ウ)

しと有るによりほこらのうちを見た  
まへはいかにもちいさく作りたる木像有  
りしかば取出しおしゑのこことく草舟を  
つくり是にのせて海上にうかめ給へは  
かせもなきに三つ羽の矢のこことくに南方  
普陀洛山のかたへ真一もんじにとふがこ  
とくに走りゆくりやう疫神のため

(44オ)

につくり給ふ観世音なれば紀三井寺  
の観世音は別して厄病厄難をすくひ  
給ふの御本尊なり是によつて厄病  
よけの守りは紀三井寺よりいつるなり

御詠歌

故郷をはる／＼こゝに紀三井寺

はなのみやこもちかく成るらん

(44ウ)

此御詠歌はとなふる通りの歌のこゝろと  
おもへとも左にあらす此故郷といふは  
みな人間仏性のたねありて仏のそは  
に居たれとも一心随縁とひかされ風と  
まよひを生せしより此かた今人間と  
成りたるまては生かわり死にかわり幾  
たびといふ数を知らずはる／＼とその

(45オ)

古郷をまよひ出しに今やう／＼と西国順  
礼して紀三井寺迄参りたりといふこゝろ  
なりたとへは子供の大神楽などに風とさそ  
われて付てゆきもとりに道を知らずま  
よふ如くとつとむかしまよひ出したるにあ  
らずありかたや観音の御かけによつて  
爰まで紀三井寺に来れば花の都も  
近くといふはこの都にてはあらす此都は  
かりのみやこにてやはり夢の浮世なれ  
は夢見て居るかこことくなり此御詠歌の  
都は極楽をさしてはなのみやこといふ  
なりうれしや都もちかく成りて九品  
浄土に成仏しむめうの酒のゑいを  
さましてさどりの身と成ると説し

(45ウ)

所の御詠歌なり

神といふにふたつあり権者の神と実者  
の神なり伊勢太神宮をはしめ奉り

八百万の神はみな皆権者の御神といふ

本地は阿弥陀如来観音勢至地藏薬師

如来など気によつて法をとぎて未来

の事はかりにてはぞんせす済度ならざる

(46オ)



(46ウ)

かゆへ神かみくと成ならせられぬ繁はな昌じやう  
 家内安全かないあんぜんをいのりそれより縁えんと成つて  
 濟度さいとなし給ふ縁えんなき衆生しゆじやうは度どしかた  
 ければ慈悲じひのうへ神共かみ仏ほとけともなり給ふ  
 また実者じつじやの神といふは厄病やくびやうの神道祖かみどうそ  
 神かみあるひはうらみによつて世人せじんをなや  
 ますものは神にいわひしなどこれらをは実じつ  
 者しよの神といふて此神には身にくるし  
 あり此紀三井寺の縁起えんぎの神もあざとき  
 女のいふやふにおもふものも有るへけれど  
 有験うげんの知識ちしきには仏神ぶつじんとも姿すがたをけんして  
 御対面ごたいめん有て仏法ぶつぽうの奥義おくぎを聞給ふ事数ことあま  
 多あり梅うめの尾おの妙忠めうちゆう上人じゆんじんには住すまよし  
 春日かすかの両神りやうじん毎日まいにち影向ようかうありて御物ごものがたり  
 あり是によつて絵師えしのたくま法眼ぽうがん上人  
 にねかひて両神りやうじんを拜まがみたくおもひけれど  
 も何程なんぢゆう信心しんじん有りてもたくま凡人ぼんじんの  
 事なれば位くらゐにまけ死しすへき間無用まわむよう  
 なりと両神りやうじんのたまへともそれこそ望もちむ  
 處ところなり少しもくるしからすとねかひし  
 ゆへ薄衣うすぎをかけしことくにて見みへさせた

『西國願礼 普陀洛伝記』——翻刻と解題——  
 三十三所

(47ウ)

まふたくまは有かたく拜しまゝ両神の  
 御姿ごすがたをうつし取奉りしか帰りに鳴滝なるたき  
 にて落馬おちまして命いのちおわる此両神のぞう  
 梅うめの尾おにあり又空也上人またくうじゆんに松尾大明神まつおびだいめいじん  
 御対面ごたいめん有つてわにぐち半分つかはされ  
 て念仏ねんぶつのひやうしを取るへしと仰らる是  
 叩たた鉦かねのはしまりなりまたけんひん僧都そうどう  
 には三輪さんりんの明神めいじんまみへさせ給ふかやうに  
 神々御対面かみごたいめん有るなればまして厄病やくびやうの神かみ  
 などたつとき僧とおもひ姿をあらわし  
 て未来の事をたのむはつなり絵馬  
 の事もふしき成るやうなれと是むかし  
 絵にたましゐの入りし事あるひは声を  
 いたしたる事数多有り古法眼こぽうがんか絵左  
 甚五郎しんごろうかほり物のはたらきたる事  
 など是におなじ

普陀伝記 卷の式畢

西国順礼 普陀洛伝記 卷ノ弐  
三十三所

(1オ) 西国順礼 普陀洛伝記 卷之三  
三十三所

目録

一 三番紀州那賀郡かさし村粉川寺觀世音  
附り渋川郡左太夫箸筒之事

(2オ) 普陀洛伝記 卷之三

紀州那賀郡かさし村粉川寺觀世音

千手觀音御長卷丈八寸

(2ウ)

仁徳天皇四十九代光仁天皇元年に建立有  
開山は大伴孔子召なりこの孔子召とい  
ふは獵師にて日に山にいりてけだ  
ものをとりこれをうり代なして渡世  
とすあるとき例のとおりに弓矢を持  
て山にゆくにか成る事やらん其日は  
うさぎ一疋手にいらすこれはいかにと  
せめて猿のたくひなりとも一疋とり

(3オ)

たしとおもひうか／＼と山に入り二里  
あまりも輿ふかくいりしか日もはや西  
にかたふきしゆへこゝろつきもはやかへ  
るべしとおもひそれより谷にくだりみ  
ねにのほりて帰るに日もはや入りける  
によりうそくらくなるにつけて木の  
下をわけて水の流るゝを飛こへなどす  
るうちに折しも廿三夜のやみのころ  
にて道のあやめも見へわかす夜中に  
は月もいて給ふなれば月のいつるを待  
うけて里までおりぬへしと木かげによ  
り月の出しほをまぢていねむり居たるに  
何となく其あたりさつと光りのさし  
ければおどろき目さめて見るに月に  
はあらずからかさほとなる丸き火の  
たま孔子召かまへに來る合点のゆか  
ぬひかりもの此年月山中にふしたる事  
数度有りといへどもつゝみにかやうなる事  
を見す何さま是はきつねたぬぎの仕  
わさ成らんとおもひてありあふゆみ  
に矢をはけてつかひきり／＼とひきし

(3ウ)

(4オ)

(4ウ)

ほり爰ぞとねらひて丸き火のたま  
の真中とおぼしきところへ切てはな  
すあやまたすはつしとあたるたちま  
ち火の玉ふたつにわかれ観世音の像  
あらわれさせ給ひ孔子召か射かけし  
矢を御手にもたせ給ひしを拝み奉

つりあらもつたひなや仏体にてまし  
ませしかさは知らずして射かけ奉り  
し事御ゆるし下さるべしとて大地に  
拝伏して礼拝し奉るに観世音いか成る

因ゑんかまし／＼けん光明をてらし給ひ  
なんし今よりして殺生をとまるとまるへし  
罪とがのうち物命をとる事第一

(5オ)

おもぎつみなりかくの如くなんしにつ  
くる事は汝が母常々我を信仰してなんじ  
か身のうへを守りくれよとたのみをか  
けしゆへに是まで附そひまもり遣わ  
す所なりしかるになんしも程なく死すへ  
し此儼死するならば地ごとく落ちて未  
来永却うかむ瀬さらに有るへからすその  
未来をたすけ得させんか為にくわんかい

(5ウ)

するそと仰られければ孔子召は仏勅  
の有かたきに涙をなかし此のち殺  
生をふつ／＼ととまり申へし罪業をゆる  
させたひたまへとて弓も矢もおりく  
だきければ観世音微妙の御こゑにて  
しからば汝この所にいほりをむすひ出  
家となるへしつねに我名をとなへて  
みらひ悪報をまぬかるへししん／＼の

(6オ)

おこたりなくんは我その時にむかへ得さす  
へしと仰せられ西をさしてとびさり  
給ふ孔子召はなみたを流しあら  
有かたやかたしけなしと御跡をふ  
しおかみもとよりわか身のうへ  
今は親もなく妻子もなければ古  
郷へかへらざるとてさらにくるしか  
らす事なればそのまゝに出家と  
成り其所にいほりをむすひあけく  
れ只観世音をねんし居けるに  
観世音の御たすけにやあらんあた  
りちかきさと人とも孔子召かほ  
つしんしたるを聞伝へて殊勝なる

(6ウ)

(7オ)

事におもひ日く食物をあたへけれ  
は獵師の時よりは却て安楽に成り  
けるゆへいよく信心をましおこたり  
なくつとめけるあるとき日の暮頃に  
十四五才はかり成る童子来りてたび  
のもの成るかこよひ一夜いほりにと  
めて明させ給われかしといふに見  
らるゝ通り不自由此うへなく殊更

(7ウ)

夜のものとてもなければたゞいろいろの  
はたにねるはかりの事なりそれにて  
も苦しからずはとめ申べしと有るに  
童子はよろこひいろいろのはたにあた  
り居る孔子召は仏を安置する事も  
なければ只にしにむかひてねんぶつ中  
つとめおはれば共にいろいろにあたり四  
方山のはなしをなす童子はあるしの  
顔をつくくとなかめ手前はすぎに  
しかた易をならひしか今そなたが  
躰を見る所に心にねかひ事有る人  
なりいゝ聞されよといへは千手観音を二躰  
本尊にほしくおもへとも大望ゆへに何とか

(8オ)

など案し居る事にていかにも望み  
あれともそちに聞せてもちの明  
ぬ事なり勿論出家の事なれば別

(8ウ)

にかわりし望みもなしといふその事  
成らんにはいと安し我ほりもの事も  
ならひおほへたれば刻やるべしとあれば  
孔子召は大きによろこび然らば柴を  
もつて刻みたまわるべし木は拵へおき  
たりといふ左あらはそなたには明るよ  
り里へおり三七日をまつへし其日数  
には出来させ給ふへし其程の食事  
といへは食は毎日茶わんに一もりつゝ窓  
よりさし入れ給わるべしといふ孔子召は  
そのよし心得て夫より庵室をあけて  
童子にわたす童子はあんしつのうち  
にいりてくろゝにて戸をさしかため  
さて毎日く一もりつゝの飯ばかりを  
まどよりさし出し置三日四日と日数  
たちてはや明日は三七日といふ晩に  
孔子召がふし居る其うへの方にて大  
音にていかに孔子召兼て望みの通

(9オ)

など案し居る事にていかにも望み  
あれともそちに聞せてもちの明  
ぬ事なり勿論出家の事なれば別

## (9ウ)

り千手観世音今こそ出来させ給ひたりとあり孔子召大きにおとろき其儘山の庵室へ走り行て童子くよひけれどもさらに答へなく庵室と見れば戸せうしのこらずおしひらきあり有りかたや内にはそうかう円満と出来させ給ふ千手観音生るかごとき御有様に

## (10オ)

ておわしますまことに此所の御本尊として末世の濟度なさしめ給ふ観世音也さて童子は見へすふしぎ成かな毎日くもとよりさし入し茶わんに盛たる飯一粒も取りたる跡なく其儘にてならへあり是童子と見へさせたまひしは観世音の御変化にておわせしなり凡夫の目にて見知り奉らさりし事のもつたみなや観世音にておわしますそと知りたてまつりなば御供養の仕かたも有へきものとおとろき恐れ誠にいつそやの御告に尊像の出来させ給ふ時せつもあるへしと御告ありしが正真の観世おんの御作いか成るからん堂の御本尊と

## (10ウ)

## (11オ)

成し奉る成らん誰かはたつとみ奉らざらん此やうすを近在近郷に聞つたへ参詣しけるに是粉川寺の本尊なりこの時はいまた粉川といふ号もなしさて本堂のいわれは河内の国波川郡に左大夫といふ大百姓そのころ有りしに一子左太郎といふて父母ともに大切にそだてしに左太郎七才のとし大病をうけて二親の案し大かた成らず都よりれきくの医者をまねきさまく医療をつくし祈禱祈念のこる所なくかねにあかしてなといへともさらに其しるしもなくいまはや死するをまつはかりにて二人のおやのなげきいわん方なし左太郎を先立なばわれくはなにと成るへきなにの染みかあらんかなしやと跡やまくらにとりつきて歎き居る折ふし十三四才ばかりなる童子きたなきこもをせなにおひよられたる衣服を着て門にたつて申けるはつれにはづれしものなり報謝を成し下されよといふ家内のもそのだん

## (11ウ)

(12才)

にてはあらずとしづまりかへつて  
みなくなげくやうすを見て何事にて  
候ぞやと子細をたつねきさやうならば  
わたくしましなぬを覚へし事あり薬な  
らは当る事も有へきかましないの事なれ  
はきかねはもとくなりあまりに御敷き  
の気のどくさにそんなればかくは申なりと  
有るに家内のものども合点のゆかぬ事  
とはおもへともまつ主人にかくと申ければ  
今ははや誰をたのむへき事もなきおりから  
なれば何にもせよたのみ見るへしとま  
ねき入れは童子はこもをおろして病人  
のゆかにいたり病人のそばにさしより  
がんしよくをながめ手をとつてみやく  
を見てしばしありて申けるはおの

(12ウ)

く気つかひ有るなほんぶくさすべし  
これ決して死する脈にあらすさりな  
がら薬にては叶ふましとふところより  
巻ものを取り出し千手陀羅尼をくり  
かへしく四五へんとなへて其たび毎  
に病人の頭よりむねのあたりをむけ

(13才)

彼まき物をさしつけてなておろしけれ  
は病人はすやくと寝入るやうすなり最早  
よしとかたわきへひらき病人は廿日余り  
もをも湯さへ通らさりしにめをひらき  
てあら心よや何にてもあれたべて見たしと  
いふそれと家内もおどろきいそぎこし  
らへもちゆけはかくへつにすみ兒附  
も見なをしいたつて心よきやうす  
に見へければ両親はいふにおよはず始め  
合点ゆかぬ事と思ひしもの共までも  
童子をうやまひやれく奇妙成る事  
かな是只人にては有まじと俄にちそふ  
致せしも何もくわすしてもはや次第  
によるしからんといとまを成しけるに  
いやまつく四五日御とまり下されよと  
いへともいやくさやうにとまる事も成り  
かたしまた外に用事もなしびやう人は  
手まへか居ぬとても最はや気つかひな  
ければ御いとま申なりといてゆくを左  
太夫夫婦は童子にすかりつきしはらく  
御待下されと台に金銀をつみ出し

(13ウ)

(14才)

(14ウ)

(14オ)

三四

そなたの御住所もつけ給り御れい

にまいりたしこれはまづ当座の御礼の

ためとあれはさやうのものゝほしきとて

まじないしたるにあらざふと通り合

せて気のとくに存してまじなみしん

ぜし也それをもらい何かはせんとあれは

夫は余りに冥加なし何卒御請下さるべし

といへはさほどに申さるゝ事なれば何に

てもあれもらひ帰るべしとて台所に

出てはしりもとを見てよろしきものあ

りあれに有る箸筒を下されよといへは

いやあれはきたなきものなりといへとも

いやゝ是をもらふべしとて取て出ゆく

を御礼に参るへき為なれば御国所を御

きかせ下されよといへば国はきしう那

賀郡かさし村粉川寺にすむものなり

御名はいかにかさねて逢ふ事

もあらんさらはゝといひて出て行少

しは送らんとするに門口を出るとはや見

うしなひ蔭もかたちも見へずさてゝ

ふしき足のはやき童子かなとふしんに

(15オ)

(15ウ)

(16オ)

おもひけるそれより左太郎次第に快氣

して丈夫に成りしかは紀州へ礼に下るべし

左太夫ふう婦左太郎をめしつれ紀州那賀

郡かさし村にて粉川寺と尋ぬれども

ゆくさきゝに左様の寺はあらずといふ

合点のゆかぬ事なりしれぬとて帰られも

せずとてそれより猶またたつねゆくに

山の際を通りしに谷水の流に白水の

なかれいつる所あり扱此山の上に人里

あらんとわけゆくにたんゝと目もはや

暮になりひとつの柴のいほり有り

この庵へたのみこよひはとまるべしとて

案内すれとも音せつ明きてらかと見

れはまた阿弥陀如来観世音ぼさつ

など本尊見へたりいづれにもせよ爰

にとまるへしとて六七人の上下内に

いり用意の弁当をいたしてひしめき

あふ所へ孔子召は里より帰り是を見

て留主のうちに人ありこれ何者なれば

留主の内にふんごみて有ぞらうせき也

といへはいやさらゝうろん成るものに

(16ウ)

(17オ)

是あらずわれは河内の国淡川郡に住居

いたす左太夫と申ものなるか当国那賀

郡かさし村にたつぬる所有てわざと

下りに道にふみまよひて此所まで

まいり見請申せは明たる寺ゆへにこよひ

一夜を爰に明さんとてうちへはいり

かくの通りの仕合なりといふ淡川左

太夫は五幾内にてかくれなき大百姓の富

貴のものにしておそらく大名といふ共

くるしからぬほどの百姓なれば孔子召

もかねてきよおよひしことゆゑに

成ほとうけ給りおよひし左太夫どの

にて候ひけるかや御見うけの通りせ

まく不自由成る所なれともくるしからず

おもわれんには一夜御かし申へしまづ

燈し火を燈し候わんとて火をともし

さて御尋のところはいづくいか成るものを

たつね給ふと有れば左太夫これより

たつね申べきと存する所なり那賀郡

かさし村にて粉川寺と申所をたつね申

なりといへはすなわちかさしむらと申

(17ウ)

(18オ)

(18ウ)

はこれへ御出ありし道にて候が粉川寺と

申寺は是なしといひまつ御かんきん

をいたしてその後ゆる御はなしを

うけ給り申へしとて観世音の御まへ

に燈明をあけまいらせ御名かうをとな

へつとめせしに左太夫夫婦のものも

孔子召かうしろの方に居なをり本

ぞんを拝み奉るに不思議やくわん世

音の御手にはし筒をかけさせたまふ

ゆへにふしんにおもひよく拝み奉

れは正しく見覚有るはし筒なれば大

におとろき左太夫は女房ならひに左太

郎そのほか家来にまで知らせおかせ

これはいか成る事ならんとおどろきあへ

り孔子召はふりかゑりなことをいひ

給ふやといふに左太夫観世おんの

もたせ給へるはしづはまさしく手

まへの箸づなりと有りし次だいを

ものかたりさては過にし方の童子と

見へさせたまひしはすなわち観世音

ほさつにてましませしかあら有り

(19オ)

(19ウ)



(20オ)

がたやとふししづみ有かた涙を流し  
ける孔子召は成るほどそれにて子細  
聞へたり此観世音ぼさつは人作に

あらず十四五才ばかり成る童子と成つ

てこの本ぞんをつくり給ふすなわち

ま事の観世音ほさつなり当春の頃

いつものごとくよひにかんきんをいたし

寝入りたりしに朝おきいでゝおかみたて

まつるに此箸つゝをもたせおはします

ふしきなり此山中にたれ来るものもな

し合点のゆかぬ事なりと思へどもあ

らた成る本尊なればやうすこそあら

んとそんじ其まゝ御手にかけて置しが

偈はそなたの所のはし簡にてありし

か此本尊は作らせ給ふ時も童子にて

御出ありまたそなたへ御出有りしも童

子にておはしませしもすなわち此ほん

尊の御変化なりといよ／＼有かた

おもひおのゝ感涙を流しける左太夫は是

ほどの御本尊何とてわつか成る庵り

にはましますやらんと有れば何を申

(20ウ)

(22オ)

もかゝる山中の事なれば万事心に  
まかせすいか成堂からの御本尊に  
しても恥かしからぬ観世音なり御こゝろ  
さしあらは御世話下されよといへは何  
かさて置それこそは望む所なり観世  
音へ御礼冥加の為と直に河内の国に  
婦りきんぎんをもちほこひ大工番匠さ  
つそくによひ集め大伽藍をは建立  
して寺号はすなわち観世音の仰ら  
れし粉川寺と号し西国三十三所い  
づれも有かたき内にもとりわき正真  
の観世音ほさつと申奉るは札所第  
三ばん粉川寺なり本尊千手観音は  
則正真の観世音の御作寺号も御告あ  
りし寺号なりならびに伽らんと成し  
も御方便にて建立ありしみな観世  
音のちからなり

御詠歌

父母のめくみもふかき粉川寺

ほとけのちかひたのもしきかな

此父母と有るは父は釈迦如来母とは

(21ウ)

(21オ)

(22ウ)

阿弥陀如来をさしてよみたる父母なり  
両親ほどに他人のおもひくれる物にあら  
すあほうか片輪なれば猶さらふびんに  
おもふ親のころなりそれにても人間は  
とこやらにまたく見はなす事ありて勘  
当のわひことをすれどもきひしき親は聞  
入れず二尊のめくみは左にあらす釈迦  
如来はけかれたる婆婆にましくして

(23オ)

衆生を濟度なされ阿弥陀如来は九品  
浄土にましくいかなるあくにんの  
ものにてもたすけ給へは只名号をと  
なへてひとへにたのみ奉れば御見捨  
なくたすけ給ふゆへわけへたてなく  
めくみ給ふましていわんや臨終正ねん  
極楽往生とねかふ信心念仏の行者  
の御恵みにもるへきや父母のおめ  
くみとよみかけて粉川寺のこの字  
を子といふ心より仏のちかひとは仏  
とはよめるは観世音の事をいひたる  
ものなり観世音のおしゑによつて  
極らく浄土に往生をするほとけのち

(23ウ)

極らく浄土に往生をするほとけのち

かひたのもしきかなとはよみたる御詠  
歌なり

普陀洛伝記第三畢

(24オ)

西国順礼 普陀洛伝記 卷の四  
三十三所

目録

一 四番和泉国卷の尾寺仙樂院観世音

附り観世音仮に南方より来り給ふ事

一 五番河内国藤井寺観世音

附り藤井安元地獄へおつる事

(25オ)

普陀洛伝記 卷の四

四番和泉国卷の尾寺観世音

卷の尾施福寺仙樂院と号す

本尊は弥勒菩薩御長卷丈六尺

左右観音文珠各五尺四天王の像

あり開山行満上人

此山はたつとき御山にて弘法大師も此山

(25ウ)

にて権僧都の御弟子と成りて落髮し給ふ所なりもとは弥勒はさつ

御山にて観世音はさつにはあらずしか

るにいま観世音はさつの御山とおもひみ

ろくほさつをおかむものはこれなし観

世音はさつ有縁の地なり往古は此寺

知りも多くあり皆福僧なれば寺中

の僧とも出家のこゝろもちにあらす平

生盤将あるひは歌はいかないなどにて

なくさみくらかつて後生の事をは

つとめづ法義にうとく凡俗同前の僧

多きゆへ不自由なる事なし叡山法

師は木曾義仲にあしく思われかやうに

出家の身として仏法にうとく凡僧

同前の所業は寺領おゝく不自由にあ

らざるかゆへなりまして俗家の有得

人は金銀何ひとつくらき事なくくらす

ゆへに法のこゝろもうとくしんくお

こらす念仏は身にくつたく有か又

はうれぬにあふかこゝろにたんのうせ

さるときならては申ものなし心おもし

(26オ)

(26ウ)

(27オ)

ろきときはかつておもひ出しもせぬ

ものなり巻の尾の寺中の僧もかくの

通りにて出家にては有なから邪けん

にて出家の行作にてはあらざるなりある

時田舎坊主と見へていやしけなる下す

法師来りて申けるは寺かたはうくへ

夏百日かあひだ本堂のそうし御出家

かたにつかわれ候ものなるか此御山もた

つとき所なれば一夏九旬の間つとめ申

度候御山にさし置れ下さるへしとねかふに

付いかにも左様の事ならば勝手にいた

すへしとそれより夏百日のあいだ朝夕

寺くにて食事をいたし本堂のそう

じは勿論毎日その外寺中のそうじ

あるひは水をくみにゆきて寺くの

柴をになひ来る事三三人まへほとづゝ

刈来る年は六十余りに見へけるか中く

わかきものゝはたらきよりはげ敷

五六人まへもはたらけはいつ迄も置た

きものよるこび居るにほとなく夏百

日もみてけるゆへにかの田舎坊主まかり

(27ウ)

(28オ)

(28ウ)

帰るとて寺へゆきもはや明日はかへり候  
それにつきて急度御ねかひ申にては  
なけれども遠国へかへり候路錢をすこし  
下さるならば辱なからんといふもつともやと  
われちんと申にてはあらすといふに何か  
けんどんなる寺中のぼうずともにて  
最初より此方より物をやらふといふやく  
そくせさりし事なれば今もつてさやう  
の事もいたしかたしむかふの寺へゆきて  
たのみ見るべしなといふにつけ外へゆきて  
寺へゆきて前のことくいふに爰にてもおな  
じ返答にて外へゆけといふかゆへだんへ  
寺へを行廻るといへともいつれの所にても  
中へ少しの事にてもくれすつかふ時は我  
さきとあらそひつかひなからいさゝかの  
わらんし錢を乞ふに中へもつて聞かれず  
かの田舎坊主もしからは申請るにも及ば  
ずたくはつにてもいたして国元へかへる  
へしとてそれより本堂のゑんにあかり  
つゝ立て大音をあげて申けるはあら笑  
止やかゝるけつかう成る御山ほとなく黒土

(29オ)

と成りてあく魔のすみかと成りなん  
かゝる霊場にまことの出家老人もなし  
けんどんしやけんのもはかり集まり居  
て形は出家なれとも身もちは出家に  
あらず見よく魔所と成るへしおしゐか  
なへとのしりて山をくたるそのとき  
方丈の住持法海上人といひしか此よしを  
聞てのしりたる言葉に聞所もあり又  
遠国へかへりて其ごとくにいわく此山のはぢ  
なりそれよひ戻しねかひをかなへつか  
わすへしと有りしかは寺中の若坊主  
とも追かけゆくにかほと走り追かけ  
てもかのものゝはしるとも見へさるに半  
町斗りさきへゆくいかにしても追付  
事かなはず上人はこれ只人にあらず  
と知りいよく追ゆき見うしなふ事  
なくしてしたひ行見よと一山  
の坊主残らず追かけしに紀州海道の  
大津といふ所の海きわまで追かけし  
にかの坊主海のうへをあゆみゆく  
追かけしものともは海きわになり

(30オ)

(30ウ)

(29オ)

もはや一人も追行事あたわずたゞ

あとをなかめやりてあきれ居るに

法海上人はいよ／＼たゞ人にあらず

いか成る聖者にてましますそやま

ことの姿をあらわし拜ませたまへ

と伏おかみてねかひ給へは知らすや

我はま事は普陀洛山の本主なりと

て千手観音とあらわれさせ給ひて

微妙の御声にてかりに下司坊主と変

化して寺／＼の法師とも法のこゝろ

あらず出家の身もちとてはなく邪見

放逸成るゆへになをし得さんと仮

に下司坊主と成り来りたるなり上人

をはしめとして一山の出家凡夫のあ

さましきふるまひ勿体なくも観世音

ぼさつの御方便の御化身とは夢にも

知らず一夏百日のあひたいやしき法師

なりとおもひ奉りし大罪のほとゆる

させ給ひ候へとみな／＼なみたをなかし

伏拝み奉つる観世音の御方便により

一山の出家今より後はこゝろをあら

(31オ)

(31ウ)

(32オ)

ため法を大せつにはげみ邪見放逸の

所行をつゝしみ申候へしゆるさせ給へと

おかみ奉る法海上人はなかく法を大せつ

にいたし御本尊をあかめ奉るべしあら

勿躰なやゆるさせ給へとふし拜みたまへ

は観世音ほさつはぜんさい／＼ながく

此事わするゝ事なかれと南方普陀

洛山へ帰らせ給ふ光明さつと輝かゝやき

紫雲にうちのり南方さして飛さり

給ふ御あとをおかみ上人はそれより

一山の寺中の坊主どもに異見ありて

拜み奉る所の千手観音の像を造立し

奉り出来させ給ふにより開眼ありし

其夜より巻の尾の御山よりして光

明さし出て和泉一国のものども夜

のうちより立いて巻の御山にのぼ

り拜みたてまつるに此観世音御身

より光明出ければまことに正真の観

世音ほさつとおかみ奉る今西国四番

の札所巻の尾の観世音是なり千

手観音ほさつは地こく道を濟度し

(32ウ)

(33オ)

(33ウ) 給ふ御すかたなり極らくにゆくものは  
すくなし地獄へおつるものはおひたゝし  
く道を濟度し給ふなれば御手干本  
にて濟度し給ふところの御姿なり

觀世音菩薩御長五尺五寸

御詠歌

深山路やひはら松ばら分行は

まきのをてらに駒そいさめる

此深山路とあるは高き山路をいひた

(34オ) るものにて此やまめい／＼のほんのふの  
大き成るみやまをこさねは極楽にゆか  
れづ此山道にひばら松わら分ゆく

とはめい／＼悪業ほんのふの邪魔を

するをひばら松はらとはいふあるひは  
腹をたてしんぬくちと三つの山それに  
絵はら松はらと成りすそにまとひかゝ

りとめるなりかりそめにも腹をたて

しんぬをもやす此火則火のくるま  
も成るぢごくのせめをうくる苦し  
これは腹をたてとうしにもあらずまた

(34ウ) 一日はぎけんよき事もあれとくちと

(35オ) いふ物は止めにくしわつかのものべつ  
してもなき物を大事にかけなてさす  
り死にしなに夫を念をかけまよふもあり  
あるひは妻子にまよひ又は財宝に心  
を残し往生をとげず是皆松はら松わら  
におなしとんよくといふやつも朝より寝  
るまであいたなく欲心といふもの有  
るなりこれを我むねに巻の尾のほと

の大き成る深山あつて松はら松はら

にかゝり行かぬるなれはいかれぬとてゆ  
かずには往生する時節あらずその松

はら松はらにかゝるとんよくしんぬぐちの

ほんのう悪業を切はらひゆくつなぎといふは  
六字の妙号なりつるきにてあく業

(35ウ) ほんのうの中より申てはあくかうのま  
じりし念仏役にたゝすと安心を定

めし人もあれとも大き成るあやまり

なり加茂川の水たへて渡るへしとい  
ふことくなりせんぐりになかれ来るたへ

る事なしほんのうのおこるもそのことく  
つぎるをまちて念仏申さんと有るに

(36オ)

ほんのふつくる事あらずほんのうの中よ  
り申す念仏にてほんのうの罪もきへ

信心もいつる信心出て申さんと有り信

じんさきへいつるものにあらず念仏となふ

るうちに信心おこる参り下向するにしん

じんおこるものなり高き山松はら松はら

つるきにてはらひきり巻の尾寺に駒そ

いさめるといふ駒は心のこまにてわきへ

ゆかぬやうに西方極楽のひかしの門を

こゝろさしまつすくに駒をむけて九品

浄土に往生と心の駒にむちをうちい

さみいさんて往生をとけよとの御詠歌

なり

既に京都東山岡さきという所に京

に奉公させおきしむすめに死に

目にあひたきくとこればかりを

おもひつめて死したるに娘はよひに

きたるものとうちつれたちとしや

おそしとはしりゆくにはや事き

れ死に目にあわす歎きかなしめど

もそのかひなく今はせんかたなく気

(36ウ)

をのほせて又端た成るもの、難義

なり夜明てもくよくさせん其とき

いとまこひあれと無理に納戸に入れて

寝させける人々もくたひれて寝いりし

とき母の貞の見おさめに髪の有

る内に見たしとそつとそはに行

鉦うつ坊主にいひてそばによれとも

なみたにむせひ居るに母はむすめに

逢たしくとおもふ魂魄家のむね

にとまりしか死したるからだにも

どりむつくとおきしかは娘は母の

(38オ)

よみかへりたまふかと嬉しくたかひに

いだきしめしかきやつといふてたかひ

にいたきあひなから兩人ともに死した

りこれは最期の一念なり

五番河内の国藤井寺観世音

千手観音御長五尺式寸

座像なり

人皇四十五代聖武天皇の御建りう

(37ウ)

(38ウ)

初瀬の鏡世音ほさつと同木にして

仏師もおなしけんもんしけこくの作に

て開基は行基ほさつなり此藤井寺

は剛林寺といふなりしかるに藤井安元

といひて大悪無道のゑせものあり仏

とも法ともしらすあるときは猪熊の

たくひを射ころし煮て喰ひ又ある

ときは鹿をころして煮てくらふ例の

ことく食ひたく成りしゆへ寺に行て

猪を料理するにより堂まりの坊主見

つけてこれはけしからぬ寺内にて左様

のけかれたるものをやくたひもなき外

へもちてゆかれよとわかりければ何を

やかましくいふそといふよりはやく堂守

坊主を引くよりはしらくよりつけて

このうへやかましくいふならば是をふる

もふぞと刃ものをふりまわしにらみ

つけそれより仏壇にかゝり花ひん香

炉なとほこりちらし前つくゑをとり

出しまないたとし彼猪の身を料理  
いたし仏具を打わり薪と成して是を

(39オ)

(39ウ)

(40オ)

たきくらい仕舞て跡を踏ちらし出行

かくの如き大悪無道の者なりおそろ

しやそれ人間の私語こと業を天の

聞所は雷のごとし我こゝろには人も

知らし聞くものもなきとおもへとも

天知る地知る我知るときやけども

天地へ聞へ焰魔王の御そばにまし

ます十王十躰俱生神のごとくそれ

くくの役人ありておのくか日々つ

くるつみ悪逆善根ともにいちく帳

面にしるし有て善根なく罪ふかき

もの死して冥途におもむき焰魔わう

の前にて一生かいつくる所のつみとか

または善根ともに糺さるゝ事なり然

るに安元ある時目をまほし虚空を

つかみ七転八倒して死したりしか頓

死のごとくそのうへむねにあたゝまり有

かゆへに二十四時はまつへしとて其儘おき

し所に三日目に息をふきかへしければ

女房子供はよび生てこゝろ持はいかゝ  
ぞといへはあら有かたや我今迄仏法を

(40ウ)

(41オ)



(41ウ)

さみし人の信心しんじんまでさまさせしか此  
たびおもひ知りたりさて死ししたる  
時うつゝのことく目くらみ死して手三途てに  
趣おもしに牛頭馬頭ごつめつの鬼おに来りて両の

かいなを引さけ中を飛としてつれ行ゆあら  
おそろしやむかふを見れば鉄てつの門かどきみ  
わろくおもひしに焰魔王えんまわうの御前まへに

くろかねのくさりをもつてくゝり十王じゅうおう十

躰た俱く生しょう神しんなみ居い給たまひしに牛頭馬ごつめつ

頭づつ申まをは大日本国大和の国くにかりの里藤井ふじい

安元やすもとと申罪人さいじんなりと中上なかつまるに焰王えんわうのた

まふはおのれ六道ろくどうよりたまゝうけかた

き人身じんしんをうけて善根ぜんこんは成なさす十じゅうあ

五逆ごぎやくのつみをつくしたるの罪人さいじん少すくし

の善根ぜんこんもあらずむしこゝの地獄じごく

にやるべしとさい判はんきわまりそれ引ひ

立たよと牛頭馬頭ごつめつすでに追おたてつれ

ゆかんとする所に老僧らうそう一人来きらせ給たまひ

藤井安元ふじいやすもといかにも善根ぜんこんはなきものなれ

とも少しのわれに縁えん有あるものなり

助たすけてとうせんとの大慈だいじ大悲だいひなれば此もの

(42ウ)

ひとたびしやはに帰かへしはしの命いのちを我われ  
に預あづかり給たまへと仰おほければ牛頭馬頭ごつめつは下に

ひさまづき居いる焰魔王えんまわうありかたや

今いまにはしめぬ大慈だいじの御みこゝろしからは少すく

しの間まは御預みあづかり中ななりと有あれば老らう

僧そうの御身みみよりさつと光明くわうめいをはなし給たまふ

にしはられしくさりの繩なははらゝとどけ

てくるしみをたすけ給たまひ此方こなたへ来るべし

と仰おほによつて御跡みあとに引ひそひ門かどの外そとへ出で

ければかならず是こゝろをわするべからずしや

はにかへりて念ねん仏ぶつをとなへよと仰おほせける

ゆへ御僧みそう様さまにはいかなる御方みかたにて候まをやと

尋たずねければ我われは長谷寺ながやの觀音くわんおんなり

なんじ長谷寺ながやの堂どう建けん立りつのとき人夫じんぷに

つれて材木ざいぼくをもち来るゑん有り汝なんじ

かつて信心しんじんの心こゝろにてはこひしにあらす

腹立はらたてはこびつれとも其時そのとき柱はしらをはこひし

か縁えんと成なり此こゝろたひはたすけ得えさする也

もはやかさねて我われちからにもかなひかた

し必かならず忘わする事ことなかれと仰おほられ

これよりその道みちをまつすくにゆくへしと

(43オ)

(42オ)

(44才)

おしへ下さる有かたやと御おしへの道をあゆむとおもへはたちまち気が付しなり今よりは心をあらため念仏申後世を願ふへし長谷の本堂建立の材木をもはこはずは地こくに落へきに少しの善根にて

たすけ給ふ觀世音の大慈大悲あら有

かたやとそれよりは女房にいとまをやり

すくにもとゝりをふつと切直様諸國修

行し国々をめぐり所々にて我かこと

き悪党しやけんのものあらは異見して

我かくの如くにて悪とうをやめて今か

くの如き身と成りたるなりこれみな長

谷寺の觀世音の御すくひなりとい

ひて仏法をすゝめまわりわざと出家

の如く頭をそりもせず切かみのまゝ

にてまわるまつ長谷寺の觀世音へ御礼に

参詣し猶また未来成仏成さしめ給へと

拝み奉りそれよりたん／＼と觀世音を

拝するに本堂もつての外にそんしもつたひ

なや觀世おん雨にぬれうたれ給ふほと

に成りてあれはあらもつたいなや末世に

(45ウ)

てかくの通り破損におよひしなりとおもひて堂守に觀世音の御作を聞はけんもんしけこくの作なりとて人皇四十五代、聖武天皇の御建立長谷寺と同木同作にて開基は行基はさつむかしは七堂からんの所にて有しか庇仁のみたれに

より焼はらわれ其後本堂出来させ給へ

とも只今はそこゝ破損し雨にうた

れ給ふなれと大そうなる事なれば

中々世話いたすものもあらずと物かたり

有るに付てあら有かたの御本尊なり

然らはそれかし所々方々とかけ廻り人々

をすゝめて奉加をもつて本堂を建なを

し申べしわれ長谷寺の觀世音の御利

生にて地こくにおつる所を蘇生れり

それより世をのかれ長瀬へ御礼中其

後諸國をめぐり邪見のものあらは仏

法をすゝめんためまたは我後世のため

まわる身なるに当寺の觀世音と長谷

の觀世音と同じ木にて作り奉る所

の尊像なればまつたく長谷の觀世音

(46才)

(45才)

(44ウ)

(46ウ)

と一たいなればこのほんとうを建立するはずなわち長谷の観音への御奉こうなりと夫よりして安元は所々方々を勸化致しわか身のうへ観世音の御利生をはなし三年余りにおひく奉加集り本堂建立成就しけるによつて末世までも藤井安元といふ者

(47オ)

長谷てらの観世音の御かけによつて地獄に落へきをたすかり蘇生したる御礼のため当寺の観世音長谷寺の観世音と同一躰なれば当寺の本堂を建立すれば長谷寺へ御奉公するも同し事とおもひて此本堂を藤井建立せし事を諸人に知らしめんか為剛林寺をあらため藤井寺と号しける安元少しき観世音へ御縁有て大き成るくとくをつみ未来成仏せし事なればすこしき善根にてもいたすべき事なり藤井てらと寺号かわりたる因縁かくのごとし

御詠歌

『西国願礼普陀洛伝記』——翻刻と解題——

(48オ)

参るよりのみをかける藤井寺  
はなのうてなにかむらさきの雲  
は藤といふものはたかくあかりむらさきの雲のごとくに花さけども我自力にて藤のつる高きところへあかる事ならず大木にまとひつき是をちからとして

(48ウ)

この他力をもつてあがる斯のごとく自力にては成仏ならず他力本願の御念ぶつを大木とちからにして往生せん是迄は人間とも成り後世を願ひし事も有つみよりそれは自力ゆへ往生せず今他力本願にあひ奉り有かたや花のうてなにかむらさきの雲とは藤のはなのかのうへに咲し色を花のうてなにかむらさきくもとよみわれくもかくの如くにて藤とおなし事なりとよみて我々もたへゆき本ぐわんたしか成るをたのみたゝ未来九品浄土に往生して臨終正ねんるときそらに花の咲し如く花のうてなにかむらさきのことくはなのうてなにかむらさきの

(49オ)

くもたなひき三像さんぞうの御来迎ごらいこうに預り  
往生わうじやうせんと願ふころの御詠歌なり

参るよりのみをかける藤井てら

花の台うたかにむらさきの雲くもとあそ

はされしものなり

(49ウ)

普陀洛伝記 卷の四畢

西国順礼  
三十三所 普陀洛伝記 卷ノ三

(1オ)

西国順礼  
三十三所 普陀洛伝記 卷の五

目録

一 出雲坊觀世音の利生りじやうを蒙かむる事

一 六番大和国壺坂觀世音

附り座頭沢市不思議ふしぎの事

(2オ)

普陀洛伝記 卷の五

出雲坊觀世音の利生りじやうを蒙かむる事

觀音妙応集めうおうしゆに右安元みぎやすもとと同じ様やうなる

事有り清水寺の觀世音の御伝ごでんに

これありこゝに上京かみきやうむらくもの御

所のほとりにさがみ坊といふて

至極しごくひんなる山ふしあり心中しんちゆうに思ふや

うさてもくかやうなる貧窮ひんきやう世よに

またとあるまし此うへは兎角とかく神仏しんぶつ

の御めくみをねかふより外ほかはあるまし

と思おもひ清水寺の觀世音へ年をかさね

(2ウ)

(3才)

て月參を成し願ひを立御慈悲にて  
何卒貧窮をすこしなりとも御ゆる

め下され福をあたへたひ給へとむら  
雲より清水へまいげつ十七日にはかゝ

さず參詣して一心不乱にねかひ申  
せしに三年になれともさして御利生

もなくけつくひんきうも甚はたし

く成りしやうにおもわれさてもくも

かくまで信心をこらし暑寒いとわず

月くく參けい致しねかひ申せとも

さしてそのしるしもなきはよくく

ふかきがういんかなとてわれなが

らあきればてしかなをも毎月お

こたらず參詣いたしける爰にさがみ

坊か近所に出雲坊といふ山ぶし有り

けるかこれもかたのことくびんぼうなり

さかみぼうはこれとつれたち清水へ

參りなんとさそへとも清水へ何しに參

るへき何としたる事にやそれかしは清

みづときくとうるさしといひて參

らすさがみ坊は何とそたまして

(4才)

(4ウ)

成りともまいらさんとおもふおり

しもはるのはなさかり成りしにいづ

も坊の所へゆきてけふは天氣もよ

しはなもさかりなれば祇園の

あたりのはなを尋ね見んといひて

つれたちゆきて粟田山ぎおんのあ

たりそこくとつれゆきまた日も高

ければ松原どおりへまわりてかへる

べしといふにいづもほうはそれはけ

しからぬまわり道なりといへはなく

さみにゆくべしとて三ねん坂をつ

れよりければいづも坊ひかしを見てむ

かふにきらひの清水が見ゆる定め

てその方は參詣せらるゝ成らんそれ

かしはこれよりかへるへしといふに

さかみ坊はひとりかへすも本意なら

すと地主のはなもいまころはさか

りなるへければせひく同道せん態

とさへ見に来る人もあるにとて引

つれ行それかしは鳥渡參詣いたすべ

しとて觀世音の御まへにいたり觀音

(5才)

(5ウ)

経きやうをとなへて福徳をいのり居る出雲坊いづもぼう  
はそとおかみてわきへより絵馬えまを見  
その外さんけいの人をなかめまち  
居れどもたいくつして下向げかうをさいそ  
くしてせわしければいまた経をよみ  
はてねども是非せひなく出雲坊いづもぼうにつれ  
だち地主ぢしゆの花を見ゆる／＼として  
下かういたしけるにその夜出雲坊いづもぼうに

(6オ)

観世音御くわんぜいおんごむそうあり其方まがたのかたへ明日  
祈禱きたうをあつらへに来るべし早速さつそく行て  
外の事はせず観音くわんおん経きやうを百篇ひゃくぺんよむべし  
しからは病氣びやうき本腹ほんふくあるへしその礼もつ  
をうけて富貴ふうきの身と成るべしかな  
らす観音経くわんおんきやうをとなへよと仰せらるゝと  
見て夢さめたりふしき成るゆめを見  
し事かなとおもひ居るにあくる日の  
昼時ひるふんに侍まわらひ老人とらひ供ともをつれて出雲坊いづもぼう  
といふは是成るにやとたつね来りて  
御所ごしよかたより御病氣ごびやうきおもき所御自分ごじぶん  
行いりきにたつしたるよしことにほう  
かくもよろしき方にあたれば祈禱きたう

(6ウ)

(7オ)

をたのむへきよし占方うらなひ申まをにつき参  
りたりはや／＼来られよ御太義ごたぎなか  
らきとうたのむなりといふに見ぐ  
るしきなりにてまいり候事こうじいかゝ  
なりとりつくるわんといへはくる  
しからずとていそぎひきつれ行  
さてまいりつきければいづもぼう  
は御病人ごびやうじんのそばによりて観音くわんおん経きやう  
をとなへしかはふしきや四五十へんの  
内に御ごころすゝしく成らせられ百  
へんとなへ奉ほうれはすぎと御ごころよく  
成らせ給へはこれによつて御礼ごらいとし  
ておひたゝしく御ほうひいたゝき  
ければ出雲坊いづもぼうにわかなに内證ないしやうよろしく  
なればさがみぼうこれを聞てさて／＼  
その方はよき仕合しあはかな行力ぎやくもいつの  
間に左やうには達たつしたるぞうらやま  
しき事かなあやかりたしといふこれ  
につきふしきなる事ありその方と  
つれだち清水しみずへまいりしばんに観  
世おんの御つけありかくのごとく行い

(7ウ)

(8才)

力たつしたる事もなし又観音經

もろくにおほへすかたことまじりに

となへしにふしきに御病氣御心克

ならせ給ひかくの通りの仕合なり

と語ればさかみぼう聞にたまらず内

へも帰らすそのまゝにて清水へ参詣

して觀世音の御まへにひれふして偕

もく此年月三とせにあまり暑寒を

もさけず毎月けだいなくさんけいた

しねかひ奉るそれかしには少しの福

をもあたへたまはずむりにつれまい

りし出雲坊は只一たび参詣し殊

さらうわのそら成るやうにおかみ

奉りしものにあのことく福をあたへ

給ふは觀世音のゑこひいき有る御事

とさまくかきくときうらみ奉りて下向

いたせしその夜觀世音の御つげに

仰せけるは其方けふ清水へきたりて

たんく恨むる事至極もつとも

成りしかしなからなんじには清水より

一せんもあたへられぬ子細あり出雲坊

(8ウ)

は一たび参詣するとあたへねはならぬ

わけあり出雲坊せん生うしにて

有りしかきよ水の普請の材木を

日くひき来りし牛なりうしは

何の材木とは知らねとも苦勞をし

て堂の普請のさいもくを引ける結

縁によつてかれには福をあたへつか

わせし事なりなんじはまた先の世

清水の坊主にて有りしか奉加錢

をはよくには取らねども五錢十錢づ

取りてのみくらひして人の施物をは

むなしく成したるゆへに今そのこと

く貧きうなりしかるゆへに一生か

間日く参詣してねかふとも幸を

あたふる事は成しかたし然れ共

なんしたひく参るくどくをもつて

未來は極業往生うたかひなく道

引成仏さすへしと仰ける此御告にて

さかみ坊ねんをはらし後世菩提を

いのりけつかうに往生をとけしと成り

此出雲坊も藤井安元ともし事心に

(10ウ)

(10才)

(9ウ)

さら／＼仏へ御奉公と思はずはこひし  
結けゑんにてかくの通りなりしかれば  
よきゑんには信心しんなくとも結縁けつえんいた  
すへき事なり

六番大和の国壺坂觀世音

千手觀音高香山といふ

(11オ)

壺坂山に弘法大師の御作といふて岩  
こと／＼く五百羅漢らかんなり梵字ぼんじあ  
り南都なんとのみやこを今の山しろにう  
つし給ふ桓武天皇くわんむてんわう奈良にて御眼みかん  
病びやうを御わづらひ遊されければ典薬てんやくの  
頭かみ其外さま／＼と御薬を差上貴僧高  
僧御祈禱ごきと有れどもすこしもしるし  
なく甚た御眼めのいたみつよければ  
御手にておさへさせ給ひすこしも御  
明き遊はさるゝ事成りかたくして帝  
思召けるにはもはや医師いしのちから薬  
のちからなどにてなをる事成かたし  
此うへは仏法のちからならてはなをる

(12オ)

へからずとて御ふれを出し給ひ七日か  
問いのりて仏法のちからにてなをす  
べしもし七日の内に直ならずは仏  
法あつて益えきなししからは仏法をこと  
／＼くほろぼし寺院じいんをこほちて出い  
家はけんぞくいたすへしいつれの法ほつより  
成りとも罷より出て御祈禱ごきといたせとき  
ひしく御ふれ出れともたれあ  
つてわれ出んといふ出家なしもつ  
とも左も有るへきことなり七日の

(12ウ)

内御祈禱いたし御心よく成し奉ら  
は其身はもちろん仏法の手からな  
れとももし自然しぜん仕損しそんしたる時には  
其身ばかりか仏法の滅めつする事ゆ  
へにいづる人さらになしそのころ  
芳野よしの山に法恩ほうおん沙弥しゃみといふたつとき  
僧そうまし／＼て岩いのほこらに行いひす  
まして居たまふこのほこらの片わき  
に柴さいかる老父らうふ式人しきじん荷にをおろし休やす  
み居てはなしをするに帝みかどさまの御  
眼めわづらひ七日の内に祈禱ごきといたし

(13オ)



(13ウ)

直しぬる出家を御尋あり御祈とう  
いたしもし七日の内にしるしなくは  
仏有りても益なき事なれば寺く  
の坊主ともをことくげんぞくさせ  
給ふて仏法をたやさんとのきひしき  
御ふれみかどさまも御無理成る御ふ  
れ今にいつかたよりも出る人かないと

(14オ)

の事成りといふを法恩沙弥聞給ひ  
それはまた世界にたつとき出家も  
有るへきに何ゆへ御祈禱をいたさぬ  
事そ此方世のまじはりをきらひ此  
山奥へ住居れども仏法のめつする  
と聞てはそのまゝに聞すてられず  
さらはわれゆきて御祈禱申さん  
とてそれよりすくに内裏さして  
ゆき給ひ御門をつかくと通りたまへは  
御門番何もの成るそとがむる法恩  
沙弥は洞穴にあつて常に湯水も  
遣はずして身体まつくろにふすほり髪  
ひげながく衣も衣るいも見るしく  
妖ものゝやう成る体なれはとかむるも無

(14ウ)

(15オ)

り成らず法恩沙弥仰せけるは成程  
不審もつともなり帝の御眼病加持  
いたせとの御ふれ出たるよし我は  
芳野の山おくなる洞穴にすむ法  
恩沙弥といふものなり仏法めつせん  
と聞たるゆへ洞にてきゝすて居  
られすこれによつて御加持に参  
りたり此よしを仰上られよと有るに  
より其おもむきを帝へ奏聞申ければ  
それ召よと仰せけるゆへ頓て帝の  
御そばへまいられけるみかとの御側  
には女御更衣の上臈かたなみ居給ひ  
てひしりの躰のいやしけなるを見て  
みなく笑らひをふくみ給ふ法恩沙弥  
おゝせけるは御いたましやかたしけなく  
も天子の御身なれとも疾病のう  
れる御こゝろにまかせられついでく  
拙僧いのり奉つらんと有るに帝仰  
けるは仏法のちからにてなをるも  
のならば七日の内にきどくを見すべ  
しと仰られけるに法恩沙弥はかしこ

(15ウ)

(16オ)

まり奉り仏法のかたしけなき事は  
じこくに落る罪にんまたはいかや  
うの病人にても直る事うたがひな  
しまして御目ばかりのことなれば  
いとやすし七日と申は程ひさし只  
今即座に御平癒なさしめ奉つる

(16ウ)

まひ一へんのたひ毎に数珠にて御  
目をなで給へば御いたみつよくか  
かへさせ給ひし御眼痛み和らき御心  
よく陀羅尼一へんのたひことに御目  
をなてたまひ百へんとなへ給ふに帝  
は御目をひらきたもふに透と御こゝ  
ろよく御目うるわしくたちまち御  
平癒あれはかたしけなくも帝は  
御手をあわせたまひ誠に仏法の有  
かたき又たつとき法恩沙弥の功力  
いち印さよと仰有る法恩沙弥もよろ  
こひ奉り御目よろしければ外に  
御用なしげがれ多き身のさまなれ  
は内裏のさまたけとも成りなんは

(17オ)

(17ウ)

や御いとま申上んどのたまへは何事  
成りとも望みなきやと仰けるに世の  
ましわりをきらひ吉野の洞にひき  
こもれば何事もさらにのぞみなし仏法  
の滅すると申を承り聞すがたくて  
まいりたる事なりと有ればみかと  
仰有けるはまことに仏法を断滅させる  
の心にはあらねともかほどの敵し  
きふれを出さすは貴僧のことき出家  
も出ましとおもひての事なり今よ  
り法恩長老とよふべしとて長老と  
いふ号を下し給わるこれ長老といふ  
はしめなり今は御いとま申すべし  
とあれは誠にあのことき出家有る  
事仏法の忝なきにしはしとめよと  
仰せけれともふり切てよしのゝ洞へ  
帰り給ふその後帝おほしめすは何とそ  
今一度法恩長老に御対面あそはされ  
たくまたは仏ほうの徳にて御眼を  
なをしたまへは堂がらん御こんりう  
あそはされたき御こゝろゆへ法おん

(18オ)

(18ウ)

長老を開山としていつくに成とも  
法恩長老の見立にてよろしき

所に堂を建よと此よし法恩長老へ

申べしと御つかひを遣わされ御迎

ひのため輿をつかわされ吉野の人

をほらへ案内者として長老に勅命く

だる長老ふたゝひ洞を出ましとおもへ

とも勅命許する所なし一つには一ヶ寺

建立すれば末代の功とくなる事かし

こまり奉るしかし輿にはおよひ候まじ

やはり歩行にてまいるへしとして即時

に歩行にて内裏へあからせ給ふ帝

は長老に御対面ありいよ／＼堂建りう

の御心さしにて法恩長老にその場所

を見たて給へと仰けるにより法恩長

ろううけたまわり所／＼方／＼と日／＼

道すから千手陀羅尼をとなへつゝ

霊地をたつねあるき給ふに大和の

国つほさかの地にて日もくれければ

爰にやどりて夜とともに陀羅尼を

となへ給ふにいづくともなく又千手陀

(19オ)

羅尼を微妙の御声にてとなふいづく  
にてか有るそここゝろをすまして

聞給ふに地の下に聞へける耳を地

に付てきけはいよ／＼地の下にきこへ

けるさては此所に不思議の仏像まし

ますべきと夜あけて其所を掘り

たまへは七尺はかり下より瑠璃の壺

をひとつほり出したりふたをとりにて見

れは一寸八分の千手くわんおんにて

おわします有かたやと帝へそのまゝ

御目にかけてすなわち此所に堂を立

べし小仏なればとて壺丈六尺の

大仏をつくり此御むねに小仏を入れ

法恩長老開基したまふ壺坂にて

出したればとてつほ坂寺と名つけし也

此壺坂の下に土佐町とてあり沢市と

いふ座頭ありしかあるもの此沢市に

其方も観世音へ一目をあけて下さ

れとねかわぬかといふ奈なくも桓武

武天皇御目わつらひの御時御利生

ありし本尊なりといふに沢市是を

(20オ)

(21オ)

(20ウ)

聞てそれは耳よりなる事なりさら

は賤しき我等なれば七日の百日のといふ

てはかなふまし千日参りしていゐる

へしとそれよりふつても照りても寒

気暑氣のいとひなく参りつめ九百九

十九日に成りければ今宵は観世音の堂に

通夜して御夢想にてもうけんとおも

ひこもり夜ふけてすこし寝入りしに

ほとなく夜あけて何の御つけもなし

沢市大にちからを落しさても聞へ

ぬ観世音かな帝の御目は七日になをし

給へとも沢市の目は千日参りしてふる

日も照る日も暑寒とてもいとわず

参りつめ九百九十九日なれば今

宵観世音の堂に通夜をして御夢

想にてもうけんとおもひ夜ふけ

寝入りしに程なく夜あけなにの

つけも御利生もなし是ほと参る

事ならば外へねがひなば今時ぶん

は目のあくことも有へきにやくに立

ぬ千日まいりさて／＼聞しとはち

(21ウ)

(22オ)

(22ウ)

かひ御利生のなき観世音なりと大

にうらみ奉りもつたいたくも見え

もせざる白目をむき出し本堂の方を

にらみつけて坂をくたり帰へりかけ

しうしろより沢市／＼と声を

かけられ誰成らんとふりかへりければ

ばつちりと両眼ともにひらけて本堂

その外あり／＼と見へければ沢市大

きにおとろきこはありかたやの御事

かな凡夫の浅ましさはらくの間

をまぢかねおそれ多くも観世音

を恨み奉り悪口申せし其罪ゆるさ

せたまへとなみたを流し座頭の

わか目にあきし事なればいつくを

見てもはしめての事ゆへ珍らしく

おもへともまつ／＼いそきかへりて家内

に悦ばせんと我家にかへるに女房

は是を見て沢市どの目があきたるか

といへばさては女房かとあいさつ

して観世音の御利生ありかたしと

女房もすぐに御礼に参りそこら近

(23オ)

(23ウ)

(24オ)

所も沢市か日のあきましたといひて  
 吹聴かきにあるけはこれを聞きほどの者  
 あら有かたの御本尊やとてまいらぬ  
 ものはなかりけるその夜さわ市への  
 御つけに汝な前まへ生の業わざによりいま  
 座頭ざとうと成り千日せんじつまいりしてたのめ  
 ともいまだ罪業ざいごうつきさるゆへあけ遣わ  
 す事成りかたきになんじさまへ恨  
 むるもつともなり明てとらせずん  
 むるもつともなり明てとらせずん  
 ば心さしあしくひがみて仏法にうと  
 く成らん事ふひんにおもひ沢市へと  
 呼かけしは我われなり我わがこへなんしが  
 耳みみに入ると目のあきしなり悪業あくごうの  
 めつするためために西国さいごく順礼じゆんらいすべしとの御  
 つけ則すなはち早速さつそく三十三所の觀世音くわんせいおんへ參詣  
 せしと成り

御詠歌

岩いわをたて水をたへて壺坂つぼざかの  
 庭にはのいさごも浄土じやうとなりけり  
 岩いわをたてとは岩いわほとたかく成るも  
 のはなし大木おほきにても大きなる家に

『西国順礼 三十三所 普陀洛伝記』——翻刻と解題——

(25ウ)

ても風にてうこかぬ事なし岩は風  
 ふけとも少すくしもうこかぬ事觀世の  
 御心も岩のことくたしかにてうこく  
 ことなし凡夫ぼんぷのこゝろはうごきか  
 わる水をたへてとは觀音くわんおん大悲たいひの御ちか  
 ひ深ふかきをいふしかれば壺坂つぼざかの庭にはの  
 砂いさごも浄土じやうとと見る心なり

普陀洛伝記 卷の五畢

(26オ)

西国順礼 三十三所 普陀洛伝記 卷の六

目録

一 七番大和国岡寺觀世音  
 附つり長門国青野なかつのへ百性ひやくじやう娘破舟むすめはせんに  
 あふ事

(27オ)

一 八番大和国長谷寺觀世音  
 普陀洛伝記 卷の六

七番大和の国岡寺觀世音  
 土仏とぶつ丈六じやうろくの尊像そんざうなり人皇にんりやう二十

五代欽明天皇の宮都岡本

の宮なりよつて岡本寺といふ

弘法大師の御作唐の五大山しやう

りやうさん天竺にては祇園精舎たい

りんしよくしちくりんしやうし日本にて

は高野山比叡山なんといふ霊地のつち

三国の土をもつて作りたまふもと此寺

は龍梅寺といふ所の岡といふをとりて

岡寺とよふなり歌にゆきゝの岡とよみ

し所なり人皇三十九代天智天皇の御

宇此岡山といふ所に毒蛇すんで岩窟に

住居し人を見れば鏡のこごとく両眼に

てほのふの如くなる舌をまきたて毒

氣をほつとふきかくればけむりのこ

とくなるもの身にあたれば即座に

死す又此辺に田地何十万石とも知れ

す明置し事末代までの世のついで

何とそ此毒蛇を退治せよと仰付

らるゝ甲冑を帯してもぐ足のあ

いたよりその毒氣にあたれば死

(27ウ)

(28オ)

(28ウ)

するゆへに武士のちからにも叶わす

其ころ大和の国東福寺にきへん

大僧正といふたつとき僧正あり帝

めして法力にて退治すへしと仰遣わ

さるればかしらに勅命をいたゝき

法力をもつて退治せん事いとやす

しこれまでの行力のつもる所

仏ほうのちからかたゝもつて頼み

ありと御請を申につき用ゆへき用

意の品は何ゝと仰せあれば別に用意

の入る義にてはあらず此水晶の珠数

一連か用意にて候とて大僧正は岡本山

の岩窟へゆき給ふ毒蛇は僧正をのま

んと毒氣を吹かけるに大僧正少し

もおそれ給わす吾勅命をかふむり

行力をもつてこゝろつくせし此珠

数仏法のちからをもつてなんしをたゝ

いま退治するものなりと秘文をとな

へかの珠数にて大蛇をたゝき給へはふし

ぎや毒蛇はからだをちぢめうこき得

ず僧正は聞ゆる大力なればどく蛇の角

(29オ)

(29ウ)

(30オ)

をもつて引出し此所池有りしにかの  
大蛇を池の内へなけこみ五十六億七  
千万歳りうげさん会のあかつきま  
て出る事有るへからすと石に阿字梵  
字をかきて毒蛇の入りし跡を此石  
にてふたをして踏すへ給ふにより末  
代まで毒蛇の出さるるに弥勒菩薩

(30ウ)

を本尊として此所に寺を建よと仰  
によつて本尊弥勒ほさつ龍のふた  
したる所なればとて龍に蓋すと書  
て龍蓋寺と名つけしなり觀世音の  
事はそれより後弘法大師入唐有し  
とき台湾国といふ所にてころは

(31オ)

八月上旬の事にわかにかぜ吹来りて  
波すさましく打立く舟は上るやら  
下るやら知れずさては此ふねこゝろへかたし  
みなく覺悟し給へと船頭申けるに  
空海聞し召三世三千の如来へきせい  
をかけこのふね何事なく通し給へ  
我まつたく命をおしむにあらす入  
唐いたし仏法を聞得て日本にかへり

(31ウ)

て法をひろめ末代までも法を残さんと  
ねかふゆへ命大切なり御ちからを合せ  
てたひ給へと真言陀羅尼をとなへ  
給ふに南にむらさきの雲出て矢を  
射ることくに此雲来つて船のほばしら  
の上にまとひ空海おそるゝ事なかれ  
まことに空海しゆしやうの心さしの  
ゆへに不便なりとおもひ此船を守るなり  
と聞へしかは空海ありかたき事なりとて  
もの事に御慈悲のすかたを拜ませた  
まへと末世まで残しをき申たしと願  
たまへは雲わかれ我は如意輪觀音也  
我斗り此舟を守るにあらす式十八部  
衆けんそくみな底に入て此舟を取  
まきて守るなり此舟はかりけかなし  
とのたまふ御姿を空海は舟板を

(32オ)

もつて爪かたにうつしとり給ふこの  
つめかたの觀世音さぬぎの八島に今  
にあり此觀世音の御すかたを三國  
靈地の土にて作り給ふ岡寺の觀世  
音なり

(32ウ)

岡寺の觀世音はべつして舟に乗る  
人などは信仰して御影を首に掛て  
いれは舟路にて難をまぬかる此觀世  
音にかきらずすべて觀世音を信する  
ともからは舟または水に入ても浅き所  
にやり給ふて命をたすけ給ふ眞言

陀羅尼經にありれいしやう記とい

ふ書物に長門の國青野といふ所に

身代よき百性のむすめあねは十八

(33オ)

妹は十三才なるか姉はつれ有て西國  
順礼しける其こしらへをするに妹は  
うら山しく親にはかくともいわず内  
證にておひをこしらへ何角と用意し

て後親にかくといへばいやゝ其方  
の年ばいにてははやし姉は頓て縁に

もつけは西國京登りなども今の

(33ウ)

内にせねば成らず其方は四五年もは  
やし其上百里の余もある道中なれば  
子供をつれては同行衆もなんぎなり  
とて合点せず姉はこしらへ同行とつれ  
たちゆくをはるゝと送りに出るを

(34オ)

見るにつけ妹はうらやましき堪忍成  
らずかねてこしらへ置しおひをおひ  
西國札を首にかけ裏より出て山越  
にまわりふねの乗場へはしりゆき  
追付んとゆきしかとも姉は北海道  
ゆへ五六里もはやし舟に乗出しと見  
へてもはやかけもかたちも見えずおり  
ふし出舟あれば姉の跡をしたひて舟

をたのみ乗出しぬ此ふね夜をかけて行

ににわか雨風つよく山のことく成る大

波うち来つて舟をあげおろしゆす

る事すさまじ人々生たる心地なくつ

(34ウ)

ゐに岩にうち上られ破舟し残らす

海のもくすと成にけり此むすめは觀音

へ参詣いたし度姉の跡をしたひ来り

しなりたすけ給へとねんし居たるに

首にかけたる順礼ふたひろかりてうけ

と成りくひばかり水より上にうきて

水をのまず五体に海につかりて波にゆ

られあちらこちらふわゝとうき居るに  
風はつよし雨はしきりにふりまつくるに

(35オ)



成て何連の所といふ事も知れずたゝ

たうくとしたる海はかりすさまじき

に娘は一心ふらんに南無大慈大悲の

觀世音たすけさせ給へと念し居る

所にすさまじき大浪どつとうち來

つて娘を岩のうへにうち上たれども

いつく共知らず雨はふる真くろには有

たぐなき居たる斗なりしかるにこの

あたりに獵師有て海あれけるゆへによ

ひよりふして居たる所に浜によき仕

合ありはやく獵に出よといふに獵師

目さめておもふ事をゆめに見ると

よひより浜のあれとおもひふしたる

ゆへなりとて又ねる所に暫く有ていまた

行さるやはやく行べしとおこす是狐たぬき

のわきならんと又寝て居るに大きにい

かつて早くゆかすんは其儘には置

しといふ所詮寝さぬ事ゆへみの笠

にたいまつをとぼし網をもちて出しに

いよく雨つよく浜もとうくとあれる

もちろん獵のきくへき牀にもあらされ

(35ウ)

(36オ)

(36ウ)

はしはらく海上を詠め居るに纒に

子供の泣声するゆへふしきや此烈敷氣

色といひ今時分にかなる事かいつ

く成るらんとたいまつにて其辺をたづ

ねみれは浜きわの岩間に十二三斗の

むすめおいつるをかけ五体しとくぬ

れしたより居けるゆへその子細をとへは

かやうくとあらましをいふさては觀世音

の御たすけなりいとおしの事やなまつ

く此方へとて我家へ連かへり女房に

かくといへばともにあわれみ衣類を

着かへさせさまく介抱して所を

とへは是より十里斗りへたてし所

なれば親元へ送りゆく偕亦親元

にては返勢戻せのたいこかねさわき

居る中へ連ゆきければすかりつきて

とふした事ととふにかやうくと始終を

はなせは二親は手を合せ有かたの御事や

となみだをながしやうの御つけ有て

浜辺へいで助け給りしは則そなたは

觀世音なりとふしおがみてよろこひす

(37オ)

(37ウ)

(38オ)

くに帰らんといふをまつしばらくとま  
り給へととむれどもせひかへるへし  
といふにより金子十兩取だして是は  
いさゝかなから遠路の所世話にあづ  
かりししるしはかりの礼なりとて差  
出す辞すれど聞入さるゆへしからは  
持かへり女房に見せ申ければこれも  
観世音の御かけとよろこぶむすめ  
の親は御礼参りとしてよく年娘  
をつれ西国順礼に出しとなり

御詠歌

(38ウ)

今朝みれば露をかてらの庭の蒼  
さなから瑠璃の光り成けり  
此けさ見ればのほんのふの夢覚て  
まよひの浮世を夢に見る世の有  
さまとさとりを聞仏のこゝろにな  
れはにくきかわゆききたなきほし  
いの事なくたとへは朝日のさめる時  
のこゝろのことく何の苦もなきさつ  
はりとしたる本来無一もつ仏のさ  
とりを開きし所のことくなり露岡寺の

(39オ)

庭の蒼さなから瑠璃の光り成るとは  
さとりて見れば露こけ草木牛馬  
のふんまでもむさきものにはあらず何  
もかも瑠璃のひかりと見らるゝとさ  
とりの心をよみたるなり

八番大和の国長谷寺観世音

十一面観世音御長二丈六尺

金色の仏像なり

(39ウ)

むかし近江の国大洪水の事ありしに  
何国より流れ出けるやらん楠の木の長  
さ六間ばかりに廻り三かいほど有る  
結構なる材木大津うらに来る浜辺の  
ものとも是を見てわれ一と舟を出して  
とらんとするに此木にさわりし者目を  
まわし又は鼻血が出るか怪我をいたすか  
なれはおそれて寄つくものなく風  
にしたかひて堅田竹生島のかたへゆき  
又大津うらに戻りけるある時ふしきや  
此材木より光明いて、海を照らしけれ

(40オ)

(40ウ)

ば人々いよ／＼不思議におもひ恐れて  
なを／＼ちかよらずしかるに堅田大つ  
の鯉鮒光明におそれてうみの  
底にくひついでうきあからず  
師ともはなはだ難義しけると也  
風水東西とたゞよひて七十年水  
海にありしかる所に大和の国八木  
の里においのかとこといふ女二親  
とおつとにはなれかなしみに

(41オ)

逢ふ金銀あれとも女の身成れば  
何にかすべき先だちたもふ二夕  
親おつとの菩提のため末世に残る  
ほと成るけつかうなる仏を建立し  
一寺をたてゝ尼と成り後世ほだい  
をねかふべしとおもひしに聞は  
大津のうらにけつかう成る霊木有る  
よしなればこれをもらいて仏に刻  
奉るべしと大和の八木より地車を  
もたせ人夫をつれきたる大津に  
て此桶の木を下さるべしあたひは  
何ほとにてもつかわすべし仏に作り

(42オ)

申たしといへはそれは此方より御礼  
を申なり数年大津にてもてあま  
したる材木なれば何方へなりとも  
持はこひ給へかししかし此木にさわる  
もの怪我せずといふ事なしかくの  
ことくたゞり有るゆへ寄つく者なし去  
によつて数年此通りにして有りし  
なりいかゞしてもちかへり給ふぞや  
といふかど子いや／＼それはそちち  
の引あけて雑事につかわんとするか  
ゆへ霊木なればたゞりあり仏にき  
さみ奉つらんになとかたゞりの有  
るへき見れば此木矢橋の方にあり  
かそこは大津浜より舟に向ひ誠に  
有かたき霊木なれば仏につくり  
奉りなか／＼末世までもうやまひ  
拝し奉らんと大和の八木より御む  
かひに参りたり御心のかなひなは御  
たゞりなくやす／＼とあがらせ給へと手  
をあわせおかみければ不思議や風も  
なぎに矢ばせせより大津まで走るが

(42ウ)

(43オ)

ことく材木真一文字により来る事いよ  
く有かたかくたく見給へかくのことく  
なれば崇りはなしと人々よりて綱を  
付地車にて大和の八木までかるくと

(43ウ)

引ゆきけるさて夫より三月しておい  
のかとこ死したりしかれば誰あつて  
かもふものなきゆへ其儘にうちすて  
あり子供にてもさわればたより有る  
ゆへあたりに垣ゆひ廻ししめを張  
おきたれもうるさき材木を持参り  
し事かなとこにてもてあまし  
居る事三十四年の間なり三十四年め  
にまた大和の八木大洪水にて此桶  
木流れ出て初瀬川になかれこむ人  
く見てよき材木なり引あげよとて  
引上んとするに立よる程のものたより  
あれは爰にてもまた垣をゆひしめ  
を張さわらぬやうにして置事なり  
三十九年にいたり其ころ徳道上人と  
いふてたつとき僧所くを廻り給ふて  
此所へ来り給ふ折ふし所の老人に此

(44オ)

(44ウ)

注連をはり廻したる材木は神木と  
いうやうなる事にやと尋給へは神木にて  
候其元は知らず聞つたへし所は近江  
の国大津の浦に七十年有て光

(45オ)

明かゝやきもしさわる者有ればたより  
ありしに大和の八木においのかとこと  
いふ者仏につくり奉つらんと八木に引  
来りしにかとこ死して三十四年其儘  
にて有りしにまた洪水にて此所に  
流れ来りて同じく崇り有ゆへにか  
くのことくいたし置く事三十九年に成る  
よし承り伝へ候所かくの通りと語る  
徳道上人聞し召ありかたき霊木也  
しからは此材木をもらい申たしと  
あれはいかやうとも成るべししかし  
なから御出家なればたよりもあるまし  
きかもし只の人さわれば崇候といふ  
いやたより給ふ事有まし繩をかし給へ  
とてろくろ繩をもつて材木をくより  
給へは近所のもの集まりてあの出家  
にはいかやうのたよりか有らん見物

(45ウ)

せんとて立集り居るに徳道上人は

六十余の老僧の只一人してかのなほ

をもつて楠の木にむかひ手を合

せ一仏じやうどうくわんねんほうかい

草木国土悉皆成仏とのたまひて

今の初瀬の山へひきあげ給ふに

かるくつくすの木は上りけるこの

所に庵をむすび楠には雨おひしお

きそれより上人日々此材木を拜み

奉りてそれかしちからとほしければ

仏牀に作り奉る事あたわす何卒

方便をもつてはやく仏とならせた

まへとふし拜み給ふ事三年に余れ

りその頃は南都聖徳天皇の御代な

りしに房崎大臣初瀬川の辺りへ

御なくさみに出給ふに楠の木のおひ

して有るを御らんじ老僧此材木に

むかひて手を合せ拜み申事やうす

聞まほしと有れば此木をおかむ事

斯くの次第なりと大津浦この

かたの事物語りし誠事にこの木

(46オ)

(46ウ)

(47オ)

霊木にて候へば仏につくり奉り度候

へともそのちからなく候ゆへ三年あま

りにおよへともかくのことく守り奉

り候斗りにて候と有れば房崎の

大臣は是霊木なり当帝は御信心に

て南都大仏殿盧舎那仏御建立有り

しなれば霊木の事を奏聞有りしか

は仏師に仰付られんと都にかへり奏聞

すへしとて大臣婦らせ此おもむき

を帝奏聞有りければこのはせの

山におひて堂建立あそばさるべしと

大和一国の小民にいたるまで人夫に

仰付られ本堂建立有本尊觀世音

は其頃天下の仏師はけんもんしけこ

くといふてけんもんしは親けじこく

は子なり京都誓願寺の本尊を作り

たる仏師なり誓願寺本尊は御長

これほどこうくなりと親子申合せ

所をへだて作りしにすんぶんちがひ

なく一所に持寄りしに一人して作り

奉りたるやうにあり初瀬の山にて此

(47ウ)

(48オ)

親子観世音をつくり居るにふし

ぎ成るかな山かつの翁遠方より見る

に仏師けんもんしは観世音けしこくは地

蔵尊と拜まける有かたやとそはゑ

寄りて見れば只の人なり又遠く

より見れば観世音地藏尊なり此親子

観音地藏の化身なりといふ説あり

作り奉る観世音菩薩御長二丈六尺

の本尊なればたい座はいかゞしたるもの

やらんと案し居る所にあくる夜夜はん

すぎより明七つ過まで此山に黒雲

まひさがり山はどろくとしんどうす

る事すさましく近在余国へも聞へけり

人々おとろき初瀬の山何事の出来

つらんおそろしき事かなといふに夜

あけて見れば不思議や八尺四方のうへ

は一面に切立たることき石に観世音の

御足を乗せ給ふくばき所あり此石の

根をほりて見るに底知れず誠に有か

たき霊仏なれば諸天善神けんろう

地神の御力にて台座の石出る事

(48ウ)

(49オ)

(49ウ)

観世音の御ちかひ末世まんかうまで  
此所にうこきたまわぬ五十六億七千万

歳りうけさんゑのあかつきまで衆

生を済度なされんとの御事にてりう

けさこんがうほうせき自然涌出の石

の台座ま事に有かたき御本尊なり

願人は徳道上人御建立は聖武天皇

御取次は房崎の大臣開眼は行基

ほさつ仏師はけんもんけしこくこれ

ほとそろひし事も有るましまこ

とにたうとき御本尊なり

(50オ)

(50ウ)

普陀洛伝記 卷の六畢

西国順礼  
三十三所 普陀洛伝記 卷ノ四

(1才) 西国順礼 普陀洛伝記 卷の七  
三十三所

目録

一 長谷寺観世音御利生の事

附り長谷の廊下并瓦の事

(2才) 普陀洛伝記 卷之七

長谷寺観世音御利生の事

長谷寺の観世音御利生菅原道実

公忝くも日の本の御神天満宮と

あかめ奉る菅丞相にておはします

とき初瀬の観世音御信仰にて御利

生記を三卷御蹟はし遊はされおかれ

たり其内にある一つ都によしあるも

の、娘二親一家一門けんぞく悉く

はなれ女の身の世すきはいたしか

たもなく長谷の観世音は御利生深

(3才)

くましますときく大和に下り初瀬に  
参詣してねかひけるは二親一家に  
もはなれ今は世すきの致し方も

なく長谷の観音は御利生深きくわん  
おんと聞参詣いたし候御慈悲をもつ  
てよろしき事を御さつけ下さるへし

此儘にては未くはぢをさらし候わん  
ねかひかなひ申さず候は、命を御取  
下さるへしと一七日か間籠りしに七

日目の明かた堂の内より老僧いで

させ給ひ汝しねかひふんにおもふ  
によりかなへ遣わすなり然れ共其な

りにては叶ひかたしそばに有るうす

き小袖を盗み着て在原寺へ行べし

しからは武士に逢ふへしそれを頼み

て一生力として暮すへしとの御告

目覚てあたりを見ればこれもこもり

たる女のうわきをぬき置き寝入り

しに御告に取れと有しは此小袖ならん

もし頭はれいかなる目に逢ふともそれ

夫迄に我こゝろからとるにもあらず

(3ウ)

(4才)

(4ウ)

御告に背きかへつてもつたひなしと  
こわくさくり見れど若し目をさまし  
いかせんとおそろしけれとも思ひ切て  
南無観世音ほさつとなへてこなたへ引  
寄るぬしは知らず寝入れれば我着たる  
見くるしきものをかわりに着せて彼小袖  
を着て立出在原寺のあたり迄ゆけは

(5オ)

あとよりばたくと大勢の足音すれば  
さては見付られしやと片わさへかくれ  
居るに馬上にてかち若兎大勢連たる  
武士ゆきすぎて馬をとぐめあの女こ  
れへよへと有るにかち侍ゆきて其由  
をいうに女はおそろしなからつれたち  
ゆきて馬上の前へにかしこまる主人見  
てさてく是程迄に似たものも有る  
ものか少しもちがひなしとて申ける  
は其方の貞かち死したる我妻に  
よくも似たれはなつかしくおもふ也  
苦しからぬ身ぞなからはつれゆき  
たしとあるはらは京都の者なれ共  
かへらすとてもくるしからず身是より

(5ウ)

御つれ下さるべしといふしからはとて美  
濃の国へ連行けるさて行着て見れば  
すさまじき大屋敷にて家中家来  
いと多くして奥方ともてはやすれば  
これ観世音の御利生と有かたくいさみ  
よろこひける其頃は京都禁裏守護と  
して諸国より三年つゝ都つめありて此

(6オ)

番に当りしゆへ女もつれゆかんとて  
用意いたさせまた都に二親又は親類  
などいふもいやしき筋目より出たるかやと  
人のおもはん所も有るゆへおは一人  
有りといふに夫ゑも土産を遣はず  
べしとて緞子ちりめん綾綸子縞子  
などの小袖其外さまくの物長持に  
したゝめ入旅だち程なく都もちかく  
成れば女は今更せんかたなくいかせん  
思ひしかみつから参てよく案内を成  
しさて殿へ知らせ奉らん其時入らせ  
給へとて相應の家居もかなと京に  
いたる三条通りを西へさして心かくるに  
東洞院あたりにて表に堀をかけてい

(6ウ)



(7オ)

やしからさる家居あればこれ宜しき  
所なりと下女に申付此内にはいか成る人  
のすみ給ふと聞へしとあれば走り行  
て案内して尋ぬるに是は上京辺に  
住給ふ御方にて候か老人の娘子にはなれ  
させ給ひ只今は御くしをおろされ尼  
と成りて爰に住せ給ふと答ふ走り

(7ウ)

かへりて此よし申せは心の内に是幸  
とうれしくそれへ参り御目にかゝり  
たしとあれば其やう成る御れきく  
心ろ当りはなしとおもひながら先請  
し入るゝに花のほうしにてあるし出ら  
れしをおば殿久敷御目にかゝらさ  
しと有るに覚へなければうろくとする  
成程久しく御目にかゝらず便りもいたさね  
は御見忘れも御尤ひそかに申上ねは御  
覚へ成さるましとて召つれし者どもを用  
事あらはよふべしとわきへしりぞかせ  
て申けるはわらは元は都の者にて両親  
親類にも悉くはなれそれより美濃の  
国へまいり武士の妻と成りしかあるし

(8オ)

此たび帝の守護の御番に登り給ふに  
つきてわらはも一所につれのぼり親ぞ  
くはなきかとのたつねまことは皆く  
死にうせて今は只我身ばかり成れ共  
さやうにあからさまに申なは筋目など  
うたかわれまたは召仕ひのものども  
てまへも気のどくゆへにふとおば一人  
もちたるよし申せしかともそのあても  
なくて難義におよひ只今これへ参る  
道すしおもひ付御家からを見かけおし  
ておばこと申たち入りしなりあはれ

(8ウ)

なさけにおばなりと御名のり下されなは  
生々世々の御恩忘れしと余義なく頼  
みければあるしの尼公はおもいよらぬ  
たのみ事なれともかの人のさまを見る  
にまことに思ひ入たるてい殊にいやし  
からざる人のさまなれはいと笑止なる  
事におもひさらは伯母と仰られ我も  
めいといわんと有れば大きによるこび  
早速夫の方へ案内すればやがて夫も  
入きたりふしぎ成る縁にてかたらひ

(9オ)

(9ウ)

とりし次第物かたりおひたゝしき  
みやけものをとらせ妻には久しぶり  
にて伯母ごに對めんの事なればゆ  
るゝといたすへしとて夫は出ゆきぬ  
さて女は跡に残りわか生たちほしめ  
長谷寺の事觀世音の御利生にて今

(10オ)

かゝる身と成りしよしを物語るにある  
しの尼公その長谷寺にこもりしはい  
つの頃にて小袖のもやうはかやうにて候  
はずやといひければ女は大きにおどろき  
いかゝしてささやうくわしく知り給ふぞ  
といふに尼公には其時小袖を取られま  
いらせしは此尼なりひとりのむすめに  
おくれたよりなきかなしさによき便り  
とも成る娘を下されよと觀世音に籠り  
ねかひしにねかひはかなはず小袖を  
取られしゆへもつたいなや觀世音をう  
らみ心にてかへりしに今おもへは其方  
を姪にもつべき觀世音の御利生の御引  
合せなりしぞかしかゝる有かたき觀世  
音の御めくみ今よりしては誠の姪と

(10ウ)

(11オ)

おもひおば子とたのみまいらせんとた  
かひになみだをなかけてかたらひける  
程なく三とせもたちて夫の守護の勤番  
もみてければおばの尼公も京都にて  
たよりすくなくと国もとへ一所につれ  
ゆくべしとて美濃の国へつれ下利  
一生安樂にくらさせけつこう成る往生  
をとげられしとなり此長谷の觀世  
音はうたひにもある通り唐土まで  
も聞へたる觀世音なりむかし百濟国  
の帝の御きさき御とし十八才なり  
世にたぐひなき美人成りしか御髪い  
つとなく無なつて老女のことく成らせ  
給ひければ御かなしみの程中もなかゝ  
おろかなり帝にも痛わしくおほし  
めされさまゝ御療治御祈禱のこるかた  
なけれどもさらに其しるしなく然  
るに御きさきの思召には日の本の長谷  
寺の觀世音は靈驗あらたまします  
御本尊ときゝ伝へたり程遠く其国かわ  
るといへとも信心のまことあらはなごか御

(11ウ)

(12オ)

利生りじやうなからん願ねがひて見ばやおほしめして  
日の本の方ひのくにのあたへ向むかひせ給たまひ一七日の間は  
るく海山うみやまへたてたる所を祈いのり給たまふに  
七日まんする夜老僧よろうそう来きらせたまひわれ  
は日本国初瀬寺の観音くわんおんなり汝なんじが病やまひ  
業病かうびやうにて是治じすることかなひがたし

(12ウ)

しかりといへとも海山をへだてはるくの  
所をいのる事不使ふげんにおもふかゆへ直し  
得へさすとのたまひて瑠璃るりのつほに水を  
入れ柳やなぎの枝えだをこの水にひたし後の  
髪かみに三度さんどそゞぎたまひてもはや直り  
たりと仰おほけると夢ゆめに見てさめておくれ  
の髪目かみめに見ゆるに黒くろく成りて有りす  
なわち鏡台かがみだいにかゝり御ごらんあるに元の  
かみよりもうつくしく真黒まっくろに成れば  
さてもくありかたやくと初瀬の観音  
たつとき御慈悲ごしひなりと御よろこひ限かぎり  
なく夫より長谷の観音はいかやう成る  
御本尊ごほんぞんなると聞きつたへて式丈六尺十  
一面の観世音にてましますとて同し  
くつくりてはせと名付なづて尊敬そんけい有る

(13オ)

(13ウ)

(14ウ)

今もろこし迄長谷の観世音まします  
なれはあし引の唐土たうど迄も聞きへたるはせ  
寺とはいふなりはるくの所さへ信心しんじんして  
いのれはかくのごとく御利生ごりじやうありまして  
日本のうちいつくよりおかみ奉るとも  
長谷の観世音へとゞかすといふ事なし  
初瀬の観世音をかなへたまふといふ  
御請願ごせうくわんは仏の有るましき事妻子さいしあれ  
は死する時のまよひに成ゆへ出家しやうけたる  
身にはかたくいましめおかれたる事臨りん  
終しゆうのみぎりはすのうてなを御もちな  
されて御来迎ごらいごうにあづかる観世音其迷まよひ  
に成るといふ恋路を取持給ふはふしき  
なる事なり臨終正念往生りんしゆうしやうねんじやうじやうをねかふは  
合点かてんなりといさみよろこひあるなれど  
もま実まことは恋のねかひいや成る事をおほし  
めす年寄としよりはりんじうをねかひおかむため  
わかきものは仏神ぶつじんをもおもわす恋路こいぢに  
まよへは此世あの世まてまよふ事をは  
ふびんにおほしめすなれと参りもせず  
すこしの縁えんもなければ御たすけなさる

(14オ)

べき事も成らず是によつて若く信

心之なきものを恋をかなへて遣はさば

夫婦となりこれひとへに観世音の御

慈悲と一生そまつにおもわず拜むが

ゆへ是を縁として未來まよひをたす

けんとおほしめしそれゆへ恋路をかなへさせ

たまふなり悪敷道ながら田からゆくも

あぜからゆくもおなし道毒とおほし

めせどもやまひにて毒忌おしくどく

薬へんしてくすりとなるこれ同じ

事にてそのゑんよりたすけすくわん

との御慈悲まことにあつき御恩なり

長谷の廊下并かはらの事

(15ウ)

人皇六十八代後一条院の御宇に南

都春日大明神の社人に信清といふ

者あり其者の子に信親といふもの

蛇かんでうといふ異病をうくるこの病ひ

は首筋ぼんのくほのあたりすさまじ

く袋のことくにはれて首まわらず大き

(15オ)

に痛み昼夜うつむき居る此はれたる

内にへびの居るといふ事なり医者薬

にもおよばず致し方なきゆへ春日大明神

へ祈禱のため信清御ねかひ申せしかども

さして其しるしもなく痛みくるしむ

ある人申せしは神道の事なれば神通

にかなひ候ことはよしかなわさる事は又

仏にいのり給へ長谷の観世音はとふと

きにあらすや御願ひ申されよとあれば

信清則長谷寺の観世音へ七日籠りて願

ひ奉りしに七日にみつる 暁 烏一羽飛来り

羽たゝきをしてたつて行目覚て是御

告成るへしとおもひて有かたくいそぎ

馬にうちのり我家に帰りていかゝ有ぞ

ととふに信親もおなしく明がたにうつむ

き居る所からす飛来りて出来物の上

とまると思へば追ふ事もならずしてす

くみ居るにからす腫物をはつゝく痛む

べきとおもふに却てつゝかれる心よさいわ

んかたなしゆへにあてがひておもふさま

つゝかせるに何やらんくわへてくつと引

(16オ)

(16ウ)

(17オ)

出す時にすこしきら／＼といたみしに烏  
の飛行を見れば、咫尺はかりの蛇をくわ  
へて飛さると見て夢さめて見れば腫  
物よりうみ血おびたゞしく出る心よさ

(17ウ)

おし出せはうみのこらす出はれたる所すほ  
り首まわる有かたやとなみだを流してこれ  
全く長谷寺の観世音の御慈悲かつは  
父上の御かげにて快氣いたせしなりと

申に信清は誠に信心肝にめいし有り

かたくそれより直に長谷寺にさんけい

いたし御礼をあげ此御礼としていかやうの

事をいたし上たりとも足る事にあらず

只観世音の御心になひたる事をいたし

上ん全く名聞にての事ならず神道の

ものにては佛法を信心いたさせん末世

へのしるしに観世音の御慈悲を知らせん

かためなり御心のほと御示現下さるべ

しとして又七日の間こもりて観世音へ伺

ひけるに有かたや観世音の御告に石

壇のうへに廊下をこしらへさんけいのも

の此石壇にて雨風をしのぎまた年

(18ウ)

よりたるものゝ杖かさにてわがまへに  
来る事いと不便なりせめて石壇の間  
成りとも其難儀をのがれて参詣いた

すやうにとおもふなりとのたまふ信清

なを／＼なみだを流してさても／＼観世

音の大慈大悲の御心諸人をあわれみた

まふ御つけなりとありかたければこの

よしを御門に奏聞申上長谷寺石

壇の間の廊下を建立し神道にても佛法

をなぬかしろにおもわせぬために春日

大明神の社人信清信親異病快氣

の御礼として建立有りし所の石壇

の上の廊下二町あまり所なり長谷

寺石だん上の廊下瓦ぶぎにてきた

る事は大和酒屋のあるし口より毎日

へび一すじつゝ出る事久しくして

此ゆへに氣もつかれさま／＼いのり

祈禱医療のこるかたなくすれども

やまず次第／＼によりゆきてせん方

なき難病なればつるにはこれにて命

も取られべく見へけるゆへ御利生あ

(19オ)

よりたるものゝ杖かさにてわがまへに  
来る事いと不便なりせめて石壇の間  
成りとも其難儀をのがれて参詣いた  
すやうにとおもふなりとのたまふ信清  
なを／＼なみだを流してさても／＼観世  
音の大慈大悲の御心諸人をあわれみた  
まふ御つけなりとありかたければこの  
よしを御門に奏聞申上長谷寺石  
壇の間の廊下を建立し神道にても佛法  
をなぬかしろにおもわせぬために春日  
大明神の社人信清信親異病快氣  
の御礼として建立有りし所の石壇  
の上の廊下二町あまり所なり長谷  
寺石だん上の廊下瓦ぶぎにてきた  
る事は大和酒屋のあるし口より毎日  
へび一すじつゝ出る事久しくして

(19ウ)

よりたるものゝ杖かさにてわがまへに  
来る事いと不便なりせめて石壇の間  
成りとも其難儀をのがれて参詣いた  
すやうにとおもふなりとのたまふ信清  
なを／＼なみだを流してさても／＼観世  
音の大慈大悲の御心諸人をあわれみた  
まふ御つけなりとありかたければこの  
よしを御門に奏聞申上長谷寺石  
壇の間の廊下を建立し神道にても佛法  
をなぬかしろにおもわせぬために春日  
大明神の社人信清信親異病快氣  
の御礼として建立有りし所の石壇  
の上の廊下二町あまり所なり長谷  
寺石だん上の廊下瓦ぶぎにてきた  
る事は大和酒屋のあるし口より毎日  
へび一すじつゝ出る事久しくして

(20オ)

らた成る長谷寺の観世音にねかひ  
奉つらは此宿病もしや快氣の事も  
有らんかとおもひ付てそれより信  
心をこらし願ひ奉り御願ひ成就い  
いたし難病御すくひ下さらは石檀の  
上の廊下の屋根を瓦ふきにいたし上  
申へしとねかひけるに御納受ましく此  
病ひやみて元のごとくすこやかに成りし  
かはかくのときふしきなる業病忽ち  
平癒する事ひとへに観世音の御慈悲  
のほと有かたしとさつそくいしだん  
の上の廊下尾根二町あまりの間に瓦  
ふきにいたしさて丸かわらの紋に  
ことくへびを付て破損におよ  
へは今に此酒屋よりふきかゆる事也

御詠歌

いく度も参るころは初瀬寺

山もちかひもふかきたにがわ

此御多い歌の心はけんりん院のようか  
僧正のうたに聞たひにめつらし  
ければほとゝきすいつも初音の心地

(21オ)

(21ウ)

こそすれと有る歌と同し心なりほ  
とゝぎすの声はきく度毎に珍らしく  
おもふこの初瀬寺もいくたひまいり  
てもふしき成る所にていつまでもはしめ  
て参りしころしてまたく参り度  
おもふはすなわち観世音の御慈悲ふか  
きゆへなり一たびこの観世音をたのみ  
奉るものじんみらいようがう信心さま  
さす臨終に観音御来迎しんの蓮台  
に乗るまでおこたりなくたのみ奉つ  
れよ観世音の大慈大悲は長谷の山よ  
りもたかく御ちかひもふかきとの御詠  
歌のころなりとかく信心はさめるも  
のなればさまざまおかみ奉るものは現  
当二世安楽横死横難やく病をまぬ  
かれ未来は極楽浄土に生れん事う  
たかひなきぞと信心有るへし

(22オ)

(22ウ)

普陀洛伝記 卷の七終

(23オ) 西国願礼 普陀洛伝記 卷の八  
三十三所

目録

- 一 長谷寺末米鐘因縁の事
  - 一 九番南都興福寺南円堂観世音
- 附り西国三十三所靈験記に有利生の事

(24オ) 普陀洛伝記 卷の八

初瀬寺末米鐘の因縁の事

長谷寺のつりかねを末米鐘と名付有  
いんゑん鐘に名有るは尾上のかね小夜  
中山むげんのかね南都の十三鐘長谷の  
末米かね此四つはかりなり

抑人皇六十七代三條院の御宇山

城の国木津といふ所に弥治兵衛とい  
ふてもとはれきくの武士成りしかとも  
浪人しておはうちからしやうく其辺  
の子供をあつめ手ならひを教へて細  
き身すぎなり古しへは余程の知行を取  
たる身にて武士の道一通りは弓馬鎗

(25オ)

あつばれの侍なれとも口おしや今は町人  
百性にあなどられかくまで勞して恥を  
さらさんよりはとたび刀を服におし  
あてしがいや死は安しなんどきにも  
死なるへし又思わぬさいわぬ有てよき  
有り付も出来て家名をあらわし出世の  
時せつもあるましき事にあらすとおもひ  
とごまり居るに有る者のいふに出世を望  
み給はく和州長谷寺の観世音へねかひ  
たまへ観世音の御利生あらたなれば

(25ウ)

いか成るねかひにてもかなわすといふ  
事なしとすめければ実にく有かた  
きおしへなりさらは百日の間參詣申

(26オ)

へしとて長谷寺へまいり武士の正直に  
かたき心にて一心ふらんねがひなれば  
何事も叶わずといふ事なしとおもひこ  
んで有かたく信心ふかく祈誓をかけた  
てまつるに寺中の出家たち観世音に  
集りつとめを成しかへりがけに鉤がね  
のもとに立より此かねは歌にもよみし  
程のかねなるにひききのいりたるにや

(26ウ)

鳴音なるねわろし銚しやうなをすも大おほそう成なる  
 事ことなりといふを彼浪人かのうらじん聞きて我等われらか  
 願望くわんぼうかなひなは此かねを寄進きしんせん  
 とおもひしかは中の坊ぼうへ人残ひとざんりあ  
 るを彼浪人衣かのうらじんころもの袖そでをひきて我われはねか  
 ひ有りて此觀世音このくわんせいおんに籠こもり居候ゐかつり  
 鐘かねの音ねあしきよしをみなく仰おほられた  
 りわれらの願ねがひかなひなば此鐘かねを  
 寄進きしんいたし申まをへしといふに其体そのくゐを見  
 るに申まをやうもなくおとろへはてし体  
 なりそれはきどく成なる事と挨拶あいさつして  
 心のうちに氣きの違ちがひたる者ものにやあらん此  
 鐘かねいかにしてかかれらが寄進きしん思おもひもよらざ  
 るなりとおかしく思おもひある時出家ときしゆ達  
 あつまり居ゐける中なかにて此事このことを咄はなし  
 笑わらわれけるに若わかき僧そうたち夫それは何なにを  
 いふ事ことと此世このよにての事ことにては有あるまし  
 死しして生うまかわりて未来みらいの事ことにて有あ  
 るへしといふそれより此浪人このうらじんを未来みらいと  
 いふ異名いごうを付つてわらひけるゆへかの浪人うらじん  
 合点あてんゆかず何なにゆへ我われを未来みらいと名なづけ

(27ウ)

(28オ)

(28ウ)

たるそと不審ふしんを成なし掃除そうじをする法師ほうし  
 どもにとふに法師ほうしども有ありの儘ままに子細こさい  
 をかたりけるそれより浪人うらじんはいよく觀世  
 音くわんせいおんへ祈いのりさてく貧窮ひんきやうはいか成なるくせ  
 ものにてかか程人ほどにあなどらるく口おし  
 や去さりながら此事このことによつて腹はらを切死きりする  
 ならばそれみよいよく未来みらいの事ことにて  
 有あしといわれんも猶更なほさら口おしとてひたすら  
 嘆なげきねかひけるに九十九夜くじゅうじゅういちや目の御告ごつげに  
 願ねがひ不便ふびんにおもふゆへ叶かなへて遣つかすなり  
 明日あした在原寺のうらわらでらへ行いべし近江国のたけふらぎの大名たいてう通とる  
 べし是これは其方そのほう前世ぜんぜより縁えんある者ものなり  
 此近江守このたけふらぎのしゅの目めにかゝりたるならば知行ちぎやう  
 に有ありべしとの御告ごつげなり有ありかたく伏か  
 おかみて坂さかを下くだり坊中ぼうちゆうを見て追付おひ鐘かねを  
 寄進きしんして見みせんそと心こゝろにおもひ勇いさみ  
 すゝんで在原寺のうらわらでらに來きて見みれば告つげのことく  
 大名たいてうの昼ひるやすみと見みへてまきうち  
 廻まわり供廻くわいり其へんにおひたゞしく  
 あつまり居ゐるいかにして殿とのに對面たいめんせん  
 とあちらこちらとうかゝひまわるをとも



(29オ)

廻りの者どもうろんに思ひしかりのく  
るにうろん成るものにてはあらず少し  
用事のあるものなりといひて幕の内  
杯のぞきけるにいよ／＼ふしんを成した  
たけく、れとて下部ども大勢いたち  
かゝれば形ちこそは見くるしけれ浪人  
なれとも正しからざる心をもつ者にあ  
らず其方ともの手にて打れまた縄目  
などの恥をうけては出世のさまたけなり  
とて下部共を取てなげのけ大きに働

(29ウ)

きければ家中の侍ども見かねてそれ  
狼藉もののかすましと早縄をもつて  
手に手に立かゝればそばに有る松の  
大木をこだてに取りて率爾あるな  
かた／＼狼藉ものにはあらず元よりう  
ろんがましきものにてはなをさら  
なし下部達より手さし有るたゝかるべ  
きおほへなければこれをふせくのみ  
事にてまつたく殿をあなだるにも  
あらず御侍中とても無体のはたらき  
あらは是非なく好む事ならねとも御相

(30ウ)

手に成り申さんといふ彼是とさわかしき  
ゆへ殿にも幕のうちよりのぞき見  
給ふにはたらきといひ衣体見くるし  
けれとも人がらたくひなく見へければ殿  
にもふしんにや思われけんこれへ召つれ  
よと仰有るそのむね浪にんへ申せは  
ありかたしと憶する色もなく殿のま  
ゑに立いつる其骨からあつはれの侍  
なりと殿の御目にとまりければ子細  
をとわせ給ふにかの浪人長谷寺に籠り  
しこのかたの事ともものこらず申上るに  
殿には是観音の御引合せなれば召かゝ  
へんと思し召其方は何と申者なるやと  
あれは西国にて菊地の一とう何かしと  
申もの名は弥惣次と申なりと申上げ  
れば奉公に望みはなきかと尋ね最  
前よりのはたらきあつはれ成るふる  
まひ我目にとまりたりとあれは御  
奉公はそれかしかねて願ふ所なり御  
召抱へ下されよといふに付てまつ殿の  
召かへ大小を遣わせと有て下されける衣

(31オ)

手に成り申さんといふ彼是とさわかしき  
ゆへ殿にも幕のうちよりのぞき見  
給ふにはたらきといひ衣体見くるし  
けれとも人がらたくひなく見へければ殿  
にもふしんにや思われけんこれへ召つれ  
よと仰有るそのむね浪にんへ申せは  
ありかたしと憶する色もなく殿のま  
ゑに立いつる其骨からあつはれの侍  
なりと殿の御目にとまりければ子細  
をとわせ給ふにかの浪人長谷寺に籠り  
しこのかたの事ともものこらず申上るに  
殿には是観音の御引合せなれば召かゝ  
へんと思し召其方は何と申者なるやと  
あれは西国にて菊地の一とう何かしと  
申もの名は弥惣次と申なりと申上げ  
れば奉公に望みはなきかと尋ね最  
前よりのはたらきあつはれ成るふる  
まひ我目にとまりたりとあれは御  
奉公はそれかしかねて願ふ所なり御  
召抱へ下されよといふに付てまつ殿の  
召かへ大小を遣わせと有て下されける衣

(31ウ)

類たぐひを着きかへ大小上下せうじやうを着きこなしたる骨柄こつぱん  
天晴あつはれなりさらば主従しゆくの盃さかづきをせんとて御  
なかれを下くだされ直すくに本国ほんこくへ付つ下くだる弥  
惣治そうぢはひとへに觀世音くわんせいおんの慈悲じひとこゝろ  
の内に有りかたくおもひ下りける始はじの程ほど  
は近習きんじゆをつとむるにこゝろ正直しやうじきにして御  
奉公ほうこうに私わたくしなく夫つまより段々だんだんと出世しゆしして  
知行ちやくちやうもまし何角なにかにつき殿とのの氣きに入相勤にゅうしやうきん  
め栗本くりもと祐貞すけさだと名なをあらためけるその

(32オ)

ころ近江たけふねの代官たいかん私欲しやく有あるゆへ百性ひやくしやうより  
ねかひ代官たいかんかわるにつき栗本くりもと祐貞すけさだなら  
ては勤ととむべきものなしと思召おもひよ祐貞すけさだに代  
官くわんを仰付おほせられける有ありかたく存ぞんし今は  
はや十分に過あつたる身みになりたりと思ひ  
おこりをつゝしみ儉約けんやくをまもり身みをへり  
くだりて高たかぶらす百性ひやくしやうよりすこしも  
物ものをとらすたゞ身みふんをけんやくして  
初瀬はつせのかねの奉加ほうかにせんとこゝろが  
ける近江たけふねの国くには八十万石はちじゅうばんごうの所成しよじやうるに  
佐々木ささき四郎しやう高綱たかづな百万石ひゃくばんごうにせんと近江たけふね一國  
八合升はちがふしやうをもちひ百万石ひゃくばんごうとする祐貞すけさだ百万

(33オ)

石いしの代官たいかんを勤ととめ近江たけふね一國いっこく栗本くりもと祐貞すけさだ  
預よかれは大名だいめい同前どうぜんの身みと成なりてこれ  
ひとへに長谷寺ながたにのずいぶん慈悲じひ深ふかく  
すれば近江たけふね一國いっこくの百性ひやくしやうとも殿とのさまよ  
りも結構けいこう成なる御代官おたいかんにて村むらく何  
方あたへもゆるまり有難ありがたき事こととよろこひ  
それより三年さんねんも立たければ祐貞すけさだ余程あまほど  
のたくわへ出来できければ殿とのにしばらくの  
いとまをねかひ長谷ながたにに下りつりかね  
の寄進きしんをいたし度存たごぞんするよしねかひ  
そも木津きのづの里さとより長谷ながたにへ參籠さんろうし  
未來みらい男おとこと異名いめい付つたる事こと今いまかく奉公ほうこう  
をいたし十分じふぶんの身みの上うへと成なりし事ことひ  
とへに觀世音くわんせいおんの御利生ごりせいなれば觀世音くわんせいおんへ  
御約ごやくそく申まをせし釣鐘つりかねの寄進きしんにしはら  
くの御ごいとま下くださらば早速さつそくに長谷ながたにへ參り  
此願望このんぼうはたし申まをたきよしを中殿ちゆうだん聞きし  
召めて仏神ぶつじんにちかひし事はちがゆべきに  
あらず早々ささ下くだるへしわれも少すくしく汝なんじが  
力ちからをたすけんとて金子かねこ千兩せんりやうの御寄附ごきふ  
あり百性ひやくしやうともこゝろさしあらは結構けいこう成なる

(33ウ)

(34オ)

(34ウ)

くどくなれば寄進に付へしとすゝめて  
 心さしあらんものは寄進につかせよと仰  
 ければ百性ともをすゝむるに初瀬の観音  
 の事殊に当代官の仰なりとて誰もの  
 かもと寄進につきおひたゝしく集り  
 けるそれより祐貞殿の御免をかふむり  
 すいふん取つくるひりつはをつくし  
 旅立して長谷寺に着しかは中の坊を  
 宿坊として釣鐘建立有大和一国の鑄  
 もの師を集めていそぎ鐘鑄をはじめ  
 けるに大和一国近在所より有かた  
 き鐘鑄なりとて長谷寺にあつまり  
 おひたゝしく群集し程なく鐘を鑄  
 立ける祐貞はぜんたい地形よりしゆるう  
 堂鐘つく迄の任用まで寄附しける  
 に長谷中の出家あつまりて祐貞に  
 此つりかねに施主の家名を泲の事  
 に記し置たしいかゝしるし申へきと  
 かゝへはすゝりとりよせ其銘に寛仁三年  
 三月十八日山城の国木津の里未来男と  
 書て此通りたのみ申とあり中の坊

(35ウ)

肝をつぶしさては先達参籠せし男に  
 て有けるかと甚だめいわくしこれは  
 いかゝいたしたる事にて候やといふにさだ  
 めてそなたにもおほへ有へしそれが  
 し先達て当寺観世音に籠りし時  
 釣かねの事を申せしに其元我をは  
 未来男と名付られししかしやう  
 申せはめいわくさするやうなれども全  
 くさにあらず未来男と人々にあな  
 とられしほどのひんきう人にて  
 有りしに観世音の御利生ゆへに此  
 世にてつりかねの建立をする身と  
 成りたるといふ事ひとへに観世音の  
 御慈悲未来まで知らしめんかため  
 なりとて施主のこのみゆへ山城の国  
 木津の里未来男とするしあり是に  
 よつて未来かねとはいふなり

(36オ)

九番南都興福寺南円堂観世音  
 三目八手不空けん素の観世音  
 弘法大師の御作なり

(36ウ)

九番南都興福寺南円堂観世音  
 三目八手不空けん素の観世音  
 弘法大師の御作なり

(37オ)

そもく当寺の觀世音は大職冠鎌足  
公の御苗裔長岡の右大臣藤原の高  
磨公弘法大師に御たつね有りしか子  
孫繁昌は先祖の成すところ成れば

(37ウ)

いかゞいたして子孫はんしやう致すへき  
やとたつねたまふ弘法大師のたまふやう  
ふくうけんさく経に三百八臂の觀世音  
を信し奉れば子孫はんしやう致すなり  
有三目八臂とはいかやうの觀世音の御  
かたちや刻みて見せ給へと有ければ  
弘法大師御直につくり給ひてかくのご  
とくの尊像なりと御目三つ御手八本  
の觀世音なりすなわち此尊像を本尊  
として御堂御建立有ければ開眼を  
成して給われとありければ弘法大師  
御開眼ありほとなく右大臣藤原のた  
か磨は薨じさせ給ひ御子閑院の左大  
臣藤原の冬次公本堂を御建りう有  
りしに全体南円堂の地を極楽地に  
成されんとて銀の小仏の觀世音を千体

(38オ)

地のそこへうづめて地形をつぎ立し  
南円堂なりしかるに此普請はじまる  
と日雇のうち七斗りと見ゆる老  
人土をはこぶと五人前も運び外の日  
雇とはちかひ後に残り掃除までしてか  
へるさてもく年寄に似合ぬ達者成る老

(38ウ)

人かなよきはたらき手と人々の目にと  
まる本堂出来て左大臣御よるこひ有この  
たひ大願成就の觀音堂八角行にして  
建られたり御祝儀御ほうひ大工日雇に  
下さるゝいつれも組くのさけ札あるにかの  
老人はかり下札なければ働らきし事人  
くの目にとまりあれば老人にも御ほう  
ひ下さるゝなり有かたくおもへとあれば金  
銀をほしきにはたらきしにはあらわす我身  
にかゝりし普請ゆへ働らきしといふに  
此ものは慮外なる事を申ものかな左  
大臣殿より下さるゝ御ほうひをいたゞかす  
身にかゝりし普請といふは何者成るや  
とのゝしりければ見れば藤原の元祖春  
日大明神なり子孫はんしやうのため觀音

(39オ)

身にかゝりし普請といふは何者成るや  
とのゝしりければ見れば藤原の元祖春  
日大明神なり子孫はんしやうのため觀音

(39ウ)

堂建立のうれしきゆへ和光同塵の光り

をかくしかゝるすかたとあらわれ働らきし

なり観音大悲のひかり我守る所にし

て子孫繁昌うたかひなし一たひ南無ん

堂に願札して札をおさむるともからは

未来極楽往生すへし春日大明神

首の御歌を遊はし残したまへは神かぜ

さつとふき来つていちじんぬさとあら

われ給ふ此観音へ一たひ参詣のものは

観世音の御めぐみ又は春日大明神の

御守り子孫はんしやうの御まもりに

預り奉る事うたかひなし御建立有

りし藤原の御子孫と申し御めぐみ

にあひ奉るなり今撰家かたとなり

たるも浮しづみなく撰政関白の御位に

のほり給ひて何くらからぬ御身日月の

ことく尊敬し奉り御繁昌遊はずは偏に

此観世音の御建立有りしゆへなり

又西国三十三所靈験記にいたし有る

御利生の事奈良の都の町に夫婦

のものあり子なく子孫なくては成ら

(40オ)

(41ウ)

す養子しても思ふやうになし南円堂

の観世音は子孫繁昌のねかひをかなへ

給ふとあれば観世音へもうし子を祈

りしに程なく玉のやうなる女の子を

ばもふけ有かたさにこのくわんぜおん

の御すがたをうつし奉り三日八臂の

像を造立なし奉り其家の本尊と

して明くれうやまひ奉りしにいか成

る事にやはやり病にて一親打つゝき

死しければ此娘養育して家を立させ

んと一家の内よりうしろ見をして

育てけるに此子十八才に成るまでに後見

するものも一家ものこらす死にたへ娘ば

かりに成り後には道具まで売払て

朝夕のたすけをなせしに女の事なれば

世わたりの業もならずしかれどもおや

／＼は人にも知られたる程の人なれば

今とても似つかわしからぬ方へは縁にも

つかす只明くれと観世音を祈りたとひ

爰にて死するとも観世音にまかせ奉る

身なればいかやうともなし下されかした

(41オ)

(40ウ)

(42オ)

拜みける其頃ころ同じ奈良の町にうとく  
 成る人のむす子いつとなく此むすめの  
 所へ夜な〜かよひすいぶん人の知らぬやう  
 に夜ふけ親々の寝しづまるをまちて

出行かへるにも夜深くおき給わさる内に

かへりぬ召つかふものども内おとなしき

者有るに此事をひそかにかたり親〜は

いかゝ思わるへき彼女の親はけき〜の人

たりしその子なれば得心ありてむか

へ取る事出来まじや兼てその方をた

のむなり折をもつてはからひくれよ

とたのみぬある時道にて雨ふりしが

幸さいわひとかの女の方へ走りゆきしにしき

りに雨あめつよく風そひて雷かみなりの音はけし

ければおそろしさにいつもかへる時分

なれども猶雨風はげしく雷しきりに

鳴れはいかにせんと案し居るうち夜は

しら〜と明はなれぬ惣して奈良の

町は朝はやくおきる所なれば家〜さら

りと門をあけ人々見せにあれば最早

かへりも成らす親〜の案しいかならん

(42ウ)

(43オ)

(43ウ)

(44オ)

(44ウ)

とそれもいたくこゝろにかゝるに五つすく

る頃雨風もやみければ今ほとてもかへり

もならず心うけれとせん方もなくとや

かくし居るに四つに成りたり娘は朝飯を男

にすゝめんと思へともかなしき事には其

用意の物あらずいかにせんとうらに出

門に出れともせん方なく男はしばしこそ

あれ今はたへかねていかゞするそと見

やるにそのもふけをなす様子も見へすしか

るに一人のはしだもの膳ぜんに具ぐを備へめし

ばちを取そへ今朝はこゝろさしの事候

ひて御まねきも申へけれと御客みやくの有る

やうすなればさしひかへ持せ上るなりと

いふ女はうれしく此はしだものに何にて

もとらせたたくおもへ共やるへきものなければ

我つねにする前まへたれを取出してやるに

はしたものは悦よろここひかたにかけて出ゆ

きぬ女はやかて此めしを男にすゝめ我も

くひてある所にかの男の男おとこより親おやの留とど

守なれば今かへるへしとて彼心知りたる

召つかひかこをもたせてむかひに来る跡に

(45才)

てとなりへゆきて礼をいわんとおもふ所へか  
のはしたもまた膳めしばちを取に來り  
てもちかへるさらは礼にゆかんと南となりへ  
ゆきて礼をいふ此方にてはなしと有れば北  
となりへ行ていへはこれもこなたにおほ  
へなしといふ不思議にをもへどよしやか  
さねてかの使に來りしはしたものに

(45ウ)

あはゝたづねて礼をいふへしまつ観世音  
を拜まんと御厨子の戸ひらき開けは有り  
かたやもつたいないや観世音の御肩にかの  
はしたものに遣はしたる前垂をかけさせ  
られてましますさても凡夫の浅まし  
さ観世音より下されし御ぜんそれとも  
知らすけかれたる前だれを御かたに  
かけさせ奉りし事恐れおふやと余り  
のめうかなさにおもはす声をあげ身を  
なげふして嘆くにぞ南隣は是を聞  
つけて此方に覚へもなき事に礼に來り  
また今なく事のはなはたしきは氣のち  
かひたるもの成らんとかけつてやうすを  
聞に今ははぢもいとわす段のの様子を

(46才)

有のまゝにかたれば人々おとろぎたつとき  
観世音ときつたへしに違わす有難やと  
何れもふしおがみそれよりたん聞つ  
たへ一日の内に奈良一ばいに聞へてこの  
所へ拜みに來る事おひたゞしく有れば  
かの忍ひ男の両親も此やうすを聞夫程  
観世音の御たすけを蒙る娘過去し

(46ウ)

親達もれぎにして人も知りたる事  
なればよめとして不足なしとそれより  
我方へ引とり嫁としすへ繁昌に  
榮へける一たびはかほとまてなんぎ  
いたせともついにはかく御利生ありて今  
に奈良の町南円堂のうつし三日八臂  
のふくうけんさくの本尊を守り奉る  
所なりと記しあり

(47才)

御詠歌  
春の日は南円堂にかゝやきて  
みかさの山にはるゝうすぐも  
此のはるの日といふ五もじはこゝろは恵  
日はしやうあんのやみよりあきらかなる  
所に出るこゝろなり春日といふをこめて

春の日はなんゑん堂にかゝやきてなり  
観音大悲の光明春日明神の和光

(47ウ)

のひかりの御めくみ一たひ参るものは  
やみよりあかりに出たる如き大悲の御  
すくひの本願をいひ三笠の山にはるゝ  
薄雲と三笠の山とは春日の山にあら  
すめいゝのむねのうち三毒ほんのふ  
の三つのまき山ありとんよくしんゑくち  
の三つ此三毒より八万四千のほんのふまよ  
ひの雲となる三毒の山こへかねる山  
雲只本願の弥陀如来の名号を唱へ  
て本願の風にて三笠山もはるゝ薄  
ぐもといふこゝろなりめいゝ仏に  
成りたる光りはあれとも月に村雲の  
ことくほんのうの雲におほはれ村雲  
にひかりかくるほんのうの雲はおひゝ  
に多く本願のがせは吹事少なしと  
いふ一日の内に三毒ほんのふは多けれ共  
本願の風をいたす慈悲せんごんの弥  
陀の名号となる事すくなきなればな  
り只本願念仏の他方の風にてふき

(48ウ)

はらひ極楽往生を成すべし  
普陀洛伝記 卷の八終



西国願礼  
三十三所 普陀洛伝記 卷ノ五

(1オ) 西国願礼  
三十三所 普陀洛伝記 卷の九

目録

一 十番山城の国三室戸観世音

附り 同国久我の庄西方寺本尊の事

并 弥陀次郎といふ寺の事

一 十一番山城の国上の醍醐観世音

(2オ) 普陀洛伝記 卷の九

十番山城の国三室戸観世音

彘んぶだごん千手観世音

御長巻尺式寸なり

(2ウ)

御出現は上の醍醐山のふもとすみ山の  
岩ふちといふ池よりしてそうきうと

いふ坊主のいのり出し奉りたる自然涌出

の御本尊なり宗休といふ坊主は宇治の

茶師方へ雇われて働きなどするものにて

(3オ)

甚たもんもうなるものところそいへいろはの  
いの字さへも知らず我名をさへ人にとわれ  
て忘るゝ程なる坊主なれとも律義成る故  
人も不便がりてあしくもせずある人観  
世音のありかたき事を申聞せしか是

はかりはわすれずよくおほへてりちぎ  
正直成る坊主なれば一心に有かたくお  
もひ奉りて観世音ならてはたすからぬ

と思ひしか夫より観世音の御名号をた

へす一心不乱にとなへ奉りける無二のしん

かうゆへか観世音の御こゝろかなひたて

まつりてある夜老人の老僧来りてのたま

ふに上の醍醐すみ山のいわふちに正真の

観世音ましますなりいそぎ御迎へに参る

へしとの御告に宗休は正直成るこゝろ

なれば少しもうたかふ心もなく有難

やと夜の八つ時そのまゝ直にたゞひとりた

いこのすみ山へこゝろさし道すから観世音

の御名号をとなへていともくらき夜にお

そろしとも思わす岩ふちにいたり星の

かげにすかし見れば池はせい／＼とすみ

(3ウ)

(4才)

渡り滝の音聞ゆれば岩ふちは爰也と  
思ひ観世音を尋ぬるにいつくにまします  
とも知れず宗休は池のそば成る岩  
にこしうちかけ正眞の観世音はいづ  
くにましますやらん宗休御むかひに参り  
たり御出現ましますへし南無観世

(4ウ)

音ほさつとしんくとしてつとうありて  
くわん世おんの名かうをとなへ居る所  
に池のそこよりかゝやきたる光明  
さして池水にさつと照らしたまふ  
宗休は奇異のおもひを成しいよく  
名号をとなへつゝ立より見れとも池  
水まんくとしていかんともする事あた  
わすま事に宗休か信するところ納受  
あらはわか袖へあからせたまへところも  
の袖をひろけて居るにふしきや池  
のみづ両方へわかれて千手観世音  
池の底より飛あからせ給ふそれより  
宗休か袖にうつらせ給ふ其時宗休は  
有がたさ心魂にてつし只声をあげ  
てなき居しかかくてははてじと尊

(5才)

(5ウ)

像をいたきかゝへて宇治へ帰りてもたゝ  
さめくとなき居たり宇治中へこの  
沙汰聞へて宗休か観世音をいのり  
出し奉りたりとて参詣おしもわけ  
られず人々奇異のおもひを成しける  
それより京都丹波近江へんより拜  
みに行人おひたゝししかるに三井寺  
智證大師の御弟子りうめうあじやり  
聞しめし及ばれ乗物に召れちこたち

(6才)

侍御供にて此観世音へ御参詣有れば宗  
休なみたを流しこの観世音のましませ  
はこそ阿闍梨の御出下されたりと有が  
たがりて只何事に付ても観世音の御  
かけなりとてさめくとなき居たりりう  
めう阿闍梨は観世音を拜み給ひまこと  
に正眞の観世音自然涌出の御本尊也  
となみたをなかし宗休かせなかをな  
でゝ出かされたり宗休乗もののにり緋  
の衣を着たるよりそなたのやぶれたる  
衣かはるかに有かたし三井寺僧中  
かんしゆ法度の身としてもかよふなる

(6ウ)

(7オ)

事はならず此御本尊たつとき事いふ  
斗なししかるを鹿抹なる所におき奉る  
はよろしからず御本尊を阿闍梨に給わ  
れ帝へ奏聞して本堂を建りうし此  
りうめうか開基となり其方は観世音

の御守りに成りて給れと仰せけるそれ  
よりねかふ所なれば此宗休かちからに  
ては堂建立何とてなり申へきといふに  
付てすなわちりうめう阿闍梨は御門へ  
奏聞あり三室戸に観世音をこんりう

(7ウ)

ありそれよりして代々の御門御尊敬  
あそばされ御勅封となる石山寺と此  
三室戸の観世音は三十三年目に御開  
帳または御即位のせつにいたり御開帳あ  
るなり正直信心のとくによりもんもう  
の宗休斗りにかきらす学文あるによ  
らすいのり出すなればうたかふこころ  
あれはかやうの事は非らず  
山城の国久我の庄西方寺御本尊の  
事ならびに弥陀治郎といふ寺の事は  
山城の国淀の一口といふ所にみづ治郎と

(8オ)

いふ悪党ふてきの獵師ありみづ治郎と  
付たるは十五日の夜生れ月のみづと  
いふ心にて付たりちいさき時に二親に  
はなれ成長したれば誰あつておさへ  
る者なくて我まゝにそだち心の有たき  
まゝにふるまひちからもつよく強気にし

(8ウ)

ていかに共せんかたなき悪たれ者成れば悪  
治郎と異名しけるある時は是かもとへ六十  
余りの老僧しやくしやうをならしたくは  
つに來れり悪治郎是を見て爰は悪治郎  
とまで異名を付られし程の者なり然は  
報謝といふものつゝあに出したることなし  
勿論やつては一分立す行れよといへば老  
僧はゑかうし拜みかへりぬ悪治郎は其  
日それよりして獵に出しに何ひとつ取れ  
されは腹を立てかへりしに明る朝またかの  
出家來りてたくはつを乞ふ悪治郎は立  
出て去りとは聞わけなき坊主かな三年  
三月門に立ててもやらぬといふ所へなにを  
目当に來る事ぞ獵の邪魔になれば  
早々立ざるへしといふにゑかうして帰る

(9オ)

(9ウ)

ほうしやもせざるに何をゑかうにおよ  
ばん今よりしてふたゝび来るべからず  
とて網をかたにかけてりやうに出しに  
今日もまた猟きかすとうした事ぞと  
おもひしにおもへはたくはつ坊主  
か来りしより猟なし何にてもあす  
来りなはあはぬやうに朝はやくおきて  
行へしもし来合せなはたゝき出して  
くれんずとおもひあくる日は夜七つ  
におきて出しに門口へ出るとはや又から  
くとしやくじやうの音聞へたり悪治郎  
腹をたてこちにはやければかの坊主  
もはやく来れり能仕やうこそあれこ  
ちの業の邪魔する坊主ふたゝひ米  
らぬやうにとめてくれんと思案をなし  
今朝はほうしやも入れん又振舞たき  
ものあり是へ通られよといふに老僧  
内に入りろりのはたになをりければ何  
れの方より出らるゝととふに西の岡より  
いて候といふ遠き所を氣根に能こそと  
咄しする内にふとき鉄の火はしをいろ

(10オ)

(10ウ)

りにさしこみ置真赤に火に成し  
いかに老僧ふるまふとは是なりといふよ  
りはやく老僧をとつてふし左のほうさ  
きに焼かねをあてければじうといふて  
煙りたてはうんどのつけにたおれふす  
これにこりて来る事なかれ又も来

(11オ)

らは右のほうさき夫よりひたひたんく  
に真黒にしてやらんと力に任せて内よ  
り外へなけ出ししやくじやう鉄鉢あし  
にかけて門口へ出しけるに老僧はむく  
とおきあかりしやくじやう鉄鉢手に取  
り上につことうちわらひ又ゑかうをし  
ておかみ帰る悪治郎は此体を見てかの  
坊主のやうすまた来らんも知らすその  
出る所の寺を見とゞけ一口へ再び来らぬ  
やうにしてくれんと追かけゆくにとかく  
すれとも追付れす上の木の瀬を水の  
上をあゆみ帰るこの坊主つね体の者に  
あらずいつくまでもと悪治郎は渡し舟  
に飛のりて向ふへわたり追かけゆくに  
粟生の光明寺の内へ此僧はいるさては

(11ウ)

(12オ)

此寺の坊主と程なく悪治郎も門口へは  
いるに見うしなひたり悪治郎は寺に  
行六十斗りのぼうすにいひふん有りこの  
寺へつけ込んだり出し給われといふ六十  
はかりの所化といふはあらずみな所化は  
わかきもの也何れよりたづね来られし  
そといふ一口より来りしか其坊主には  
焼かねのしるしを当置たりそれを印に  
尋ね出し給われといふ方丈聞付たまひ  
悪治郎をよひていさめ御聞あり六十余り  
の僧此寺にありそれは釈迦堂をひらき  
見よと方丈は寺中の出家と悪治郎  
をつれて御厨子の戸をひらき見給へは釈  
迦世尊の左のほうさきに焼けるしあり  
御足元まで血なかれあり方丈はあつ  
とひれふしかやうの邪見悪党成る者  
をは老僧と成り濟度有る事ぞんじ居中  
候へとも加程までの御事有りかたやと  
ふしおかみ給ひ悪治郎悪につよきは  
又善にもつよく此御本尊の御すかたを  
見奉るより一念ほつきしてあらもつ

(12ウ)

たひなや冥かなやゆるさせ給へとふし  
おかみ今迄は仏法といふものはわけも  
なき事とおもひしにかゝる奇得の有る  
ものをあらゝ勿躰なや今よりこゝろを  
改めて仏法を信じ申へしゆるさせ下さ  
るべしと歎き奉り夫より獅師をやめて  
大声にて念仏をふたんに申けるかゆへさ  
てふしぎの事かなかれかやう成るあく  
とうものゝ念仏申時節あり不思議なる  
事かな今迄とはうちかわり弥陀次郎に成  
りしといふてそれよりして弥陀次郎と  
いひふらすある夜ふして居る上の方にかみ  
の木へ網をもちてゆけといふ声するふしぎ  
成る事かな今はや獅をやめて後世をねかひ  
居るにと思ひて其まゝに聞すてにして  
伏し居るにまたしはらく有りて上の木  
へゆけよといふにいまた行さるかとしき  
りに催促有ゆへ様子こそ有らめと  
思ひて網をもちて上の木へ至るに何も  
かわりし事なし何といふ事にやと思ひ  
居るに川の底に光明ありてさつとてらし

(14オ)

見奉るより一念ほつきしてあらもつ

(13ウ)

見奉るより一念ほつきしてあらもつ

(14ウ)

給へはさては爰に網を入れよとの事  
なりけりとねらひすましてさつと網を  
打引上げればありがたや三尊のみだ  
如来あからせ給ふ善光寺の御本尊と尅  
躰なりさてもくけつこうなる御尊像  
を得たる事なりと尊敬供養し奉

(15オ)

り久我の庄の上みやう阿闍梨といふ  
出家は八幡にさんけいして有正真  
の仏をおかみ奉り度御座候何れの所の  
本尊御座候や御つけ下さるへしといのら  
れけるに八まんの御告に正眞の如来  
所くあり其方が方より近し淀の  
いもあらい弥陀次郎か方の弥陀如来を  
おかめよと御おしへ阿闍梨は直に一口へ  
米りて弥陀次郎を拜み百日参りを

(15ウ)

くわんとして三里はかり所を六十あまりの  
老僧なれとけたひなく参詣しければ  
弥陀次郎此寄徳をかんじかほとまて此  
尊像を信心あらはわれも此仏の御供し  
てそなたの寺へまいり一れんたくしやう  
の同行とねかわんとて今の弥陀二郎と

(16オ)

いふ所へうつし奉り上みやう阿闍梨と  
弥陀次郎仏前にて如来を拜し月日を  
同しく刻限ちかわす手を合して往生  
し給ひける今近衛様の御領分にしてす  
なわち近衛様御信仰ありて御代々の御  
位牌も此寺にあり三室戸の宗休は正  
直の下司坊主弥陀次郎は凡俗のあく  
とうものなりしにかく結構なる御本尊  
を得たる事偏に信心厚きゆへなり

(16ウ)

御詠歌  
終夜月をみむる戸わけゆけは  
うちの川瀬にたつはしらなみ  
此よもすからといふはほんのうのやみにて  
胸の月のひかりみへすほんのうの雲は  
れ極楽世界にいたりて月をみむるとい  
ふは月を見んと戸を明て見ればといふ  
心なり宇治の川瀬にたつはしらなみと  
はほんのふのまよひのつみ川瀬にしら  
波と立ことくなり西国三十三所を廻り  
て罪をはらひ御詠歌観世音の名号を  
となへたすけ給へといのるべし

(17オ)

山城の国上の醍醐観世音

三日十八臂じゆんでい観世音

御長三尺

聖王宝大僧正の御建立なり 聖宝大

僧正は観世音の化身にして 聖武天皇

聖徳太子と御一林なり 聖宝大僧正

奈良東大寺にまし／＼けるとときよし

の大峯山に大蛇すんで参詣とまり

ければみろくほさつ五十六億七千万歳

りうげさん会のあかつき御説法有る霊

地にて役の行者のふみわけ給ふ仏法

応護の御山なるに大蛇さまたけをなし

て参詣なく草木にて道たへたる事

そのまゝにて置へきやと思召れ行て

退治せんと百人力ある大僧正大まさか

りをもつて山にわけ入たまふ大蛇は月

日のことき両眼に獅子かしらのことき

頭をもたげ口をひらき舌を出して聖

宝僧正を呑んとすおのれに呑るべき

僧正にあらすかたしけなくも此御山は仏

法おうこのゑんのうばそくの守りたまふ

(17ウ)

(18オ)

(18ウ)

御山をさまたけなすにより唯今聖宝か退

治するなりさりながら魂魄未来を助

得さすべしとて大方の僧正大まさ

かりを大蛇のかしらへうち立たまふさし

もの大蛇なれとも大方の僧正にかしら

をうたれ何かはもつてたまるへきそう

身をちゝめて倒れぬ所をつゝけさま

にうち伏せ七つに切はなし給ふそれよ

りして大峯山上をふみわけ給ふて

芳野よりして熊野へ御参詣有りし

なり順の参詣これなりまた熊野より

吉野へ参詣は逆のさんけいなり再たひ

大峯の道をひらき給ふは聖宝大僧正

醍醐三宝院聖護院は此大僧正の御末流

と立て有るによりて大峯入遊はざる時

に山ふし先達斧まさかりをもちゆく

は悪魔をはらふ術にして聖宝大僧正

の大蛇を退治ありしゆへなり大僧正は

夫より東大寺にましますある時観世音

の御つけに山城の国はんば山醍醐蜜寺

といふ所に薬水あり此水を一たひ吞

(19オ)

(19ウ)

(20オ)

ものは薬となりて三悪道をまぬかれ  
 未来成仏する水にて広太むへん  
 の山なりと老僧告たまふ是より僧正は  
 ばんば山に行て醍醐水をたつね給ひ手  
 にすくひ呑給ふに其あしわい常なら  
 すまことに観世音の慈悲法水三悪ぼん  
 のうを消する醍醐水なりあら有かたや  
 とて観世音を造立ありそうこくゑん  
 まんの山五十六億七千万歳りうげさん  
 ゑのあかつきみろくぼさつの御説法有  
 る御山なれば女人のけかれたる者一たひ  
 あかりてもけかれとなれば此御山けがす  
 ましきため女人きんせいと成る女人を  
 にくみ給ふにはあらず穢すましきため  
 なり女人参詣すれば女人堂光明杉迄  
 観世音御出迎なされてうけとり給ふ  
 広太むへんの御山まゝとに天善神ゑん  
 魔王ごどう冥官守護の御山なり

御詠歌

逆縁ももらさてすくふ願なれば  
 しゆん礼とうは頼もしきかな

(20ウ)

(22オ)

逆縁とは順礼の事順礼といふは参ら  
 んと心さし参れば順なり爰迄来た  
 つめてにといふか逆ゑん也信心もなく  
 序にまいるものもたすけ得さすべし  
 と観世音の大悲の御こゝろにて  
 逆縁ももらさてすくふとの御事  
 なり順礼するるとまいるものは気づか  
 ひするな未来極楽往生させてとら  
 すへしとの御詠歌の醍醐より三十七  
 町とあかり上の醍醐あまりとおくゆへ  
 三十七町下に里坊をたてたまふこれ  
 下の醍醐なり三宝寺なり醍醐水と  
 いふ薬の名をとつて醍醐といふ観  
 世音の堂のまへに札の立たる井  
 ありこれたいこ水の薬なり聖宝僧正  
 観世音の御つけにて諸天善神ゑん魔  
 法天ごどう冥官守護のみろくの御  
 山にてたいこ水といふ薬水あり霊仏  
 無二の山なれば女人きつかいと定め給ふ  
 右詠歌順礼の縁にて信心なく序に  
 参るものにてこそ縁となり観世

(21ウ)



(22ウ)

首大慈大悲の地藏尊大慈大悲にて  
御すくひ有る観音地藏同事也

普陀洛伝記 卷の九終

(23オ)

西国順礼 三十三所 普陀洛伝記 卷の拾

目録

一 地藏尊御利生の事

一 十二番近江国岩間寺観世音

(24オ)

普陀洛伝記 卷の拾  
地藏尊御利生の事

地藏靈驗記に有所地藏尊御利生

の事こゝに奥州出羽の国羽黒山の山

伏地獄めぐりをせんと諸国をめぐりいで

けるに身は五知の宝冠頭きんをいたゞき

十二因縁のひたをすへて是をいたゞき九

重まんたらすゝかけをかけ胎蔵黒色

のはゞきをはきやつめのわらんづは八葉

(25ウ)

その血にへかゑり焔もへ上るこれけつぽん  
かけんき地獄といふしやうぎやうねんきやう  
ほつぽん経に出し有る地ごくなり是を  
血の地ごくとはいふなり座の上にて死し  
たるものゝ落るといふ左にはあらず女人

(25オ)

のれんげをふまへ金胎両部のかたち  
を表し山ぶしいちにやう院しよわう越  
中立山と心さし立山にのほり此所へ  
はたやすく来る事ならず何かいとも知  
れぬ橋もかけあり谷ふち橋とてむかふの  
岩角にからみ手まへの岩根にからみたる  
藤つな行あひからみて此藤橋と成り  
有るをわたる罪ふかき悪業のものは  
谷底へ落るなりいちにやう院藤橋を渡  
るにむかふにこへ夜をあかし立山の様子  
を見んと岩に腰をかけ大すいくのだからに  
をは始終となへけるにうし満頃にも成しと  
おもふころ何かわ知らず地ひゞきして落  
たる音するに耳もつふるゝ程のおびたゞ  
しき音なり何事やらんと思ふ所に目の  
前に大き成る血の池出来てくらゝと

(26オ)

月のさわりのけかれ地に流るれば地神  
をけかし水に流るれば水神をけかす此  
けかれのうくる所なくしてみな越中  
立山に来る此けかしたるを御詫申さす  
若きとてうか／＼と仏法の心もなく  
暮し俄に死する女はみな此地獄に落

(26ウ)

るわれに何事も罪科の覚へなしと思へ  
と斯地神水神をけかしたる罪ありて  
地こくに落る所げんき地獄にて是へは  
女はかりなり時に女とも地獄の池の端に  
真赤に成り居るに風さつと吹きれば  
みなこと／＼く池の中へ飛こめは悪鬼  
来りてにへたる血を女の口へ流し込  
くるしみなりみれば坊主にてもあらず

(27オ)

尼にてもなきひとりのも是も池の  
中にてくるしみいかなる罪か有て此尼  
もこのじごくには落たるやとずいぐだら  
にをひたものとなへ居るに一通りの風  
さつと吹来れば此池雲のちるかことくに  
さらりときへて元の山と成りにける  
然るに女こへにてかの山伏をよひかくるに

(27ウ)

山ぶしも大におどろきしかかやうの所にて  
怪しき事恐るへきにあらずと氣を取直  
し何事そと問ふにそなたには諸国修行  
なさるゝ御人なると身受たり是より  
いつかたへ御心さし有るやととふにい  
にも諸国をめくるものなりかゝる身の上  
なれはいつくと定めたる事なし何事  
の有れはかくはいふやととふに御はつかし  
きすかたをば御目にかけてしわらはゝ京都  
東洞院五条にて何かしと申ものゝ娘

(28オ)

なりしか女の身のかなしきは地神  
水神をけかしたるつみ若きゆへ  
仏道の心さしもなく暮らせしにはからす  
十八歳にて死し今はくるしみを受ける  
かなしき京都のかたへもし修行に御越  
あらは何とそわらはか親里を御たつね  
有りてわらはか衣類の残り有るをはた  
打敷と成して所／＼地蔵尊へあけ成  
仏いたすやうにとむらひ給われと仰つたへ  
られ給わるへしあらなつかしの父母や  
といふに山伏仏体あまたの中に地蔵

(28ウ)

尊斗りへ心さしふかきはいかにといふ夫は  
わらはか身の上わつか成る縁より地藏尊

あわれみをうけ昼夜六たびの責苦を

一度はもつたひなくも地藏尊わか身に

かわりてせめ苦を受給ふにより一度つゝ

たすかり候ゆへなり不思議の御縁にて父

母の方へ言伝をいたし成仏を成し候わん

(29オ) とよろこふに山伏是を聞いていたわし

の御事やさらは是より都にのほり

東洞院五条へたつねまいりくわしく

やうすをは申へし心安く思わるへしざり

なからたしか成る証拠もなくては両

親のかてん有るまじと申に御もつ

ともなり証拠はわらは十三歳のとき

母とつれたち雲林院の花を見に

(29ウ) まいりしにかへりるとき説法あり

しか少しはかり何こゝろなく承り

しに地藏尊の御利益をときたまふ

御説法にて地藏尊の御ちかひにて

ろくたいむげのしやくじやうをもたせ

給ひ少にても縁有るものは助けすく

ひやらんとて百三十六地獄の中を尋

ねめぐりたまひ此しやくじやうをに取

つけよと仰せられたすけ給ふとの御事

をうけ給わりてあら頼もしの地藏尊

やおもひ奉り只一へん南無延命地

蔵尊と手を合せ拝み奉りしかそれか

御縁と成り六度の責を一たび御たすけ

下さるなり此よしをいひつたへ給へとい

へはさつと風ふき来つて声のみ残り

すかたはきへうせける山ぶしは諸国をめ

(30ウ) くる心さしなれともまつ都へのほり

五条通り東洞院に何かしとたつねて

うちへいり近頃むすめの死したる事

有りやといふに成程この頃むすめを死

なせていまた中陰のうちなりといふに

それかしは奥州出羽の国の者にて諸国

修行に廻り此頃越中立山にせんせう

致せし処ふしきの事にて死し去られ

し娘御にあひたりけつぼん地ごくへ

落居られかくくの通りゆへ何にて

も証拠ありやせうこなくては親心得

(31オ)

(31ウ)

心有るましと中せは十三歳のとし雲  
林院にて母御と地藏經の説法を聞れ  
し時かやうくと申されければ成るほど  
それは儲成る証拠なり其事を其方に  
御存し有るはつはなしむすめか方  
より申こせしに相違なし地獄に落  
たるとは不便の事なりと両親の歎き

(32オ)

いわんかたなし山伏わ此体を見ていかに  
なげかれしとてゆかるゝ所にあらすまた  
親子は一世と申せはたとへ行たりと  
てあわるゝ事も出来ず此上ははやく  
成仏有るやうにのこしおかれたる衣類  
を地ぞう尊へ上て跡を弔らひたまふ  
こそ第一の事なれといふに其通り  
にまかせ所々の地藏尊へ幡打敷を上  
て跡をねんころにとむらひければ一周  
忌の節になりて二親其外一家の  
うち同じ時に夢に見られしはと  
むらひの功どくにて今は極楽浄土へ  
成仏すと一時に見しもふしき也是逆縁  
にて何共おもわす只序に一篇斗仏名を

(32ウ)

となへし縁にてかく成仏したるなり  
とうからしをくらがりにて知らず  
食へともからしにかきものはにかしある  
ひはすもふ芝居杯見物すればむかふの  
氣にうつりその心に成る説法の庭  
に入れば目に仏を見耳に説法を聞  
心に三毒のほんのふの悪なく其罪  
なく心に信心なくとも縁に逢ひ仏法の

(33オ)

心のうちにうつせりといふ事なり何  
ころなくとも其縁に逢ひ仏法の  
心うつらすといふ事なし何心なくとも  
参り信心なくとも念仏申へし信心出  
て跡より申念仏はなし念仏となゆれば  
其中より信心はおこるなり百へんあるひは  
千へん又は五千遍など所作をうけ珠数  
をくるも数をきわむるにあらず珠数を持  
居れば念仏をわすれず唱ゆるゆへに  
信心は出来るとのすゝめなり

十二番近江国岩間寺観世音

手手観音泰澄和尚の建立也

(34オ)

越前えちぜんの国みかけのやす澄やすずみの妻つまは天よ  
り白玉はくぎよくくたり口くちに入ると見て懐胎くわいたいあり  
りしに此泰澄たいじやう和尚わうを誕生たんにやうしたまふ  
誕生たんにやうありしは白鳳はくほう十一年六月十一日なり

(34ウ)

又泰澄たいじやう和尚わうの兄あにに安かたといふ人なり  
時に泰澄たいじやうはつね人とちかひ生れし時  
よりして啼事なぐなくたゞにこゝとし  
てわらひ居給ひ二三才の時よりたゞ  
手を合せておかみ居給へはこれ只人ただひと  
にあらづとおもひちゝはゝのいとおし  
みもわけて厚あつかりし八歳はちさいの頃ころより  
みなゝ寝しつまるをうかゝひ夜毎よごとに  
抜ぬいでゝ願ねがは人のおきさるうちに立  
かへりてふし居らるゝはしめの程ほどは  
おとろきさわざたつねけれとも毎夜  
の事なれば常のやうにおほへ居る兄安あにやす  
かたのおもふにはあのもは母の懐胎くわいたいの  
時よりふしきあり只人とは見へすとはお  
もへとも幼少成るもの毎度ぬけ出  
いづくへゆくそ見届とどげんとかねて心

(35オ)

(35ウ)

へひかへ居るに例れいのことくぬけいてゝゆ  
かれしかは跡あとをしたひゆくにおち白  
峯みねといふ大山にあがるなをしたひゆく  
に其山は岩をたてたることく成るはけ  
しき岩石がんせきのところ成るにとふか如くに  
登りければ兄安あにやすかたもおとらしとしたひ  
来りしかども爰こゝにいたりてのぼる事  
あたわすして是非せひなく下より詠なめいれ  
はこなたの方に平らか成る所有て四方  
を見はらす所あり爰こゝにて四方を千遍せんべん  
礼拝らいはいして後に南無十一面観世音神なんぶじゆん變へんふ  
しきしやととなへ夫よりかへり給ふその  
おもむきを見て両親りやうしんにかたれば左ひだりこそ  
有るらんと夜るゝ出でしをいまは案あんし  
もせずしていつもの事におもひしか  
十五歳の時こよひかきりと出られけれ  
と両親りやうしん何の事もおもわす居られしに  
それよりかへり来り給わす夫ゆへ大きに  
おとろきなけ給ふ泰澄たいじやうは是までの  
御恩ごおん忝かたじけなくけなし今よりして子有りとな  
思召おもひまして仏法修行ぶつぽうしゆぎやうの事なればまづたく

(36オ)

(36ウ)

御歎なげき有るへからすと書かきのこしそれより  
白峯しろみねの岩屋いわやにこもりて木この実落みおちは  
を食物しょくじとして木食もくじと成り二十年の間  
岩屋いわやを出いさりけるにふしきやいつく  
より来るとも知らず真黒まっくろなる猿さるの  
ことき法師ほうし出来たり泰澄たいてうにしたかひ給

(37オ)

仕つかず泰澄たいてうの心の内に思おもひ給たまふ事を  
此法師ほうしよくさとり知り望もちにむかひして  
その用もちを弁ひんず常じょうには只ただあをむきにふ  
して居る泰澄和尚たいてう じやうもいつくよりきたる  
とのたつねもなくそばに置おけしなり  
後白峯しろみねの霊地れいぢひらけて人の通かよひも

(37ウ)

出来きしに諸人しよじんかの法師ほうしに御僧みそうは平日何事  
をなし居ゐらるゝやと不審ふしんを成なしてとへは  
大とくの用もちをぎく行者ぎやうしやなりといふて大徳  
の用事もちじの外ほかは只寝ただねてばかり居ゐるゆへに臥ふ  
行者ぎやうしやと付つたり泰澄和尚たいてう じやうとはのちに付つた  
まう此頃このころいまた名もつき給たまはさるゆへに  
たゝおちの大徳たいとくとは申ませしなり六根清ろくこんじやう  
浄じやうの身みと成り岩屋いわやに住居すまし給たまふこの  
ころの御門ごもんを元正天皇げんせいと申ま奉ほうる養老ようらう

(38オ)

六年ろくにんに御腦ごのうもつての外ほかにて御祈禱ごきたうさま  
なれとも御ごこゝろよからす時に越前えちぜんの  
大徳たいとくといふ名僧ないうしやうありと奏聞そうもんに達たし  
ければいそぎ御使ごつかひをつかわされ内裏ないりに  
めされける普天ふてんの下卒士げそつしのうち  
いつれ天地てんちにあらすといふ事なけ  
れは大徳たいとくは御使ごつかひとうちつれのぼりて  
内裏ないりの惣門そうもんにて岩屋いわやわすれたるも  
のありとの給たまへは御供ごくわうしやの臥行者ふぎやうしや此こよし  
を承うかるより実まにもといひてゆく人々  
はふしきにおもひ何の事共ごと知らさる  
にかへりしとおもひ居ゐる大とくは夫それ

(38ウ)

よりやうやく二三町ちやうもあゆみ給たまふに  
臥行者ふぎやうしや越前えちぜんのいわやより取とり参まりし  
とてとつこを出だす大徳たいとくは是こゝをとりて  
あかり給たまふみなくふしき成なるものと  
おもひいるさて大徳たいとくは御門ごもんの御そは  
に参まりとつこをふり千手陀羅尼せんじゆたらにを  
となへ給たまひ一へんくにてとつこをも  
つて帝みかどの御身ごみをなて給たまふに次第しだい

(39オ)

く御心地ごこちよく成ならせられ千べんに

(39ウ)

みちければ玉躰御安んとならせ給ふ  
 御悦ひなまめならず臥行者は内裏な  
 りといふ遠慮もなく真あをのけに  
 成りてふしたりしを公家殿上人見給ひて  
 あのもの人共見へず岩屋に有る猿る  
 ならん大き成る猿なり年を経れば斯迄  
 大き成るものにやなと有るを臥行者  
 聞より大に怒り大徳のそばにつかへず  
 ひしやする行者をさるなりとはいかにし  
 たるいひ事にや目に物見せんとて御縁  
 のはしらをとらへて引うこかする清涼  
 殿紫宸殿の御座夜のおとと迄も  
 くわうりくとなりひまきうこきける  
 に大徳はこれを見給ひめしつれし行  
 者はへんどの者なれば何にてもあれ  
 おのれか気にあわぬ事あればかゝること  
 をなすものなりいてくしつめ候わん  
 とてとつこをもつて柱をおさへ給へは  
 動きやみけり行者にむかひ人々の座  
 狂を仰らるゝをさのみ腹あしく思ふべ  
 からすと有れば行者はやうくいかりを

(40ウ)

しつめてまたうちかへりて臥しぬ御門は  
 御腦平愈をよるこばせたまひ何にても  
 あれ望みはなきやと勅問有るに岩  
 やにこもり有れば外に望み迎もなし  
 さりながら七堂からん御建立下されかし  
 と有るに勅免有りてすなわち大徳に  
 からんを立べき地を見立有るへしとの  
 みことのりそれより大徳はからん地を見  
 立として所々を廻り給ふに hands だら  
 尼をとなふる声ありいづくぞと聞給  
 へは側成る大木のうちに声あり扱く  
 有かたき霊木かな生木のうちより  
 観世音うつりまします霊木此木を持  
 て観世音の像をきざみ奉り本尊  
 とせんとし召所のものに申付此木大切  
 にいたすへしとて帝へ奏聞有れば急ぎ  
 仏体にきざみ奉り則ち其処にからん  
 を建よと勅命にて此木をきり二つに  
 引て見ればふしきや木のもく目に両方  
 とも千手観音の御すかたあり大徳は  
 此木をおかみ奉りいよく有りかたく此木

(41オ)

(41ウ)

をもつて刻み奉つる本尊末代の靈  
仏なりと有る今の岩間寺の観

世音これなり世にあせかきの観音

と申奉る毎朝〱御あせをなかし

給ふゆへは一百三十六地獄を巡り罪人を

たすけ給ふゆへなりとぞ又雷よけの

観音とも申なり此観世音にかぎらず

観世音は雷のなんをすくひ給ふ雷の

なる時はうんらいくうせいでんがうばく

しゆだひうねび観音力とおふじとく

せうさんと観音の名号を唱へる声する

所へはらいを落すまじとの御請願なりし

かるに此観世音を別にかみなりよけと

有りて御守りなど出る事はいかゞぞと

尋るに其由来越前の国にくかみ山

といふ所ありてくかみの長者といふ

長者五重の塔をこの山に一人して

建りうあり出来上りし所に一天かき

くもりいなひかりして雷の音すさ

ましくして塔の上へおち五重の塔

たちまちに焼亡ひける長者はせつ

(42オ)

(42ウ)

(43オ)

(43ウ)

(44オ)

かく建立せし五重の塔これは所のあしき

ゆへか長者の事なれば所をあらためて

又五重の塔をたてゝかつかうもよくてき

てよろこひ明日供養と有るに其日また

空かきくもりひかり〱といなひかりし

て次第にきひしく成り塔の上へ真黒に

なり黒雲かゝると見へしかまた雷おち

てやけほろびける長者は歎きかなし

み心にゆかみ有るや仏の御うけなきやと

なけきけるこの事を大徳聞し召てまつ

たくそれは雷にあらすかたしけなくも

五重の塔建る所大ろくてんの魔王のさ

またけるわざ其まゝに置べきにあら

すとて長者か方へゆき給ひければいか

なる事なれば仏の御うけましまさぬや

と有るにいや〱是仏の受たまわぬといふ

にはあらず魔王の所為なりいま一度建

りうあれ我請合て焼すまいと有れば

そのころのたつとき和尚のかくのたま

ふ事なれば金銀にいとひなき長者也

所をもかへすその所にてと有るさしづ



(44ウ)

によつていそぎ五重の塔を建ける普請のうち大徳も附居給ふに程なく五重の塔を建上げる明日は塔くやう也とて大徳老人に任せ置れよかならず

一人もよるましとて其日になれば大工ども手を引といなや又空かきくもりぬるに又こそ雷ならんと皆く恐れ居るに大徳は一心不乱空を詠め居給ふに

塔のうへに黒雲まひ下りくわらくとんと落る所を大徳不動明王悪魔がうぶくのばくの印をむすひ給へは何か知らずころくくと落ると空ははれわたるいざ皆く来れとあればよりて見れば何とも知れず惣身真赤朱のとき髪はながうしてはくの繩にしばられ居る大徳其時おのれ大六天の魔王のらい神両三度まで功德深き五重の塔を

(45オ)

さまたけを成すかゆへに我今斯如くしはりたりかゝるさまたけを成す其ゆへをかたれと仰せければ是わたくしの業にあらす此くかみ山に山神有て五重の

(45ウ)

塔を建つればその地へは三世三千如来やうかう有れば靈地と成る是によつて山神ことき位のなきもの此所に住事ならず住所なくなれば塔を建置ぬやうにさまたげくれよと頼みゆへにかくは成せしなりといふさいふ事も有るへし今よりは山神のほこらを建て其所に住所といわひ込むへしまた今より越前の国くかみ四

(46オ)

十里四方天地陰陽けきほつの外雷の鳴る事有るへからす汝繩をゆるすへしとあれば雷神請合申しからは其印に此山に水を出すへしとあれば雷神爪にて岩をうちわれば岩二つにわかれ清水いづる是くがみ白峯の雷水と名付て

(46ウ)

今に山神もいわるこめ給ひければかへつて守護神と成り今白峯にめぐり白山大権現と北国に有所泰澄和尚雷神を降伏し給ふゆへなり此大徳の建立の岩間寺観世音なればかみなり除の観音と有りて御札出るなり雷をきらい恐るゝ人は此守をいたゞき首にかけて居

(47オ)

れは随かなる事なり

御門よりして泰澄和尚と号を下さる  
是和尚のはしめなり大徳の望みに

よつて父泰澄の文字をすなわち

泰澄と付給ふとなり

(47ウ)

普陀洛伝記 卷の拾畢

西国順礼 三十三所 普陀洛伝記 卷ノ六

(1オ)

西国順礼 三十三所 普陀洛伝記 卷之拾壺

目錄

一 雷の説の事

付り猫の怪異の事

(2オ)

普陀洛伝記 卷の拾壺

雷の説の事

夫天地陰陽けきほつての雷とは天の

あつき陽火に陰の水のたゝかふゆへ

なり形ちとてはなしといへとも落る處に

爪かたまたは毛なと落て有る是を

いかにといふに海にすい牛といふうし又

海獅子といふてしらうみに底にすむ

先そのことく空にも雲をかけるけだ物

あり鳴音は是もおとろきあへるゆへに

かくの如きなりまた悪魔らいといふ

(2ウ)

(3オ)

ありこれは大六天の魔王のわざにして死人をつかみなどする雷なりこれは猫の雷と成りたるなり此三つの雷の説よきやおもふ又この外さまの説あり

北野天満大自在天神のけんそく十二万八千の内に火雷神あり

猫の魔障を成す事まさしく京都

寺町通りのうちある寺にふかく年へ

たる猫有つておりく変化して人を

たぶらかす事ありといへとも住持かつて

此事を知らずしてことの外にふ便

かられけるにある時この猫夜ふけて

住持の寝られし間に寝間をぬけ出

外へ出けるに住持目をさましかに

と見やるに是もまたおなしやうに年

を経たる大き成る猫来りて人のことく

ものかたりする様子にて其声かすかに

聞へたり住持はかてんのゆかぬ事と

うかひ居けるに程なく二疋のねこ

立別れかへるやうすなればかくれ居て内

(4ウ)

へはいる所を引とらへておのれはかてんのゆかぬやつやうすはのこらす伺ひみたりありやうにいふべしとねちふせければ此猫人のことくものいひてわたくし

共は年十三年いたせは何れも皆通力

を得申なり仲間の法式としてけんどん

邪見なるものゝ死したる時その死骸

をつかみとる作法にて御座候所に此度

わたくしの事其つかみ取番に当り

申候然るに気の毒成るは此たひ取らるゝ人

と申はこの御寺の自家の禅門にて候へ

は御恩を受たる御寺のたんほう衆の事

ゆへゆるしくれよと申せとも聞入れす

番を替りくれよと申せとも取あへすと

かくにわたくしに其禅門の死骸をつか

み取よと申事なればせひなく其ぶんに

相談極め申たる事にて御座候御恩深き

御住持様の事なればすいぶんと御けか

のなきやうに致し申へししかし今疋疋

付そひ来る猫の候得はまた自然の事あ

らも斗りかたく候へは其御用心には水品

(5オ)

(4オ)

(3ウ)

(5ウ)

の珠数を御持參成さるへしと申ける住持眼をいからしおのれにそれをならふへきかすいふんかの禪門の死骸手から次第つかみ取て見るへし最早いとまを遣わすへしふたゝひ米る事有るへからすとなけ付けはとひ出て何国へゆきけん跡かたもなく矢にける彼の猫か言し如く檀家の禪門死しけるに葬式を営み七条の火屋にて火葬にせんとて

(6オ)

棺を火屋へかき入れしに空かきくもり雨風はけしく雷なりいなひかりいわん方もなく恐ろしき気色なれはかれこれとひしめく所に宿坊はさてこそとゆだんなく守り居らるゝ所に幾たひか落かゝる斗りのはけしき雷成りしに終に棺のうへに落ける所宿坊すかさず水晶のじゆすにてうちらはらひゝ難なく魔障を退けたまひしとかやそのあとを見れば年経たる猫の大き成ることいふはかりなきか水晶の珠数にて打れ死し居たり此ねこはすなわちかの宿ほう

(7オ)

の秘蔵せしねこにて有りけるとそ宿ほうの名態と畧し爰にしるさすまた爰に江戸のさる寺の和尚これも檀家に死人有りければ行むかひ棺のふたをひらきて死人にかみそりをあてんとて経文をとなへ剃刀をかしらに当たたまへは死人手をあけてあたまをなでる和尚おとろきかみそりをひかへ死人の顔を見給へはやはり死したる人に相違なしまたかみそりをあてんとし給へはおなしく手をあけてかしらをなでるはてかてんのゆかぬことゝあたりを見給へはむかふのれんじの所に年経し猫の大き成るが上り居て下の方をなかくて其なす所手をあけて頭をなてるさては此ものゝ成す所なりとおもひ和尚はまた亡者にかみそりをあてゝ目は猫の居る所を見やり給ふに猫はまたいせんのごとく手をあけておのれかかしらをなでる斯のごとくすれば死人も手をあけて頭をなでる事

(7ウ)

の秘蔵せしねこにて有りけるとそ宿ほうの名態と畧し爰にしるさすまた爰に江戸のさる寺の和尚これも檀家に死人有りければ行むかひ棺のふたをひらきて死人にかみそりをあてんとて経文をとなへ剃刀をかしらに当たたまへは死人手をあけてあたまをなでる和尚おとろきかみそりをひかへ死人の顔を見給へはやはり死したる人に相違なしまたかみそりをあてんとし給へはおなしく手をあけてかしらをなでるはてかてんのゆかぬことゝあたりを見給へはむかふのれんじの所に年経し猫の大き成るが上り居て下の方をなかくて其なす所手をあけて頭をなてるさては此ものゝ成す所なりとおもひ和尚はまた亡者にかみそりをあてゝ目は猫の居る所を見やり給ふに猫はまたいせんのごとく手をあけておのれかかしらをなでる斯のごとくすれば死人も手をあけて頭をなでる事

(8才)

幾たひしてもおなしさま也とかく死したる人をねこのつかふ事あやつり人形をつかふにおなし死人有る内には用心して猫をちか付間敷事なり

御詠歌

水上はいつく成るらん岩間寺

岸うつ波かまつ風のおと

(8ウ)

水上はいつく成るらんといふ心は身のまよひはじめしそのむかしの水かみはいつく成るらん岩間寺ときかまほしききといふこゝろなり今人間と成りて其先の世にては牛にて有りしか馬にてありしかも知らず無始ひとたひまよひ出したる水上はいつくなるぞといふ心今もまたまよひいて無明の酒の急ひさめす始終一心てんとうするなり岸うつ波か松風の音とは波の音松かせのおと雨の音これ聞わけにくし浪の音松風のおとまたくまに降雨の音みな品かわれともおと斗り聞はたゞさあ〜として聞わけ

(9才)

(9ウ)

かたくまきはしこれ迷ひの耳にきくゆへなるしやなの説法をきくに真如実相の御法をひらく時は此迷ひあらずこと〜敷きゝわかるなり一心てんとうとは淨楽我常の四つのでんとうとてありひとつには淨のてんどう此娑婆世界を清くきれひ成る事とおもひ居るこれ大きな違ひなり此娑婆世界はなはた以てけかれ不浄の世界なり衣装を着かへ髪をあぶらにて結ひおしろひをもつて女はいろとりうつくしく見ゆれとも髪もゆふ事なく湯水もつかわすそのまゝに居るならはたちまちむさくなる事は知れたる事は目に見へたる事なれとやはりまよひ居る此世界は地まてにけかれあり人間の身体のかさきかほりは四十八万空の天へのほりてくさく不浄なるにほひなれば四十八万里より上に天人は遊へとも夫より下へは穢たる世界にちかければ下らす天人は人間とちかひ清浄にして神通あり既に

(10才)

(10ウ)

經文にも有る事娑婆世界のありさま

は仏の御目よりは屎中の虫のけかれ

たる中に居ながらそのけかれたる事を

知らずしてたのしみ居るかことごととなり

屎中にわくむしは其中をむさき所とも

知らず屎中を楽しみきれぬなる所よ

き楽しみ所とおもふへし人間の目からはむ

さくして目をあて見られすすなわち如来

の御目よりはこの娑婆世界を其ことくに

見給ひてむさく穢れて有れば早く成仏

なして清浄けつはくなる極楽浄土へ来る

心にはならざるかと思召よしなり二つには

楽点動といふこの娑婆世界をたのしき

世界なりとおもふなれとこの娑婆世界

は苦の世界なり生るゝ時になく産こへ

これすなわち苦のはしめにて目出たし

といひ悦こへとも生るゝものはその生るゝ

ときに身をさくことくるしみ有り是

を生かといふてひとつのくるしみ

なり八千世界はみな三界火宅なり

八つのくるしみは一生涯のそみのつき

(11オ)

(11ウ)

(12オ)

(12ウ)

(13オ)

る事なく目には見耳にはきく鼻

には匂ひをかぎくるしみにする世界な

りまた極楽世界には何ひとつくるしむ

事なく見る事聞事みなたのしみは

かりなり此娑婆世界は暑ふなり寒ふ

なり雨風地しん火事なと騒動す是

みな八苦の内なり三つには我点動我

とはわれといふ事なり我身にまよひ

居る事なりからだは有てなきもの也

焼は灰と成り埋めは土となるあると

見しからだは跡なく消はてゝのこる

ものは名はかりにて有りけるを我身

は有る物と思ふかゆへに他人とも言分を

成し又は万事につけて望みことたへ

さるなりこのからたをは無きものと

見ればさして何事にもくつたくせず

物事わきまへてあれば命おしきと

も思わず世に生有る物死せさるとい

ふ事なし恐れ多き事ながら御代

くくの御門にも御いのちにかかり有て

死のみちはのかれまします事あたわす

(13ウ)

御位といふ御幸と申何に付ても御ふ  
 足成る事はさらになし上もなくけ  
 つかう成る御身の上なれとも娑婆世  
 界の有さまにて此死の道はかり  
 は御心にまかせず医療祈禱といへとも  
 御命にかぎりあればすくひ奉る事  
 能わす是非もなき事ぞかしいわんや  
 下司下郎の身として何とて命を惜む  
 べきや念仏の行者のいさみ勇んで  
 往生するはいと有かたき事なり死に  
 とむなしとおもひては何とて極楽往

(14オ)

生の成るへきや四つには常点動といふ  
 て此娑婆世界はつねにかはらぬとおもへ  
 とも無常の世界にして定まりたる事は  
 あらす一つとして常ならず万もつ草木  
 国土いづれも生あるものに初めあれば  
 終りあらずといふ事なし万物みな定  
 めなきものと知るへし何ほど大切成る  
 取扱ふ衣類あるひは諸道具といへ  
 とも古くなればくちはて後くには  
 跡かたもなく成る事ぞかし唐土に

(15ウ)

(15オ)

かんやう宮とて金銀をちりはめ珠玉  
 をもつてかさりとし宮殿楼閣の結  
 構数百里に建つらねしもたゝ一時の  
 けふりに広くたる焼野原と成り鉄の  
 柱に石を根つきにしたりとて有は  
 つる世にあらされは只何事も無常と  
 観しはやく九品の浄土に成仏往生  
 とげんとのおねかひを起し悟りをひらき  
 迷ひ居たる岸うつ波松風のおと聞  
 わけよとの御詠歌なり都て人々の何  
 事をいふもあうんの二字なりあうんは  
 真言秘密多羅に經に功德の事を  
 あらはせり然るに何事をいふにもあうん  
 の洩る事なし六字の名号をもとなふ  
 るにあうん多羅尼三へんとなへる功  
 どくあり跡は口をひらくなりうんとは口  
 をふさくなり南無の二字のうち南  
 と口を明てとなへ無と口をふさぎてと  
 なへ阿弥の二字は阿と口をあき弥と口  
 をふさぎてとなへ陀仏の二字は陀と口  
 をあき仏と口をふさぎてとなふ六字の

(15ウ)

(16オ)

名号のうちにて三字は口を明き三字  
は口をふさぎて唱ふ此故にあうん三へん  
の功德有りとはいふなり阿は胎藏かい  
うんは金剛かいにして金胎 兩部真言  
ひみつの陀羅尼をは長くと唱ふる所  
を六字の名号につめて手みしかく

(16ウ)

となへ申なりしかも一遍の六字の名  
号にて金胎 兩部の真言ひみつの陀羅  
尼經三篇となふる功德にあたるとなれば  
六字の名号百へん千へんとなふる時は  
いかほどにあたるや知られずいとも有  
かたき御事なり

(17オ)

西国順礼 卷之拾貳  
三十三所 普陀洛伝記 卷之拾貳

目録

一 拾三番近江国石山寺觀世音

(18オ)

普陀洛伝記 卷の拾貳

(18ウ)

拾三番近江国石山寺觀世音  
拜み奉る所は大仏なれとも御腹内にお  
いさぎ仏を納め奉るこれは木そうと  
もいひまた繪像なりともいふ伝記く  
わしからすむかしの伝記はやけうせたり  
しをたんくとつしたへたる今の  
伝記あり何にてもちいさき如意輪觀世  
音御腹内におさめあり開山は南都  
東大寺良弁僧正なり聖武天皇の御  
婦依にて今南都大乘院一乘院の御  
先代なり三寶院聖護院などにて

(19オ)

たいこの聖宝上人を御先代に立ると  
同じ事なり時に此良弁僧正の親御  
何といひし御人なるやこれもでん記  
にくわしからす近江国志賀の里の人  
なり良弁出生ありて七夜のうちに  
父はむなしく成りしかはひとかたな  
らぬなげきなりといへとも世の有さま  
なれば是非もなく野辺のけむりと



(19ウ)

成りし出生ありしおさな子を無  
 き人の形見とおもひうきを凌ぎて  
 世を送り何とそして此子をそだて  
 あけ出家と成して夫のほだい我後  
 の世をもとむらわれんとそれをちか  
 らにおもひてふたゝび嫁する事をも  
 せずしてそたてけるに次第に成人す  
 につけても父のおわしまさはいかに  
 悦び給わんと思ふもなみたのたねと  
 なり明しくらし給ひけるしかるに此子  
 二才の時母のふところに入れかいて  
 こふ桑の葉を畑へ取にゆかれしにふと  
 ころにいたき居ては桑も取りにくく  
 邪魔になるゆへ爰に下り居てあそばれ  
 よと美しき砂原のうへにおろし遊ばせ  
 おきて桑のはを取なから折ゝ此子を  
 見やるにきけんよくはい廻りてあそひ  
 居ける折ふし比良の山のかたより年  
 経たる鷺の飛来りはるかに高く此  
 子の上を舞ふよと見へし真一もんじ  
 に飛下り此子をつかみて飛行けるを

(20オ)

母は鳥の羽音におどろきふりかへり  
 見る所にはるかに高くとび行ける母は  
 有るにもあられすして焼野々きす夜  
 のつる子をおもわぬはなきものをあら  
 心な悪鳥やかへせ〜我子を戻せとその  
 場より末しら雲の旅の空何国をあて  
 ともさためなく狂気となつていて行  
 ける此ころ南都東大寺にきいん大僧  
 正と申貴僧おはしましけるかの鷺  
 は子をつかみながら奈良の春日山  
 の杉の木のごずゑにとゞまりてたゞ  
 なかめ居たりけるうへ見ぬ鷺と  
 いひて物をつかみ得るとそのまゝ  
 引さきくらふものなるにさもせ  
 さるは不しきなり惣じて外の鳥  
 類は鷺をおそれつねに餌をひ  
 ろふにもうへの方を見る鷺は鳥類  
 王にて我よりこわきものなきゆへ  
 うへ見ぬわしといふ事なりさても  
 その子の守り袋の内に一寸八分  
 の如意輪観世音を入れ奉りつね

(21ウ)

母は鳥の羽音におどろきふりかへり  
 見る所にはるかに高くとび行ける母は  
 有るにもあられすして焼野々きす夜  
 のつる子をおもわぬはなきものをあら  
 心な悪鳥やかへせ〜我子を戻せとその  
 場より末しら雲の旅の空何国をあて  
 ともさためなく狂気となつていて行  
 ける此ころ南都東大寺にきいん大僧  
 正と申貴僧おはしましけるかの鷺  
 は子をつかみながら奈良の春日山  
 の杉の木のごずゑにとゞまりてたゞ  
 なかめ居たりけるうへ見ぬ鷺と  
 いひて物をつかみ得るとそのまゝ  
 引さきくらふものなるにさもせ  
 さるは不しきなり惣じて外の鳥  
 類は鷺をおそれつねに餌をひ  
 ろふにもうへの方を見る鷺は鳥類  
 王にて我よりこわきものなきゆへ  
 うへ見ぬわしといふ事なりさても  
 その子の守り袋の内に一寸八分  
 の如意輪観世音を入れ奉りつね

(21オ)

母は鳥の羽音におどろきふりかへり  
 見る所にはるかに高くとび行ける母は  
 有るにもあられすして焼野々きす夜  
 のつる子をおもわぬはなきものをあら  
 心な悪鳥やかへせ〜我子を戻せとその  
 場より末しら雲の旅の空何国をあて  
 ともさためなく狂気となつていて行  
 ける此ころ南都東大寺にきいん大僧  
 正と申貴僧おはしましけるかの鷺  
 は子をつかみながら奈良の春日山  
 の杉の木のごずゑにとゞまりてたゞ  
 なかめ居たりけるうへ見ぬ鷺と  
 いひて物をつかみ得るとそのまゝ  
 引さきくらふものなるにさもせ  
 さるは不しきなり惣じて外の鳥  
 類は鷺をおそれつねに餌をひ  
 ろふにもうへの方を見る鷺は鳥類  
 王にて我よりこわきものなきゆへ  
 うへ見ぬわしといふ事なりさても  
 その子の守り袋の内に一寸八分  
 の如意輪観世音を入れ奉りつね

(22オ)

くかけさせ置けるか驚も此尊像を  
おそれてや子を疵もつけすまもり  
居るはかりなり子は木の上にてなき  
いる所に折節きいん僧正此所を御通り  
有けるにかすかに稚子のなくこへを聞付  
給ひふしぎやいつく成るぞたとつね  
たまふに杉の木のはるか成る木すへに  
稚子わしのつかみ居るを御らんじ何

(22ウ)

とて此子をたすけ得さすへしと  
て七条の御袈裟を御弟子達を初め  
近習その外侍ともに杉の木の枝に  
ひろけさせ見給ふに凡疊三帖じき  
ほどありみなく油断なくかるくふう  
わりと受とめよとて待うけさせ僧  
正は真言秘密の印加持を修した  
まへはその法力の功德にてたちまち  
驚はとびゆき其子は錦の袈裟の  
うへに受つゝまれける僧正立より御  
覽有るに玉のことく成るうつくしき  
男子にて今迄なき入居たりしに僧  
正いたき上給ひければにこくと笑らひ

(23オ)

(23ウ)

(24ウ)

(24オ)

けるにそ猶さら不びんに思し召いつく  
いか成る人の子にて有かは知らねとも  
無や父母のなけき居るやらんふしぎの  
命たすかり得しを父母に帰へし得さ  
せたくはおもへともいかにせん其便りを  
得すと御栗物にいたき乗せ帰らせ給ふ  
御寺にてはそたて上られす乳ぶさに  
てそだつうちは御所かたへ御頼成さ  
れける此僧正院の御所に殊さら御婦依  
ましく其外の御所にも御婦依有る僧  
正なればきいん御坊よりあつかり申  
せし子成りとしていつれにも大せつに  
にして内裏の上臈かた中にてそた  
ち給ふ事又有るましき果報也七才  
に成られければ僧正の御方へ御取戻  
し有て仰けるは其方は二才の時かやう  
くの事にて杉の木すへよりおろし有  
てしゆへ両親知れすかくまで成人  
致されたり能もの道理を合点し  
て我弟子と成り経陀羅尼をよく  
覚へ学文をならひ法宗三論をわき

(25オ)

まへ師の跡をつき斯のとき衣を着られよと仰られければおとなしく父母なくてそたてられ参らせしはうへもなき御情有かたくそんし奉る恐なから取もなをさす父母と存し奉れはいかてか仰をそむき奉つらんいかにも御弟子と成し下されよと申けるにぞよくも申されたり其方二歳のときつけて居られし此守り袋は定めて母のぬわれし成らんこれを母とおもひ父恋しくは此観世音をおかまるへしこの尊像も同じく守りに付有しそと仰ける此子成人にしたかひ経文を見ひらき若き僧中南都七大寺の内にてきいん僧正の弟子良弁ほとんどの学文有る出家あらしといふ程の事になりければわかき良弁なれとも天晴きいん僧正の御弟子なりと御尊敬あつて禁裏院中その外御所へにも良弁の説法を御聞なされて御帰依ましけるさて良弁三十歳のときいん僧正御

(26オ)

遷化有るに僧正良弁をちかく召れいま既におふだいらくの風吹来りて西方の浄土にゆくなり其方は今南都七大寺の内にて第一の学者なり東大寺きいんか弟子たる事我悦こひ思ふ所なり杉の木すへよりおろし我弟子と成せしより今すてに三十才におよひ今別るゝといへとも我心すてに足りぬと仰られければ良辨なみたを流し我幼少の時よりして莫大の厚恩にあつかり誠に父とも母ともおもひ奉りし師の御ほうに別れ奉る事のうたてさよとてなけきしませ給へ共浮世の中の有さまにて終に墓なく成らせ給ふ良弁僧正は師の御坊きいん僧正にもおとり給わす聖武皇帝の御帰依の御僧なれば御所へにも御尊敬まします大かたならず扱も志賀にまします良弁僧正の御母は彼鷲の跡をしたひ我子の行衛をたつねわび終に狂気と成りて凡日本六十余州尋ねさまよひ我

(26ウ)

(27オ)

(27ウ)

子をかへせ我子を戻せと幼なき子供  
のこへさへすれば呼いたらぬくまもなく  
あこかれ歩行しかはおさなき子供は氣  
違ひよとはやし立爰にては恥かしめられ  
かしこにては笑われても尽ぬ命なれば  
冬は寒夜の雪に臥夏は炎天の暑  
に照され乞食の身と成つて三十年

(28オ)

の其あひたまとひあくかれ山城の国淀  
の渡りにてふと迷ひの心はれ正氣と  
成りさても浅はかのわかかな我子の身の  
上まよひ出していふにもあらず驚に取られ  
し事なれば此世にいきて有るへきやし  
かれはいかほとたつねしとて廻り逢ふへ  
き事にあらしまよひ出し其頃より  
何程月日を送り年をかさねし事や  
らん乱れをくれし髪を見ればさてく  
白く成り果たり詮なき事にはちを  
さらしあるきぬる事のうたてさよ今よ  
り故郷へ帰るへしと船頭を頼みて舟に  
のせもらひともの方につくまり居たり  
ける乗合の内に都の者有て咄すを聞に

(28ウ)

南都東大寺の良弁僧正は二才のとき  
驚につかまれ春日山の杉の木すへよ  
りおりさせ給ふ事天よりあまくたり  
まします成らん帝をはしめ奉つり御所  
くにも御婦依ましく僧正と成り参ら  
せしよし今南都七大寺にて第一の  
尊とき僧正なりと申けるにそもしそ

(29オ)

の僧正かわか子にてはなきや世には似  
たる事も有るへしとそのはなしたる男  
にくりかへしく尋ねけるにかやうくと  
きけは聞ほと似たる事ゆへその儘志  
賀にはかへらすして奈良の都へ心さし  
行けるに老の足のはかたらすやうくと  
二日目にならの都につきにけるさて東  
大寺に来て見れば筋塀たかく四つ  
足の門きらひやかに内を見こめは  
幕引まわしさてまた玄関には教多の  
侍なみ居つ門前には諸方よりの使  
者の供まわり馬のり物すきまなく中  
くよりもつかねはよもやかし是か我  
子の有へき所にては有ましともし

(29ウ)

(30オ)

またさにても有らんかとふたゝ心  
も乱るゝ斗りの思ひにて門のすみ  
より内のやうすをうかゝひ見れば門  
ばんしかりて中へに寄つけすわか姿  
の見るしければ実にも断りそかし  
と立退そきしかいかにもして僧正に

(30ウ)

御前にかゝらんやと三日の間東大寺の  
とは知り給はず御乗物にて御供廻りのさ  
むらい近習若党にいたるまで美々しく  
出立毎日春日の御社へ御参詣成され  
ける母御は御前にて僧正を見受申  
さるゝに御年頃は三十斗りに見へ給ひ  
とこやらにおきな顔の似たる所の有とは  
いへともしかと夫とも見されたかたくよし  
それと見定めしとていひ出すべき便り  
もなく元来必定それぞといふへきに  
もあらされはせんかたなくあちらこち  
らとする所に東大寺の内より出家一  
人出られしかは是こそよぎつてなりと  
立よりて言葉をかけかく浅ましき

(31オ)

(31ウ)

姿にて申出すもおそれおゝき御事ながら  
御出家様と見うけ御ねかひ申上たき  
事候へは先程より是に持受候由申ける  
出家立より是を見れば浅ましき乞食也  
しかれども出家の身なれはいとふへきにも  
あらされども爰は途中といひ追付僧  
正の春日より御下向あれはかたへ以て  
爰にては悪かるへしねかひとあらは我寺  
にて聞へき問我方へ来るへしとて同  
道して寺にかへりやうすを聞けるにわら  
はゝ江州志賀の里に住しものなりしか  
二才になりし男子を鷲に取られそれ  
より狂氣しておよそ三十年程の間諸  
国をたつねさまよひあるきしか山城の  
国淀の渡りにてふと狂氣さめ正氣と  
なり故郷志賀にかへらんと舟にのりし  
にのり合のはなしをきけは南都東大寺  
の僧正はかやうへと聞につけ其儘に聞  
すてならず恐れ多き事ながら若我  
子にてもや有らんと尋ね参りしかども  
御覽のごとく見くるしき乞食の体なれ

(32オ)

(32ウ)

は御門前へより付事能わす夫故その御方  
方をたのみ申なり何とそ僧正の御耳  
に入へき仕方を御おしへ給わるべしよも  
我たつぬる子にては有ましなれとあまり  
によく似たる事ゆへにねかひ奉るなりと  
申けるに成ほと僧正の御身のうへ其通

(33オ)

りの事なれとも其もとのなりかたち  
かくまで落ふれたる体なれは何にして  
も御直には中上がたし其おもむきを  
書附てすなわち二月堂のまへに良弁  
杉とて大き成る杉の木あり此杉の木に  
書付をはり置てその側に居られなは

(33ウ)

僧正にも母御の御在所を知らせ給われ  
と毎日く春日の社へ御参詣有て此  
杉の木のもとに御乗物をおろさせ給ひ  
御十念有ればかくのことくいたし置なは  
御目にかゝるへし其おもむきを書付進  
すべしと則書付を渡し今日ほもは  
や御参詣もすみたれば明日の事に致  
さるへしと有て明の日のかの杉の木に  
書付をはり置て母御は其わきに居ら

(34オ)

れける良弁僧正は例の通り御つとめ  
すみてのち其まゝ春日の社へ御参詣  
有て杉の木のもとにて御乗物を出さ  
せ給ひ手をあわせ御十念をとなへ給ふ  
に杉の木に書付を張りたり僧正其書付  
を是へと仰に依て御そばへ持ゆきけれ

(34ウ)

は御手に取らせられるに母御は嬉し  
くおほし召猶さらかたへにうつくまり居  
給ひける僧正は書付を御覽有るに近江  
の国志賀の里の者にて二歳に成る男  
子を鷲にとられ狂気と成り子の行  
衛をしたひ三十年かほと諸国をたつ  
ねさまよひしにふと本心に成りけるゆへ  
故郷にかへらんと淀川の渡しにて乗

(35オ)

合の人のはなしを聞は東大寺の僧正  
こそ二歳の時鷲に取られ給ひしかとも  
不思議にいのちたすかり給ひ出家と成り  
給ひ今にては帝の御帰依ましく七大  
寺のせきかくと仰られ給ふよしうけ  
たまわり恐れ多くは候得とももしや  
と存し書付にて御目にかけたく斯は

(35ウ)

はからひ候とそ書付あるを御覧有て  
 僧正の御心にてつしければ此書付を張  
 たる人を吟味せよと仰けるにあたりを  
 見れば浅ましげ成る乞食のうつくまり  
 居て外にはさらに人もあらされは彼  
 乞食にその方此書付を張たる人を知る  
 さるやと尋ねければ成程書付をはりし  
 はわらはにて御座候と申けるそのおもむき  
 僧正へ申上ければ其女是へ召せよとて  
 御そばへ呼せられければちぎれたる  
 こもをうち払ひはるか隔てゝうつく  
 まる左様にへたて居ては聞取かたかる  
 へし近く是へと仰けるゆへ御傍ちかく  
 参り給ふに僧正は此書付に子を失ひ  
 し母公とはそなたにて候かと御尋ね有  
 ければいかにもその書付はわらはか身の上  
 にて御座候僧正仰けるは我も同じ身  
 の上にて此年月春日大明神へ願  
 ひ奉りて両親此世にましまさば何とそ  
 御在所を知らせ下さるへし我人父母へ  
 孝養をらいたすへき事なるにいか成れば

(36オ)

(36ウ)

良弁不幸にて幼少の時ためしなき難  
 にあひて父母に別れ奉り見も知らず  
 御名をだにしらされはたつね申さん  
 やうもなし夫ゆへ毎日此杉の木にむかひ  
 て此世にましまさは息才延命の祈禱  
 のためさなくは後世の御ためとおもひ  
 十念となへ拝し申御事なり此書付の  
 通りにては良弁か身におなしきやうなれ  
 とも世にはまた似たる事もあるものなれ  
 はしかと夫とも定めかたしもしや  
 良弁か母にてましまさは是春日大明  
 神の御引合せなりしかれとも只今中  
 ことく書付はかりにては定めかたし其  
 子を鷲に取られし時着せられたる衣  
 いか又は外になににてもしるしと成すへ  
 きものはなきやと仰ければ母申されけ  
 るは実に断り去なから三十年の間狂  
 氣と成りて暮せし事なればさやう  
 の事も覚へ申さすとさめくとなき  
 給ひしかしはらく有て実有難やおも  
 ひ出せし事こそあれ其子の守りに

(37オ)

(37ウ)

(38オ)

一寸八分の観世音を入奉りてつねにつけ  
させ置候をおもひ出して候と申されければ  
良弁大ひによるこひ給ひ夫こそ慥か

成るしるしなり夫は是にて候かと御はだ  
よりかの尊像を取いたし給ひ師の御房  
の仰おかれし御言葉に此観音の尊像  
はかの杉の木より取おるせし時着たる  
衣類の帯に付有りしとて父母の形

見にせよと我に下し置れし也さては  
母にてまします事の嬉しさよと明神の  
方をふし拜み偏に御生によつて只  
今親子の対面致す事の有かたさ

(38ウ)

よ去にても我に尋ねあわんとて三十年  
の其間御苦勞有りし御事のおもひ  
やられていたわしとかゝる事のあらずとも  
はかり知られぬ親の恩まして斯まで  
御身をくるしめ奉りしは良弁が不孝の  
つみゆるさせ給へとふしまろひてなげか  
せ給ふそれより我御乗物へ母上をのせ  
奉らんとのたまふを母深く辞し給へば  
いやとよ親の恩の深き事物をもつて

(39オ)

たとへかたし三世両達釈迦如来の御  
身にさへ御父浄飯大王の御棺をかき  
給ひしに此良弁御乗物をもかくべ

(39ウ)

きはつなりと御母をのり物にめさせ  
参らせ僧正は御歩行にて跡より御  
供なされ御寺に帰らへ給ひ御弟子達  
を付置れ母御は御年八十才にて結構  
成る往生をとけさせ給ふ此御母を大仏  
の戌亥の角に御殿をたて子安明神  
といわぬこめて今にあり何にても  
子供願はかなへ給ふ御神と成らせた  
まひける

普陀洛伝記 卷の拾貳畢



西国順礼  
三十三所 普陀洛伝記 卷ノ七

(1オ) 西国順礼  
三十三所 普陀洛伝記 卷の拾三

目録

一 石山寺觀世音御利生の事

附り尊弁僧都説法の事

(2オ) 普陀洛伝記 卷ノ拾三

石山寺觀世音御利生之事

聖武皇帝南都大仏殿御建立ありし

に仏に押奉る金はく御たりなされず

いかゞはせんと公家大臣共に御評議遊は

されける所に其儀ならば国々へ触を廻し

役々へ申付なは金銀はいか程にても集り

申べしと有ければ帝宣ひけるは此璽舎

那仏は末世まで尊み奉るへき御本尊

の金はくを公義より触を廻していただき

てては仏のはくと聞て有かたくおもひ

(3オ)

出すものもあり又是非なき事と思ひ出す  
もあらんさようにては末久しくとげがた  
し大峯さん金峯山にてこがね多きゆへ  
金の御たけと書て金峯山といふ也此所  
にてこかね貫ふべしとて座王権現へ御  
使を遣されんに外の人にては成るまじと良弁僧  
正へ仰付られ外の事につかふにあらすゑんぶ  
だいの仏をはくを致し候由申へしと勅定  
を蒙むり夫より良弁僧正は吉野蔵王堂  
へ参り給ひ此たひ帝の勅をうけ参り

(3ウ)

候は金銅十六丈の璽舎那仏に置奉る金  
はく足り不申権現へこのむね御断申  
金峯山のこかねをつかひ申たし外の事に  
つかふにあらすは権現にもおしみ給ふ事  
なかれとの勅命なり然れば此良弁へ金を  
下し給はれと御申あれば権現の御告に此  
山のこかねさら々惜むにあらす我心の儘  
にも成りかたしそのゆへは此山のかねを  
我役の行者よりあつかり五十六億七千  
万歳りうげさんゑのあかつきみろくほさ  
つの説法の時此山に敷こかねなれば望

(4オ)

にまかせかたしゆへに其ねかふ所の金

はくは外にてさづくへし爰に近江国

勢田の郷に正眞の觀世音を造立しい

のるならば何ほとも箔はいつるなりと御

告ありければ良弁僧正都へかへりその

おもむき奏聞有る所にすなわち又

良べんへ勅命あつて近江の国勢田

の郷に觀世音を造立し御ねかひの

金箔をいのり申へくやう仰付らるゝ

これによつて良弁勢田の郷に至

り給ふすなわち今の石山寺の地なり

良弁僧正地勢を御らん有るに木石等

にいたるまでいかさま靈地なりとおも

ひたまひけるしかるにかたわら成る清

水のもとにいわにこしかけ釣をたれ

居る老人申ていわくいかに良弁我

こゝにありて汝をまつ事ひさしとあ

りけるにぞ良弁僧正是只人にあら

す御名を聞せ給われと仰けるろう人

の給ひけるは此處は正眞の觀世音の

靈地なり此所に觀世音を造立し一たび

(4ウ)

(5オ)

(5ウ)

參る輩は極樂往生うたかひなし此事

を知らせんと爰に来てまつ事久し

さてまた此地は靈場の清水にて疫病

厄難をのかるゝ薬水なりなんじ此所に

觀世音を造立すへし我は近江の国

比良大明神なり今本社にかへるべし

との給へば神かせさつとふき来り

翁と見へしはぬさとなり比良の嶽へ

飛さり給ふあゝありかたやとふし拝みこれ

より御告にまかせこの岩をは台座とし

て如意輪觀世音を造立し御腹内へ

良弁僧正守り本尊一寸八分の觀世

音を納め奉る夫より良弁はかの箔の

事を御祈ある程なく奥州みちのくに

金のはなさき連金一万三千六百兩を

帝へさし上天仏殿のはくと成し也石山觀

世音の御方便にてなんゑんふだいの仏出

来させ給ふまことに正眞の觀世音浄土

ふたらくせんも斯あらん藏王権現比良

大明神の御告に正眞の觀世音靈地

と有る一たび參る輩成仏うたかひなし

(6オ)

(6ウ)

と仰ける御告勅願は聖武皇帝建立  
は良弁大僧正観音の御台座は比良

大明神の腰をかけさせ給ひし岩にて  
自然涌出の右下の水は観音知恵の

(7オ)

清水にて大悲水といふ池なり是によ  
つて代々の御帝御尊敬あそはし御勅

封にて三十三年目に御開帳の外御即位  
の節は御開帳ありて天下太平万民  
安全の御祈禱有るとかや

石山寺観音の御利生ある事語るもつき

せぬ事なれとも良弁僧正の御身の上  
におなし御利生ゆへこゝに出すある時

(7ウ)

加茂の社司に侍従といへる女あり形  
ちよくはつめいにして歌をよみ詩

をつくり神主殊に寵愛する事なゝめ  
ならず其頃の社師当代のことくにあら

す甚だおもくしく有し也此侍従胎  
して男子彦人もとめり本妻のねたみ

甚だしければ詮方なく思ひ居たりしか男  
子出来てよりいよくねたみ深くさま  
くくのしりける親や子とも毒害させんと

(8オ)

たくみしを侍従これに聞つけさてく  
是非もなき事かなかゝる中に居る事

一日も心安からず我身の上は兎も角も  
殿の御種なるをおめくと殺さん事も

口おしき次第也とかく此勉に居てはた  
とへ此度の難をのかるゝとも始終のため

よるしからずとおもひ定め此子をかゝへ  
てやかたを忍び出其子を菊桐の紋附

(8ウ)

たる手箱に入れ錦の袋にいれ下加茂の  
みたらし明神にとふて本妻の如みによ

つて此子をつれやかたをぬけ出たり此子  
当社の神職何かしのたねなればまさしく

明神の御氏子なれば御見捨なくお救ひ  
下されて何方へ成りともつかわされ下さるへし

(9オ)

只今御渡し申也あわれみ給へて此子の成長  
有るやうに守らせ給へとふし拜み袋に

包みしをみつかきの端にかけ置都のかた  
へ立出しに箱の内になくこへすれば跡へ

引戻され親子恩愛の名残おしくい  
だき抱へて乳房をふくますれば頓て心  
よけに寝入しを母は此子の顔を見ていつ

(9ウ)

ものごとく添乳して寝る事とおもひしやすや  
／＼寝入し事のいとおしや果報つたなく  
今母にさへ別るゝやは今生のわかれと  
おもへはなみたのむねにみち／＼ふさかり  
声さへ出ずむせひしか又思ひかへしていか  
成る事の縁ありてふたゝひ逢ふ事のあ  
らんも斗りかたしと手箱のかけごを取て  
是をしるしと成すへしとなく／＼見捨都

(10オ)

の方の知るへのかたへ心さし其後大原の  
奥に髪をおろし尼と成り諸国修行に  
いてられけるに土御門大納言殿加茂に  
御心願有て御参詣の所のみかつかの所  
におさなき子のなく声しけるを聞つけ  
給ひ御慈悲ふかき御方にて不便成る事  
におほしめし召よせ御覧あるに菊桐の  
紋付し手箱に入れ錦の袋につゝみ有り  
是はいやしきものゝ子にあらす何ゆへにか捨  
つらん不便なる事なりと連帰らせたまひ  
夫より乳母をつけて育てられしに  
其子発明にして年月積り早十三さいに  
成りければ大納言殿仰けるは其方事

(11オ)

はうぶやの内に此手箱に入みたらし川の  
社に捨あるをよし有る者の子ならんに  
不便成る事と思ひつれ帰り養育致し  
たりしに我子あらされはわか跡をつが  
すべきにもあらずよく／＼聞給へ両親をも  
知れざれば出家となつて父母現当  
二世をいのり又親々此世にましまさは仏  
力法力によつて再たひ廻りあふ事も  
有るへしまた身の為にも是に過たる事  
はあらしいかゝおもわるゝやとの給ひけるはし  
めて知りたる我身の上誠に父母に  
まさりたる御厚恩いかてか仰をそむくべし  
我心にも出家を願ふ事なれば仰といゝ  
旁／＼もつて只今より出家と成て是  
まで御養育下されし御恩も送り奉  
らんとおとなしくの給へは実にてかされた  
たりとて比ゑひ山良根院恵心僧都の  
御弟子と成し給ふ恵心僧都もよぎ弟  
子と悦び尊弁と名付たまひ経巻陀  
羅尼を読ならい学文をならわせ給ふに  
一を聞き十を知り愛といへはかしこをさと

(11ウ)

はうぶやの内に此手箱に入みたらし川の  
社に捨あるをよし有る者の子ならんに  
不便成る事と思ひつれ帰り養育致し  
たりしに我子あらされはわか跡をつが  
すべきにもあらずよく／＼聞給へ両親をも  
知れざれば出家となつて父母現当  
二世をいのり又親々此世にましまさは仏  
力法力によつて再たひ廻りあふ事も  
有るへしまた身の為にも是に過たる事  
はあらしいかゝおもわるゝやとの給ひけるはし  
めて知りたる我身の上誠に父母に  
まさりたる御厚恩いかてか仰をそむくべし  
我心にも出家を願ふ事なれば仰といゝ  
旁／＼もつて只今より出家と成て是  
まで御養育下されし御恩も送り奉  
らんとおとなしくの給へは実にてかされた  
たりとて比ゑひ山良根院恵心僧都の  
御弟子と成し給ふ恵心僧都もよぎ弟  
子と悦び尊弁と名付たまひ経巻陀  
羅尼を読ならい学文をならわせ給ふに  
一を聞き十を知り愛といへはかしこをさと

(12オ)

る其知恵比叡山にて若手の僧の内にて  
尊弁につくものなしといふ程にぞこそ  
成り給ふ扱また説法弁舌あざやかにて  
其さわやか成る事五音の開合まことに  
仏在世のふるなも及はぬほどの説法利  
生の名人とならせたも御としいまだ  
廿五歳なりさてまた恵心僧都も説法  
の名人にて宇治にてせつほうあらせた  
もふに今は御年もたけさせたまふは

(12ウ)

御苦勞におほしめし其頃尊弁は説  
法利生の名人なれば所々にて恵心僧  
都の御名代として御説法有りしに  
時しも嵯峨の釈迦堂供養の御せつ法  
清凉寺にて一七日の内なれば聴聞の  
人々はみちくおしも分られず此  
尊弁僧都御せつほうのたひことに  
菊桐の手箱にしぎのふくろを高座  
にかけ置説法のうちに御たのみ有る  
は我身は産家のうちに此手箱に入れ  
加茂のみたらしの社に捨られしを去  
る御かたの御なさげにて人と成りいま

(13オ)

(13ウ)

恵心僧都の御弟子尊弁とは成しかど  
も尚親を知らずして明くれ難き悲  
しむなり此手箱并に袋に付て御存  
じの事もあらんやと説法の座へ持出て  
おのくを頼み申なりもしや此二品御見  
知りの方あらば御知らせ下されよと  
頼み給ふ此尊弁より始りし説法の  
手箱なりとそ時に御母には石山寺に  
籠らせたまひ大悲のちかひにて何卒  
我子に達せ給ひ良弁僧正は二才の時  
驚につかまれ三十年の後母公にあは  
せ給ひしも此観音の御慈悲なり我も  
それに同じくわかれてより廿五年

(14オ)

成りひとへにあわれみましく我子に  
あはせてたび給へと願われける観世音  
の御告に老僧出させ給ひて我子に  
あわんとならば嵯峨へゆけよとて一首の  
うたをよませ給ひける  
玉手箱中にかげごのなかりせば  
ふたみしられていかに逢ふべき  
と御告あればいそぎ嵯峨へゆきて釈

(14ウ)

迦堂かどうにいたれば御説法あり内に入て

聞居きこられけるにいつものことくこの箱

につきて見知りみしあらはおしへ給へと身の

うへを語り給ふ母此よしを聞給ひ是は

いかにと見やり給へは高座かうざへ程速くして

手箱てばこのもんは見へねとも僧正そうじょうの御年頃

いまた三十には満みてたまわずまたおしゑ

呉くれよと語かたらせたもふ御身のうへ何れも

我わがむねにてつしければ説法せっぽうの終るを

今やくと待まちかね居たまひけるにやうく

に説法せっぽうはて聴聞ていもんの人々下向げかうあれは今

はうれしくさらは高座かうざの御僧ごそうに逢ふ

てくわしく様子ようすを聞まほしくおもへとも

我かたちの見くるしければいかゝはせんと

思おもひわずらひ其所そのところを立て勝手かてへ行い見るに

下僧げそう下部しもともは乞食こじきなりとしかりのゝ

しりけるにそいやとよわらはゝ説法せっぽうを

御ごときなされし御僧ごそうの高座かうざの箱ばこの事

に付御目ごめにかゝりたしと申ける其由そのよし尊

弁僧都べんそうどへ申ければ其尼足そのあたまへと召めせられ

高座かうざのうへにてはなししたる事に付聞

(15オ)

(15ウ)

(16オ)

(16ウ)

(17オ)

せられたきとはいか成事なりごとにて候や尼あまこたへて

今日御説法ごせっぽうのうへに御身の事御はなし

有りしをうけ給はるに我身わがみの上うへ同おなし

き事の候へはその事を申上たき故也

我われ若わかかりしとき加茂かものの明神めいじんの神職かみ

何かし殿とのの内にありしに飯初いひはつならぬ縁

にや殿とのの御たねをやとし男子なんしをもふけ

しに本妻ほんさいの御ねたみつよく親子おやこのも

のに毒どくを吞のせころさんと有りしを聞きお

そろしさに夜よに入いていまた七夜しちよも立たぎ

りし水子みづこをいたきやかたをしのひいて

氏神うぢがみなれば加茂かもの瑞籬みづきに菊桐きくどうのもん付

たる手箱てばこに水子みづこを入れて錦にしんの袋ふくろに

入れて捨置すて置きたり夫おつとより我われは北山きたやま大原

の奥おくに入りて髪かみをおろし尼あまと成りて

諸国しよこくを巡めぐり修行しゆぎやうせしに此こゝろ江州かうしゅう石

山寺やまでらの観世音くわんぜいおんにさんけいしわか子

いまたこの世よにあらは再またたひあわせて

たひ給へと信心しんじんをこらし願ねがひ奉りしに

観世音くわんぜいおん御告ごつこに我子わがこに逢あふとおもはゝ

嵯峨さかへ参れとある一首ひとしゅの歌うたを下くだされ

しゆへに今日はへ参りし也然るに

御説法の上の御はなしを承はるに観

世音の御告の御利生の有かたき扱は

夫そとおもへともかゝる美々敷高座の元

へみるかけもなくやつれはて見苦しげなる

有りさまにて出てもやらず心は飛たつ

ことくに思ひしかとも御説法の終りたる時

にこそおもひかへして唯今御はなし中也

扱も我子捨たりし其時の事を思へは

あさましやいかに若かりしとて何と心得

捨たりけんさりなからもしやまわり逢ふ

時のしるしとなり且は心のなくさみ形

見とおもひ手箱のかけこをとり身をば

なさて持たるなり石山の観世音

の御告の歌に

玉手箱中にかけてこのなかりせば

ふたみ知られていかにあふへき

と仰られつるかけこは是なりとてとり

出しわか身のうへかくこそ候へ御ぼうの

御身の上こそ聞まほしけれと仰ける尊

弁僧都は彼手箱を取らせかけこを合せ

(18ウ) 御覧あるに元来まよひなきひとつものゝ

事なれはいかて逢さる事の有へきや

尊弁僧都さては母にてまし／＼けるか

と頓て親子の名のりを成しよろこひ

のなみたにくれ給ひしか尊弁僧都

御手を合せ誠に石山寺観世音の御利生

今にはしめぬ事なからかゝる奇特をま

のあたりに見る事の有りかたさよ又一つ

には土御門殿御なさげの程こそ有かた

けれ抑、糺の森よりひろひあげ養育な

さしめ出家をすゝめ恵心僧都の御弟子

となし下されし事皆これ土御門殿の

御恩なりわれ説法の高座にのほり

身のうへをかたり人々に聞せつれば

こそ今親子の対面もかなひたり御慈し

悲なれ我出家とならずんば高座の上

のはなし成るましたとひはなしをした

りとして母上はへ来り給はずんば対めん

かなふまし偏に土御門殿の慈悲観世

音の御利生成りとしていそぎ石山寺観世

音へ御参詣あつて法施を給ひ御下向には

土御門大納言殿へ御参り有て御対面

なされて今更あらたまりたる事ながら

呉々も御恩を有かたく謝し扱もふし

きに母うへに対面致せしよし委しく

申させ給ひはひとへに石山寺の観世

音と当御屋形の御慈悲ゆへなりと御

悦ひのなみたをおさへかねて御礼を申

させ給ひ扱御母には比多ひ山のふもとに

坂本の里に庵を立て夫に住せ申年

たけ給ひてけつかふ成る往生をとげ給ふ

有りかたき観世音の御利生なり

普陀洛伝記 卷之十三畢

(21オ) 西国順礼 普陀洛伝記 卷の拾四  
三十三所

目録

一 奈良道念仏石因縁の事

拾四番江州三井寺観世音

(22オ) 普陀洛伝記 卷の拾四

奈良海道念仏石因縁之事

御詠歌

後の世を願ふ心はかるくとも

仏のちかひおもきいし山

後の世をねかふ心はかるくともいふは小

因大果といひてねかふ心はかるきもの

仏おほし召はおもきものなりたとへは

すこし功德にても大き成くとも有仏の銘

〳の子をおもふかことくに思召親の子を

思ふ事はたとへかたく深し子はいか程に

親を思ふとも親の子をおもふ程にはあらず

親にはなれ氣のちかひたるものを聞す

子にはなれて狂氣せしものはむかしより

今に至るまで数多世その如く念仏

の行者に毎日三尊の弥陀如来御来迎

あつて守らせ給ふとなり一日に参詣の

者には一日に千度御通ひなされ守らせ

給ふと真如堂の如来の御夢想にもあり

とかく願ふものは子のごとくにて後

世ねかふ心は軽くとも仏のちかひ重き

石山なりとの御歌なりかるき願ひなり

(23オ)

(22ウ)



(23ウ)

ともおもひ御ちかひにて極楽往生をさすべしとの大慈大悲のありかたき御うたなり然らは銘／＼の願ふ所ろき成るへし重くねかふはいか程有るに白川の法蓮上人は昼夜念仏にたゆみなく頭らよりあせを流し願ふ程の事を

こそ重き石山と申なりしかれとも仏のちかひ重き事は只一ゑんの念仏をとのふるにも千巻の経文にもまさりしと成り

其頃法然上人を人々尊とみ奉つりければ奈良大仏殿の供ように法然

(24オ)

上人をたのみ奉つり南都七大寺の衆徒をはしめとして数万人の参けい

有るに法然上人は念仏を高／＼と十へん

となへ帰り給ふを七大寺の衆徒大にお

どろき法然上人にむかひいさ実の堂供

養をなされよと申ければ法然上人のため

ひけるは只今の念仏にて堂供養は

相済しなり一へんにてもよろしかる

べきなれとあまり参詣のおひたしく

候ゆへ十べんとなへたりとて其儘御帰り

(24ウ)

(25オ)

なされける僧衆をはしめ数万人の参詣是程の堂供養なれはいかさまむつかしき勤めあらんと思ひの外只念仏十へんとなへ給ふ斗りなれば是らの事

なればなま／＼敷下司法師にても勤むる事なり此ま／＼にては堂供養しなをすへし僧衆あまた追いかけるゝに奈良坂と

いふ所にて追付法然上人に向ひ申けるはいかにしてもあのま／＼にてはすみかたし女童

にてもとなふる念仏十へん斗にては大仏殿くやうとはいわれまじ今一度仕直し

たまへかしと申ければ法然上人仰せけるには

みな／＼念仏の重く尊とき事を知ら

す一へんの念仏此石よりもおもしろ

たりの石をさしてのたまふに然らば

念仏の一へんのおもさこのいしより

もおもぎかるき御ためし見たしと

あれは法然上人紙に六字の名号

をしたゝめそばに生たるまつの木

をてんひんとして一方にかのいわを

くゝりつけ一方には此六じの名号

(25ウ)

(26オ)

を書たるちいさき紙成るに岩はむく  
／＼と土をうごかし地はなるゝと見へ  
しがたちまちうへゝすつとあかり念  
仏のかたおもく下へさかりける法然  
上人これ見られよかた／＼ねんぶつ  
の功どくかくのことしと仰られける今  
に此石奈良へ下る右の方に念仏石  
とかきつけ雨おひをしつらい有中

(26ウ)

／＼拾人かゝりてももたるゝ岩にあら  
すかくのことくおもき念仏の御ちか  
ひなり  
爰にまた比叡ひ山の恵心僧都は能弁  
にして諸方御説法有りしにあるとき  
宇治にて説法なされける時高座の上  
に向て朝日山のかたより木の葉一枚  
飛きりて高座のうへに落とまる何心  
なく手にとり給ひ見たもふに木の葉の  
虫くひ文字なり則ちあらわれ有りよ  
みて御覧あるに歌の下の句なり極楽  
へゆく舟の便りにとあり恵心僧都是を  
御らんじ参詣の者に仰けるは及ばぬな

(27ウ)

から是に上の句を付しが斯も有へきや  
法の道知る人あらば渡すべし  
極楽へゆくふねの便に  
と御付なされよませられければさん詣  
のうちより老人老人出て大きに  
歎きければ恵心僧都仰けるはそなたは此  
説法を有りかたくおもひてなき給ふや  
と問せられければはいや／＼まつたく有り  
かたくて歎くにはなく只今の御歌の  
上の句に法の道知る人あらば渡すべし  
と遊はし候此歌の心にてはわたくし

(28オ)

とものやうに仏のみちをいかにもわき  
まへ知らぬもの極楽へとははゆく事な  
らぬよしうけたまわり候へば夫かかな  
しく歎き中なり此程の御説法にては  
何事も知らぬものも念仏さへ中なは極  
らくへ行るゝと仰られしに只今の御  
歌は夫と違ひ候事のかなしさよと歎  
きければ恵心僧都も甚だこまらせいやとよ  
何事を知らずともたゝ一心に念仏となふ  
れば極楽往生ちかひなし此うたの上の

(28ウ)

(29オ)

句は只弁にまかせてよみあやまりた  
るなりさほとに聞わけれし事なれば  
歌の心も有りぬべし上の句いかゝ有る  
べきやよみ直し給へと仰ければされは  
とよおなし事なからも

法の道知るもしらぬも渡すべし

極楽へ行舟のたよりに

(29ウ)

かくあれはわきまへなきものも極楽に  
往生すへし我は是四方極楽浄土  
の阿弥陀なり汝あまりに能弁成る儘  
折々斯のとき誤りあり此事をしめ  
さんかため老女と成つて来りたりと  
のたまひ朝日山へ上らせ給ふと見へし御  
姿は失せにける誠に仏ぼさつも随喜し  
給ふ程有りかたき恵心僧都御説はう  
なりとそ

拾四番江州三井寺観世音

今高観音といふ如意輪観世音也

三井寺の開山は比叡山慈光大師の御弟子  
知證大師なり観世音も此知證大師  
の御作にて開眼の時に五十六億七千万

(30オ)

才りうけん兔のあかつきまで濟度  
ましませやと智證大師の給へは三度  
うなつき給ひし御尊像なり其のち

此三井寺に教待和尚といふ御僧有り

しか此和尚はみろくほさつの化身な

りといふ御年百六十歳まで遷化有る

常に此和尚は湖の鯉鮒をみつから網

にて取給ひはね廻るをくしさしにてあふ

り食し給ふ諸人は是を見てあれほと

名僧知職といわれなからかゝるけふがる

事にてわれ然れとも雨を祈ればふり

来り晴を祈れば天気と成る飛鳥も

おち立浪もしつまる程の名僧成れば

心のひらきは有るへきなれと魚肉を

好みて食し給ふそならば買調へまいるべ

きに手つから網をもちてすくひ取て

手廻るものをくしさしにして焼食は

るゝは俗にても心有る者はせさる事

成るにふしんなりとそしる者多ければ

御弟子此事をありのまゝに教待和尚

へ申かねる事ながら御すき成さるゝ事

(30ウ)

(31オ)

(31ウ)

ならば買とゝのへてめし上られよ凡俗  
のものとも兎や角そしり申故聞すてかた  
くかくは申上るなりと有ければ和尚笑わ  
せ給ひ我鯉鮒を食ふ事何かと申もの  
あらは明朝つれ来るべしうたかひを  
はらし見すへき間明朝つれ来るべし  
と仰ける扱あくる朝に成ければ彼うた

かひ居けるものとも三十人斗つれ来たれば  
和尚は早朝より網をもつて鯉鮒とり

(32オ)

きたりみなくしはらく待れよとて  
人々をならへ置其所にてはねまわり  
たる鯉鮒をくしにさし焼あぶり袈裟  
衣をもかけながら魚の頭より尾先迄

壺本ものこらすかむり喰ひ給ふを見て  
いつれも興をさましあぎれ居けるを教待  
和尚は残らすくひ終りてみなくこなたへ  
来るへしとて海きわに行て手を合せ

て普門品をとなへくわつとはき給へは  
水の面にちいさき蓮華はらくと生し  
ける是此ごとく人間は経文念仏をとな  
へ仏法を知り成仏すれとも虫けら或は

(33オ)

此海の鯉鮒などは仏法を知らざれば  
成仏する事おもひも寄らすこれを  
ふびんに思ひての事なりしゐて味わひ  
にかゝわり食するにあらす我むねには  
一代の諸経をおさめ有るなれば経藏に  
いり仏果の縁となし助け得せんか  
ため也 則此喰たる魚の骨をことくく  
蓮花成し見せ給ふその蓮花水の泡の  
ことくきへ失けるを人々見るよりいよく敬

(33ウ)

ひ尊みける此教待和尚常に三井寺より  
清水へ日参して行樂居士と御懇頃成る  
和尚三井寺より通ひ給ふ道をくちめぢ  
といふなり是は教待和尚の道すからふみ  
たもふ下はくしうめつほうまで浮み助  
かると有をくすめすしと言し也有時教待  
和尚今の観音山へ上りて湖水浪を  
清そう観を観じいたまふ後の山の麓  
つたひより年のころ八十斗と覚しき老  
翁芝を荷ひて爰に來りて枝おしなから  
教待和尚にむかひ老僧には何を詠め居  
給ふそと有に教待是を見給ふに賤

(34才)

しけ成る翁也ければ是汝じのしる事  
にあらすとの給へは翁からくと打笑ひ  
汝じうかくと東方を詠め居てわれ  
足下に仏の台の有る事を知らざるが  
おかしさに尋るなりと有ければ招待和  
尚是たゞ人にあらすと老翁に向ひて  
我足下に霊場あるとの給ふは御身は

(34ウ)

いか成る御かたにてましますや御名を名乗  
下されかしと有りければ我は此霊地を知り  
たる事年久し奥の院の如意輪観  
音は開山智證大師の作にて誠に利  
生有縁のありかたき本尊なり然れ  
とも此山は五十六億七千万歳りうげさん  
会のあかつきまでけがす事ならざるゆへ  
に女人けつかひにて奥の院へは女人  
参詣する事ならず有縁の衆生済度も  
成らざる故観世音の御心に叶はず大慈  
大悲の利生もうつもれ此霊場も埋み  
ある事の歎かわしければ此所に堂を建立  
し観世音を是へ直し女人をも参詣  
し済度あらは有縁の霊場成るへし

(35才)

(35ウ)

かくいふ我に汝じ知らずや此山の鎮  
守新羅明神なり智證大師と約束  
せしは我なり必ず此事たかふべからず  
今は本社に帰るへしとの給へは老翁と見へ  
しは御幣と成り三井寺の北の院へ飛去  
給ふ

(36才)

智證大師年曆にいわく天安式ねん  
六月八日商人李延か舟に乗て唐土  
より帰院の時同く十八日西刻白髪  
たる老翁海上に現じて我は是新羅  
国の神也出生うの教法を守つて慈  
尊の出世に到らんといふ終わつて見  
得ず師の洛のとき其神また出  
現す勅使を鴻臚館にとむのち  
三井寺の北野にうつす  
招待和尚はあら有かたやと夫より御告  
にまかせて今の所に堂を建りうし  
観世音を移し奉り有縁の衆生を済  
度まします事そ有かたき開眼のとき  
三度うなつき給ふ正眞の観世音奥の  
院にましまさば女人のおかむ事有まじ

(36ウ)

き新羅明神と教待和尚の御陰にて  
女人までも参詣し扱こそ西国十四番  
の霊場とはなりぬ

真如堂の御本尊比叡山にて智覚

大師の御ねんじ仏なり智覚大師

五十六億七千万歳りうげさん急の

あかつき弥勒の御説法までは女人

禁制の霊場なりなく此所に

(37オ)

まし〜濟度なされ候やと御尋ねなさ  
れしに如来うなつき給ひましまさず

ゆへ然らは下山なされむさき所にても

衆生のため女人をも参詣し濟度まし〜

候やと申ければその時如来三度うなつき

給ふかゆへ比ゑい山よりおろし奉りぬ別して

女人濟度の本尊也といふ信濃国の善光

寺堂供養の節門内へは俗一人も入れ

す戒行をたもつ出家斗四十八人つめて

四十八夜勤しに此うち出家の夢に如来を

拜み奉つるに御物おもひなる御顔ばせなれば

四十八人の僧どもの堂供養御心に叶は

せられす候やと伺へは四十八人の僧共我

(38ウ)

名をとのふうれしけれども此者ともは我身  
にそはずとも往生すへきなりふひん成る  
はう急んの衆生を門内へ入れ濟度せん  
事をねかふとの給ひける夫より門を開き  
て貴賤みな〜参詣いたし拜み奉る  
事ありかたき次第なり

(38オ)

御詠歌

いつ入るや波間の月は三井寺

の鐘のひゞきに明る水うみ

いつ入るやといふは人間生死の無常をい

ひたるなりいつとは出るといふ事死して

行といふ事入るとは入るにて生るゝ事

なり百人一首蟬丸の歌に是や此行

も帰へるも別れては知るも知らぬも逢坂

の関とある是も行は死してゆくかへるは

生るゝなり死するものあれば生るゝもの有り

知るも入らぬもおなしはちすにて逢ふと

いふあふ坂の関と説しなり人間不増

不減にてまさすへらす死ぬる程づゝ

生るゝもの也増すばかりにても食物たらす

へりてもならぬものなり三山六海一分田と

(39オ)

て三分は山六分は海にて田地は世界一分  
なり日本六十余州をすくにすれば東西

千三百里余り南北は五百余里成るとあるされ

はいつ入るや浪間の月はいかゝそといふに人間

は生死無常にて水海に浮む波間の月のこ

とく波立は月影長し又みじかくも成り或

は切れたりするなり月あるやと波に手を入

てさぐれとも取れずなきかとおもへばある

人間もそのことく有るかと思へばあらず死すれば

焼て灰と成る影も形もなし然かふして

常夜のやみに迷ひている人間は月のみちか

けにおなし朔日より十五日迄段々満月と成る

人間にていはゝ三十九迄なり三十九は男女

ともにさかり四十より年寄の内にて下り坂と成

る月も十六日よりはかゝる小野の小町のごと

く深草少将の九十九夜まで通ひた

まひし姿にても関寺小野の年頃に成り

ては見る影もなく婦人は巾の広き帯にて

粧ひも白髪と成り杖にすがりては粧ひ處

にてはなくやう／＼にじりあるくのみにして

誰見やるものもなし小野か歌に

(39ウ)

(40オ)

(40ウ)

おもかけの替らて年の積れかし

たとへ命にかきりありとも

かくのことくよみしにや小野の果のあさ

ましや月ひかしより出給ふ発生門にして

生るゝ也西に入給ふは浄土門にて毎日

日月かくのことく死するそよとおし

へ給ふ波間の月おなし三井寺の祇お

ん精舎のかねのこへ諸行無常とひ

びき一日はほんのふのねむりの夢をさ

まし極楽浄土にいたる処は夜の明

たることしといふ心にてみづかみに

三井寺のかねの事をよみ鐘の

響きにあくる水うみとの御詠歌

なり

(41オ)

(41ウ)

普陀洛伝記 卷の拾四畢

西国順礼 三十三所 普陀洛伝記 卷ノ八

(1オ) 西国順礼 普陀洛伝記 卷の拾五 三十三所

目録

一 祇園精舎の鐘の事

依藤太秀郷か事

一 拾五番山城国今熊野觀世音

大仏三十三間堂の事

滝口横ふへか事

普陀洛伝記 卷の拾五

(2オ)

祇園精舎のかねの事

依藤太秀郷の社は勢田の大橋のかた

わらにあり秀郷は藤原の房前公六代

の孫村雄公の子也和州田原といふ所の

名を取り後依の字をかへて氏となす朱

雀院の朝に平の将門をほろほし鎮

守府將軍の官に任ず是よりさき延喜

八年の頃江州勢田の橋に恐ろしき者出て

(2ウ)

(3オ)

往来の人昼の七つ頃よりしてとまる藤太  
此よしを聞て往来の妨げをなすもの其儘  
差置へきいわれなしとて弓矢たづさへ勢田  
の楼に打むかふ抑々勢田の橋といふは  
江州比叵の海のなかれ渡り二町の  
中に中嶋あつて橋を二たつに切て  
掛渡したり秀郷は勢田にいたり橋の此  
方より向ふをきつと見やりけるに物こそ  
見ゆれあやしやと小橋をわたりよくく  
みれば尾さは海にあつて胴は大橋の上  
にわだかまる頭はらんかんの上にもたせ  
山のことく成る大蛇なり偕は是にてある  
へしいかさま諸人の恐るゝこそ尤も也  
去りなから何程の事有るへき行て跡へ  
戻るにもあらず大蛇の背中をしたゝかに  
踏ちらし過ゆけは少しへだゝり色青さ  
めたる男一人跡より来り声をかくるによ  
り秀郷振りかへりて何事そと問ふに彼  
男近付より天晴頼もしき御人也只今

(3ウ)

大蛇と見るへしもすなわち我なり此頃我  
形ちを顕し大蛇と成りて往来の人を多



## (4オ)

くためし見しにそこ元程なる大丈夫の人  
を見す夫につき我そこ元へ頼申度事有  
り我は此橋の下に住む処の龍神也我と  
威をあらそふ敵有り其敵といふは是よ  
りはるか向ふなる三上山を七卷半まとひ  
しほどの大百足なり我龍宮城を切り  
取らんと時々龍宮におし寄せ我けんぞく  
の命をうしなふ事数度也やもすれば  
我かた負色をあらわし是に苦しめらるゝ  
事多年なればあわれよきかとうどを

## (4ウ)

もふけ此敵を退治せんと思ひ立かたのこ  
とくはからいひしにそこまじたる武勇  
なし我方人と成て此敵を打ほろ  
ほして給われとありければ秀郷いと  
安き事なりと請合ければさらは我住方へ  
案内申さんとて勢田の橋詰より下りて  
案内するに龍宮城へ至りければ龍神  
さま／＼響応し扨夜に入ればすわや敵  
の来たりと大にさわく秀郷いかゝの  
ものやと見れば数万のたいまつとも  
して押よする体なり秀郷は心中

## (5オ)

八幡宮をねんし奉り弓矢をもつ  
てうちつかひ引しほりねらひすまし  
篤と見れば数万の松明と見へし百足の  
足にて其まん中なる頭と心さし切て  
放すにあやまたすむかての頭には当り  
けれども矢竹もくだけ飛ちつて立す  
幾年ふるとも知れざる百足の事なれば  
頭は鉄石のことくかたければ矢の立  
さるもことわりなり秀郷は一の矢を射  
そんしたるを無念におもひ百足には人  
間のつばきの毒に成る事を思ひ出し二  
の矢を取て根のかた口にふくみ引し  
ぼりねらひすまして切て放せばあやまたず  
百足の頭を射抜きければ何かわもつてた  
まるべき数万の松明と見得しも悉くきへ  
はて、終に百足は亡ひにけり龍神は大きに  
悦ひ百味をもつてあつくもてなし現当  
二世を謝せずんは有るへからすとて米を入  
りたりし俵一俵巻絹一疋又天竺祇園精  
舎のつりかね一足を秀郷へおくる此巻  
絹はつかふにつきる事なし取るに随ひ

## (5ウ)

(6オ)

## (6ウ)

てのびるきぬなり米のたわらもそのご

とくへる事なく是現当の謝礼なり

釣鐘は釈迦如来の天竺国祇園精舎に

て説法有りし時羅漢達へ只今説法の

はしまると知らせにつきたりし鐘也此かね

の音を聞きものは百八ほんのふのねむり

をさまし極楽往生を得るかねなれば

是を後世のためにおくり候とてけん

ぞく共にとりもたせ送らせける秀郷は

俵と絹とを所持してつりかねは三井寺に

送りける此鐘の音諸行無常と響き

けり実にも有りかたき釣かね也此鐘

の音を御詠歌によみたり高倉の宮頼

政を御たのみなされ比叡山三井寺宮

かたにくわゝりて平家の一門を亡ぼ

さんと御くわたて有りしに比叡山の衆

徒裏かへつて平家に組しけるゆへ奈良

法師を御頼み有へしとて御幸有りしに

宮六度まで御落馬ありし故に宇治に

暫らく御座を居られしに流矢にて宮隠

れさせ給ふによつて頼政も自害して失

(7ウ)

(7オ)

(8オ)

ぬ三井寺法師は比叡い山の衆徒等平家

に組しゆへ高倉の宮斯ならせ給へは

此意趣をはらさん為に比叡い山へせめ登ら

んといふはやくも聞つけ憎き三井寺の

法師ともかな此方より政おとせよと

三千坊おこりたてば三井寺は小勢

成れはうちまければ三千坊の衆徒

三井寺を焼はらひしに此釣鐘残り有る

を見て此鐘は天竺祇園精舎のかね

なれば比叡い山へ取かへり大講堂の前

につりてつきけるに只ことごとく鳴りて

鐘の音いです衆徒腹をたてゝ鳴ぬとて

此まゝに置へきやとて大木にて鐘もく

をこしらへ五六人にてつきけるに音はいで

すして只なる斗りにてそのうへ其うな

る音三井寺へゆかふくと人の耳に聞へ

ければ衆徒いよゝはらを立てさらば

三井寺へ戻せよとて其儘むとて寺坂

といふ処より百間ばかりつき落せは

鐘はくたゝに破れにけり是を三井寺

へ送りけるを台に乗せ置たりに小蛇来

(8ウ)

(9オ)

(9ウ)

りかねの廻りをくるく廻り破れたる  
処をねふりければ一夜の間にことごとく  
破日癒合たりかけ揃わずして穴有  
しにおなじく小蛇来りて夜毎にねむ  
りしかはこれもまたいへあふたり今  
は此やふれきす又ひきつりし跡つき  
てあり

十五番山城の国今熊野觀世音

十一面觀世音立像御長式尺

弘法大師の御作なり

後白川院の法皇の御持病に御頭痛有

て殊に常ていの御すつうにはあらず御

后かたかわるくにおつむりをなてさす

り奉つり諸寺諸社に御祈禱仰せ付ら

れ典薬の頭さまく御療治成し奉るといへ

ともさらに其しるしもなく是によりて法皇

思召けるには今天子の位と生れ尊とき

事たぐひなしといへとも此頭痛は前生の業病

と思ふなれば熊野権現へ御ねかひ有へしと

おほし召紀州熊野の三所権現へ御参詣

あつて吾今王位に生れたれとも癒難き

(10ウ)

頭痛あり是ひとへに前生の業にてや有  
らんと存するなり三世両達の釈迦如来さへ

御持ひやうありし事なれば業病といへ

とも三所権現の御ちからにて平癒那

さしめたひ給へと深くねんし給ひけれ

は権現の御つけに今主上の御頭痛

は業ひやうと申にてもあらねとも前世

のすこしさわり有るによつてなり君

前の世にては蓮花坊といへる修行者

にて諸国をめぐり給ひし功力によつ

て今王位と生連給ふ蓮花坊にて

有し時紀州岩田川にて死す所のもの

あわれみ土をおゝひ置しに年月を経

雨露におかされ骸だをあらわせしに此

髑髏より柳生出て今大木と成つて其

根かの髑髏をつらぬく風ふけば木動く

根ひゞき髑髏をほうこかせり今の肉身

にこたへて御頭痛と成る此柳の木を切

て十一面觀音をささみ根をほらせ

給ふそならはたちまち御平癒有るへし

との御告なり夫より紀州岩田川の

(11オ)

(10オ)

(11ウ)

(12オ)

やなきを掘り根をさがせばされこべ  
あり則ち法皇へ御覽にそなへ奉つれ  
ばふしきに前生の我頭に逢ふ事  
よ今王位と成り居るも此頭の思なり  
然れば頭痛のするはずなり思ある我  
前世の頭へなればとて錦の袋に包  
院の御所に置給ふさて大木の柳成

(12ウ)

れは大小の観世音三千三百三十株御  
建立あつて此観世音を並へ給ふ為に  
三十三間堂をこんりうあり此観世音を  
並へ彼しやり頭へを観世音の御腹内に  
おさめたまへはたちまち御頭痛は直ら  
せ給ひける此ゆへ大仏三十三間堂を頭  
痛山平癒寺蓮花王院と名付たもふ  
夫より後白川の法皇は熊野へ御礼  
として三十三度御参詣有りしなり後  
鳥羽院は廿五度御参詣有りしとそ其後  
白川の法皇には御年寄らせたまふかゆ  
へ熊野の権げんへ御ねかひあつて都  
のうち霊地あらば熊野の三所権げ  
んをいわいこめ奉り熊野へまいり候心

(13オ)

(13ウ)

にて参詣申たしいつくか霊地にてや  
御知らせくたさるへしとねかひ給ひければ  
都の東南に弘法大師の作にて十一面  
観音あり此所こそ霊地なり此観世音へ  
まいり給は、熊野へ御参詣も同じ事也  
三所権現の社も立給わ、影向して  
守り候へしと御告にて三所権現の  
御うたに

(14オ)

道遠く年もよふ、老ぬれは  
おもひをこせよ我もわすれし  
との御歌也夫より都の東南を御吟味  
有りしにいまの今熊野観世音は弘  
法大師の御作にてあれはこれぞ権  
現の御告霊地にて渡らせ給ふ御尊像  
渡らせ給ふ御尊像なりと御悦ひ浅からすし  
て御建りうあつて熊野三所権現をいわひ  
こめ給ひ紀州熊野と同然なればとて地形  
ふかさ六尺堀りのけさせ紀州熊野より  
土を取よせ爰にしかせ給へは上六尺は熊の  
の地なりそれよりむかしよりといふ生々  
世々の昔の事なりたつとも知らぬとは

(14ウ)

観世音大悲のこれほとまてありかたき  
御ちかひ有る事を知らずして居たる  
ことよ又知りたりとも大六天魔王にさ  
またけられまよひ居て参詣もせざ

りしがむかしより大悲のたつとき  
事は有れども今迄それともこゝろつかす  
今大悲の御めくみのふかき事

を知りてみれば有りかたき仏のちかひ  
のからたなるといふ御詠歌なり  
信心あれとも魔のさまたけにて信心の

(15オ)

道を知りそけ成仏せず魔にさまたけ  
られんとする時いそぎ心を取直し踏  
とまるべし西行も妻子はさまたけ

成ると見て家を出られたり妻子は  
色々尋ねけれども終にあわすとかや三条  
の斎藤左衛門の尉諸高の子に斎藤

滝口内裏武士たりしか東宮の帯  
刀に補せられ又院の御所へも参りぬ爰

(15ウ)

に建礼門院と申奉るは平の清盛公  
の姫君にて高倉の院の御后なり此  
姫君の御内に横笛と申て十六才に成る女

(16オ)

有り左衛門の子の滝口しのひ横笛を  
かたらひ居ける親左衛門聞付て是をせい  
しければ滝口は世をあぢきなくおもひ  
嵯峨にゆきて出家をとけこもり居

ける横ぶへ是を知りて尋ねゆきけるに  
滝口入道あわす心には逢ひたく思ひ

しかとも親と仏にちかひし事とおもひ  
直してあわて過ぬ横ぶへ是をうらみ桂  
川に身をしつめ死したりける滝口是を

あわれみ其なきからをとり上て灰と  
なし骨をとりて七里けつかいの高野

山にのぼり骨をおさめこれらも出  
離のさまたけとおもひければ

(16ウ)

何事も知らず登りし高野山

恋も無常もたねと成りけり

加藤左衛門重氏入道してかるかや道心

と号し法然上人の御弟子と成り

其妻子都へたつね登りけるゆへ高野

山へゆき給へは石堂丸又へ高野山に

分のほりたつね逢ふといへとも名のりた

まはずこれらも妻子にまよひ引も

(17オ)

とされ成仏のさまたけなればかくの  
ことく心つよく其場にてしたまひし  
ものなりとそ

(17ウ) 普陀洛伝記 卷の拾五畢

(18オ) 西国順礼 普陀洛伝記 卷の拾六  
三十三所

目録

一 十六番山城国清水寺観世音

附り 田村將軍伽藍建立の事

并に 鈴鹿山鬼丸の事

(19オ) 普陀洛伝記 卷の拾六

十六番山城国清水寺観世音

千手観音円珍の作協立

勝敵毘沙門將軍地藏

(19ウ) 円珍は大和国小嶋寺の方に居給ひて観  
世音を信仰し給ふ然るに観音の御夢想  
に正真の観世音を拜まんと思は、山城  
の国木津川のかたへ行べしとの御告に

(20オ)

より木津川に來り給ふ所に川水の流  
れに金色の光明ながる、筋有此川  
の水上こそ観世音の淨土有るべしと  
おもひ光明のあるかたをたつね登り給ふ  
是今の清水音羽の滝也夫より山へ  
うちのほり給ひしに柴の庵有見れば  
白髪の翁あり円珍を見て珍らしや  
大和の国小しま寺の円珍よく來たれり  
と今まてに見も知らぬ翁の我住む所  
の寺迄もしろし召は是只人にあらずい  
かなる翁にて渡らせ給ふそ御名を承り  
たしとあれは我此所に住む事久し汝  
か來たるをまつこと多年成りしに今  
尋ね來りし故に我觀念の眼を開きよく  
知るなり我は行觀居士也此所は靈場なり  
この所にある柳の木は七仏出世尊仏の昔し  
より有る所の揚柳也此木をもつて千手  
観音を刻み此所に堂建立あらは後、の  
參詣群集の靈場と成へし此庵は今より  
汝にゆつる也我は東國へ濟度に行そと申ける  
円ちんしはしと留め奉るといへともいやとよ円

(20ウ)

(21オ)

珍ちん只ただ独どく生しょう死じ独どく去こ独どく来らいみなおなしと  
振り切ふりきて音おと羽は山さんのかたへゆきたもふ観くわん世せ音おん  
は我われ婦ふり来きりてきさむべしもしおそくは  
汝なんし刻まみ奉ほうれとある御おん声こゑを知るへに円えん珍ちん  
は何なに国こくまでもと御おん跡あとをしたひゆかんと  
よぢ登のぼり追おひ懸か給たまふ所に今の牛うし尾おし山さんに  
て行ぎやう叡えい居こ士し見み帰かへりたまひ汝なんし是こゝより来きる

(21ウ)

事ことなかれかならず揚やう柳りゆうにて千せん手て観くわん  
世せ音おんをきさみ奉ほうり広かた太た無む扇せんの功こう徳とく  
有あり霊れい場じやうとなすへし堂どう建けんりうはほど  
なく出い来くる事こと有ありかならず待まちへしと  
仰おほければふしきや白はく雲うん来きり雲うん霧きのこ  
とく行ぎやう叡えい居こ士しを引ひまじめ東あかしをさして  
飛ときり給たまふ其その御おん跡あとに履かかたしあり是  
今いまのうしを寺てらの宝ほう物ぶつなり円えん珍ちんは庵いん  
りにかへりて千せん手て陀た羅ら尼にと観くわん世せ音おん  
名な号ごうをとなへて観くわん音おんを作りつくりたまふ事  
三さん年ねん三さん月げつにしてたんこんみめうの観くわん世せ  
音おん出い来くらせ給たまふあら有ありかたや堂どう建けん立たちも施せ  
主しゆ有ありやと待まちち給たまふ處ところに其その頃ころ都みやこに坂さか上のぼり田た村むら  
丸まるといふ御おん人ひと有ありて帝みかどを守護しゆごしおわします

(22オ)

(22ウ)

是これを田た村むら将しやう軍ぐんとも中ななり多おほそが嶋しまより都みやこ  
へ攻せきたる田た村むら将しやう軍ぐん帝みかどより征せい伐はつに遣つかは  
されしか田た村むら丸まる将しやう軍ぐんの奥おく方かた懐くわい胎たい有ありしに  
十と月げつもすき十五じふごヶ月げつになれとも出しゅつ生しょうなければ  
田た村むら丸まるあんしさせ給たまひ唐たう土どより来きりし  
医い師しに見みせ給たまへは是こゝはくわいふくといふ病やまひ  
成なりり是こゝには女め鹿しかの生いきもを取とれぬ内に  
いれて吞のせ仕し給たまへは平へい産さん有ありし其その外ほかの  
事ことにては中なく出しゅつ産さん有ありしとある故ゆゑにみづ  
から鹿しかを追おふて音おと羽は山さんをかり立たられし  
に女め鹿しか一ひき疋びきもなくあすは西にし山さんをかりたて  
愛あい宕だうより善ぜん筆ひつ杯はいを狩かり立た給たまはむむ  
なしからん去さりながら今いま暫しばしかりたて見みよ  
とて打う立たぬその頃ころは岩いわがんせき草くさ木きし  
げりし山さん成なりれば鹿しかおふ狐こ師しは山さんを見みす  
とて段だんくわけ行ぎやう所ところに円えん珍ちんの庵いんに  
来きり給たまふ円えん珍ちんは所ところからなれば松しょうの音おんしん  
さんゆうこく三さん衣い一いつ躰たいのけかいにて行おこなひす  
まし給たまふ処ところへ狩か装そう束そくの異い形けいの体たいにて  
田た村むら丸まるいで来きりたまへはこれはいか成なり  
方かたにて此こゝ所ところへ来きりたまふぞとおゝせ

(23オ)

(23ウ)

ければ是は田村丸と申もの成るが今日  
此山に狩する所得物一つもなく猶かり立  
んとておもはず爰に来るなり我狩好み  
無益の殺生をたのしむにはあらず我妻  
懷胎して十五ヶ月におよふといへとも今  
に出さんなし唐こしより来たれる医

(24オ)

師に見ずれば女しかのいききもと  
り調合して用ひなは出産有るへし  
と中に付狩に出たるなりとあるに円珍  
これを聞てさてく承り及びし將  
軍の仰とも覚へぬ御言葉かな唐土

(24ウ)

の医師いか成る薬をか用ひるかは知らね  
とも鹿の命を取事尤小の虫を殺し大の  
虫を助くる妙劑とはいふなから夫にて御出  
生の有る迎も生たる鹿の胸をさき手を  
さし込生肝をとられ死する鹿の苦し  
いか斗りならんやその鹿のうらみ天に登  
り御出生の御子の為にもよろしからじと  
仰せあるに成程尤の事なりさりながらいか  
かともせんかたなければ斯のことく次第成  
りと仰ける円珍重ねて仏ほうの御恵

(25オ)

みにては鹿も殺さず御出生あるやうの  
事もあるに田むらまるけにもそのこと  
をもはさるにはあらねども頼まいら  
すべき方なかりしなり貴僧の法力を  
もつて此事かなへたひたまはく此所にて  
七堂伽藍を建立すべしと仰けるに扱は  
此人こそ行寂居士の仰置れし御堂  
建立の施主成らんと心に思ひ夫こそ安き  
御事なり観世音大慈大悲の御ちかひ  
長生不老の御祈禱をいたし法力にて

(25ウ)

七日の内に御出生うたかひなしかならず建  
立有て大悲の尊像安置申さるへしと  
の給ふに田村將軍いかてか事をたかふべき  
と互に約をなして別れ給ふそれより  
円珍は木尊揚柳観世音の御前におひて  
田むら將軍の妻女たとひ此度に定りたる  
命数たりとも観世音大悲の仏力をもつて  
めいすうをばのはしたまひ七日は程  
遠したまいま円珍かねかひ一世一代大  
切のねかひ此事なり此事叶はさるに  
おめては三日は程遠し只今円珍か命

(26オ)



(26ウ)

をめしとり給へ生産のねかひ叶ひなは  
 田村丸七堂伽藍を建立すべし御堂  
 造立は円珍かねての願望なれば何分  
 此ねかひをはやくかなへ末代有縁の利  
 生衆生済度の霊場となさせたまふ  
 やうあをぎねかふものなりと昼夜の  
 わかちなく三日三夜あせをなかし  
 のられける時にふしきや田むら將軍の妻  
 女三日目と申にいさゝかさわりもなく  
 安くと平産有て殊さらうつくしき  
 玉のごとくなる男子出生有ければ田むら  
 御夫婦の悦ひなゝめならず早々音羽山  
 円珍の御元へ男子出生の注進有べし  
 われも續て参詣し大悲の御前にて  
 御礼申べしと早馬を先立音羽山に至る  
 円珍に御対面あり扱く有かたき観音大  
 悲の御誓ひと申かつは貴僧の法力をも  
 つて出産有し事のかたじけなさよ御礼  
 の七堂伽藍早く建立すへしとて観音を拝  
 し円珍を拝み悦び給ふ扱も御堂はいづくに  
 建べしや円珍御坊御さし図有るへしとあ

(27ウ)

れは岩がんぜぎけわしき山中なればわづ  
 かなる堂建べき所もなしいかせん外へ  
 所をかへては観世音の御心に叶はず此上  
 観世音の御差図をねかひ奉つらんと円珍  
 御房田村丸七二人観世音の御まへに通夜を  
 なし伽藍の地形御さしづ下さるへしと願ひ  
 給ふに其夜深更におよひ音羽山一面  
 に真黒に墨を流したることく成る雲覆  
 ひ稲びかりおひたゝしかみなりの音  
 洛中の貴賤男女此音におとろき音羽山  
 のけしき只事にあらずといか成る事の  
 出来るならんとさわきあへる所に明前に至  
 りてやうく物音しつまりけり倍も音羽  
 (善)

(28オ)

山にはふしきや伽らんの地面を諸天菩神  
 堅牢地神觀世音二十八ふしゆけんぞくの  
 なさしめ給ふと見へて岩石を打くだき  
 平地となし給ふと見へて本堂の地形此  
 時に開けしなり本堂は千手觀音奥  
 の院は円珍の庵の跡にて斯有難き靈  
 地觀音淨土普陀洛せんと拝み奉るへき

(28ウ)

本尊なり清水の脇立勝敵毘沙門大

あたご山將軍地蔵ほさつを安置する

事多ぞの千嶋高丸といふもの軍勢

を催して日本をしたがへんとせし頃也

此千嶋といふは蝦夷松前の外八百八嶋

の大将と成居ける是まで多ぞの千嶋より

たひく日本を切りしたかへんとせしかども神

国成れば叶はずして有しがまた此度高丸

打て登るに帝聞し召田村將軍に仰せ

て高丸を征しもふこの賊を一人も日本へ

いるべからすと勅命有りければ田村丸は武

士多き其中に多らわれ節刀をたまはりけれ

は面目をほとこし高丸強將にして其外

随ふものともおとらぬ烈しきもの共なれ共

勅命を真頭にさしかさし吾神国の御

ちからにて攻戦ふべしと思へともたやす

き敵にあらされは仏の庇護を頼み奉

らんと夫より音羽山門珍僧正の御もとへ

参り此たひ勅命をかふむり多ぞの高丸

征伐のため東国に発向いたすの所かの

賊徒等みなく剛勢のものともなれば

(29オ)

(29ウ)

(30オ)

(30ウ)

(31オ)

ひとかたならぬ相手なりしかれば観音  
大悲の御恵みをかふむらずんばかなふ

ましひとへに貴僧の丹誠を頼奉る処

なりと有りければ円珍僧正いかにも心安

かれ少しも億したまふべからず大慈大悲

の観世音を念し奉るものならば剛敵の

奴原攻ほるほさん事いとやすしと有けれ

は田むらまる大に悦び頓て打立東国

さして進発ある円珍は此たひ田むら

丸勅命をかふむり高丸征伐の為東国

へ発向有によつて大悲の御誓ひ仏法

庇護の勝敵毘沙門天同しくあたごの

権現將軍地蔵ほさつ本尊大悲の千

手観世音ほさつ庇護のちからを添さ

せ給ひ怨敵退散成さしめ給へと黒あせ流

し火水に成て祈られる高丸は奥州

南部仙台白川打越てはや駿河の国

富士のすそ野清見の関まで寄来る

百万騎の賊徒の勢ひ西にむかひ田村丸

の軍勢三十万騎既に清見か関にて向

勢出合互に陣を堅め翌日に至れば

(31ウ)

高丸か陣より熊のことき形にて髪ひ  
 げ長き者おどり出て是は高丸か軍勢  
 の内に名を得たる者也都より官軍の  
 大将は何といふ人成るぞ名乗申べしと  
 呼はるにぞ田村丸將軍是を見て夫討  
 取よと下知すれば敵見方入乱れ攻戦ふに  
 高丸は四角八面に切て廻る其勢ひ魔け  
 いしゆう王のことくあるひは大六天の  
 魔王夜叉神のあれたることく官軍少

(32オ)

しまげ色に成て戦ひけるに田村丸將軍  
 都清水の方に向ひ觀世音をふしおかみ  
 南無觀世音菩薩田村か軍勢を庇  
 護まし／＼勝利を得せしめ給へやと心中  
 にねんし給へはふしきや西の方より紫の  
 雲矢を射ることく米りて田村將軍の旗  
 のうへにとゞまり其うちに觀世音のま  
 し／＼て光明を照らし給へはもふこのひ  
 す此光りにて毒氣にあたりたるが／＼  
 とく今迄勢ひかゝり戦たりしに忽  
 ちに陣勢しとろに成て負色に見へ  
 にける官軍は氣に乘し戦けるその

(33オ)

うちに觀世音は大悲の弓に知恵の矢  
 をはけもふこを目かけ射かけ給ふまた  
 毘沙門天地蔵ぼさつは爰かしこかけ  
 廻り敵の射かくる矢を打扱ひ給ふによ  
 り味方には一人も手負ものなく田村丸  
 はあますなもらすなと是を幸ひ切立迫  
 詰給ふによりさしもの荒夷も神仏の威  
 力に射しらまされて秋の木の葉の如く  
 也田村丸は仏神庇護の戦ひに勝利を得  
 こと／＼く夷をたいらげかいぢん有る此戦ひ  
 の有さまくわしく帝へ奏聞有ければ音

(33ウ)

羽山円珍を召れかゝるぎどく有事をとわ  
 せたまふに是ひとへに田村將軍の信  
 心ふかく觀世音をねんし給ふより本尊  
 觀世音ほさつ大悲の御威力をくわへ  
 給ひ脇士勝敵の毘沙門天將軍地蔵  
 ほさつおふこなし給ふそれゆへ勝敵  
 毘沙門天將軍地ぞうほさつを脇  
 士に安置し日本守護の靈地と成  
 りしはありかたき利生なり  
 田村のうたひに鈴鹿山の鬼神退治に

(34オ)

たむら將軍のむかひしといふ事は  
なき事なり高丸を退治有し時に旗の  
うへに千手觀世音かたちをあらはし  
給ひし事を作りたるもの也今勢州鈴  
鹿山に鬼の住たるといふ岩窟有れとも  
実記なき事なり鈴鹿山に鬼の住と

(34ウ)

いゝしは田村丸より六百年ほど後に  
伊勢の國に長野伊勢守といゝし人  
の奥かたに狐付てさまゝともてあ  
つかいけれともとかく狐のかずその頃  
都紫野に一休と申て尊とき出家お  
はしけるを聞つたへ頼み申けるに氣の  
かるき御出家にてその儘使者と同道  
にて伊勢に下り奥方のやうす御覽  
じ是は今まで加持のしやうあしき  
ゆへなりいてゝわれら祈禱を申て  
きつねをのけやらんと奥かたのたけ  
なる髪を手にもとひおのれちくせう  
奴かなちくせうの身として仏牀を受し  
人間をくるしむる事はなはたもつて  
いわれなき事なり只今ぎつと立去

(35ウ)

るへしのかぬにおひてはけんろう地神  
ことに冥官に申付て永くおのれをち  
く生道をまぬかれざるやうにすべし  
しかれともくましきやいかにゝとのた

(36オ)

まひけるこの一休和尚と申は後小松院  
の皇子にて貴き名僧にておはしまし  
ければいか成狐もおそれをなし只今  
立去るべしとて一間の内をかけ廻り  
て打たおれければきつねは其まゝ退  
にけり斯て奥方正氣と成りければ  
一休和尚は外に用事もなければ帰る  
べしと御申あれば伊勢守よろこ  
びにたへず御礼として金銀巻物を取  
出ししんするに出家の事なればかや  
うの物はいらざればとて人にとら  
するも世話成ればとてかへしたもふに  
伊勢守はそのまゝ都へ送りて御弟子  
成りとも送るべしとて跡より悉く  
く長持に入れて鬼丸といふ力量の  
ものを宰領に付登されしに鈴鹿  
山にて鬼丸風とおもひけるはいらぬと

(36ウ)

いふ出家に無理にやる事もいらざる  
儀なりさらは是を我物と成して

つかわんと思ひ一休和尚にむかひ只今  
殺し申さん斯期あれといふ何にゆへ

そとあるに此送りものゝ金銀を御僧  
いらぬと申さるゝゆへ是を取て我物

にせんと思へと御僧都に登りて此事

を人に語り自然国に聞へては事六

かしそれゆへに殺すなりと申ける夫は

いらざる事なり惜む心なれば心に語

る事もなく有つて邪魔に成る物を

取てもらへは我為に悦ばし然れば

殺す事は無用にせよかし金銀巻もの

は残らすもつて行べしと宣ひける鬼丸

も一休の心を感じ助けて返しける

それより鬼丸は国へは帰らすして鈴

鹿山の岩窟にこもり多くの方人

を集め強盗をなしけるゆへに暮におよ

へは此所を通ふ人なし此鬼丸を鈴鹿

山の鬼神として田村丸又清水の観

世音の事を引入れ作りてうたひし

ものなり

(38才)  
普陀洛伝記 卷の拾六終

(37才)

(37ウ)

西国順礼 三十三所 普陀洛伝記 卷ノ九

(1オ) 西国順礼 三十三所 普陀洛伝記 卷の拾七

目録

盛久親世音の御利生蒙る事

附り景清年破りの事

普陀洛伝記 卷の拾七

(2オ)

盛久親世音の利生を蒙る事

爰に平家の侍主馬の判官盛国か

子に主馬の八郎左衛門尉盛久といふも

のあり盛久は平家に名を得し難波瀬

尾上総五郎兵衛悪七兵衛景清などと同じ

やうに世に知られたるものなりしか常く

普門品を三巻つゝとなへて清水寺親世音

を信仰する事年久し然るに平家の

一門武運つきて木曾義仲の為に都を

追落され檀の浦へ落行しを又もや義

経範頼に攻立られ二位殿建礼門院を

(3オ)

始め奉り一門の人々残らず西海の波に  
しづみ給ふ処に上総景清盛久は命

を惜むにあらざれとも主君の仇を報ぜ

んと戦場を切抜盛久は京都の北白川に隠

れて夜なく白川より清水へ日参せり爰に

都に有りし時したしく召仕ひし女あり

しか北白川へ尋ね行て申しけるは移り替る

世の中とて平家の御内におみて世に知ら

れ給ひし御身の今かく人目を忍ひ給ふ

事のいたわしきよとて折々音づれ来りける

盛久世に有りし時数多召仕ひし人の中

に只一人尋ね来る者なきに殊に女の旧

恩を忘れずして来る事の嬉しけれとて

大に悦ひけるとなり扱も鎌倉頼朝將軍

は平家の一門もし赤間檀の浦にて有ら

まし実験帳にて御覧あるに名を得たる

盛久か行衛見へさりしかは此者其儘に差

置は行末当家に仇を成すべきもの也と思

召尋ね出せよと京都守護北条四郎時政

に仰付られ何卒生取にし名を得し者なれば

当家に召仕はんとあれは触を廻し尋ぬれとも

(3ウ)

(4オ)

(4ウ)

うつたへいつる者なし時に北条思ひけるは欲  
 には心まよひし習らひなれば盛久を注進  
 する者あらは黄金拾枚ほうびとして出すへし  
 と辻々に高札を建置しかは我人注進せん  
 事をおもへとも都の内に盛久の行衛を知  
 りたる者老人もなし然るに彼女黄金拾枚  
 のほうびに心替りして恩を請たる主人  
 なれとも天下の御尋人なれば終には知れる  
 事なればと思ふ一念の悪心より北条殿  
 の屋鋪へ行注進の事ありて直に申上度  
 との事ゆへ時政立出いか成事そと尋ね  
 られければ彼女盛久の有所北白川に忍ひ  
 居て夜な〜清水へ参詣致さるゝ成り此  
 事外に知る者なしといふに時政いか成る  
 事にて斯は知りたるそとあれば盛久世  
 に有りし時召仕はれしゆへ此頃北白川へ折  
 〳〵おとつれ候ゆへに能々其様子を知  
 れりといふ時政はにくき女か仕業哉と  
 おもへとも我が申儀に偽りなしと黄金  
 十枚ほうびとして渡されければ有りかたし  
 といたゝきもはや御用なくは帰らんといふ

(5オ)

(5ウ)

をしはしと留め高札の通り黄金は遣  
 はしたり然れともおのれ主人の恩を忘  
 れ訴人をいたす事これ全く主殺し  
 の料のがるべからずとからめさせ後〳〵  
 の見せしめと直に牢へ入れける偕時政  
 は子息江間小四郎義時をよひ盛久か捕  
 手に行べしかし北白川へ行うかつにか  
 かるべからず聞ゆる盛久中〳〵たやすく捕  
 るゝ事有まし其上疵を付す生捕と有  
 鎌倉殿の仰なり然るに盛久清水へ参  
 詣するとある是幸ひ下向する所を吉田  
 の辺にて待受道広き所へおひき出し  
 不意をうつて取らはいか成盛久成りとも  
 思ひかけ有へからず仏神への参詣をさまた  
 くる事宜しからず下向待しとして三百人  
 の人数を爰かしこに廿人三十人つゝ別れ  
 居て相凶をさため一度に馳より組  
 とらはやわか仕そんする事有るましとて  
 江間小四郎を大将として組がしらを極め  
 吉田百万遍のあたりに別れ居て盛久  
 おそしと待かけたり盛久はかくとも

(6オ)

(6ウ)

(7オ)

知らず来かゝりしをまちもふけたる捕  
手の人数相図をなして一度に立ち  
人音にもりひさ早くもさととり扱は  
盛久をめし捕に来りしよと心得身  
かまへして居るを廿人三十人つゝ八方より

取巻に松の太木をこだてにとり平家の

主馬の判官盛久を召捕んとて来りし

よな我手並の程は兼てより知りつらん

かゝれや〜と呼はつたり義時進み出て江間

小四郎討手として向ひたり今其方事北白

川に有事露頭におよひ誰知らぬものもな

したとひ此場は切抜たりともかくあらは

れたる上はやわかのかれは有るまし江間

小四郎か向ひしうへは不足にも有まし爰

を連れいやしきものに組留られ名を

くださん事口措次第ならずやと呼はり

〜大勢にて追取巻盛ひさも随ふん

はたらくといへとも式三十の相手にあら

す三百人にあまる人数なれば終に戦

ひつかれて召とられけるすくに鎌倉

へ下しければ頼朝公の御前に召れ如何

(8オ)

(8ウ)

に盛久平家の一門亡びたりし事は全  
く頼朝のなす所にあらす平家の一族

奢にあまり王位をかるしめ奉るにより

天のせめを蒙り斯は亡びしもの也かな

らす頼朝を恨むべからす汝は平家に

おゐて名をゑたる侍なり何卒頼朝に

仕ゆるものならば平家の知行に倍して

召仕ふべし盛久いかにと有ければ是

は思ひもよらぬ仰かな忠臣二君につかへす

と申せばいかてさる事のあらんやと堅

く申放しけれともまつしはらく土屋三郎

宗遠に御預け有て度々土屋をもつて

何卒思ひ直して頼朝に仕へよと仰有

といへとも只とく〜首を刎られ候事御

慈悲なりとてつかゆる心更になし土屋

もせん方なく其趣き頼朝公へ申により

扱〜おしき者なれとも随がはざるに

助け置べき盛久にあらす明日由比の

浜にて成敗すべしとの仰有ける早々由井

か浜へ引出ける鬼神と聞へたる盛久成り

ければ是を見んとて鎌倉中の人民たち

(9ウ)



(9ウ)

こそみて見物す土屋三郎宗遠警固して  
 盛久既に敷皮の上に押直れば太刀  
 名は土肥の次郎真平検査は梶原平三  
 景時なり盛久三侍へ礼義をのべ申  
 けるは某日頃音羽山の観音を信じ奉り  
 毎日普門品三巻をよみし事怠る事  
 なし然るに今日 暁早くより是へ参り候道  
 すから二巻はよみ奉りぬ今一卷読終る

(10オ)

問しばしのいとまをたまわれかしとあるに三侍  
 も殊勝におもひいつれも聴聞致すべし  
 心静に誦誦あれとゆるしけるに盛久は  
 懐中より紺紙金泥の普門品を取出し  
 心静に読奉る既に誦し終れば押巻  
 て戴き居る所を太刀取土肥次郎真平  
 は後に廻り太刀振上丁と打けるに普  
 門品の巻物よりくわつと光明かゝやき  
 もちたる太刀鐔元よりだん／＼に折れたり  
 此普門品の内にわくそうわうなんくりんけ  
 らよくきうよくしゆじゆねひくわんせお  
 んたらじんだん／＼と罪を滅し三罪  
 に及ぶといふ共太刀段々に折れて助

(10ウ)

(11オ)

るといふ事也盛久末期に至りて未来  
 を助け給へと読たれとも多年てつとう  
 の信心なればかくのこくとく劔たん／＼に  
 折たるきどくうたかふ事有へからず  
 かゝる所へ秩父畠山の重忠はや馬に  
 てかけつけ声をかけ盛久のさんざひ暫  
 く待たれよ君よりの仰有りと呼はり馬  
 の内に入て頼朝公よりの御教書を出し  
 盛ひさのさんざひ今日の処延引すべし  
 すなわち盛久をめし連直に尋ね給ふへき  
 子細有るゆへ畠山庄司を遣わさるゝ処なり  
 とあつて夫より盛久を鎌倉殿の御前  
 に召されける有かたや頼朝公御台所政子  
 前もろとも昨夜の夢に御年八旬に  
 たけ給ふと見えさせ給ふいと殊勝なる  
 老僧香染の袈裟をかけ水晶の珠数  
 をもち給ひはとの杖にすかりて御もの  
 思ひなる御顔付成りければ夢心にこれ  
 只人にあらず老僧はいか成御方ぞと申  
 せば我は都東山に住むものなり盛  
 久つねに観音にあゆみはこひ普門

(11ウ)

(12オ)

品三卷を毎日読誦する事年久し其心ざ  
しいと不便なり此度盛久か命を我に給はれ  
よ此事ゆへにはるくと都より来る也と宣ふ事  
我は元より政子の前も同じ告也是清水と

あれは觀世音菩薩なり盛久の信心觀音

大悲の御誓ひこそ有かたし然る上は命を

助け本知を返しあたふるなりとて紀州熊

野の知行所をかへし給はる是ひとへに觀音

の御誓ひなり盛久は本知にかへり紀州

にて榮花の身と成り子孫はんしやうに

榮へける今に紀州の内一村作り取の所

有天下にも付す紀州にも付す守護不入

の所にて老人頭有て其村支配す是盛久

の知行所にして子孫今にかくのごとし

平家の侍上総の悪七兵衛景清は一の谷の

合戦の場より切抜しは盛久と同じ心

にて命惜むにあらねとも亡君の仇頼朝を

一矢にても恨みんと鎌倉に隠れ居て窺

ふといへとも日々榮へ行源氏の勢ひ中々

近寄る事あたわす爰に南都東大寺大仏

殿は三位中将重衡公の焼亡されたるを此

(12ウ)

(13オ)

(13ウ)

度御建立有て堂供養有に寄頼朝南都へ  
御参詣ある事を景清聞出し是社よき時節  
と南都へ行て七佛寺衆徒に紛れ付ねらひ  
ける大仏殿供養導師は前に書する黒谷  
法然上人にて念仏の功德おもき事を大石を  
もつて見せしめ給ひしは此時とそ扱も悪七兵衛  
景清は鎧を着し上に衣をまとひて七佛寺  
の衆徒にまきれ頭を袈裟につみ小  
手すね当にて身をかため小長刀を袖  
に隠し頼朝を付ねらふといへとも幕引

(14オ)

(14ウ)

廻し当たりへ近寄事ならすいかゝはせんと思ふ  
処頼朝公には供養の場へ立出ると廊下  
歩み給ふを見付てこれよき折なれと弓  
に矢をつかひねらひすまして切て放す其  
矢山門のたる木の真中より少し片  
寄りてはつしと立景清は又も大衆の中  
へ紛れこみしを四相をさとする重忠是を  
見付衣の下甲冑をたいしたる僧有堂  
供養の僧にはあらずと後より抱き  
留曲者を組とめたりと呼はるにそ景清  
は関東一の大力にしめ付られさすかの景

清もはたらく事あたはず終に大勢おり  
合て生捕たり景清が射込たる矢の根

今にあり夫より景清は六波羅牢の谷と

いふ所に牢をしつらい八方角の堀込柱に

しげく貫を入れて手かせ足かせ首かせ迄も

くさりを以てつなき置は身をうごかす

事も叶はず頼朝公には景清をおしみ給ひ

是までの知行に倍して召仕はんと重忠

をもつてたひく仰有といへとも二君には仕へす

と中く聞入す是によつて重忠に預け牢

に入れ置く、景清は日頃清水の観世音を

信仰し普門品を怠たらず唱へ居るに牢

のほとりを通る者此よしを聞音に聞へし鬼神

と呼ばれたる景清成れとも世の盛衰こそ是

悲なけれ今は大同然にてうごく事もな

らすといふを聞て口惜や世の人くにあざけ

られ平家の運命こそつたなけれ誠に

内の文にたとへ手かせ足かせを請たりとも

此文を唱ふるものはおのれまぬかれ助る

と観音大悲の御誓ひなり此文の御誓ひ

偽りなくは今景清か身の上を助け給へと

(15ウ)

(15オ)

(16オ)

一心に普門品を唱へ南無大悲の観  
世音ほさつと念しければふしき成る哉  
首かせ手かせ足かせまてはらくと抜  
たりけるあら有難や是さへ抜なばこの  
牢は我力にてやふる事いと安しと柱

をもつてゑひやつとゆすりければくはら

りくと崩れるにぞ番兵ともおとろき

ふためくを景清八寸角の手ころ成るを

小脇にかいこみ二王立にたちたる

勢ひにおそれて近よるものなし景清

はしつくと其場を立のきまた鎌倉

へしのひ入足非頼朝に一矢射かけ亡君

のうらみを散せんと付ねるふに又此度

も生捕れ頼朝の御前へ引出しけるに頼

朝仰けるは天晴なるつわ物哉六はら

にて詰牢の難義をももの、数とも

せすまた此処へしのひ来り頼朝を

ねるふ心ざしかんじ入りたりと涙を流し

かゝる武士をむざく殺す事あるへからす

縄を解ぎ命を助け帰すなり今一度頼

朝をねるふべしと寛仁大度のおとせ成

(16ウ)

(17オ)

(17ウ)

これは景清も勇力くだけ斯までねらひ  
奉る景清御手に入しこそ幸ひとくく  
首を刎らるへきに只今の御仰によつて  
景清かうらみはおもひとまり候なり  
しかしうらみを留るといへとも源家の榮  
へを見ればとて御前におひて兩眼を  
くり出し斯盲目と成るうへは目に見へざ  
れば恨みもなしとて生国日向なればとて  
御いとまを申請本国に下り日向勾当と号  
して後には娘にもあひて最期のせつ

(18オ)

普門品をよみていたゞきしに御経より光  
明かゞやき其光りに目を開けは元のごとくに  
両眼あきらかに見へてけりけつかふなる往  
生をとげけるひとへに觀音の御利生なり  
楠 正成千早の城をしのひ出長崎勘解  
由左衛門か陣所の前をひそかに通られ  
しを長崎の番兵矢を射かけしに  
正成の臂に当る南無三宝と矢を取ゆ  
かれしに落付て矢の跡を見るに曾て  
疵なし悦ひて其後不斷首にかけられ  
たる普門品の一心称名といふ所に矢の

(18ウ)

(19オ)

立たる跡有り扱は身替りに立給ふもの  
なりと有かたくおもかけるとなり  
雍州府志に言書に出し有る清水三年坂  
の事世に三年坂といふて此所にてたを  
るれば三年目にならず死するといふ事  
大になる間違なり三年坂にてはあらず文  
字には産寧坂と書也産はうむなり  
寧はやすしとよむ字なり女の産寧坂と  
いふ也都て清水子安の塔車やとり馬  
留め西門の下まで産寧坂といふ也聖武  
天皇の御后光明皇后御懷胎成されしに  
高きも賤しきも女の産といふものは大役な  
れば皇后にも御案じなされ觀世音を御  
信仰有しにある夜の御夢に老僧来り給ひ  
安産をねかひ給はゞ此觀世音をいのり  
たまへとて御尺二寸のかねの仏をあた  
へ給ふと御覽し御夢さめければふしき成  
る哉御側にこかねの仏ましゝける此觀世  
音を御いのりありしにやすくと娘宮を  
御誕生ましゝける此娘宮すなわち孝謙  
天王なり産といふものは下たゞもあんする

(19ウ)

## (20オ)

ものなれば高き賤しきとて女はあひみ互  
ひなり我ひとり観世音の御慈悲を請  
べきにあらすと思召小仏にては火事何に  
かに紛失する事氣つかわしと仰られ座  
像二尺の観世音を作り内に小仏を納  
め霊地なればとて清水の今の子安  
の観世音堂を御建立有て泰産寺

子安の観音と末代まで懐胎の女參

## (20ウ)

詣し御願ひ中せし也光明皇后の御建りう  
ゆへ左りのかたに皇后の御影を安置し奉る  
此故に産寧坂といふ懐胎の女一度參詣  
致し此坂をあゆむ者にはけかせせず安  
産をいたさせとらせんとの御誓ひ也産  
の願ひには観世音地藏尊を取り分  
願ひ奉るへし八坂の塔五重の上に木  
にて鍵のごとくなる物あり是は外の塔に  
はあらず足利六代の將軍普光院

## (21オ)

よしのり公の御時此処に陣所をか  
まへ西国勢の寄せ来ると淀八幡山崎  
よし峯まで此塔の上にあがりやぐらとし  
幕を張り遠見せし処にて幕を掛ん

か為にこしらへしそのまゝとて是も雍州  
府志に見へたり

## (21ウ)

御詠歌 松風や音羽の滝の清水の  
むすふ心は涼しかるらん  
此松風やといふは清水寺の松風のおと  
たゝさつくと聞ゆれともさとの耳に  
聞ては観音大悲の御説法の御声と聞ゆ  
るといふ心さやうに見れば今日何かと物言  
事もみなあうんの二字に洩るゝ事なし  
あうんの二字は真言ひみつの陀羅  
尼しんらまんぞう草木国土悉皆成仏  
と見る時は是皆仏身也さすればさとり  
たる耳に聞時はさつくといふ松風の  
音も御説法の御声と聞へ音羽の滝清水  
のむすふ心は涼しかるらんと三毒のほん  
のふにて穢たる垢を観世音大悲の知恵の  
水にて洗ひ落せよ目に見ゆるよこれた  
る仏の知恵の水にてあらはねはきよく  
成らす參詣して音羽の滝の水を手に  
むすひ一口吞ば心の垢の穢れをうち  
おとしすゝしからの御うたなり此滝

## (22オ)

おとしすゝしからの御うたなり此滝

(22ウ)

三筋に流るゝ中は利右は観音の知恵左  
りはひとり慈悲の三つなり中は観音  
の御正躰として右は観音の知恵左りは  
観音の慈悲是利智慧の三躰今日の

(23オ)

凡夫にもたとへいか程の悪人にては利  
智慧の三躰かけたるものなし盗みして  
人をころしゝほどのものにては三つ子  
の井戸端へあゆみければあふなしと脇へ  
是人間の自然の慈悲なり右智慧は人  
間かしこきもの目のうちくるゝと廻る  
やうに見ゆるそのことくにてすへて右の  
手は殊の外はたらけどもひたりは慈  
悲ゆへおさまり居て役にたゝぬやうな  
れど慈悲といふものなけねは成らす  
万事よき知恵にて右の手はたらく  
といへともひだりの手かまはずして右の手  
はかりにても男女ともに何をするにも  
あらず利智慧三躰右は知恵にて火なり  
火はするどきものゆへあかく不動尊の劍  
も右に持せ給ひしなり左りは慈悲の  
水なり此ゆへに如来も右をあけたもふ

(24オ)

知恵をもつて天は三十三天王までほん  
なふきつな切給ふこれ知恵をもつて也  
地はならくの底までさつけ得さすへし  
と左りの御手をさけ給ふ清水音羽観  
音の智慧のみつを手にもさひ一口の  
むものはこゝろすゝしくなす霊水な  
れはありかたくしんじんいたゞくへきな  
り

(24ウ)

普陀洛伝記 卷の拾七終

(25オ)

西国順礼 三十三所 普陀洛伝記 卷の拾八

目録

一 拾七番山城国六波羅密寺観世音

附り空也上人由来の事

六斎念仏由来の事

鉢叩 由来の事

協立地藏尊奇特之事

(26オ)

普陀洛伝記 卷の拾八

十七番山城国六波羅密寺觀世音

十一面觀音御長八尺湛慶作

開山空也上人

六波羅密寺といふは過古七仏未來千仏

の如來みな六波羅密をおこなひ勤め給ひ

仏とは成給ふ自身仏と我ちからにて成には

皆此修行をせねば淨土成らず三世兩達

釈迦世尊も此修行をなされたる事なり

六波羅密といふて六つの行ひなりだん

はらみつといふて物のおしきといふを止

め何にても人のほしかればおしますして金

銀財宝はいふに及はず何にても人の望

めはやる事也かいかふみつといふは戒をた

もち修行する事なりにんにくはら密は

腹をたてず何程の事にも何にても思は

ぬなり精進はら密は修行怠りなく勤

むるをせんしやうみつは退屈せず修業する

をいふ般若波羅密はぐちの迷ひをやむ

る事をいふ是たんかいふなるまじと阿弥陀

如來おほし召たゝ南無阿弥陀仏と申せ

よ成仏させたすけ遣わすとの御本願成れ

(26ウ)

(27オ)

(27ウ)

は此六波羅密の修行はいらす是亦何

とて成へきや六波羅密は修行の名

なり釈開山空也上人は全く五十九代

宇田天皇の御孫にて六十代醍醐帝の

第二の皇子なり醍醐帝延喜の帝

の御事成り上人御誕生の時にふしき

ありしは産よりして始終阿弥陀仏く

と啼たまふ弘法大師はあひらうんけん

となき給ふ是を夜なきといひ七里か

あひだたゝると何国にてもおかす母是

をいたゝき所く方く流浪ありて後に

和泉の国檟の尾にまします檟の尾寺

の権僧正と申貴とき名僧の御耳に

は子の啼こへ真言陀羅尼あひらうん

けんと聞へければ是只人にあらずとて母

公にもらひ弟子と成し給ふに弘法大師と

成らせ給ふ夫にまさりて空也上人は阿

弥陀なりといふしに御父帝おほし召

あつて鞍馬山に御殿つくり有は上人三才

の時よりくらまにも置給ふ阿弥陀く

と啼給ふは仏神も應護したまひ鞍馬

(28オ)

(28ウ)

(29オ)

山の鹿猿しかさるの類るいまで夜な〱御子の側そばにあつまりつゝ仕つかへまいらせし也七つの御年みとしよりして御出家みしゅつがに成ならせたくおほしめして貴舟きふね明神めいじんへ御願みねがを立たれ何卒なにとぞ出家しゅつがと成なして下さるへしと御いのり有りしに明神めいじんあらわれ出でさせ給たまひ扱あ〱殊勝しゆしょうなるおほしめし有難ありがたこそ候へ御望のみぞに任まかせ御剃髮みしづめなされ參まらせんと御手みでづから御剃髮みしづめなさせ進しんせらるゝと御夢見みゆめみ給たまひさめ〱上人じゆんじんの御姿みすがたを御覽みらんあれば衣えを召めし御剃髮みしづめなされおわしますそれよりして御みつから空也上人くうにょじんと御名みを付給たまふ此こゝからだは空也くうにょ草木そうぼく国土こくど皆みな空くう成なり

(29ウ)

と有あつてすなわち御名みに付給たまふ夫つまよりして毘沙門天びしゃもんてんに御ねかひ有あけるは我國わがくに〱所ところ〱を廻めぐりて念仏ねんぶつをとなへあるきすゝめ申まをたし力ちからをそへて給たまはれと有りければ毘沙門天びしゃもんてん御厨子みしゆしより出いさせ給たまひありかたき上人じゆんじんの思召おもひめが立たかな我われもちからをそへ參まらせん是こゝを念仏ねんぶつの拍子ひたしと成なし叩たたき給たまへとてこかねの鉢はちを渡わたし給たまふ空也上人くうにょじん

(30オ)

是こゝをいたゞき扱あ上人じゆんじんは六字ろくじの名号めいごう紙かみに書かき毘沙門天びしゃもんてんに進しんせられしを毘沙門天びしゃもんてんほこをとつて是こゝに引ひかけ受取うけとり給たまひ御厨子みしゆしの内うちに入いらせ給たまふ此鉢こゝを阿字あじの鉢はち

(30ウ)

といふ鞍馬山くらまやまの神事かみじに出いるなり空也上人くうにょじんは夫つまよりして此鉢こゝを叩たたき洛中らくちゆう洛外らくがいを廻めぐりうか〱として居ゐる者の耳みみに念仏ねんぶつのこへを聞きせて仏縁ぶつゑんをなし給たまふ是こゝより鉢叩はちたたきといひて今は頭かぶは俗ぞくにて衣えを着まき帯おびして町〱を修行しゆぎやうす是こゝも異形いぎやう成なるもの成なれは開山かいざん空也上人くうにょじんの差さ図ず也扱あ又また鞍馬山くらまやまにて定盛じやうせいといふ狛師くわしありしか手に鹿しかの皮かわをもち獵りやうに出いけるを空也上人くうにょじん見み給たまひて

(31オ)

物の命いのちを取候と事こと罪つみの第一だいいちなり其上そのかみ鹿しかは我われを守護まもりしつかへし也かた〱不便ふびん成なる事ことなれば今いまより殺生せつじやうを止とまへしと段々だんだんと御示みしし有あしかは定盛じやうせい発はつ記きして涙なみだを流ながし最早さいぜん殺生せつじやうをとまり申まをへく候間まを何卒なにとぞ御弟子みでしと成なし下されよと直すに弓矢ゆみやを折捨おりてける上人じゆんじんは出いかしたり〱とかんじ給たまひ扱あその方は妻子さいし有りやと尋ね給たまへは成程なるほど妻子さいしは御座候みま得えとも夫つまには



## (31ウ)

かまひ中さす候といふに上人仰けるはいやとよ  
夫にては慈悲の殺生なりあなち頭を剃  
には及はず心たに妻子にひかれされば則ち  
仏道の修行調ふへしかならず心を引やかに  
心得へし其儘衣を着し我に付て廻れよと  
仰により今に二元祖定盛の跡を継俗にて

## (32オ)

衣を着し妻子あるは開山の仰付られなり  
又ひやうたん叩くは寒中に夜な〜廻る事  
成れば寒氣に当るべきにとて一つのひさごに  
酒を入れて定盛に遣はれ此酒にて寒き  
をふせき念仏を申べし多くのめば酔  
くるうがゆへに仏も深く飲酒をいましめ  
給ふ定もりは凡夫たれども今は仏道に  
入て他念なければ少しは苦しからすとゆ  
るし給ふ今に此ひやうた人を叩き廻る也  
其後加茂明神へ上人また〜御ねかひ有  
て国〜をめぐり候間應護成し下さるへし  
とあれは上人へ明神御対面まし〜て鯨  
口を半分上人へつかわされ是を叩きてひ  
やうしと仕給へとて御渡し有ける是叩  
鉦を四十八願の數に合せ四十八てうを

## (33オ)

こしらへ給ふ鞍馬毘沙門天よりさつ  
かり給ひしこかねの鉢を打込て四十八  
の叩かねに成し給ふ故にむかしの叩き  
鉦にはこかね入りある也鉦を打念仏を唱ふ  
る事は空也上人の有かたき御かたみ也夫を  
いかにといふに皆是木火土金水の五つ也  
人間も其ごとく心肝脾肺の五つ也是はた  
ましにて火也其色赤く肝は木にて色  
青くじんは水脾の臟は土にて黄色なり  
肺の臟は金にて音を出すは肺より出す也  
東は春にして木なり南は夏にして火也北は  
冬にして水なり西は秋にして金なれば  
是念仏の色を出すは肺なり西方を願ふ  
に鉦をたゞき念仏を申は同氣相求む自  
然の道理なり開山空也上人かくして  
所々を廻り給ふところ人皇六十二代村  
上天王の御宇天曆五年の春疫病こ  
との外はやり人はもちろん牛馬にいたる  
迄死する事おひたし國家に人種つき  
候ほど成れば忝けなくも帝叡慮をな  
やまし給ひける空也上人もふびんにおほ

## (33ウ)

こしらへ給ふ鞍馬毘沙門天よりさつ  
かり給ひしこかねの鉢を打込て四十八  
の叩かねに成し給ふ故にむかしの叩き  
鉦にはこかね入りある也鉦を打念仏を唱ふ  
る事は空也上人の有かたき御かたみ也夫を  
いかにといふに皆是木火土金水の五つ也  
人間も其ごとく心肝脾肺の五つ也是はた  
ましにて火也其色赤く肝は木にて色  
青くじんは水脾の臟は土にて黄色なり  
肺の臟は金にて音を出すは肺より出す也  
東は春にして木なり南は夏にして火也北は  
冬にして水なり西は秋にして金なれば  
是念仏の色を出すは肺なり西方を願ふ  
に鉦をたゞき念仏を申は同氣相求む自  
然の道理なり開山空也上人かくして  
所々を廻り給ふところ人皇六十二代村  
上天王の御宇天曆五年の春疫病こ  
との外はやり人はもちろん牛馬にいたる  
迄死する事おひたし國家に人種つき  
候ほど成れば忝けなくも帝叡慮をな  
やまし給ひける空也上人もふびんにおほ

(34オ)

し召祇園牛頭天皇は疫病の御司にて邪見放逸の罪ある者あれば御差図あつて疫病神を遣わされ是を罪し給ふ此事は第貳番紀三井寺の修下にくわしく見へたり空也上人祇園牛頭天皇へ御祈り有りければ御夢想に十一面観世音をつくりたまひて祈るへしと有るによつて上人夫より清水に籠りて十一面観世音を作り給ふ疫病をうけしもの

(34ウ)

此御本尊をいのり拜むへしと祇園牛頭天皇の御告なりとあつて此観世音を地車に乗せ京都中引まはり御香水として御茶湯をせんじ是をいたゝかすればたちまち熱覚たすかりければ祇園石の鳥居のもとに観世音をすへ奉つり爰にて茶湯をいたゝかせたもふ其時の茶せん今に祇おんの宝蔵におさめ有夫よりして空也寺に茶せんはじまりしとなり是によつて疫病静り万民安堵しけるとなり観世音は当ぶんわらふきの仮家にて有しが後今のごとく伽藍出来たり此

(35オ)

(35ウ)

観世音を信仰する者は疫病はやり病ひをまぬがるゝ御誓の御本尊也本堂の地の下には大般若經六百巻をおさめあり開山は空也上人にして今西国第十七番の御本尊也唐土きやうさつ多国といふ国に疫病はりければ帝王歎き給ひければ十一面観世音あらわれ給ひいそぎ我姿を刻み祈るべし疫病を退ぞけ中へしと仰せければ急き観世音をきさみ奉りいのりければ白昼に疫病神観世音の廿八部ゆのくわけん恐れてことくあらわれ逃遁しと成疫病

(36オ)

(36ウ)

中には十一めん観世音を初り奉りおかみ中にしくはなし  
空也上人 紫野雲林院のあたりにすみ給ひしがある時十月の頃大宮通りを下へ鉦うちならし御通りあるに白髪の翁さも寒気成る躰にて上人の側に寄れば上人いか成人にてましますそと御尋ありければ我は是松尾大明神也と仰けるいかなれば其の姿にて是まで御出なされ候さればとよ我に神いさまをしてくれる者

(37オ)

はあれとほんのふの風をふせきくれる  
ものなく寒く候間此風をふせくへき衣を  
一重与へ給へと仰ければ其時上人衣を  
ぬぎ給ひ此衣は年ころ経文を誦念仏  
を申こんたる衣なりとて明神へ上たもふ  
請取給ひて上人かならず松の尾へ来  
りたまへ重ねて対面まち申なりと明

(37ウ)

神は帰らせ給ふ夫より松尾へ行給へは明神  
出させ給ひ神前の鰐口を上人に与へ給ひ是  
をとつて念仏をひろめ給へとて大鼓と鰐口  
を空也上人へ渡し給ひける是によつて松尾  
明神の御たくせんなれば御神事には大鼓  
鉦をうちならし念仏を申なり今是を六斎  
日といふ此鰐口は寺に納めあり扱空也上人  
は定盛か持たる鹿の皮と角と請とり  
給ひ是は鞍馬山にて我につかへし鹿  
成りとして鹿のぼたいのために角を杖へ  
の先きにさして洛中洛外をつきあるき  
給ふ此杖もじう物となりぬまた松の尾の  
神前に鰐口あらず神楽に大鼓なきは空  
也上人へ進せられし故なりといふいわれなり

(38オ)

然れば神御前にて念仏を唱ふれば御神  
慮にかなふなり大鼓鉦にて空也上人に月々  
の六斎日に所々にて打ならし念仏を弘め給ふ  
此六斎目といふは毎月六日八日十四日廿三日廿  
九日晦日となり訳て此日吉をなし腹など  
立まじき大事の日成れば六斎日に空也上  
人は大鼓を打給ふゆへ是を六斎日といふ六斎

(38ウ)

のはじめ空也寺なり此六斎には天より人々  
の善あくをあらため帳面に記し焰王の御  
前にあけ置けは死して後焰魔の御前に  
引すへられ罪をたゞされてもあらかふ事  
成らず其上善根を絶して悪心放逸の者  
は十年つゝ命をちゞめ給ふ也空也上人は西  
の御坊のあたりに住給ふに爰は念仏を進め  
給ふものもなき処成れば賑しき市中に  
出て一字の堂を建立したく思召何国  
のほとか宜しからんと西山より見下し給へは  
三条櫛司のあたりへ紫の雲空より  
下りあれは此処こそ然るべからんと三条くしけ  
に堂建立有て紫雲たなひきし所なれば  
とて山号を紫雲山と付られ極楽寺と申

(39オ)

とて山号を紫雲山と付られ極楽寺と申

(39ウ)

ける応仁の戦ひに此伽羅焼て今油の小路  
に有る空也寺是なり此寺の鎮守は松尾  
大明神をいわいこめ奉るとなり正法に氣特  
なしといえとも奇特なきにもあらず大和国  
松むろのちくさんといふ名僧あり御児ご  
の時成しか御師匠北の院空誠僧都の  
御もとへ空也上人御出ありしにしほらし  
き見出て師の僧都は留主にて候と申  
ければ空也上人仰けるは能こそ御留主を  
召れしそささひしくあらんと仰ければ  
いかにもささひしく候なりと申ければ然らば  
むかふにある基ばんを持来られよと基  
をうち申さんと仰けるゆへ基ばんを中へ  
重ねれば持れざるよし申ける然らば  
此数珠を基ばんの上に置てもたれよ  
とて投出したもふをすなわち基ばんの  
うへに置もちければ不思議や此基ばん  
かるくとあかりけると也斯のごとくふしき  
あれは正法に奇特なきにもあらず扱また  
空也上人内裏へ御上りなさるゝにも矢張  
修行の御姿にて歩行にて御出なさるゝ

(40ウ)

道にて雨ふり出しけるにふしきや何国よ  
りかは知らねとも白鷺来つて笠のごとく  
なり上人の上を覆ふ雨をふせく其時上  
人念仏をとなへ給へは御身より光明かゝや  
きしとぞ扱又其後上人奥州へ念仏進  
めんかため御下り有て黒川といふ所にて御  
往生なされしに香を焼給ふ紫雲たな引  
花ふりてねむるがごとき御臨終也 則火葬  
にし奉りて其灰をもつて上人の像を  
つくりて空也の御影と拜み奉るなり  
上人御年七十歳此御影の脇仏壇の御  
厨子に安置し奉るなり

(41オ)

観世音の右の手の方にかづらかけの地藏  
と申 貴き地藏尊あり爰に夫婦と娘  
老人とくらし居けるもの有まつしき事た  
くひなし夫はわづかのものを売に出るといへ  
とも中々親子三人其日を送る事もなら  
ずそれゆへ家内道具ひとつ二つと段々  
売尽し今は何を売べき物もあらざ  
れば夫の留主に娘にむかひて申けるは扱  
かほと迄まづしき身とは成はつるもの

(41ウ)

(40オ)

(42才)

故我（わが）〜ふたりは家内（かない）にのみあれはたとひ  
一日（いちにち）二日（ふたにち）食（しよく）せずとも凌（しのぐ）べけれ夫（おとこ）は外（また）をかせき  
そこ爰（こゝ）と歩行（あゆ）給へはさひしき腹（はら）にて帰り  
給はん事のいたわしさ夫（それ）手（て）だてを（か）まへた  
りといへとも此事（このこと）夫（ふ）に深（ふか）く隠（かく）していひ知らず事  
なかれとて我（わが）頭（か）をすきあげおしけもなく根元（ねもと）  
よりふつと切（き）りかもし（も）じを持（も）ち行（ゆ）て代（しろ）なし食（しよく）事（こと）を  
とゝのへ待（まち）居（ゐ）けるに程（ほど）なく夫（おとこ）は色（いろ）青（あお）さめ  
たる顔色（かおいろ）にてたち戻（もど）りける親子（おやこ）の者（もの）つね

(42ウ)

〜地蔵尊（じざうそん）を信仰（しんかう）すかゝる貧窮（ひんきやう）は地蔵尊（じざうそん）の  
御方（ごかた）らにもかなひかたし今（いま）は我（わが）女房（にようばう）娘（むすめ）なから  
も餘（あま）りふかひなく恥（はづ）かしさに我（わが）内（うち）なから余（よ）  
所（そこ）へ行（ゆ）しやうに腰（こし）をかけ居（ゐ）ければ妻（さい）は商（あきな）ひ  
の事（こと）いかゞありしにやと尋（たず）ねければ一日（いちにち）あるき  
けれとも商（あきな）ひなしとていと案（あん）じ入（い）たる風（ふう）  
情（じやう）成（な）れば其（その）心（こゝろ）をさつし夫（それ）は少（すく）しも苦（くる）る  
しからず御事（ごこと）なり又（また）さやう成（な）る事（こと）斗（た）りにては  
有（あ）るまじと力（ちから）をつけて嘸（ま）心（こゝろ）淋（しみ）しくおわさんに先（まづ）  
食（しよく）事（こと）し給（たま）へとて指（さ）し出（だ）しければ夫（おとこ）は驚（おどろ）きけふの  
もふけの心（こゝろ）当（あた）りてもなきにかく（か）まへられしはいか  
なる事（こと）ぞや今は家内（かない）に代（しろ）なすへき道（みち）具（ぐ）もなし

(43才)

(43ウ)

と不審（ふしん）しけるを妻（つま）はとやかくいひくるめ食（しよく）事（こと）  
すゝめければ夫（おとこ）も食（しよく）事（こと）しまいけれとも兎角（とかく）に  
米（こめ）一つ（ひとつ）の出所（しよところ）もなし合点（あてん）ゆかねは女房（にようばう）の外（また）  
へ出（で）たる間（ま）に娘（むすめ）をよひて尋（たず）ねれともとかくに  
わからざれば大（おほ）に案（あん）事（こと）かやうに困窮（こんきやう）にせ  
まれば二人（ふたり）いひ合せもしや人の物（もの）をかすめ  
とりはせさりしやと申（ま）ければ娘（むすめ）申（ま）ましとはぞん  
すれとも餘（あま）りうたかわせ給（たま）へは是非（せひ）なく申（ま）也（なり）  
けふ母殿（ははどの）の髪（かみ）をきり給（たま）ひそれを代（しろ）なし調（たの）へ  
たる食（しよく）事（こと）なりあすはわが髪（かみ）を切（き）るべしといふ  
を聞（き）く父（ちち）は涙（なみだ）をほら〜と流（なが）し世（よ）はさま〜  
有りといへとも我（わが）ふかひなきゆへに妻（さい）子（こ）をや  
しなふ事（こと）あたはす妻（つま）に髪（かみ）をきらせ夫（それ）を  
煙（けむ）りの代（しろ）となすへき事（こと）有（あ）るへきや扱（さ）も〜我（わが）  
ふかひなきをも恨（うら）みす女の髪（かみ）を切（き）るといふ  
貞心（ていしん）の程（ほど）の過（あや）みさよと涙（なみだ）を流（なが）し申（ま）けるが  
夜（よ）に入（い）て妻（さい）子（こ）のよよく寝（ね）入りたる間（ま）に書（か）  
置（お）きしたゝめ其（その）方（かた）事（こと）我（われ）に連（つ）添（そ）ひ居（ゐ）る  
ゆへに親（おや）子（こ）ともに難（なん）義（ぎ）かん苦（くる）をたへしのふ  
貞心（ていしん）の心（こゝろ）さし生（な）々（た）世（よ）々（た）わすれ置（お）す我（われ）男（おとこ）  
の身（み）として妻（さい）子（こ）はごくむ事（こと）あたわす恥（はづ）し入（い）

(44才)

(44ウ)

といへとも今更詮方もなしなま中我かく  
てあらはいつを限りとなき困窮ならんも  
のとおもひ出行也いか成人をも頼み世を渡  
るへし我はまた出たる日を命日と思ひ  
回向をたのみ申なりと書残し心強くも出  
行ぬ妻子は斯とも知らず夜明て書置を

(45オ)

見て大におとろき悲しめともしすへきやうなく  
夫よりして妻は夫の別れを悲しみ深く  
歎き忘るゝひまなく終に病となつてふし  
ければ娘も今は袖こひと成り母を介抱しけるには  
どなく母死して跡に残りし十四才のむすめ  
こそ不使なれ父には生わかれ母には死に別  
れ便り力も有らばこそたれ頼むべき人も  
なければ母の死骸をかたつくる事も成らず歎  
き居るかゝる所へしやくじやうをつきたる出家  
来り給ひ何をかな歎くぞと有れば娘申けるは  
御出家成ればこそ御尋下さる事有かたさよ  
是は自らか母にて候か死し申されしなり  
父にもおくれ貧しき事成れば母の死骸を  
ほうむる事をもならず頼むへき人もなき身の  
上ゆへ斯は歎き申候也と申ければ夫は不便成る

(45ウ)

上ゆへ斯は歎き申候也と申ければ夫は不便成る

(46オ)

事かな氣つかひすへからす我片付て得さす  
へしと袈裟をひろけて母の死かいを包み腰  
帯にてくるくゝとくり出家背中に追ひて其方  
も我につきて来るへしとて鳥辺山に至り  
むすめにあたりの木柴をひろひ集めさ  
せ死骸のうへに積置火をかけ夜もすから  
経をよみ給ひて明かたに骨を取出して  
是こそ汝しか母のかた見なり持ゆきて回  
向いたすへしまたいとけなきものゝ不便さよ  
親類のものにても有りやと仰ければ両親に  
おくれ外にたのむべき人もなしと申ければ  
父に別れ母におくれし事なれば両親のほ  
たひまたはその身のために尼とも成りなは  
仏の御恵みも有へし我は六波羅密寺に  
住僧なりとあれば段々御慈悲ありかたさ  
申尽し難し冥加のため御施物を上度  
おもへとも貯へなき身成ればせんすへもなし  
あつて役には立ぬものなれとも心ばかり  
の御施物御うけ下されて可申哉と申せは心ざ  
しの御施物と有れば何にてもあれ受んとあ  
れば懷よりはさみ取出したけ成る髪を

(46ウ)

(47オ)

髪を

(47ウ)

なてあけておし気もなく根元よりふつと切てさし出せは出家は是御覽し女の大切なるは髪なりかほとまて美しく延せし黒髪を母の布施物にせよとてふた親のそたて延し置べきや千々のこかねにもまさりしかもじの布施物受申なりとあれは有かたき仰かなみづから西の岡に少しの知る人有れば是をたのみ尼と成つて修行に出たき願ひに候と中ければ扱く殊勝の心さし成りとして出家はわかれ帰り給ふ鳥部山の朝あらしにはらくとちる露もおのか涙に数そへて立去りかたくおもへとも斯てはあらぬ事なればしほくと立出御情を蒙りし御僧へ御礼をも申さんと六はら密寺へ行先観世音を拜み父母の菩提をねかひさて脇立の地藏尊おかみ奉るに持せ給へるしやくしやうに生々敷黒髪のかよりありはしめはおとろきしかまさしく我髪也と思ひしかは側なる出家に此地蔵尊の持せ給へるしやくしやうにかよりたるかもじは

(48ウ)

前かたより掛させられて候かと有ければ出家是を見ておどろきけるゆへ左様成らはおとろき給ふな夫は自らか髪也其訳はかやうくと語り扱もく有かたや忝那やさようとは存ぜずもつたいなや母の死散を御背中におわせ参らせたる事の冥加なやと地藏尊の御誓ひを人々有かたくかんじ奉るかつら懸の地藏尊と中奉る毎年七月廿四日御開帳あり

御詠歌

(49オ)

おもくとも五つの罪はよもあらし六波羅堂へ参る身なればおもくともといふは身の上なり朝起るより寝る迄罪をつくる事おひたし世の人ことわきに我は罪なしといふ者ありどこからゆるして罪なきや罪つくらねはならぬ凡夫なり是ほと重き罪はあれとも五つの罪とは五逆罪なり主人や親を殺し僧を殺す罪大きにふかし法を弘めるための出家成れば是五逆一つ成り出家の事をそしり中ことをしければ仏の身より

(49ウ)

(50オ)

血を出すなり親をころす五逆のものは此世にてははりつけにかゝりうかむ世としてはさらになし手に殺す事なくとも不孝のものは皆親殺しにおなじ心には殺す度おもへともころせば我身を罪に行はる我身のおしさに得ころさず殺さぬ斗りの不孝もの則ち五逆の罪に仏道神道儒道にも孝行の事は同じ六波羅堂へ参り觀世音を拜む程の者成れば八億四千の罪はあるとも重き五逆の罪はあるまし五逆のものは外の仏菩薩も見捨給ふにそのつみふかきものさへ最期の一念に助けたまへと阿弥陀仏をたのみ奉れば下品下生の方へ往生し助くる弥陀の御本願五逆のわか身なれと頼み奉らば往生うたかひなし有かたや忝けなやとおもひ觀世音へあゆみをはこひ頼み奉れとの御詠歌なり

(50ウ)

普陀洛伝記 卷の拾八終

西国順礼  
三十三所 普陀洛伝記 卷ノ拾

(1オ)

西国順礼 普陀洛伝記 卷の拾九  
三十三所

目録

(2オ)

一 拾八番山城国六角堂頂法寺觀世音  
附り聖德太子諸国御順見之事  
普陀洛伝記 卷の拾九

(2ウ)

拾八番山城国六角堂頂法寺觀世音  
御長寸八部ゑんふたんこん  
六臂如意輪觀世音聖德太子七世の守  
本尊三十二代用明天王の太子なり七世さ  
きはしやうまん婦人天竺にてはなんかく  
大師日本にては聖武皇帝となり給ひ  
七世目聖德太子と申奉る又は八つ耳の  
皇子とも其外さまの御名あり御母  
皇后春のはしめなれば馬を御覽有へし  
とて出させ給ふに馬屋のほとりにて御  
誕生ありしゆへ厩戸の皇子と申奉る西



(3オ)

方阿弥陀如来の脇立救世観音御身の姿を隠し聖徳太子に成り仏法を弘め給ふ御とし十三才にて大和国とよ寺を建給ふそれ迄は大工も堂の建やうを知らざりしに御差図にて枅かたなにかかやうと仰付られ大工の道具をも皆おしへさせ給ふ天王寺に道具の名号有聖徳太子

(3ウ)

のおしへ給ふ事多しある時甲斐の黒駒といひ一日に千里をかける名号有りこれに召れて調子丸秦川勝跡見の逸位を召し連られ淡路の国いわ屋の浦といふ所はるかに沖の方を御らん有るに海上上にちいさき箱うかみありて波にたゞよひ磯辺へより聖徳太子の御側まで来りければその箱を取あげ御覧あるに内へ水の入らぬ様にちやんぬりにして堀込の書付あり太子是を御覧しあらなつかしや御本尊是我七世の守本尊也と上書に呈大日本国玉身鷹下天台南岳門弟中と書付あり南岳は天然にて我前生なり我日本の皇子と生るゝ間斯の通りにして海上

(4ウ)

にうかめ日本へ渡し申べしと門弟中へ申付置しか唯今再び拝し奉る成りとして箱を開き給へは錦の袋に入り金銀の御厨子にて一寸八歩の観世音ほさつ也あら有難やと仰られければ凡人は知らず菩薩の御化身成れば先の世の事此世未来迄よくも御存しある事なれば夫より御身を放し

(5オ)

たまはず尊敬し給ふ御年十六才にて守屋を退治なされて撰津の国天王寺を御建立有べしとて所々を廻り材木を御見立に御出有し山城国愛宕郡に御出有折しも夏の事なれば大ひなる森の有けるによき影なりとすゞみ成され森今の六角堂の所也其頃は山城の国といふ在所なく都は大和国山辺郡なりなかつきの都いがるかの内裏とて今橘寺の辺りにて今田畑の内に其時の内裏の礎ありたれ田地にいくつと公儀に御帳面に記し留られたり時に聖徳太子は愛宕郡の森のうち清き水の流れあり御はだをぬかさせられ御手洗あそはしけるに御肌を搦させ

(4オ)

(5ウ)

給ふ觀世音をしばらく森の木に懸置給ふ御手洗過て御肌あはだに掛させられんと觀世音を取らせたまふにふしきや千貫目の重さに成らせられあかり給はず川勝かわかつ講見なんといふ強力つよぢからにても中く少しもうこきたまわすいか成思召ありやと太子其夜は此森に一夜をあかし給ふ觀世音へ御尋ね有しはいか成事にてよらせ給わぬや凡人の事にて候へは存し奉らす御知らせ下さるへしと念し給へは御夢想ごむしやうに此所未世こゝろのいまに至りて往來しげき所に成る事程ちかし汝なんぢし七世迄付そひれとも今よりして爰こゝにとまり末世の衆生を濟度せんとおもふなり堂の形ち六角に立へし替りし堂なりと不審なし人々ひとびと拌むを縁として濟度すへしとの御告也太子には今更御放れ申は御名残おしく思召とも觀世音の思召なれば是非もなし然らば此処に堂を建へしと仰けるかゝる所に老人の老婆おつと来り此杉はいか成る杉そと御尋ね有るに毎日此末こゝろに紫雲むらさきぐもかゝり候ゆへ神木と申ならわしたるよし申上げれば幸ひ也然らば

(6オ)

此木を切れと仰られ其杉の木一本をもつて外ほかの木をすこしも交へす六角堂を建たり冷しき大木とは見へたりそれより聖徳太子は大和の国いかるかの内裏へ御帰りなされける誠まことに有難き觀世音現當二世有縁の利生りせい未來影向みらいかげむかひのかしこき靈たま仏ぶつなり協立地藏きやくたつじざう菩薩毘沙門ぼさつびしゃもん天なり今此都このみやこと成りし時二条一条九條ふたじょういちじょうくじょうまで九重の都と町わり有りしに六角堂をよけねは一方一町たらず一方は餘るゆへ町割むつかしければなれとも太子御建立の堂なれば動かす事成らずなんきながらとやせん角やせんかどと時の役人案事やくにんあんじわすらひけるに一夜しんどう雷かみかみ電かみかみ稲妻いなづま冷ひやましくなりはためくにそ何事の出来るやらんと恐れおのゝきしに夜明て見れば町々の真中まんなかにて邪魔じまなりし六角堂三

(6ウ)

十間じゅうかんばかり夜の間に跡へよりある事は諸天善神しよてんぜんじんけんろうけんろううう地神觀音二十八部衆ぢじんくわんおんにじはちはふしゆけんぞくけんぞくの成し給ふ事也と知られたり今の六角堂門前の町の真中まんなかに丸き石まるいし壱いちつあり京の真中也といふ其時の本堂の

(7オ)

此木を切れと仰られ其杉の木一本をもつて外ほかの木をすこしも交へす六角堂を建たり冷しき大木とは見へたりそれより聖徳太子は大和の国いかるかの内裏へ御帰りなされける誠まことに有難き觀世音現當二世有縁の利生りせい未來影向みらいかげむかひのかしこき靈たま仏ぶつなり協立地藏きやくたつじざう菩薩毘沙門ぼさつびしゃもん天なり今此都このみやこと成りし時二条一条九條ふたじょういちじょうくじょうまで九重の都と町わり有りしに六角堂をよけねは一方一町たらず一方は餘るゆへ町割むつかしければなれとも太子御建立の堂なれば動かす事成らずなんきながらとやせん角やせんかどと時の役人案事やくにんあんじわすらひけるに一夜しんどう雷かみかみ電かみかみ稲妻いなづま冷ひやましくなりはためくにそ何事の出来るやらんと恐れおのゝきしに夜明て見れば町々の真中まんなかにて邪魔じまなりし六角堂三

(7ウ)

十間じゅうかんばかり夜の間に跡へよりある事は諸天善神しよてんぜんじんけんろうけんろううう地神觀音二十八部衆ぢじんくわんおんにじはちはふしゆけんぞくけんぞくの成し給ふ事也と知られたり今の六角堂門前の町の真中まんなかに丸き石まるいし壱いちつあり京の真中也といふ其時の本堂の

(8オ)

壱いちつあり京の真中也といふ其時の本堂の

跡成るへし此丸き石より今の本堂迄の間  
此義に応ずる也斯あり難き御利生ある

御本尊なれば西国札所十八番と成り給ふ

御利生十二才に成る女の手習ひにゆく道な

れば六角堂へ参りおかみ通り手習ひの内

に南無観世音はさつと書しか子供心にも

もつたいたなくおもひ其処を引さきて六角の

さんせん箱へ入置ける其後成人して縁につき

懐胎し年十九なれば厄年とて二親をはじめ

案じ何とそ安産をとねかひ居るに産の氣

つきて殊の外難産にて三日か程もみに

もんで免や角とさわけども今ははや命もつゝ

くまし此うへは腹を割て成りとも身二つに致し

たしと敷き居る所へ老僧一人来らせ給ひ

此内は殊の外さわかしきか何事成るやと御尋ね

あるゆへかやうくと申せば然らば此御封をつか

わすべし清き水にていたゞくへしさあらば

早速身二つに成るへしと有れば有りかたく

戴きける僧生るゝ子男成らは左り女ならば

右の手を握り居る事有へしと仰けるまつく

急ぎ御封をいたゞかせければ早速安産す扱

(8ウ)

(9オ)

(9ウ)

もくありかたや今の御出家はいづくへ御出  
や見失ひ奉りしといふうまるゝ子男子の左  
の手を握り居る開き見るに御封也さてく  
ふしき成るとおもひしに其夜産婦の夢に

老僧来り給ひ我は是六角堂の観音成る

か汝しおほへ居るや十三才なる時手習ひ筆

にて我名を書きさんせん箱へ入置し心を我は

忘れずして此たひ患みつかわす所也昼吞

せしは先年汝か書たる名号なりとのたまふ

と見て夢覚たりあらありかたやと彼御封を

開き見れば成程と思ひ稚き時書たる観

世音の御名号なり難産に持こもり既に

死すべき命を観世音御名号をさんせん箱

へ入れし故に助りしと思ひいよく六角堂

の観世音を信仰し奉り母親の書し観世

音の御名号を正真の観世音の御手より

戻りて生れたれば此子のため是に過たる

守りはなしと守り袋に入て其子のまもり

とは成しにける

御詠歌

我おもふこゝろの内は六つの角

(10オ)

(10ウ)

たゝまろかれと祈る成けり

わかおもふ心のうちはむつの角とは角と

いふ字にて五塵六欲の六つの角の是

六根也此角に引かゝり往生のさまたけと

なり我力にて角を祈りては成仏成らさ

るかゆへに観音大悲をねかひて角をおり淨

仏成らざるを淨法せよとの事また五輪六

欲おなし事にて六根をは眼耳鼻舌身

意の六つ也是を六塵にすれば色声香

味触法也是六欲発る十悪といふは身三

殺盜淫品両舌悪口意誦綺語意

三とんよくしんみくち此身三品意にて十

悪なり色けふは目に見るにつけ諸道具るい

又は女色に迷ひ声はこへなり耳にあたるさま

〱の事を聞ては腹をたて欲も出来る也

香は鼻にてにをひをかぎ味は舌なり口

にて両舌といひて中言をいひ又悪口をい

ふなり只意地わろく物を言うそをいふか

五戒のうち也新語は人をあやつるをいふ

触塵は身なり我身を大事におもひ衣類

(11オ)

(12オ)

なとも其うへ〜と能ものを着たる欲なり

法塵とは心なり上皮にては美しき様に見

ゆれども其心の内はさま〜欲心ぼんのふ十悪

五逆をも作る是法塵なり人間はだまさるゝ

事あれとも司令録の神仏はだまされ

給はず焰魔王急度御覽有れば其罪のが

るゝ事あたはず眼口耳あれとも見ざるいわ

ざる聞ざるのごとく知らぬ顔して居るへし眼見

へざる時は仏の經文をおかみ奉る事あたわ

す耳聞へざる時は有かたき仏法を聞事あた

はず物いわざる時は念仏となふる事もならず

是又第一なくて叶はず

人の心鏡にうつるものならば

さぞやかたちの見にくかるらん

とあり心の鏡にうつらねはこそあり〜と見え

たらばいか程美しき人も此の歌のごとく見にく

かるべし六つ色声香味触法の角をおりて

円く成るやうにして淨土へ参り眼耳鼻舌

身意の六塵のなきざとりの身と成るべし

有かたやと思ひ観音大悲にあゆみをはこび

ねかふへきなり幾たひはきても塵の出ること

(13オ)

(12ウ)

(11ウ)

(13ウ)

く人間の六塵止む事なし然れども実相無漏の大海の浄土は塵も芥も請込給ふそありかたし観音六つの御手は六道をすくひまします夫々の役あり御手也右の御手三本は思惟の御手といひて煩杖になされ一本は如意宝珠を持給ふ一本は百八の数珠を持給ふ左りの耆木はりんとうを持給ふ一本はいまだひらかさる蓮花を持給ふ又一本は安座の

(14オ)

御手といひて安座の石をおさへさせ給ふ此左りのりんとうを持せ給ふは天人を助け給ふ御手なり天人は我飛ゆかんとおもふ方へりんとうをこかせはこけゆきて不浄をはらひ其跡より飛ゆく也是天人を助けんとの御手也蓮花を持せたもふはにくだん八葉の蓮花は人々しよくの仏給れば其衆生を助けん為に持せ給ふ安座の御手は修羅道をたすけたもふべしとの御手にて左りの御役也右に百八の珠数を持せ給ふ畜生を助け得させんととの御事なり畜生は口を咂としてなるもの也人間も悪智成るは畜生に近しよくくたしなむべし観世音の大慈大悲には百八の珠数のかす観

(14ウ)

(15オ)

世音の御知恵をあらわしたる数なり如意宝珠は餓鬼道をすくわせ給はんとの御事なり如意宝珠心のごとく書文字也世に是を借ふしの玉とはいひ習はせりにりふしといふ事は如意宝珠也餓鬼は只ひたるゝものを見喰たる目にかゝればほのふとなる水を見て嬉しやと呑にかゝれば火ともへあかり百千万功食もつをくろふ事あらず水のむ事もならず此苦しみを観世音の大慈大悲にたすけ給ひ心におもふごとく望みのごとく成るといふ心にて如意宝珠持せ給ふ思惟の御手を地獄道にあたる一百三十六地獄の罪人をいかゝして助けんと御思案煩杖の御手なり人間にてもしあんする時は煩杖をつくか如し観世音に御思案申事あらねとも其御姿をあらわしてかやうに六道の御こゝろをくだかれて罪人をたすけたもふとの御尊像なり

(15ウ)

普陀洛伝記 卷の拾九終

(16オ) 西国順礼 普陀洛伝記 卷の式拾 三十三所

目錄

一 拾九番京革堂行願寺觀世音

附り鹿子を愛して死する事

岡崎村大工觀世音を信じ難を

まぬかるゝ事

普陀洛伝記 卷の式拾

拾九番京革堂觀世音寺号を

行願寺といふなり千手觀音御長

八尺

(17オ)

行願寺は元一条の小川に有りしか太閤秀吉公の時ぶん今の所に移されたり開山行

門僧正と申僧正は豊後の国はや見郡の人成りしか渡世の商売とてもあらずして只獵

を好みて遊獵せしにある時獵に出られしに女鹿を追出しけり是よき得もの成りと弓

に矢をつかひきりくと引しぼり鹿の胴腹をねらひすまして切て放すにまとの違ひか

こふしのくるひか鹿の腹を矢の根にてすり切ければ其破れし所よりはらみ居ける子鹿

(17ウ)

もれ出る血おひたゝしく出てたまるへきやうもなく見へしにそれををかまわれすもれ出たる子鹿の血をねぶりにいたわるとい見るに忍ひがたき有さま成りしか親鹿次第によりて終りに死す然るにかの男此跡を見てかほとまて子を不便に

(18オ)

おもふものなるに心つかずして此年頃数限りもなく殺せしげだものゝ親兄弟妻子有て定めしかやうの歎きかなしみつらんに夫をも知らず殊さら渡世にするにもあらず只一時の興に乗じかゝる殺生をなせし事のくやしきよ年令若きといふにもあらず今にも死ん事斗りがたし然れば後世の事こそ恐ろしけれ此のち深く殺生をとゝま

(18ウ)

るべしと発記して此鹿こそ我に菩提心をおこさせくれしとてすなわち鹿の皮をはぎ衣の上に鹿の皮を着て所々方々修行せられける是すなわちほんのふ即菩提とそ成にける諸国を廻り其後都に登りて繁昌の地なれば定めて邪見のもの多くあるべしとおもひ京中を修行して

(19オ)

もれ出る血おひたゝしく出てたまるへきやうもなく見へしにそれををかまわれすもれ出たる子鹿の血をねぶりにいたわるとい見るに忍ひがたき有さま成りしか親鹿次第によりて終りに死す然るにかの男此跡を見てかほとまて子を不便に

(19ウ)

廻り給ふ衣の上に鹿の皮を着たるはいか成  
事と問ふものあれば我身のうへを物語り  
必らずく殺生をはずまじきものそ我は夫  
ゆへにこそ出家には成りたりと京中を語り  
歩行しゆへ皮を着てあるかるゆへ革堂  
上人と異名せしとなり此僧つねく観世  
音を信じて普門品を誦給ふに有る夜

の夢に正真の観世音を拜奉らんとおもは  
下加茂の神前に神木として注連はり

渡し有る桑の木霊木あり此木をもつて  
汝し千手観音の像をきざみ安置すへし

是正真の観世音はさつなり未代霊地と成て  
末世の衆生をたすけ給ふへしと御夢想

の御告にまかせ下加茂の社人を尋ねり  
愚僧は一条の小川に柴の庵をむすひ

修行致す行円と申もの也此あかつきか  
やうくの御夢想をかふむりしより其桑の

木を所望に参りたりとあれば社人も昨夜  
明神の御告に神前の桑の木に観世音

ほさつ乗りうつりおはしまして霊木と  
成り有也一条の小川より行円といへる出家

(20ウ)

所望に明日来るべし左あらは早速  
遣わすへしとの御告也貴僧の来らせた  
もふを相待申なり是まで人々此木にさ

はればたより有るかゆへにおそれを成し  
て今注連を張り人をあたりへ寄ざる也

と申ける夫より行円三年三月にして千手  
観音を刻奉りて一条小川に安置し奉る

一刀三礼とは観世音の御ゆび一本刻み  
奉つては三度礼拜し其度毎にかく礼

拜して成就せし御本尊なり夫より  
行円京中を廻りかやうくの御告にて

観世音出来させたまひし也本堂建  
立の願ひ有とて修行し給ひければ人々

信心をもつて財宝を施入しければほと  
なく観音堂建立成就すよつて行円

願成就せしといふ心にて行円の行の字を  
取願の字を取て行願寺と名づけ皮を

着てあるき建られし堂なれば革堂  
と書てかう堂とはいふなり

同じ事ならねと則やを雪隠といふ唐土  
の臨隠寺の雪寶長老は則やに手づ

(21オ)

(21ウ)

(22オ)

からきれいにそうじし給ふゆへ雪竇の雪  
 の字を臨隠寺の隠の字を取り、則をば  
 雪隠とぞ名づけしは是よりはしまる  
 雪隠へ行を廁へまいるといふは高野山  
 の高野にあらずかわやと書は高野是  
 はとうは声を通づるゆへかうやといふ也七里  
 けつかいの高野山の事をするはもつたいな  
 き事也革堂もおなし道理にて革堂  
 すなわちかわ堂なり

(22ウ)

革堂観音の御利生は都岡崎に大工有し  
 か京へ細工に出かけ帰るさには是非共  
 革堂の觀世音へ参り信仰する事とし  
 久し生国は丹波の笹山の者にて幼少の  
 時両親にはなれ伯母にそだてられ人と  
 なり岡崎に住けり女房を持つるにこの女  
 心さし悪く所の若きものと密通して  
 我男毎日くかせぎに出て留守なれば彼  
 密夫を引入ける然るに彼大工の友達これ  
 を知りてひそかに大工に告知らせければ  
 我直に見ぬ事なれば見届けし上の  
 事と思ひわざと知らぬ顔にて居たりける

(23オ)

(23ウ)

(24オ)

に丹波より伯母の病氣殊の外重きよし  
 知らせ来るおさなき時より厚き思を  
 請たる親同ぜんの人伯母なれば聞と其儘  
 今宵夜通しにゆくべしとて持らへける  
 か京の細工場のくめん有とて京へ行し  
 間に密夫此事を聞つけよき時節なれ  
 は跡よりつけゆき老の坂のあたりにて切り  
 殺すべしといへは女房是を聞て成る程  
 よろしからんしあふなき事なりかの  
 人はかよわき生れつきゆへそなたの相手  
 にはたらず苦もなく殺さるへしとおもへ  
 とも窮鼠却て猫をとるといへはおひつめら  
 れて詮方なき死に身に成つて鼠のねこ  
 にくひつきしにおなしあなどつて疵な  
 どおひ人に不審を立られ夫より事のあら  
 われんもはかりがたし我おもふには道中  
 用意の弁当に毒を入れて遣はし是をば  
 道中にてくわれたならば只食しやうな  
 どにて死なれたるに成りて跡くの難も  
 有るまじ此方に仕給へといへば密夫これを  
 聞いていかさまにも是はよき思案なり然らば



(24ウ)

其通りにせんとていかゞしてとゞのへ来り  
密夫毒薬を女房わたしければすなはち  
弁当をこしらへ飯は勿論菜にいたる

まで残らず毒を入れおきいつれにても一口  
くゑば其儘死するやうに手はやく取り  
したゝめたる女こゝろぞ恐ろしき夫はかく

とも知らず京の得意がたの細工ぐめんよく  
成して是より直に夜通しにゆかんと  
いそぎこしらへけるか女房はかの弁とうを

(25オ)

取出し夜通しの事なれば用意に持せん  
とこしらへ置たりと差出せば夫は何の心  
もなくよくも心付たりと腰に付て出で

ゆく神ならぬ身のかなしさは毒ある事も  
露しらす悦ひ我家を立出ぬ借大工は常  
に革堂の観世音を信仰し奉れば此度

伯母の病気の事なれば猶さら観世音  
へまいりねかひけるは伯母の病氣にて  
丹波へ参り候もし此度定業にて命終り

(25ウ)

候とも恩を請たる伯母にて候へば何とそ大慈  
大悲の御ちかひにて今一度対めんなさ  
しめ給へとねんし奉りてかくねかひ奉

(26オ)

れは我丹州へ来たり着まては観世音  
の御ちかひにて伯母の命を御留置下  
さるゝにうたかひなしとよるこひ我身の  
事はつゆしらす夫よりすくに急ぎける  
が落中にて日もくければよわき男な

れは心ぼそく恐ろしけれと伯母の事のかな  
しければおそろしなから行処に老の  
坂に掛り向ふを見れば大の男道をふさぎ  
立居たり扱こそ出合たり追はぎ成らんと

(26ウ)

おそろしく振り返り見れば跡よりも来り両  
人に引はさまれければ氣もたましいもうせ  
はてゝ唯うつむきて南無観世音ぼさ  
つとふるひくとなへ行ぬげんとするに大こ  
へ耳もとにひゝき衣類をぬけよといふに

ゆるさせ給へといへともはやくぬぎ残らす渡せ  
命はかりは助けくれん隙とらば切り殺  
さんとだんひら物を抜はなせばわたくし  
は丹波にあるひとりの伯母病氣大切に

(27オ)

つき見舞に参る者成れば路用とても過  
分に持すといへは彼はいわすと早くぬげ  
ひまとらば目に物見せんとふりまはす刃

(27ウ)

ものにおそれてくる〜と帯引ほとき衣類  
をぬぎあかはたかにて丹波へもゆかれねは  
しゆばん一つゆるし貫ひふるい〜にけのびて  
かたわらにすくみ居るに式人の追はぎ  
は扱〜おもひの外らちの明ぬはたらき  
去りなから何か爰につゝみたるものありひら  
き見て是は弁当なり幸い時分もよし  
さらは賞既致さんと兩人側なる岩に腰掛  
くひかゝれば彼大工脇より見て折角これ  
まで持来りし弁当まで取られし事の  
うらめしさよとくにも喰へはよかりしにと  
なかも居るに彼盗賊はかの弁当を取りて  
二口三口喰ふと見へしかうんといふてそり  
かへる一人の盗賊是はといふて立寄りしか  
是も同じくたおれふす大工はふしきに思ひ  
しはらくなかも居るに二人ともたをれし  
儘にてうごかねはこわ〜なからそばへより  
よく〜見れば兩人の盗賊黒血をはきて  
死入ける思ひよらぬ事なればつくりせしか  
まつとられし衣類を取て手はやく着し弁  
当の残りふしん成りと引つゝみ腰に付

(28オ)

(28ウ)

て急ぎけるはや道にての噂さに老の坂  
に式人追はぎ死し居るか其毒にても  
当りしや食物を引ちらし有るといふに付  
彼大工ひそかに弁当をひらきみれば飯は  
紫き色に成てあり扱は女房か密夫と心  
をあわせ斯は工みし事とおもひ夫より丹  
波の用を仕舞岡崎へ戻りける女房大に  
おとろきたる躰成しか大工何気なくかの  
密夫を女房によびに遣わしければ気味  
あしくおもへともゆかすはいよ〜知られなんと  
恐しなから来りければ彼大工は女房と  
密夫をならへ置て汝はよくも我目をかすめ  
ふ罅を成し其上毒にてわれを殺さんと  
まてたくみし事夫程までにおもふ事な  
らは女房をくれよといゝはせて比興成  
事也我老の坂にて追はきに出合はぎ取ら  
れしは難儀なれと毒を仕込し弁当をぬ  
す人ともうばひ喰らひ毒に当り死したる  
ゆへ我は其難をのかれまた毒なくははぎ  
とられ丹波へゆく事なるまし此ゆへに女房  
にはいとまをつかわす間連行べしと女房を

(29オ)

(29ウ)

(30オ)

密夫へ渡し誠に観世音の御利生にて毒  
 やくのなんをまぬかれ命を助け給はりまた  
 盗人には毒をくわずとも迎もろくな死は  
 有まし毒に当りしは切らるゝよりまし成  
 らん是も又観世音の御慈悲と有かたく  
 おもひ発心して西国三十三度順礼の念願を  
 をこし一生西国順礼して結構成る往生とけ  
 しと也此事遠きにあらす元禄年中にて  
 利生記に出たり

御詠歌

花を見て今は望みも草堂

の庭の千種も盛り成るらん

花を見て今は望みもかう堂といふは

観世音の御手にはまた開かぬ蓮華をもち

給ふにくたん八葉の蓮花なり人間五臓の

じんのそふはすのみふれんけこくゑんしやうの

仏生のたねなり此度開けは仏生を得る観

世音大悲の持せ給ふ蓮花もそのごとく観

世音の持たせたもふ花を見てはたい願ひ蓮

花をひらき仏生得は今はのぞみも草堂の

庭の千種と書て千人も万人もといふこゝろ

(31オ)

にて千人にも限らず千の種といふ成れば  
 参詣のともからみな観世音の大慈大悲  
 の照されて仏神と成へし千手観音  
 の千の御手の縁をもつて庭の千種成  
 るらんとのこゝろなり

(31ウ)

普陀洛伝記 卷の式拾終

西国順礼  
三十三所 普陀洛伝記 卷ノ拾一

(1オ) 西国順礼  
三十三所 普陀洛伝記 卷の弐拾壹

目録

一 二拾番山城の国善峯寺観世音

附り 宇都宮蓮生坊か事

火車来迎の事

(2オ) 普陀洛伝記 卷の二十一

二拾番山城の国善峯寺観世音

千手観音御長八尺

開山けんさん和尚はひゑい山天台の学者

にして諸経を学文し天台一ねん三千

のむねをひらきちとう兼備の名僧

にておわします生国は因幡の國の

人にてひゑい山にのぼりて学文有しに

母公はおりゝ文をもつて見舞に人を

登せられ比叡山殊のふひへる所にてい

(3オ)

よくそく才成るか手おりの木綿など  
折々のほせ女人きんせいの山なれば  
互にふみのたよりはかり成しか母公にも

だんゝ寄る年の事にて次第によはり  
給ひしうへ近頃かり初の事にて伏し

たまひしに次第におもり今はたのみす  
くなく成りしかは命の内に今一たび対

面ありたくかつは我子に臨終をすゝめ  
られたしと有れば其むねを文にて申

来るけんさんさつそく下山ありて因幡の國  
に來りたまひ殊にすくれて介抱を成し給ひ

けさ衣を取おき介抱中は俗と成り羽  
織を着てかりに俗名をつけ母公の

二便をとりむつきまで手づからあらひ  
清めたまふ母公は我子とはいひながら出家

の身を一日にても俗にする事勿体なし  
母の恩は十月懐胎よりして十恩有り

今此御用を達せずんは御恩を報し奉  
る時節成し釈迦世尊も御父の御恩をお

ほしめし御父淨飯大王の御葬送の御  
こしをかき給ふましてや我らこときもの

(3ウ)

(2ウ)

(4オ)

御用を聞てあるへきやとのたまひて  
五日ほとかりに俗名をつけ常の親子と  
おほしめし何なりと御用おゝせ付られ  
よとて御介抱ありしなりかしらは出家に  
て羽織を着て俗名をつけたまに釈迦の  
弟子と成りて御介抱あれば母公にけさ  
衣のぼちあたるゆへにかく有りしなり

(4ウ)

此事は元亨釈書にも出たりそのうち  
母公死去ありりんじうのせつにはけさ  
衣を着し元のけんさんと成り臨終を  
すゝめ野辺におくりだびして骨を首  
にかけひゑいさんにかへり道にてさてく  
無常の浮世かな今まては月く人にを  
山へのほされてとひ首つれ給ひしに

(5オ)

今よりしてとわるゝ人も成し亦母  
の御身のうへ六道四生のうちいつくに  
まします事やらんも知れす今一度あふ事  
もならず追つけ我身も此ことく成るへき  
は今の事なりこれよりひゑいさんに登  
り学文して僧都の大僧正のとてい  
わればとて何の為にか成るへき只後世の

(5ウ)

事こそ大事也と無常を観し見たまひ  
比叡山にかへり学もんする心もふつ  
いやになりそれよりすくに西山よしみ  
ねにいたり柴のいほりをむすひ念仏  
を申世を観してすませ給ふあるとき  
よしみねのふもとを通り給ふに此山に  
紫雲たな引有りけるをふしぎにおもひ  
山にのぼり見給へは仏もなく堂もなし扱  
は此所霊地なりとて紫雲の瑞頭によ

(6オ)

つて此所に住給ふしかるにある時老翁出  
て何をか観じあんするやといふけんさん  
是を聞て見ればいやしき翁なりしほら  
しや我に向つてもんとふするの如何にても  
尋ねみよ返答せんと何がひゑい山にて学  
もん有りしけんさん何にてもいわんとてかくの  
ことくの給へはいやくいやしき老僧成ればもん  
どふなどいふ事は知らず御身此前霊地

(6ウ)

と知りいほりをむすひあれとも此まゝに  
ては御身の外に此所を霊地と知る者  
なしあたら霊場をこのまゝうかゝとして  
置べきにあらず霊仏有れば一字の堂を

(7オ)

建立あらは末代までの靈地と成るへしと有  
ればけんさん只人にあらすとおもひ本尊と  
すへき靈仏もあらすと有るに本尊に作る  
木は一条革堂行願寺の觀世音を作り  
し靈木の残り有り是をもつて觀世音  
を刻み奉り安置するならば末代衆生を  
濟度有る靈仏と成るへしとていやしき老  
翁と見へたるかわれば当山のあしさが明  
神なりいまなんしに告る所もかならずたかふ  
べからすとの給ひければ神風さつと吹來り  
老翁は一せんぬぎ白き御幣とあらはれあ  
からせ給ふそれよりしてけんさんは一条革  
堂の觀世音をつくり奉りし残木にて

(7ウ)

觀世音の像をつくり奉りけんさんみづ  
からかいげん有りしにいと殊勝に出来させ  
給ひけんさんみづから悦こひ此觀世音をねん  
し給ひ其夜の夜はんはかりに西山よし  
みねより光明出て山城国中ひるの如く  
てりかゝやき帝にも觀覽ありてよし峯  
へひかりを見せにつかはし給ふ京中より  
も人々ゆきて見るによしみねのいは

(8オ)

りに千手觀世音まし／＼てけんさん  
拜み居られける御門此よし聞しめし堂建  
立の御寄進あり京中の貴賤ともに信心  
をおこしこゝろさしの施もつを上ること  
おひたゞしく觀音大慈大悲のひかり  
にていくほとなく堂建りう有りしなり  
善峯の觀世音ほさつと一条革堂の觀  
世音とおなし木にて作り奉りし御本  
尊なり此後此所中たへ有りしに東山  
よしみつの慈鎮和尚の取立あり中興  
開山慈鎮和尚也慈鎮和尚は百人一首に  
有る大僧正慈円の事なり和歌の名人  
にて狂歌なども多くよみ給ふなり

(8ウ)

慈鎮和尚よしみねにて

(9オ)

我いははみやこの南ひつしさる  
よをうち山のすしむかひなり  
慈鎮和尚へ歌もあまりよませ  
給ふ事無用になされぬかと  
一申ければ  
人毎にひとつのくせは有るものを  
われにはゆるせ敷しまのみち

御詠歌

野をもすぎ山路にむかふ雨の空

よしみねよりもはるゝ夕たち

(9ウ)

此野をもすぎ山路にむかふよしみねへ参る  
道の野をすぎ山路にかゝるといふやう成れ

どもその事にあらず此ほどのといふは人間一生のおわりわれ人共にゆくちううの

道なり中有の野ばら東西も知らずあ

んなんのうくとしたる野原のくうき先

に山ありこれは死手の山とて高さ五百

ゆじゆんの山なり跡より午頭馬頭の鬼

(10オ)

追たて此山へ追あげ山はつるぎにて身をさ

し跡より追来る是をさして野をもすぎ

山路にむかふとよみたる也此野山をゆか

ぬものは極善極悪のものは通らず極善

のものは息引取らぬうちに三尊廿五苦

さつ御むかひにあい奉り観世音のれんけ

に打のりつまはしきする間に極らくへ

行身なりまた一向の極悪人は人を殺し

親をころすものは是も息引取らぬうちに

午頭馬頭の鬼火の車をもち来りて

(10ウ)

いきの有る中に乘行てまつさかさまに  
ひとつき地獄に落ちるゆへこの野やまを通

らす

生なから火の車にのせ行事折節目

せんにあり河原町徳兵衛と申ものゝ直に

咄せしを聞しに延享元年の頃なり此

同町に日ころ我慢げんとんにて仏法を聞す

念仏をも申さずしてくらす老婆有り

しかねつ病をやみてくるしむ事けし

からずして死する二三日まへよりあれく

とさげびはねあかり飛出るを介抱人引

とめておさへてもなかくとめられつ

火にさわることきねつひやうにてさわるも

あつし半時ほとつゝかくする事二三日ある

連れに來たとめてたべと声を上ると苦

るひ出しこのくるしみしつまるかねつにて

むちうに成るかゆへわけも聞えずかゝる程の

事なれば近所のあたり隣まで此苦しむ

ことを人知れりくるひあがき出せばあら男

四五人もかゝりて押へ手もち足をもち

けれともとびいてくるふをとめられすかく

(11ウ)

(11オ)

(12オ)

のことくにてくるひあかき死し息引とれは  
火の車もへ上り出けるを人々の目に見へ  
すなはち徳兵衛もおさへ居て此体を見し  
とてはなしけるまた是におなしやう成る  
老婆火の車に乗りゆくとむすこむすめ  
の夢みて追かけゆきやけとをばすると  
ゆめに見てさめてみれば手にやけと

(12ウ)

して有ると聞へしなり此川原町の  
事はじぎに聞しゆへ爰に出しおくなり  
右のことく成る極悪人は中有の野山を  
通らす一こくにゆく也又善もなく地獄  
にゆく程の悪もなく中有に迷ふもの  
多し是七々四十九日か間迷ふといふあ  
んなんもくらき所に迷ひ居る是三界ま  
よひの衆生といふ七々四十九日の間斗  
りにてもあらすうかますしてまよひ  
居るものおよく有る也死手のやまを  
登るものはほんのふ作りし罪火の雨と  
成てそらよりふりかゝり此雨をしのぐ  
笠は観世音弥陀の名号をかさに着  
るより外にみの笠はなし善みねよ

(13オ)

(13ウ)

りもはるゝゆふだちとはよしみねへ一度  
参詣いたし観音大悲をねかふものなら  
は此雨にあふとも観音見たまひて大悲  
笠にてしのぎ助け給ふそとのこゝろ  
にて善峯よりもはるゝ夕立とはよみ  
しなり

(14オ)

(14ウ)

西山善峯けたい院に今宇都宮だ  
きとめの如来あり恵心の作也宇都  
宮弥三郎友綱は元久式年八月十六日  
御弟子と成り剃髪し給ふ  
宇都宮弥三郎馬上にて通りしむかふより  
熊谷入道蓮生来るゆへ傍輩のよしみ  
なれば熊谷入道成らすやとこへをかけ  
られ熊かへも言葉をかけ宇都のみや  
弥三郎かめすらしやく馬上にてゆう  
／＼と出立給ふ所はあつはれ一方の大將  
也いかほとの大敵たりともふせくへき宇  
都宮との也去なから此世の敵はふせがる  
へきが此世にて作りし罪来世にて  
敵と成り来る時はいか成る宇都宮殿  
にてもふせくにいかやうなる具足かぶと



を着らるゝともこの敵はなか／＼ふせがる

まし是をふせくには南無阿弥陀仏具

足なくてはかなはずと申宇都の宮うち

うなつき蓮生坊の申さるゝことく我

此世の敵は恐るゝ事もあらすといへとも

未来の戦ひちからにおよはずもつとも

なり発心して熊谷蓮生坊の一言に

よつてかく成りしといふ心にて宇都のみや

入道蓮生とおなし字を名に付法然上

人の御弟子と成り念仏さんまいにて有

りしかとてもかほとまてねかふちから

阿弥陀如来のむかひをちきにおかみたし

か成る事を拜み申未来成仏をねかふ

へしとねんしけるにある夜三尊の来

迎有てなんしか成仏うたかひなし

臨終はまだ程もあり其時にのそんでむ

かへ取る事うたかふへからすと仰られて

帰らせ給ふ阿みだ如来あらりかたや御名

残をし今一たび拜みたしと思ふ一心にて

もつたいなしともおもはず追かけ参らせ如来  
の御うしろよりたき居たり是よりだきと

(15オ)

(15ウ)

(16オ)

めの如来と申す斯のことく一心さへかたまり  
てねかへはめい／＼のねんじ仏皆斯  
のことくなり

七万石大名 熊谷入道蓮生

十八万石大名 宇都宮入道蓮生

爰に善峯のふもとにまつしく世を渡る

女ありおつとにわかれて後二人のむすめ

をつへ柱と思ひそたてし姉はおきととて

十五才に成り妹はおきしとて十三才也

兩人とも母に孝行成るむすめなりしか母

は三年わすらひ居れともくすりをのむ

事もならずして月日をかさねいまは次

第におもりて命も危く見へしゆへ

二人の娘介抱してくすりを与へたく

おもへとも医者をよく事も成らずやう／＼

として心安きいしやをたのみて見せけ

れは是は中／＼本服有るまし人参とい

ふものを用ひたらはもし助かる事も有る

へきしかしなから薬もむつかしきくすり  
にて毎に人参を用ひ候へは金子拾両

(16ウ)

(17オ)

(17ウ)

もなくては成らずと有ゆへ金子十兩といふものは猶さらとゝのひかたし然るに姉のおきと思ふは此身をうりてすこし成りとも金子をこしらへたしと近所の人を頼み我身をうりてやう／＼金子五兩出来たるゆへ此通り妹にかたれば我身とても母よりもらひし物也本服のため成らは身をうりて御薬をあげたしとして妹も又身をうりて二人して十兩の金子をこしらへ

(18オ)

母の側へ此金子をもちゆき御薬をあげて本服の事を医者にたつね申せは金子拾兩なくては療治とどかすと有りしゆへ武人とも身を母さまの為に金子に致し候これにてくすりを吞せられて御本服下されかしといへは母はおもき枕をあげたとひ死すともむすめをうりて薬のみ本服する心なし便りとする二人にはなれたとへ葉種のむとても娘の事の案しにしていよ／＼病ひは重く成るへし母に断はらずして身をうりしか何ゆへ聞せて其上にて極めはせでと涙をなかしかなしみければ二人のむすめ申は

(18ウ)

母さまよりもらひし此身なれば売てなりとも御本服をいのり申なりわつか五年の事に候へははしの内の御別れなりかならず／＼御案事下されましといへは夫程迄に事を極め殊更金子も受取し事成れば

(19オ)

今はゆかてはかなふまじ是や今生の別れとも成へきかとなく／＼わかれ出にける母の申せし言葉のことく次第に日にまし病ひ重りて今は命終におよふ時近所の人に申置しは二人とも其居所を御存知あらばむすめかたへ御知らせ下さるべしといひ置き終に空しく成りければ近所の者とも打寄て取かたつけむすめの方へ知らせければ姉のおきと大ひになげぎさて／＼神仏成らぬ事なればかゝる事とも知らず御本服のため成ればとなかれの身と成りし事なりかやうの事ならはなにしにこゝに来るへき御そばにつきそひ居て御介抱申へきもの成りしにとなみたを流しもはや四十四日に成り給ふかせめては御墓所へまいりて御急かういたさんと親方にわけを申一日いとまをもらひ

(19ウ)

母さまよりもらひし此身なれば売てなりとも御本服をいのり申なりわつか五年の事に候へははしの内の御別れなりかならず／＼御案事下されましといへは夫程迄に事を極め殊更金子も受取し事成れば今はゆかてはかなふまじ是や今生の別れとも成へきかとなく／＼わかれ出にける母の申せし言葉のことく次第に日にまし病ひ重りて今は命終におよふ時近所の人に申置しは二人とも其居所を御存知あらばむすめかたへ御知らせ下さるべしといひ置き終に空しく成りければ近所の者とも打寄て取かたつけむすめの方へ知らせければ姉のおきと大ひになげぎさて／＼神仏成らぬ事なればかゝる事とも知らず御本服のため成ればとなかれの身と成りし事なりかやうの事ならはなにしにこゝに来るへき御そばにつきそひ居て御介抱申へきもの成りしにとなみたを流しもはや四十四日に成り給ふかせめては御墓所へまいりて御急かういたさんと親方にわけを申一日いとまをもらひ

(20オ)

墓所へゆき母のいますか如くさて／＼かやうの事とも存ぜず御側に居て御介抱を申べきものを知らぬ事こそいちづに御本服をねかひ不孝の罪をかさねし事御ゆるし下されよとかきくどき後を見れば妹のお

(20ウ)

きし是同じ心にて親方きひしきかゆへぬけて出てまいりしとなく／＼たかひに語り合ふかうして母はかく成らせ給へは何しに勤をすべき是より尼と成り母さまのぼだいをいのるべしとて二人とも墓のまへにて髪をぎりそれより善峯寺の出家をたのみ住持の御弟子となし下さるへしとたん／＼とねかひけるにいまた年もわかきに髪の有るなきにはよらす其まゝにて母のぼたいをとむらひまいらせよと有は二人とも髪は早切候とて尺成る髪を出し見せければ左程までおもひつめられし事なれば尼と成し弟子にせられける我／＼はすくにいとまを下さるへしもし親かたさかし出されてはいか成るうき目にあひ候わんもはかりかたければ此上奥にかくれ

(21オ)

(21ウ)

申とて庵りをしつらひ爰に居て母のほたひをねかひけるある時二人とも観世音のまへに通夜をしてねかひけるは母妙林か地獄に居られ候やまたまよひ居られ候やそんし申さず観世音大自在大悲のちからをもつて母を極楽を道引下さるべしと姉清雲妹貞雲ねかひしに其夜の丑満ころとも思ふ時ぶん観世音の内陣すさまじき音して妙林／＼とよふ妙林は母の戒名成るかとももひしに赤鬼青鬼罪人をしぼり引立てるをよく／＼見ればましきく我母也こはなさけなや何ゆへそかなしやと思ひしにふたつの鬼妙林をさしあげて火の中へなけ入れたり一人の僧来り給ひ妙林をひき上給へはふたつの鬼申けるは是はいか成る御たすけにて候そや此ものはほだいななくしてむすめの事のみおもひくらし後世の事なくして死したるゆへほんのふの罪深きもの也といふいかにも其通りなれとも娘か尼と成り妙林かぼだひをねかひ中有地獄いつくに

(22オ)

(22ウ)

あるとも観音大悲のちからをもつて助  
け給へと一心不乱に観音をたのみねかふ  
心ふかしその心さしをあわれみて助け得  
さすへしと仰ければたちまち御僧と見へし  
観世音ほさつと拜まれ給ひ母妙林と見へ  
しほさつの形ちと成りて西方へともなひ  
給ふと思へは清雲貞雲夢さめて見れば

(23オ)

観世音の御前にふし居たる也二人は夢の  
ありさまを語りあひて有難やかくの通りの  
夢見しといへは貞雲も其通りのゆめ  
なればあら有りかたやかたしけなやこれ  
ひとへに観世音の御めくみをもつて母  
の地獄に落られしをたすげ下されしと  
清雲貞雲はいよ／＼観音の名号を唱へ  
て御礼を申住持にかたれば涙をなかし  
て観世音の大慈大悲をよろこひ二人  
の信心をかんにて観世音を拜し奉る  
に御衣のすそこけてあり是を見て  
いよ／＼三人はなみたをなかしあらあり  
かたや暫の内に此所を地獄に成し我  
／＼に御見せ下され母をたすげ給ひし也

(23ウ)

(24オ)

其地獄のほのふにてかく御衣のすその  
こげさせ給ひたるなり清雲貞雲はそれ  
よりいよ／＼庵りに引こもりたるなり念  
仏を申観音の詠歌をとなへ二人共に  
けつかう成る往生をとげし也かゝるあり  
かたき御本尊十九番かう堂の観世音  
とおなし木にて誠に下加茂神木とあ  
りし時より木の内に普門品陀羅尼を  
唱ふ声ありしと言つたへし霊木にて  
作り奉りし有かたき御本尊なり

(24ウ)

普陀洛伝記 卷の式拾耆畢

(25オ)

西国順礼 普陀洛伝記 卷の廿式  
三十三所

目録

一 式拾耆番丹波国穴穂観世音

附り観世音身替りに立給ふ事

蓮華比丘尼物語りの事

(26オ)

普陀洛伝記 卷の式拾式

丹波の国桑田郡穴穂觀世音

仏師かんせいの作御長三尺

寺号菩提寺願主は丹波

の国宇治のみやなり

丹波といふ文字はあかき波と書なり

(26ウ)

其ゆへはむかし此国に大き成る池有て

底に大蛇すみたりしかるに強力かうりきの者

有て此大蛇を切ころし池になげ込み

しか三日か間血にて池あかく波立し

ゆへあかき波と文字にかきて丹波と

いひしは是よりしていひそめし事也

是は国名風土記といふ書にあり桑田郡

といふはずさまざま大木の桑の木

ありしを其木をきりとりてあとを田地

と成したる也此桑の木大木なりし故

うとろの穴出来たりといふによりあな

穂とかく字なくほのこゑおに通づる

かゆへあなをとはいふなり然るゆへにかな

にてかけばあなほと書てあなをとよ

むなり

(27ウ)

扱宇治のみやなりといふものは丹波の穴穂の百性大富貴のものにてずいぶん

しわく人にとてはつるに物をやりたる事

なく人の物はほしく幼少なる時より

生れつきてはなはだしわきものなるに

むすめひとりあり是親とちかひ多く

なさけありてしかも容義もよくして

二親の寵愛はかりなし然るに十六才の

としかりそめの事に煩らひ付しにさ

まゝ祈禱医療をつくすといへとも定

(28オ)

業にてや有けん今をかきりと成りはて

たり二親にむかひて中やう是まで御苦

勞をかけし御恩も得送り申さすして先

達まいらす事不孝の罪ことさら女は

罪ふかき身なれば我菩提のために

聖觀世音を一昧造り給わるへしと遺言

成して終にはかなく成にける無常の

世の中なげくかひもなく野辺の煙り

と成し残りしものとは戒名ばかり両

おやの歎き大方成らすしてむかしをし

のふなみにむせひせめてむすめの申

(28ウ)

(29オ)

せしごとく彼聖觀世音の尊像を造立し奉つらんとて京都より仏師かんせいは丹波へよひむかへて我方にて尊像を作らせんとおもひ京都へそのおもむきを申のほせし仏師かんせいは觀音ほさつを常く信仰の者にてありければ大によろこひ有かたしとて早速丹波に下り宇治のみやなりか方にて五十日程に聖觀世音の尊像をきよさみ奉りし処にたんこん微妙にして笑るか如きの尊像出来させ給へはかんせいも我手に作りながら有かたやと思ひ拜し宇治のみやなり夫婦のものも尊像を拜し奉りなみたをなかし申けるは扱もくふしき成る事かな此觀音の御顔はせを拜し奉るに過にしむすめの顔に其儘なりもつたひなき御事なから是程迄に克にさせ給ふものかなとて声を放つてなきかなしみもつたひなき事なから今よりは此觀世音ほさつを過去りしむすめとも思ひておかみ奉るへしと悦こひければ

(30ウ)

かんせい其過去給ひしむすめこはいか成るかたちにて有しや知らざるに左程にこの尊像の似させ給へるとはふしきなりと共にかんるいを流しけるみやなりはいたつてしわきものなれともあまりのうれしさに沢山に有る金銀成れば礼として金子三十兩はかりつかみ出して仏師かんせいに取すればかんせいは大きによるこひ是はおひたしき下され物なり早速京都へもち帰り家内のものへ見せて悦こはせ申さんさりながら今宵は今夜これにありてあすは早く京都へ帰るへしといひてとまり居るにみやなりは情なや例の病肝積おこりてつらくおもふに昼仏師かんせいにつかわしたる金ぎん過分の事なりさてく口おしき事をいたしたり何ぶん半ぶんほどは取戻したきもの也と急におしくなれば身うちの毛もちぬるほととやかくおしくおもふ内に夜もはや明にければ仏師かんせいはみや成り夫

(30オ)

(30ウ)

(31ウ)

婦にいとまこひを成して都へ帰る跡にてみやなりはいかゝせんと身をのみ今はたまらずあとより追かけ半分は是非取返しなんものをと大江山幾野の道といふあたりにてかんせいに追付しかまた一念の悪心そひ出て半分戻せとも言にくしさいわぬ跡先に人もなけ

れはうちころしてみな取戻すへしと後よりしつかにあゆみよりてたゝ一討と切付ればわざものにて大けさに物の見

(32オ)

事に切はなし金子残らず取戻し仕すましたりと大ひによろこひ急いで我家に帰りける妻はかくとも知らずいつものことく

観世音をおかまんと仏前にまいり御戸

ひらけは観世音ほさつ大けさに切て

あり台座まで血流れありこはいかにと大きにおとろきわつと声を上

伏まろひてなげくにそみやなりは何事

成るやとはしりより見れば観世音の御

肩先より乳の下まで大けさに切さけ

たりし有さまさしくかんせいを切ふせ

(32ウ)

(33オ)

たることき御疵なりみやなり大におとろき不審はれざればだん／＼のわけ女房にもかたらず先何となく京都の仏師かんせいをば見せに人をのほせけるかんせいは何事なくして表に仕事をして居る使はあ

いさつして此あたり迄用事あつて参りしゆへ立よりしといふよくこそとかんせいはいさつして申けるは丹波みち用心はな

はだわるしかならず油断有るな我等事みやなり殿より帰るとき大江山の当

りにて後より大き成る男出来りて我に切てかゝるふり帰り見るにはや直に抜身

ひらりと見へしか切られたやうたゝかれしやう覚へす逃かへりしかいつの間にかはみ

やなり殿の給はりし金子は残らず取られたりされとも身に疵も付す帰りしを悦ひ

(33ウ)

居る也かならず／＼用心を成してうか／＼とは

通り給ふなといふ使のものは忝なしと礼

をのへ丹波に帰り此よし／＼みや成りに

咄きは聞とひとしく勿体なやかんせい成と

おもひて切ふせしは此観世音にてましませ

(34オ)

しよな我身なからもあいその尽はてたる  
此身かな今まで邪見にくらせしを只今誠  
におもひ知つたりあら情なの我心かな此  
つみ何としてかはのかるへきと発心して先  
京へのほりかんせいにわひ言してさんけ  
すへしとて早そく京都へ出てかんせい方  
へいたりかんせいを見るところを合せてそな  
たはまさしく観世音ほさつなり有難やと

(34ウ)

拜めはかんせいおとろきは何事を仰らる  
ると申にみやなりはわけをいわねは利も  
聞へすと我生れ付て人に物をやる事を  
おしみけるに此たひ其許に観世音ほさ  
つをきさみもらひ過去りし娘の顔に克  
似させられしか餘りのうれしさに金子をつ  
かみ出し其元に進せし成れとも跡にてを  
しく成り其元のかへりを追かけ行大江山  
のあたりにて追付見れば幸い前後に人  
もなしよき仕合とおもひうしろより  
大けさに切ふせて金子を残らず取かへし  
我家にかへれば聖観世音勿寐なや大げさ  
に疵をうけさせ給ひ台座まで血なかれ有

(35オ)

(35ウ)

り我それにもなをうたかひの心をさし  
はさみ是まで人をのほせて其元の様子  
を見せけるに其使のものかへりてそなたの  
はなしを聞是までつくりしあく業ゆへ  
や我ながら我身にあいそつきいか成る  
いんくわにてかゝる事を成しけるそもつ  
たひなやそなたには観世音ほさつの身  
かわりにたゞせ給へは取も直さす其もと  
は観世音ほさつ也すなわち其時金子  
入られし財布はそなたに覺へ有るへしと斯の  
通りにさんけを成して金子をのこらすさい  
ふに入かんせいかまへにさし置このわび言  
をせんためばかりに此たひのほりし也  
たゞ何こともゆるし給へかんせい殿とて  
ふしまろひ手を合せて歎きわひけ

(36オ)

れはかんせいは大におとろきさてはその  
時のぬす人みやなり殿其元にて有りし  
よなわれらつね／＼観世音ほさつを信  
仰し奉るに其節只道の恐ろしきに観  
世音菩薩の名号をとなへしあるきしが  
観世音の御たすけにあひ奉り我身に

(36ウ)



替らせ給ひ疵をうけさせおはします事

のもつたひなや有りかたやとかんせいも諸  
ともでありかた涙にくれにけるかくのごとく

さんけ有うへはみやなり殿の罪もきへぬ  
へしといふみやなりは其場にてすぐにも

とよりを切はらひかく発心いたすなりと  
てかんせいにねんころにいとまこひして

それより丹波にかへり女房には一生を過す  
程の財宝をつかわしあひたひにて離別

しさてのこる田地諸道具家やしきまで  
売払けるに大身代の事なれば金ぎん

は元より有合すうへに此うりはらひ  
たる代金をもつて観世音ほさつの堂

を建りうし娘のほたひかつは是まで  
つくし罪とがのほたひのためといふ事

にて寺号を菩提寺とつけ則ち我  
家の跡に建立せし本堂聖観世音西

国二十卷番丹波の国桑田郡穴穂の  
観世音是なり

此観世音大けさの疵有るか妙なり村  
上天皇の朝応和式年に建立なり

(37オ)

(37ウ)

(38オ)

御詠歌

かゝる世にうまれあふみのあなを  
やおもわてたのめ十二へ一こ憂

かゝる世にうまれあふみのあなをやと  
いふ心は釈迦如来の御説法におくれみ

ろくほさつの出世には先たち二仏の  
中げんゆへたすけてくるゝ人あるましと

いふ心にてかゝる世に生れ合せたる身  
のうへをあなうたてやといふ事にてあ

なうやといふ心にてよみし他  
心通といふて人の心を知り給ひ氣に

よつて法をとき給ふ釈迦如来の御身  
はちいさくも又すましく大きにも成

らせ給ふ折には女にも成り給ひてすゝめ  
たまふ事自由なれば御すかたをかへさせ

て成りとも助け給へと末世なりもし仏  
ものいわすしよきやうに口なし説法あり

同じほんふの出家ゆへあなうやとなり  
穴穂の観世音ほさつの御疵年久しく

いへす今におゐてうみ血流れたまふ  
とて御開帳いたせは絹切にてぬくひと

(38ウ)

(39オ)

りて拜ませ給ふ今にかゝる事はまつせの  
証拠とし邪見のものにしめし給わん

との御方便御済度のためか

爰に天竺国のある所に蓮華女といふ

けいせいあり此親方仏法を信じ釈迦如  
来の御弟子をまねぎ法をきゝけるに

(39ウ)

かのけいせいともをよひ出して此ものどもの

罪ほろほしの法義を御きかせ下さるへし

と有御弟子のたまふはそれ女はつみふ

かきもの成るに其罪ふかき女の三千世

の女をつみをひとりしてうくる程つみ

ふかきはけいせいの身の上なり我よそ

ほいをもつて人の心をたふらかしいつ

わりをもつて人の身をそんじ親兄弟

に勤気を請させ家諸道具まで売払

國をもかたむけさせる程の罪兒に紅おし

ろひを付うつくしく花のとき我姿な

れと思へ共無常のへんみつ世のならひ

いつをも知らぬ命なればうかゝといつ

までも其通りとおもわすつとめの中より

仏法を信すへしとこまゝと示し給ふに

(40ウ)

(40オ)

(41ウ)

(41オ)

其中に女一人因縁有けるまことしめしの

通り違ひなき事かなと思ひ切て御弟

子と成り申さんとたいわんしやうじやにて

釈迦如来御説法と聞是へ行て御弟子

に成らんと出ける道にてきれい成る清水

あり我此姿も今しばしなりわか身の

すがたを見おさめと水かゝみに写し見

れば髪くるくとうつくしく我なが

らよひ器量とおもひしかまた迷ひ出し

あたら美しくし髪を切にても有まし

是より帰らんとおもひしかまたおもひ直し

ていやゝさもすへき事にあらすとおも

へともとかくに我かほすかたまよひてゆき

つ戻りつ心定まらず片わきに有る石

に腰をかけて思案するを釈迦如来は

靈鷲山の会上より御覽してふひん

や此ものあれ程までおもひ入りしに

引戻さるゝ残念さよいてゝたすけ

得させんとて如来の三十二相のかゝやき

たる御姿をば女の身とへんじ給ひれ

んげ女かやすみ居るむかふより来り給ふ

(42オ)

に蓮華女は是を見てきても〜としほ  
らしき女郎かなと見るうちにそばちか  
くなれば成ほと又是ほとに美しき  
女郎世にも有るものかと我身女ながら  
も見とれて思わず申〜と言葉をかくる

(42ウ)

彼女房来つてわらわが事にて候やとい  
ふに蓮華女も立よりいかにもそなたへ  
かけし言葉なりわらはも此道すしを参る  
に女のひとりにて心ざびしければもしやく  
るしからすは御ともなひ申たしといふに  
彼女わらはも召つれしものに少し用事  
を申付あとに残しやかてには参り候半  
なれともひとりにてさひしく存せしに幸  
ひの御つれなりと悦ひてつれたち行に  
その物いふ声のしほらしさいわん方なし  
何かとはなしもてゆく内にこの女腹を  
いため出しことの外に苦しがるゆへにれん  
げ女はこはいかにせんとうろたへてめし  
つれ給ひし人は見へずこれは何とせんと  
あせりて介抱し身をもみ居るうち急  
にせりつめてたへ入ければ蓮花女は大き

(43オ)

(43ウ)

におとろきさても〜いたわしやかほどに  
うつくしき女郎のはかなき事これは  
何とかせんと見て居るうちに鳥飛来  
ひける追て見れとも中〜聞すしてくひ  
ちきるはらわた出てくさき事いふ斗り  
なし今まで我身よりうつくしき女郎と  
思ひしに此姿二目とも見られすわか身  
もやがて此通りよとさととりて夫より  
すぐに釈迦如来の御弟子蓮華比丘尼  
となり五百羅漢の内に入給ふ今は此やう  
にして助くる人なしともあなうやと  
おもふなよといふ心にて思はせんかため  
十こへ一こへといふ心なり弥陀の名号  
十声一声申ものはたすかるがゆへあな  
うたての世に生れあふ身と思ふまし  
といふおもはせなり

(44オ)

(44ウ)

普陀洛伝記 卷の貳拾弍畢

西国順礼  
三十三所 普陀洛伝記 卷ノ拾貳

(1オ) 西国順礼  
三十三所 普陀洛伝記 卷の廿三

目録

一 二十二番撰津国惣持寺觀世音

附り亀にのり給ふ子細の事

(2オ) 普陀洛伝記 卷の貳拾三

廿二番撰津国惣持寺觀世音

千手觀世音御長三尺六寸

變化童子作なり

人皇五十九代宇多天皇の御代宇多

天皇は近江の源氏の元祖也越前守藤

原の高房公西国の方へ御下り有り

此みきりは天下武家のさはきにあらす

して禁裏より諸国を御政道ありて公

家衆国名をつき手訳して國々へ下り

給ふ事なりこれによつて高房にも

(3オ)

西国へ御下り有りしに三歳に成らせ給ふ  
若君をつれさせ給ふて御下り有るこの  
御心は若君をたん生有りし御台所は

むなしく成らせ給ひ後の御台所を

迎へさせ給ふに継母といふものは高きも賤

しきもまゝ子にくむ情なき女心何のわき

まへもなき三才の若君をにくみたもふに

のちの御台にも男子出来させ給ひければ

猶さら三才の若君をにくみ死に給へかし

と心におもひにくみ給ふを高房公聞し

めしけるゆへ御留主の内をこゝろもとなく

おもひ給ひて西国へつれさせたまふにぞ

有ける伏見より御舟にて大坂へむけて

それより海路舟に乗り播磨の方へ行

給ふ獵師ともまなかつほの大きき程の

亀を引上人々あつまり居るを高房公見

給ひ慈悲ふかき殿にて鶴は千年亀は万

年のよはひをふるものにて有ればさだめ

て彼ものどもの殺すへきにあたひをつかは

し是へもち来れよ命をたすけつかはす

へしと仰ければ召つれられし家米の衆

(3ウ)

(4オ)

(4ウ)

かしこにゆき買取て殿の舟へ乗せければ  
我は仕合ものかな千万年のよはひをふる  
ともすてに命を取らるへきにたすけ得  
さすそよ万年ふるものなれば我子と盃  
をさすへしと仰せられさす盃済て我子  
をそく才に守れよかならず水底に居て  
うかみ出ぬやうにせよといひてはなちや  
り給へは三度ふり返り見てさも嬉し  
けなる有りさまにて水そこへずぶくと  
しつみけりそれより西国舟にて御下

(5オ)

り有り須磨あかしの景まことに名所の  
気色を御覧あり若君もきげんよく遊ひ  
給ふ情なきは人こゝろ此付くの女中に  
継母より小袖金銀をもらひ頼まれこの  
たひ西国にてよき折を見合せて海中  
にはめよとたのまれ欲にうつる人心浅  
ましくもきげんよくあそひ給ふをたが  
ひに目ませして西海にどんぶりと落し  
けるにあれよくといふにかひなく高房  
公は御身もあられすかゝるたくみにて失  
なひたるとも知り給わす高房か子を海の

(5ウ)

みくずとなしふかさめのゑしきとする事  
のかなしきよ所詮命はなきもの成らん  
日頃信し奉る初瀬の観世音ほさつは  
此時の事也せめて死骸を出してたひ  
給へとふしまろひて歎きたもふ処に  
はるかむかふの方に子供のなく声あり  
それゆきてみよとて伝馬舟にて櫓を  
おし立て行見ればふしきや若君は波の  
うへにつくばゐて泣居給ふこれはくと  
と悦ひかく程遠く流れ給ふにこれ

(6オ)

只人にてはあらず何事なく波の上に御座  
成さるゝ御運のつよさと申先々伝馬舟  
にいたきのせあとを見れば先達てたす  
けられし亀の背中へのせ居たり亀は  
若君のかせ給へは其まゝ水底へしつみけ  
り高房公は若君の何のけがもなく戻り  
給ふかゆへ御よろこひなゝめならすいわん  
方なし是ひとへに亀が恩をおくりしもの  
なからもまつたく初瀬の観世音ほさつ  
の庇護によるものなりとおのゝ御  
利生のあらた成るを有かたやたつとやと

(6ウ)

なみたを流し御悦ひ有る夫よりしてこの  
冥加御礼のため観世音の尊像を一躰

作り奉り度おほしめし京都に御帰りに有  
ても禁庭の御用しげきかゆへにその御  
沙汰なくおほし召ながら延引す其内に  
高房公御病氣につかせられ御死さまへ

(7オ)

に若君を御そばへ召させられ我いひ  
置事を聞置て観世音の尊像を一躰

作り奉らるへし其方西海の波の内にし

つみしを観世音ほさつの御利生にて

命たすかり亀の背中に乗居たりこの

礼に観世音の尊像をつくり奉らんとお

もひ居たりしに其隙なくして我は死

する也其方此御縁をわすれず長谷の観

世音を信仰して新仏を一躰つくり給ふ

へしと遺言有りしを子心におほへたま

ひ御成人有りて山陰の中納言と申て

吉田の先祖也その頃きやうさんといふ唐

人のほり居る東寺の鴻臚館にて御もて

なし有りしか今こうろくわんたへてあら  
す山陰の中納言は唐音をよくおほへ

(8オ)

給ふ御方にて此きやうさんにむかひ何か  
と御はなし有りしおりふしあのかたに  
霊木は有るまじきやかねて観世音を作

り奉りたしとおもへともよき木なく候ゆへ

何とそもとめ申たしとあれば唐人聞て

成ほどあの方青龍山のぶつもん院と申

寺にせんだんこうぼく赤せんだんあり

たけ三尺六寸まわり沓尺八寸あまり

なりといふになにとぞ買とりたしい

かほとこの事にてたるべきやと有れば

あの方に金銀すくなき所ゆへ日本には

たくさんなり何程の事にもなし金

百両遣はされたららんにはのほし申さんと

そんし候といふそれは心やすき事也とて則

百両をわたし又外に百両取出して是は

その方への礼なりとて渡し給へは

程なく登せ候はんといひて金子貳百

両を受とり唐土へかへりふつもんいんの

大衆に逢ひて大日本山陰中納言殿仏

躰にきさみたく候間これの赤せんたん  
をもらひのほせくれよとて金子百両

(8ウ)

(9オ)

(9ウ)

請取かへりしなり百兩はすなわちしどうに上るなり中納言に御約そくいたし候ほとに此木をたまわるへきよし申ければ成程渡すへしとて用意するに帝王此よしを聞給ひて赤せんた人を日本へのほす事は無用なりとおしみてあの方の津く浦くの舟問屋へふれを出しもし赤せんた人をのほすものあらは急度曲事に申付へしと有るゆへいかにして

(10オ)

ものほすへき仕方なししかればとてのほさねは日本にて金子貳百兩うけ取かへりたればのほさねはもろこしのはぢなりとおもへとせん方なしこれによつて夜ふけて此木を海ばたへもちゆき書付をしたゝめけるは此赤せんだんの木長さ三尺六寸まはり壹尺八寸余にしてかたちけたなり大日本国山陰中納言殿の方へつけ仏鉢と成す所也海上なんなくわたり給へと書付て此木はわれ大日本国の山陰中納言殿へやくそくしのほせて仏鉢と成す処也

(11オ)

仏法おうごの諸天善神けんろう地神風神水神二十八部衆海上を無難に大日本国へ渡し給われと祈念して海中へさんぶとなけ入たり山陰中納言殿も唐人へきやうさんも誠に心ゆへ此木播磨の国明石の浦へ波にゆられてよせきて夜に入ればくわつくと光明光り渡りければ浦人ともふしんを成し此木を引あけるに何やらん書付あれとも唐人の書たるものゆへによめす何にもせよ御地頭へうつたへ申さんとて都へのほりけるにふしき成るは此明石の地頭則ち山陰中納言殿成り明石の浦人とも右のおもむき申上げはいかさまにもふしき成る木なりすこし心おぼへの事もあれば中納言殿直に御らん成さるへしとて御馬に召れて明石へ下らせ給ひさてかの木を見給ふに唐土のきやうさんに約そくせられし所の赤せんたんの木なりいまだ仏にきざまさる先にかゝる寄瑞の有る霊木有かたやと

(11ウ)

の事もあれば中納言殿直に御らん成さるへしとて御馬に召れて明石へ下らせ給ひさてかの木を見給ふに唐土のきやうさんに約そくせられし所の赤せんたんの木なりいまだ仏にきざまさる先にかゝる寄瑞の有る霊木有かたやと

(12オ)

思し召からひつに入荷になわせ西国海どう  
くか路をのほられ今の惣持寺の処にて  
休ませ給ふにからひつを荷にひしものとも中  
納言殿より跡あとに立けるに殿とのには餘よほと行ゆき  
給ふへしおくれはあしからんと立たちより  
からひつをになひあくるにはへつきたる  
ことく何百貫目のおもさも知れずとかく  
すれとも中ちゆうかき上かみべきやうなければ

(12ウ)

せひなく中納言殿帰かへらせたまひかき  
上かみせて御覽みかん有るに事あたわす靈木れいぼく  
なればかゝる事も有るへしとて中納  
言殿からひつにむかひうやや敷しき此この所ところ  
靈地れいちとおほしめしとまり給わんとの御  
事と存し候しかし材木さいもくにて此所に置奉  
りては人の信仰しんぎやうもなしの仏ぶつ躰たいにきざみ奉  
りまた此所へうつし奉らんする間聞し召  
わけられ下されひとへにまつ京都へ御入  
下さるへしと仰せ有りてさてみなよ  
りてかきあげ奉るべしとありければ  
みなよ立たちよりかき上るにかるよと上らせ  
給ふ中納言殿はそれよりみやこに御婦かみ

(13オ)

(13ウ)

りなされ宇多天皇へ奏聞ありてよき  
仏師にきさませたくおほしめしけれ  
とも是ぞといふふつしもあらずこれゆへ  
に大和の国長谷寺へ御参詣みまげなされて  
よろしきふつしを御引あわせ下さるへし  
と觀世音へ御ねかひ有しに七日に当る  
夜の御告みつけに朝下向あさけむかひのせつ十四五才さい  
はかりの童子どうしに逢ふへし是をたのみ  
申へしこれよきふつしなりとの御夢想みむそう  
有りかたくたのもしくおもひ給ひて御下みけ  
向有るに果はたして十四五歳はかりの童  
子どうしにあひ給ふ中納言との御覽有るに  
餘あまりにきたなきものなりさりながら外ほか

(14オ)

にさもと思童子しどうしもなければ是成る  
へしと思召あの童子どうし是へよひて見給ふ  
に着たるものは破れつゝれたり髪かみは赤  
かしらにてかき乱みだし顔かほからだはよこれ  
土つちなともつきたり先其方は何もの成る  
そと仰せあれはさやうに思ひ給ふ其方  
は何人なにびとそといふ我われは都山陰みやまのかげの中納言  
なるか又さいふなんしはいか成る事を成

(14ウ)



すものぞとあれは我は仏を作るもの也

といふ然らば観世音の御夢想也たのむへ

しとそれ乗物にのせ来るへしとおゝせ

けるゆへあのわつばくわんたいものとおも

へとも中納言殿の仰せなれば乗物に

のせて都へつれかへりければあのものは

観世音はさつの御告にて仏をつくる

童子なりと仰けれども皆々がてんせず

初瀬の観音の御告と仰らるれとも

よく／＼思召ても御らんせよ大切成る霊に

木をあんの年もゆかざる童子もし少し

小刀をつけそんしたる時はもはや替りの木

とてもなければあぶなき事なりと何れ

もかく申上げるとくち／＼にいへは中納言

殿もいかさま皆いへはそこも有りとしあん

し給ふ童子は笑らひ出し我仏を得つ

くるましとてみな／＼わらひなすと

見得たり我好んて来るにあらすたのまる

るかゆへに来りたるなり上手にてはなけ

れとも夫程にうたかわるゝ事ならは何に

ても木を出さるへし細工を見せんといふゆへ

(15オ)

(15ウ)

(16オ)

しからはとて有りあふ木をあてがへは

風呂敷つゝみよりのみ小刀を取出して咄し

をしなから此小刀を遺ふてはなにをほる

とも見るへすたゝひらり／＼とつかふありさま

そのはやき事いふはかりなし人々は此駄

を見ていかさまにもとおもふうちに十一

面観世音の尊像をきさみて此手きはにて

くるしかるまじきやは只其あらましの

細工成らん今すこし念を入たらはよろし

かるへしとて差出すを見るに手きはもよ

ろしくいと殊勝なる十一面観世音の

尊像也中納言殿は是を御覽し大に悦

ひ給ひ此上の手際もあらしいよ／＼きざみ

給われと有りければしからは一間四面の別

家をこしらへらるへしとてあらたに別家を

かまへさせ此内に入内の方より四方をしめ

かならず此そばへ寄人も寄来る事あるへ

からず食事は穴をあけおき内に棚あれば

それへ昼時／＼に飯を茶わんに一盛つゝ

乗せおくべしといひければ三七日のあひた

教へることくするに三七日目の夜半のころ

(16ウ)

(17オ)

(17ウ)

中納言殿のまくら元にて大音をあげて  
 いかにか黄門兼てねかひ申されし観世音の  
 尊像成就せりはや／＼拜し候へと有しかは  
 おとろき起てふしきや只今たれとも知らず  
 観世音の尊像出来させ給ふあひだはやく  
 拜めよとありとていそき彼別家にゆき  
 て見給ふに四方ともに皆ひらきありて  
 彼童子は見へす千手観世音ほさつ亀を  
 ふまへ給ひてそうこうゑんまんと出来させ  
 たまひゑみをふくませ給ふことく御面像  
 中納言とのふしおかみ給ひやかて観世おん  
 ほさつの御しめしありし靈地成れば  
 とて撰津の国堂を建惣持寺と名付  
 しなり惣持といふ事は仏説の内に有  
 る名なり変化童子の作御長三尺六  
 寸京都吉田の亭新はせ寺の十一めん  
 観世音ほさつは此童子の是にてよき  
 かとて作り給ふ所の尊像なり惣持寺  
 と同作にて心見の観音と申なり

(18ウ)

御詠歌

おしなへてたかきいやしき惣持寺の

(19オ)

ほとけのちかひ頼まぬはなし  
 此御詠歌はさして別にいふへき事も  
 あらず只歌のとおりのお心なりおしなへ  
 てとは上天子より下万民に至るまで  
 おしなへて仏の御心にへたてはなし人間  
 は本より信有る御方はおもんするはつな  
 れとも貧窮の人はあなどり富貴成る人  
 はうやまふやうなる事自然とへたつる  
 なり

(19ウ)

いやしきに情へたつるもの成れば  
 賤かふせやに月はやどらし  
 この歌のことく仏はへたてなし乞食にても  
 念仏申て極楽へ行時はまくら元へ三尊  
 御来臨二十五ほさつ御出なさるゝなり  
 しかれば惣持寺のほとけのちかひたの  
 まぬはなしといふこゝろなり

(20オ)

西国順礼 普陀洛伝記 卷の廿四  
 三十三所 普陀洛伝記 卷の廿四

普陀洛伝記 卷の式拾三畢

目録

一 式拾三番撰津国勝尾寺觀世音

附り清和帝勝尾寺へ行幸の事

(21オ) 普陀洛伝記 卷の式拾四

二十三番撰津の国勝尾寺觀世音

御長八尺妙觀、仏師と變化

童子拾八人の作なり

(21ウ) 開山せんちうせんさん二人の僧なりもと  
ふた子にて有るゆへ兄弟といひながら  
同年なりいとけなき時七つ八つの時より  
父母にねかひ給ひ二人共出家と成り給ふ  
親御はよき師をたのむへしとて天王寺  
のゑいたんの弟子と成す此兄弟一を聞  
て十をさつするれいしゆんはつ成なるを  
見てよき弟子を取たりとよるこひた

(22オ) もふに此其人おりくは片すみにてなに  
やはなし合てすまぬ顔つきにて有りし  
か是はゑんりの心にて浮世をきらひ  
未来成仏のねかふ心のふかきなりよつ

てはなしあひ只成仏の事いひての

事なり法然上人の仰られしまことの念

仏の行者は二すねすねて見ゆると仰

有しはせんちうせんさん二人のときをい

ふ然るに十九才のとき二人共師の前に出

て御ねかひの義師の恩のをもき事忘るゝ

には有らす御そはにてつかへ候はつなれ共

我くにはちと望みの候ゆへ御いとまを

給わり度候と有ければ成ほとこのぞみ

有るならば何方へ成ともゆかれよ兩人共

れいりしゆんはつもの我に過たる弟

子なり然るゆへもはや是までとおもひ

外に師をとる心得もつとも事也我さ

らく恨むる心にあらす何方へなりとも

ゆきよき師あらはつかへられよとあれば

こは勿体なき仰かな梵天帝釈の御罪

をかふむれば師を見限りたるといふや

う成る心にはあらずねかひと申はとかく

世の名利をいとひいか成る山の奥にも引

籠り柴の庵をむすひ觀念したく  
存候とあれば成ほともつともなからそれ

(23オ)

(22ウ)

(23ウ)

ならはまた早ししやくまくの戸ほそを  
しめ居るはいと殊勝なれと若くもあり  
またくはやしとていとま出す兄弟三人  
はとかくねかふてはいとま出すとかかひに忍

ひ出て諸方あるき山また山にわけ入今  
の勝尾山に行給ふ其ころは爰を勝尾と  
はいわす只の山也しに峯に五色の雲添

へ五色の光り有りければ此やまこそは靈  
場也とわけのほりて柴のいほりをむす  
ひ爰をしやくまくふわんしやう也とて

(24オ)

籠り給ふ此五色の雲光明とも凡人の

目には見へす浮世をいとひ是程におも

ひ入たる人の目には見ゆる也今日念仏

をとなふるものにはすてに三尊の如来

光明をはなち給へとも凡人の目には見

得すある時せんちうせんさん此山を行どう

しめくり給ふに奥の院のうしろ此山

のみねはんにやかみねといふ所へゆき

て見給へはふしきや女とも見へ男とも

見得て美しく十六七才斗りの年頃

にて髪はなかくとして此所に四面の青石

(25オ)

有るに座禪のていなりせんちう兄弟不

しんをなし立よりてそれなるは男女のわか

ちも見へず座禪のていはいか成る人にて候そ

ととひければ我は光仁天皇の皇子にて

名はかいしやうといふもの也と仰ければ二人

は大におとろき飛しさり頭を地に付

人皇四十九代光仁天皇の御子桓武天皇

皇の御兄御なり時に皇子仰けるは我当

今光仁天皇の御子かいしやうと生るれ

とも仏法にこころさし有りて内裏をしの

び出此所に来るに峰に五色の雲たれ引

有りしゆへ是こそは我座禪所よとこの

処にのほりて座禪をする事既に四

十日なり禁庭の采花は何かはせん松

ふく風の音夜半にすむ月をわか友と

して今日まで心をすまし居るに僧達

はいづくの人そと仰有るにあら勿寐な

や一天の皇子として雨露の御凌きこそ

とてもなくかやうの思召こそ有かたけれ我

くはせんちうせんさんとして此山に庵りをむ

すひて誠に雨露をふせくまでのいほり

(25ウ)

(26オ)

なれともまつく夫へ御供仕るべしこれに御座有りし事ゆめく今まで知らずして

御苦勞あそはされたりと中せは天竺

まかた国のあるじ淨飯大王の御子悉

達太子は天子の位をつかせ給ふへき御身

にて十九才のとし内裏をしのひ出させ給

ひたんとく山にわけ入あらへ仙人につかへ

させ給ふ及はずなからわれも御跡をつき

成仏せんとの心さしなりと仰ける両僧は

なみたをなかし光仁帝の御子と生れ十

善天子の御跡をつき給ふへき御身にて

何のくらし事もなく綾羅錦繡にまと

われて風にもあて奉らぬ御身のかゝる御心

さし有かたくこそ候へ然るにけふまで御食事

には何を召上られ候やといふ爰に來りて

三日斗にてや有りし鳥三羽毎日本の実

をくわへ來りあるひはさばをくわへ來り

てあたへける是を食して空腹なる事な

しと仰有る鳥は熊野の三所権現の御

まわりにて毎日く供御をはこひ候事と

存し奉る是もつて未曾有の事也先々

(26ウ)

(27ウ)

御供致さんとかいしやう皇子式人の僧

にいさなはれ庵りに入給ふかいしやう皇子

せんちうせんさん三人の開山なりとする所

なり禁庭には皇子見へさせ給わぬゆへ

光仁天皇宸襟をなやまし給ふ下々にて

さへうろたへ手分してさかすましていわんや

天子の皇子の御子となれはいか成る事

そとて下くまでおとろき奉つりて国く

諸方人はしこをかけてたつね申け

るに此山におはしますよし知れければ御門

のおほしめしには左程まで思ひ入たる事

ならば内裏へかへし入たりとも爰に居る

心は有るましその所に望みの通り諸

堂を建へしとの勅命にて御建立有本

尊は弥勒はさつの像にてみるく寺と

名付し也かくてせんちうせんさんの兩

僧はかいしやう皇子にむかひ御名残お

しくは候へとも我く兩人は成仏の時

節到來なれば御いとま乞申奉るとあ

れは名残をしの兩僧たち我も追付ゆく

へしかならず座をわけてまち給へと仰ける

(28オ)

(28ウ)

我々もまち申とそれより山にのほり西

にむかひ合掌あれは紫雲たな引来つ

て兩僧を引つゝみ西方へつれ行ける是

現在なりみな此からたは死して置いてゆく

に此二人は即身成仏なり奥の院に金仏

の大日如来其側に西方のまつといひて

枝はことく西へさしたる大木の松有

兩僧此松の木の上より西方へ飛給ひ

し松の木也といふ今は此松の木かれて

有り勝尾寺名木也其のち日向の国よ

りこうにちといふ坊主みろく寺へわざく

のほり是にかいしやう皇子のまします事

うけたまわりかた田舎のものは皇子の

御姿を拜み奉る事あたわす正しく如来を

おかみ奉ると存しわざく日向より登り

候なり皇子の御すかたを拜み奉りた

しといふ其通申上げれば則御前へ召出

さるゝにこうにち坊は有かたく御そはへ来

り正眞の阿弥陀如来と拜み奉りけるこ

うにち坊申やう日向の国にたけ八尺の  
ひやくたんの木所持仕候へとも是迄遣わすべ

(29オ)

(29ウ)

(30オ)

き方もなし其儘にてさし置候也御入用の事  
あらはさし上申たしといふにかいしやう皇子  
は其ころ講堂を建させ給ひ本尊に觀世

音ほさつを立たく思召所是さいわいなり  
しからは觀世音に作り奉りたし其木を  
われに得させよと仰有ければ有かたく

ねかふ所の事也爰にまた仏師妙くわんと  
申坊主有是をもとにさし上申へしとて

(30ウ)

日向にかへるさつそく此木と仏師妙くわんと  
共にさしあげけるに妙觀すなわち觀世音  
の尊像をつくり申せと仰付られしかは

かしこまり奉り然らは二間四面の別家を  
仰付られ下さるへしといふ七月十八日の朝卯

の刻いつくよりともなく十八人の童子出  
来り妙くわんと共に別家に入り内よりし  
め食事は人別に飯を仏器に一盛つゝ毎日

(31オ)

一度つゝまどのあなより入らるへしと申  
七月十八日よりかゝり翌八月十八日の夜大  
勢の音していかに皇子御望みに任せ觀  
音出来たりおかみ給へやといふ皇子起させ  
給ひて御らん有るにあたりにも人ななしふ

(31ウ)

しんにおほし召別家に御出有ければ千手  
観世音の御そはに仏師妙観ばかりかし  
こまり居て十八人の童子は一人もなし観  
世音をおかみ給ふに威霊れんくとして  
微妙の御そうかう有かたやとおもひ拜し  
給へは妙くわんは御望の本尊出来させ給へ  
は妙観御いとま申へしと手をあはせ合掌し  
つると見へしに其儘にて死したりふしき

(32オ)

の事ともなり妙観はすなはた勝尾に葬  
むり給ふ今十七日十八日とを観世音の  
御縁日とする事は此勝尾のくわんおん  
よりはじまりしなり観世音の御縁  
日は廿四日也十八日とする心は七月十八日  
十八人の童子出八月十八日にこの本尊  
出来させ給ふ十八日と十八人と観音に  
ゑん有る日なれば御縁日といふ心十七日  
を退夜として参詣するなり

(32ウ)

空也上人の所に出すかことくかねを叩  
き念仏申は人間五臓の四季にて  
東春木南夏火北冬水西秋金に当る  
なり五臓とは心肝脾肺腎なり六腑

(33オ)

とは胆胃大腸小腸膀胱三焦なり  
五臓の心は南火 肝震 脾坤 西  
は金に当る 肺は乾 腎は坎 西のかね  
に当る 鉦をたつき念仏申せは同気相  
もとむ自然の道なり念ぶつを申  
仏に成る 仏身は人間にかきらす畜  
るいむしけらにいたるまでみなく

(33ウ)

仏身あり此かたちはいか成るものぞと  
いふにかたちも色も知れぬもの也然  
ればわけもなきものそといへば神道  
に神秘といひて知れぬものあり人間  
六腑の内に三焦といふもの形ちも知  
れつ色も知れず然れとも名も三焦  
といふて六腑の内に入て有から医道  
の方にも知れぬ事あり春毎にはな  
のさき出る木なれどもさらはとて木  
の内に花に成るものあるかと木を  
わりて見るに花に成るものなし人  
間の仏身もかくのごとく仏身有  
れとも見へず

元亭げんてい釈書しゃくしょにみろく寺とあり然るに

其のち代よ座主ざすすばり給ひて六

代目の座主ざす行しゆんと申はちとう兼あ

備の名僧めいそうなりはんにやか峯みねに一層四方の

庵室あんしつを建て夫へ引こもり心をすまし心の

ちりをはらひ観念くわんねんのゆかと成し給ふ頃

は清和天皇せいわてんかうの御代みよなり長寛年中ちやうくわんに帝みかど

の御腦ごのうもつての外にて御なやみあそはし

ければ諸神社しよしんしやの御いのり貴僧高僧かうそうの御

いのり加持かぢさまなれともさらに其しるし

なし今は危あやふき程に見へさせ給ふとき

みろく寺の行しゆんはたつとき名僧めいそうなり

と聞し召て御加持ごかぢを仰付られなは御腦ごのう

御平愈ごへいゆう有るへしと諸卿しよきやうひやう評議ありてその

おもむきを奏聞そうもん有けるかいそきめしのぼ

せ候やうとの御事ごじなれば勅使ちよくしとして藤原

のすけ道卿みちせつ摂津の国みろく寺へ御下り

あれは弟子衆てししゆちゆう勅使ちよくしにむかひ申されけるは師

の坊ぼうは此山こゝおく般若はんにやか峯みねと中所ちゆうしよに庵いりを

建てそれへ引籠ひきこもり居られ候へば勅使ちよくし御

下向げかうのおもむきを申聞まうもんすへし平生へいせい我

(34才)

(34ウ)

(35才)

まゝなる人にて貴賤きせんとなくこひへつら

ひを成さす高官かうかんの御かたと申殊ことさらに

勅使ちよくしの御事ごじなれとも其差別まへつなくいか成

事や申されんひとへに勅使ちよくしの宥免ゆうめんこひ

ねかひ奉ることわり申さて勅使ちよくしすけ道

卿きやうを庵室あんしつへともなひゆく帝みかどより御勅使ごちよくしと

して藤原ふじわらのすけ道卿みちきやうはさて御越ごこし也

師しの坊庵室ぼうあんしつを出させたまふて勅使ちよくしの

おもむきを聞なさるへしといへば行しゆん

あらやかましや勅使ちよくし何の用ありて爰こゝに

来らるへき観念くわんねんのさまたけと成ればよき

ほとにあしらひ早はやかへすへしと申さるゝ

弟子衆てししゆはかしらをかき勅使ちよくしにむかひ師の

坊我ぼうわがまゝにて庵室あんしつを出されすと申せ

はくるしからすこひへつらふはあしゝそれへ

ゆくへしと勅使ちよくしは庵室あんしつにゆき給ひ行

しゆんうけ給わるへし帝みかどの御腦ごのうにつきさま

ゝ加持かぢ祈禱きとうありといへともかつてその

しるしなしみろく寺の行しゆんは名めいそう

なりと聞し召およはせ給ひ某を以て勅使ちよくし

としていそぎ召つれ祈禱きとう致されよとの

(35ウ)

(36才)



(36ウ)

御事也と仰わたされければ行じゆんかやうに庵りにこもりてこゝろのちりをはらひて観念座禪いたせは世のましわりへつらひをうるさくおもへはなり内裏へ上りたらは兎角のあいさつへつらひをせねはな

(37オ)

らすそれをこのこはかやうにいたし候身にもあらず仕官奉公ともなすべしそのうへ祈禱坊主にてもあらず然ればまいり申まじと有りければすけ道卿これはすこしあらだてゝ申へしといかに行しゆん普天の下卒土の内いつく王地にあらすといふ事なしこれ申さすとも知れたる事なり勅使をうけかたしけなくも勅命をかふむりまいるましとは学文をしたる行じゆんのいふへき事にあらず早々参内いたされて然るべしとあればいかほとにのたまふともかやうに引籠りし身なれば帝よりの仰成りともものほり申ましと有りけるすけ道卿六十六国の内にすんで勅定に背くといふは其罪はなはた重し是非とものはられすは成かたしとあれば日本

(38オ)

の地をふめは登らねはならぬとならほと三尺斗の竹の有しを地につき立その上にあかりこの地より去る事三尺なりと有るにおろかや行しゆん竹は日本の地に生したる竹にして竹の下もすなはち日本の地なりと仰ければめんとう成りとはるかに空に上り座禪して五十間ほうとうへより是にてもよろしかるましきやいまたよろし共なく唐土天竺へ成りともゆくべしと有ければ勅使も今はせんかたなく都にかへり右の次第を一一奏聞有りければ帝聞し召さほどの名僧祈りならば本ふくすへし然らはのほるにもをよはす彼地にて祈禱をせよと今一たひ下りて行じゆんにしゐよと仰せ付らるすけ道卿引かへしてみろく寺へ下り給へは此のほり下りに五日かゝり給ふに行しゆんはやはり空に座し居給ふ弟子衆もはや下りさせ給へとあればまた跡より何とぞ申参るべしとのたまひしに又勅使御下りなりと聞弟子たちはさためて

(38ウ)

(39オ)

(39ウ)

きひしき仰付られとおもひしにすけ道  
 卿は空中に居給ふ行しゆんにむかひて有  
 りし通りを帝へ奏聞いたす廻左程に  
 都にのほる事をきらひ候はゝのほるにおよ  
 はす其方にて祈禱いたせよとの勅詔なり  
 是ほと的事は帝の御脳を御祈禱あり  
 て御平愈有るやうにせらるへしとの給へは  
 是にて祈禱せよとの御事ならはかしこ  
 まり候法義を御たつとみもなくのほれと  
 仰下されはとて参るものにあらすなるほと  
 御祈禱いたすへししかしもはや御祈禱いた  
 すにも及ばず御平愈有へし此御脳は物の  
 怪なり今まで御薬加持祈禱物の怪と  
 見る物あらず我よくこれを知れり此七  
 条の袈裟水晶の珠数をもつて帰り  
 帝の御枕屏風に懸らるへししかしし夫  
 も道すから面倒に有るへければ是より  
 内裏へなげやるへしとて袈裟の上に  
 水晶の珠数を置都の方へなげ給へ  
 は虚空を鳥のごとくにみやこの方へ飛  
 行けり勅使も弟子衆も行じゆんの法

(40オ)

(40ウ)

力をおとろきしはし空をなかめ居るさ  
 て袈裟と珠数とは都に飛いたり  
 帝の御枕屏風にさつとかゝる音を帝  
 聞き召ぬるとたちまち御心よく今の音  
 は何成りしとあたりを御覧するに水晶の  
 珠数と籠相成る袈裟と御屏風に掛  
 り有誰かかけしと御せん義の所にすけ  
 道卿はや馬にてかへり給ひみろく寺の  
 次第奏聞あれはかたしけなや帝は袈  
 裟と珠数とをもたせたまひ有かたき法の  
 徳名僧かなとて戴かせ給ふそれより御  
 礼として帝みろく寺に行幸あれは  
 此よし弟子衆行しゆんに申されければ御  
 むかひとして出られしかはや帝は御こしに  
 召かへられて勝尾寺の山門まで御出あ  
 り山門の向ふに大石有とき行じゆん  
 御むかひに出て腰をかけられし石にてこ  
 しかけ石といふ帝は行じゆんに仰けるは  
 行じゆんあつはれ名僧かな我に勝もの  
 世界にあらず行しゆんはかり也いひはり  
 て都へのほらす爰にて折くれしにさつ

(41オ)

(41ウ)

そく平愈したりし事名僧の法力法は

かたしけなきものなり朕にいひかちし

行じゆん也と仰られ王に勝たるおほし

めしにて清和天皇の勅額御宸筆にて

勝王寺と遊はされしよりみろく寺を

あらためて勝王寺となへけりその

のちあまりもつたひなくおもひ勅額

はおさめおき勝尾寺と尾の字に書か

へてあり

(42オ)

普陀洛伝記 卷の貳拾四終

(42ウ)

西国順礼 普陀洛伝記 卷ノ拾三

(1オ)

西国順礼 普陀洛伝記 卷の廿五

目錄

一 播磨国教心入道の事

一 二拾四番撰津国中山寺觀世音

附り利生さまの事

(2オ)

普陀洛伝記 卷の貳拾五

播磨の国教心入道の事

勝尾寺の七代目にしようによ上人と

申てたつとき上人おはします此上人の

往生をうら山しくおほしめして法然上

人讃岐より御かへり此所にて四年かあひ

た念仏し給ふなりしやうによ上人は釈迦

一代一切経をくりかへしく成仏のさと

をひらき給わんと思し召成仏とくたつは兎

かく人にましはらすものいわす心をすまし

内外清淨六根淨々天地同躰と自然

(2ウ)

(3オ)

に成仏を得る事を知れりとして般若か  
みねに庵室をたて、十二年か間物いわす  
の行是成るへき事にあらす弟子衆見  
舞に行るゝにそれも外より音つれに  
て内に入る事ならず内よりは聞た受  
とつたといふ返答のかわりにりんをな  
らし給ひ寺の事は一の弟子しやう  
かんといふに申付をき十二年か間氣根  
つよく勤め給ひしに八月十五日夜しきり  
に庵室の戸をほと／＼と叩く

(3ウ)

らんと此うち人有るかとおもひ叩くと  
見へたり居るをは知らせんとりんを鳴ら  
し給へはいかにしやうによ其方は来年  
八月十五日夜往生有るの間此事を知らせ  
申せとの御事也われらは播磨の国かこの  
郡教心といふもの也只今極楽へ行ける也  
と有ければありかたしと戸をひらぎ見  
給ふに人かけみ得ず松の嵐の音聞へけ  
るさてこそ教心のじやうふつ峯の月最  
中なればさへ渡りしにはるかに音楽  
のおと聞へさてこそ教心の成仏有かた

(4オ)

(4ウ)

く今名僧とも呼はれる身に来年の我  
往生を告知らす程の教心名僧成る  
へしいそきはりまへ人を遣はし教心の  
つね／＼のつとめいかやうなる事ぞやうす  
を聞てわれもその通りにつとめ往生  
をあやかり申へしといそきはん若か峯  
より夜中に下りて寺にゆき弟子

(5オ)

しやうかんにむかひ早／＼に播磨かこ  
の郡へゆきくれよと有るにしやうかん  
何事にて候やとふにされはとよ今  
宵播磨の国加古の郡教心といふ人  
極楽へ往生するとして我庵室に來り  
て我往生も来年八月十五夜也と知ら  
せし程の知識いか成る日頃の勤にて  
ありしや其事を聞我も教心のごとくに  
勤めたしと有ればしやうかんは其まゝ  
支度して播磨へゆき寺／＼を尋ねあ  
るく内にわら屋の内にとあわれ成るな  
き声聞へしかはいか成る事そと内に入て  
とひければ夫此ころ死し跡に残りし  
妻むすめなり別れば是非なき事成

(5ウ)

れとも死かいを片づくる程の事もならぬ  
 困窮ゆへなげき候なりといふさて〜不便  
 成る事なりたひの用意も有れば少し  
 遣わすへしそれにてかたつけ申さるへし  
 まつ〜急かう成しつかわさん亡者はいづく  
 にあるやととへはむかふの石の上に候といふ  
 を見ればさもきたなげ成る十徳を着  
 たる禪門西にむかひ合掌して死し

(6オ)

居たりさらに死したるものとは見へす扱〜  
 是はけつかう成る往生かな仏在世にもかゝる  
 往生は有ましとしやうかんは拜礼しいか成る  
 徳在りし人にやと尋ければ一字も知らぬ人  
 にて平生方〜働らきに雇われ夫をもつ  
 て世を渡りし人なり名あれとも人々名を呼  
 ずして阿弥陀坊〜と呼れ候常に何事も念  
 仏を拍子にして仕事を致され候実の名は教  
 心と申せし也と中を聞大におとろきければ  
 かの女房何ゆへにおとろき給ふといふに我は  
 此教心といふ人を尋ねに来るものなりわ  
 れ師の坊の往生を此教心のげたまふゆ  
 へに教心常〜いかやうなる勤めを成し

(6ウ)

(7オ)

給ひしやきゝ参れとの事にてたつね  
 めくりし也あらたつとや有りかたやと  
 旅の用意の金子を出しこれにてよろ敷  
 葬りたまへ教心へ進ずるは如来へさし上る  
 もおなし事なりさて〜ありかたき往生  
 かなと礼拝し十徳の片袖を師の坊  
 へのみやけにと取りそきかへり思召の外  
 出家にはあらずいやしき俗人にて知れ

(7ウ)

かたかりしやうすかやう〜の所のものに  
 て一生一字も知らぬ禪門なり石の上に  
 西にむかひて合掌し日数ふるにかた  
 ちも其まゝからすもつゝかすと播磨に  
 て有りし次第こま〜とかたれば則  
 十徳の袖をも見給ひてしやうによ上人  
 は一字も知らぬ教心念仏にて合掌往  
 生する事われも念仏は有かたしとは  
 おもへともなまなか一切経を知りたるゆへ  
 かへつてまよひと成る観念座禅の心を  
 すましおのつと成仏とくだつを知るへし  
 と十二年の無言の行あたら年月を  
 念仏申さて暮らせし事の残念さ十二

(8才)

年の行を勤めしわれよりも一字も知  
らぬ加古の教心かすくれしとそれより  
して一向専修念仏こそとなへ給ひし也

御詠歌

おもくとも罪には法の勝尾てら

ほとけのたのむ身こそ安けれ

おもくともは我身は三毒ほんのふの罪重  
き身なれとも此罪のおもきよりも弥陀  
観音の法のちからにてほんのふの中よ

(8ウ)

りたのみ奉り候ものは御たすけあれば  
法の勝尾寺と罪のおもきより法の

ちからかをもくかつといふ心なりのりと

は法の事也然るゆへ仏をたのみ奉つり  
念つるものは成仏うたかひあらす此世  
にて悪事災難七なんそくめつ七福

(9才)

即生となれば何にもせよおそろしき  
事気つかひなくやすき身といふ

こゝろなり

勝尾寺になき薬師と申薬師如来お

はしますこれはかいしやう皇子御臨終  
の時七日の間なき給ふゆへかく名付たり

(10ウ)

二階堂本尊のあみた如来は元祖法然  
上人さぬきより御かへりありし時此山に  
て開山せんちうせんさん即身往生并に  
しやうによ上人けつかふ成る成仏をと  
け給ふ御山なりとて今の二階堂の

所に庵室を建て四年か間御座なされ

て御所持の一切経を此所に納め給ひ此所に

御座有りし時に歌に

柴の戸に明くれかゝるしら雲を

いつむらさきの雲と見なさん

(11才)

此心はしら雲を三尊廿五ほさつ御来迎  
の紫雲と見たやと思召たる御心の歌

なり此所に御弟子安居井のせいかくを召  
れて御説法ありしなり其せつ唐土の善  
導大師法然上人と御対面御物語り有り

し御すかた戸ぼそにうつり給ふ戸帳は

一位様より御寄附有るあふひの御紋付

御開帳いたし拜めは袈裟衣にて御手

を合せ給ふ御かけありくと拜まれさせ

給ふ上人其後都へ御出あり跡にて二階

堂つくりて堂建けるまことに礎か成る御

(11ウ)

開山法然上人の御庵室の跡御遺跡と

(12オ) いふは此二階堂也其外知恩院小松谷にても御遺跡と定めし御弟子中いつくを御遺跡と定め申へきやと御たつね有りしに仰有るには念仏をひろめ廻るわれなればゆいせきいつくと定むる所なし

たゝ念仏の声する所こそ何国にてもわれゆいせき也と仰られける元祖法然上人建

曆二年正月廿五日御臨終なり

勝尾山のうへにかいじやう皇子の座禪石あり此石のうへにおほひかゝりし傘のごとく松今にあり

(12ウ)

二十四番撰津国中山寺観世音

聖徳太子の御作則太子御建立

にて日本観世音霊場の初め成

れは往古は第一番の札所なり

撰津の国中山寺奥の院におほなか姫のみさゝきあり奥の院はむかし太子御建立の中山の観音堂也今は堂より十八町立の山へあかるおほなか姫と申は人皇十四代仲表天皇の御后なり仲表天皇は八幡

(13オ)

大はさつの御父なり八幡大はさつこそお神天皇にて御母は神功皇后と申奉るなり

ひらたく申奉つればおほなか姫は仲表天皇の御先妻にて神功皇后は後妻也時に聖

(13ウ) 徳太子大和の国いかるかの内裏南殿に御座成されしとき御夢にひとりの天人女官達を召つれられて天くたり給ふを

(14オ)

太子はいか成る天女にてましますそと仰有りければ天人のたまひけるは撰津の国に山の形ちさんこのことく観音の淨土有縁の霊場ありけれども神国なれば仏法に心さすものあらず我其霊場をとく知るといへとも誰に知らするものなしそれゆへ是まで過し来りぬ末世の衆生さいどの観音淨土一たび参詣するものは三悪道をまぬかれ地獄におつましかゝるたつとき所うつもれ有る事歎かわしくおもひそなたは仏法帰依有る事をよるこひかく告知らしむるなりこの所に十一面観世音をつくり奉り観音霊地と成らは末世有縁の霊場成るへしわれはおほなか姫なりとの給ふと御覽し御夢さめそれ

(14ウ)

より太子は甲斐の黒駒に召れ調子丸阿曇のいちいを召つられ今の中山の手まへに今きんりうじといふ所ありこれまて御出なされ山くを御覽有るに紫雲たな引かゝる山あり是そ霊場也とてわけのほり給ひて山のけしき御覽有るに峯

(15オ)

三つ有りて三尊のかたちを表したる山也と思し三つの中の峯にて御馬に召れて見たし給ふに川の流れ山の腰を廻り誠にをほなか姫の御をしへのことく爰そ末世うゑんの霊地なり天竺にて釈迦世尊御説法有りしぎじやうせんむこ川のなけれ釈尊御入滅のふれぬせんともいひつへし有かたや太子御一代内の御悦ひにて山のいたゞきの岩の上に御馬に召れて乗とゞめ御らん有し其時の馬の足あと四つ上手のほり付たることくひつめの跡岩につきてあり此岩は奥の院の御陵より又一町程上へのほりし所なり太子は此駒に召れ富士禪定をなされし名馬にて一日に千里も掛る也夫より太子御直作の十一面観音を本尊と

(15ウ)

しからん御建立ありて堂供養の時太子御馬に召れ中山の境内に入らせ給ひかひの黒駒はひさをおり頭をうなたれける此馬はかしらに角一本有りしか此角おちしなりいよく霊地なり畜生なからもひさを折かしらをうなたれ角を折たればとてちくこくざんとも峯に紫雲たな引なれば紫雲山ともいふなり馬の角の霊宝とて有り扱やまのみねさんごの如く三つ有る中の山を中

(16オ)

ようとして中の峯に観音堂を建給ひしゆへ中山寺と申なり是日本観世音堂霊場のほしめなり住持は西国第壹番と成したる也大悲水といふ水あり是観音大悲の水なればとてかくいふは甲斐の黒こまの足を洗ひし川すなわちあしあらひ川といふ今此中山二十四番に成しは花山院入覚法皇の熊野三所権現の御むそうにてたへたる西国三十三所願礼を河内国石川寺仏観僧正御案内にてめぐりはしめ給ひしより那智山老はんと成りたるなり此事は上巻にくわしくいつる

(16ウ)

(17オ)



ゆへに爰こゝに略りやくす

中山寺は日本観音の靈場れいじやうのはしめ

なれはいにしへは第一番と定められ長谷のとくどう上人あらいま焰魔大王たむろより授り給ひ

し宝印ほういん一度いちど西国順礼じゆんれい歩みをはこびし

ものは地獄じごくに落すまじと焰魔えんまの詠文じゆもん

なり是中山におさめ給ひ石のから戸

入有る所参れば右手の方にあまの岩

戸のことくにして其奥そのおくに石のから戸

有て是におさめあり

中山寺木尊十一面観世音じゆんじゆう一疋いちはちに乗

り給ふ右のわき立十一面観世音象しやうに

乗り給ふ左のわき立十一面観世音獅子しし、

にのり給ふ此脇こゝ立くわんおんは熊野権現くまののりけん

の御告ごつげにてうんけいたんけいの作さくなり

いにしへ中山の観音へあけし米銭まいせんをか

たけて山さきより日くれて中山へかえる

出家有りしに其ころは山さきにおゐは

き有りて九人まで出来りかの出家をは

き米銭まいせんをうはひ取命といめはかりはゆるす也

とてつきはなし九人の盗人ぬすびとは東の方へ

(17ウ)

(18オ)

(18ウ)

かへるにむかふより火打石ひうちいしほど成る石を

はらりくとうちかければ一向東いっかうとうの

方へゆかれす西のかたへかへればまた西

の方よりも打かけ南北四方より段だんく

に打うかけられてかしらかしらを打うれ目をつ

ふされ今は一足いちあしも逃にげられす九人のもの

おもふは是奉加このがの米銭まいせんを取しゆへ観音

の御罰ごばつなるべしといへは御ごわひ申上まをてかへ

すへしといへは石いし少すくなく成りて少しやむ

さてくおそろしき事かなとて彼出家かのけを

たつね出し奪うばひ取りし物をことごとくかへし

御託ごたつを頼たのむといへは出家おもひもよらすとら

れしものをことごとく取戻とどし是ひとへに

観世音の御利生ごりきうなりとありかたたく又

かのものどもかくのことく心の改かたまり

たるはこれまた有かたき事成りと手

を合せ南無大慈なんむだいじ大悲だいひの観世音ととなへ

ければたちまち小石もやみければ九人

のもの心を改かめ目のまへ御罰ごばつをうくる

程ほどのわれく死ししてはいかやうの責せきを受うん

もはかられす今より観音をしんし念仏ねんぶつ

(19オ)

(19ウ)

(20オ)

を申此悪業をほろほさんと九人ながら  
発記して髪をきり中山にて出家と成りし  
か此仲間(なかま)に山崎(やまざき)の庄屋(しやうや)ありて此事を聞(き)さ  
て〱九人のものは日頃(ひごろ)思ひし程(ほど)の者共(ものども)に  
あらず是(これ)しきの事何のおそろ敷事(しよ)有らん  
何と心のかわり坊主(はうず)には成りたるそ我(われ)は  
さらに心おくせずとて悪(あく)とうも増(ま)りしか  
つるに煩(わづ)らひ出しけるか熱病(ねつびやう)にて苦(くる)しみは  
ねあかり虚空(こくう)をつかみ死するまへに口は  
両耳(りやうみみ)までひろかり目はむき出し歯(は)をくひ  
しばり只(ただ)をあかくしてくるしむ体(てい)さな

(30ウ)

から鬼(おに)のことく人も思ひてそはへ寄(よ)るもの  
なくしてくるい死(じ)に死(し)したりしかこのも  
の〱執心(しゆしん)中山の觀世音(くわんせいおん)をうらみ九人は  
たすけ給(たま)ひしに我(われ)はくるしむを受(う)けると  
おもひし一念火(ねんひ)の雨(あめ)と成りて毎夜(まいよ)〱山  
ざぎより中山へゆきは山崎の火と今に  
いふ是也かゝるもの末世(まつせ)の見せしめにとおぼ  
しめし御心(ごこころ)にてや有るらん今に浮(う)かみ得(え)ず  
して山ざぎよりかよふなり  
多田(た)の藏人行光(くらんとくみつ)と申は中山の觀音(くわんおん)を

(21オ)

深く信仰(しんぎやう)有りしゆへ御台(みたい)にも參詣(さんぎ)致(いた)さ  
れよとあれば御台(みたい)はかつて信仰(しんぎやう)なけ  
れば參り給(たま)わす何とそ參らせたく春(はる)の  
花盛(はなさか)り中山の花にましたる花有(はな)るまし御出(ごで)

(21ウ)

あれよとの給(たま)へは然(しか)らば見物(けんぶつ)に參るへしとて  
ゆき光(みつ)も一所(しよ)に御出(ごで)ありてまつ〱觀音(くわんおん)へ參  
られよとこし元の御(ご)ともなひ申御參(ごさん)りあれ  
はこし元ともかねの緒(を)を取(と)りて御台(みたい)にあて  
かへは手に取(と)りて打(う)んとし給(たま)ふにかねの緒(を)御  
台(たい)の長(なが)きくろ髪(かみ)をくる〱と巻(ま)きて中(ちゆう)に  
つり上げれば人々(ひとびと)是(こゝ)をとおとろきさわざ

(22オ)

はいもうする行光(ゆきみつ)には寺中(てらちゆう)をたのみ觀音(くわんおん)に  
御(ご)わひあれば半時(はんじ)はかりして下(した)へおち給(たま)へは  
半死(はんじ)半生(はんせい)正氣(せいぎ)なくこけ給(たま)ふやう〱正氣(せいぎ)  
つきて乗物(のりもの)にいたき乗(の)せ御歸(ごかへ)りあれば何事(なにこと)も  
なく常(つね)の通(とほ)り也(なり)それよりして御台(みたい)も觀  
音(くわんおん)を信仰(しんぎやう)ありたひ〱御(ご)さんけい有り  
しとなり

中山觀世音(しやんせんくわんせいおん)七月十日(しちがつじゅうにち)千日(せんじつ)參(ま)りといふて  
毎年(まいねん)近在(きんざい)よりおひたしき參詣(さんぎ)也(なり)此(こゝ)日(ひ)  
は西国(さいこく)三十三(さんじゅうさん)所の觀世音(くわんせいおん)みな中山(しやんせん)へ御出(ごで)

## (22ウ)

有る也中山観音にはこかねのかきをあつかりたまひ此かきを西方へもたせ行給ふにこと／＼く観音極らくへ御出成さる是を年／＼大勢のさんけいの中より二人もおかみ奉るものあり今にかくのとをりなるにむかし此日にさんけいしたるもの申は何国ともなくたゞ今長谷の観音御出なりといふ声有て長谷の観音をおかみまた清水の観音御

## (23オ)

出なりといふこへ有るとおなしくおかむものありしかれば大勢御通夜の輩からおかむもおがまぬも手をあはせ南無観世音ほさつと申なり是今にこのごとく拜むものなりそれゆへ千日に向ひぬるとてむかしより参詣す有難や観世音をおかみたりといふもの有るに浦上左近といふ儒者ありて是を合点せず何をばかさね来るそやと信心をさまたけ居るにまたあくるとしも拜みたりといふもの有るゆへに左近は何とも合点ゆかす事かなとおもひて翌としの千日参りに

## (24オ)

いかゝしたる事と行て見届げんと女房にいふ然らはわらはも参詣いたさんといふいやとよわれは有かたくおもひてまいるにはあらすやうすを見とゞけにゆく也といへ共女房とかく一所にまいりたしとて子供をつれ親子四人中山へまいり見れば野も山も一めに御通夜の人あつまり念仏の声おひたゞし左こんおもふやうさても夜露をうけて毒らしき事なるにとおもひて観音の前にいたれば自然と有りかたくおもひ手を合せておかみけるにそれ只今六角の観音御出なりと大勢手を合せおかむ又どの観音也といふておかむ左近かつておかます女房いひけるは只今御出有りし観世音を拜みしといふ左近夫にても合点せずして居るに中山の観世音を先に立給ひわきたちの観世音跡より御出ありそれより三十三所の観音こと／＼くはるかに御あかり成され西方へ御出有るを残らず左近拜み奉りあら有難や忝けなしとふしおかみ是はとあり

## (24ウ)

いかにしたる事と行て見届げんと女房にいふ然らはわらはも参詣いたさんといふいやとよわれは有かたくおもひてまいるにはあらすやうすを見とゞけにゆく也といへ共女房とかく一所にまいりたしとて子供をつれ親子四人中山へまいり見れば野も山も一めに御通夜の人あつまり念仏の声おひたゞし左こんおもふやうさても夜露をうけて毒らしき事なるにとおもひて観音の前にいたれば自然と有りかたくおもひ手を合せておかみけるにそれ只今六角の観音御出なりと大勢手を合せおかむ又どの観音也といふておかむ左近かつておかます女房いひけるは只今御出有りし観世音を拜みしといふ左近夫にても合点せずして居るに中山の観世音を先に立給ひわきたちの観世音跡より御出ありそれより三十三所の観音こと／＼くはるかに御あかり成され西方へ御出有るを残らず左近拜み奉りあら有難や忝けなしとふしおかみ是はとあり

(25オ)

かたき御事成るに今迄諸人の信心を妨げ  
しなりもはや孔子もありかたからす  
此上何か有りがたからんとそれより親子四  
人も発心して中山の門前にわつかの  
庵りをたてかつへて死んでも極楽へ早く  
行たしと籠り居る人々聞て夫程の信心  
者ころす事もおしきとて近所より食事

(25ウ)

をはこひ毎日すゝめける一食にてあとはこ  
とわり明日下さるへしとてかへしける其後  
一人死し式人死し後には左近ばかり受て  
くひしか是も五六日ほと音せさるかゆへ近  
所のものとも寄り合て戸を明て見れば親  
子四人ながら西の方にむかひ合掌して  
けつかう成る往生をとげにける日数立て  
もかたちも替らずにはほひもなく親子四

(26オ)

人ならば合掌のてい殊勝にもまたあわれ  
なり近所の人々此体を見てかんし入我取  
置やらんかれ取置んといひて四人をすなわ  
ち此中山寺に葬ふり跡ねんころにゑか  
うあり四人の墓所今に此所に有る也  
かくのごとくなるゆへにいつくの観音も

七月十日は千日なり

(26ウ)

普陀洛伝記 卷の式拾五終

(27オ)

西国順礼 普陀洛伝記 卷の廿六  
三十三所

目録

一 中山目あけの如來

附り美女御前の事

(28オ)

普陀洛伝記 卷の式拾六

目あけ如來の事

中山寺に恵心の御作目あけの如來と

て小仏の尊像あり此如來のゑんきは

清和天皇の孫貞純親王の御子六孫

王つねもと鎮守府將軍の嫡男多田

満仲は老年に至りて摂州多田に引籠

まし内裏の守護天下の政務をは嫡

子摂津守源の頼光に御渡し有りて

是まで軍に多くの人を殺したる罪をつ

(28ウ)

(29オ)

くのわんとて発心ありて後世をたすから  
んと思召御剃髮の御ねかひありしに御  
門是を御ゆるしなし尤政務におひては頼  
光是をとり行なへは氣遣ひなしとい

へとも今にても禁庭にそむく者有ては  
頼光もいまた若き事なれば満中其  
時かけ引くして朝敵をしつめずんは然るへ  
からすと勅命下りしかゆへ是非なく思召  
しからは我替りに子供の内器量の

(29ウ)

ものをよりに出家致させたとしと御子の内  
四ばん目美女丸に仰渡されて中山寺の  
中の坊にせんくわん法師といふを師と頼  
みて遣はされける美女御前はそのうつくし  
き事女のことき美人成しゆへに美女  
丸とつけ給ふか其才智れいりしゆん  
はつ成る事たくひなしこれによつて満中  
御子の内にてゑり出し学文して後々  
は名僧とも成るへきものなり思召て美女  
丸へ仰付られける所に存の外学文きら  
ひ経文を覚へす出家をきらひ只山に  
て木をきつて太刀と成し同宿を相手

(30オ)

としてたゞ明くれ兵衛をもつはらとし  
てくらし給ひ寺中のものもてあまして  
居たり師のぜんくわんも外の弟子と同  
しやうに折檻もならず弟子といふても  
満中の若君ゆへ左やうにきひしくもて  
あつかふ事も成しかたく折には御異  
見あれども中々御聞入なくたゞ明暮  
兵衛のみ心かけたまひける御とし十

(20ウ)

四才なり此おもむき御父満仲ほのかに  
聞給ひ大きにいかりいそぎ美女丸を連  
来れと御使をつかわされければやかて美女  
丸来らせ給ふて御父の前へ出させ給へは出  
家致せよと申付しに経巻陀羅尼はよ  
みもせずして寺中の僧をてうちやく致  
すのよしもつての外なる悪事ともことく  
く聞知たり父か命師のおしへをそむ  
く事不届なり今よりして改たむへきやい  
かにと仰ける美女丸は仰せゆへ是非  
なく中山寺へ参り候得とも出家の義は御  
ゆるし下さるへし只今治りし世なれば  
沙汰いたすものもあらねども世の人々に

(31オ)

(31ウ)

命おしさに出家と成りたりとあさけられんも口おしくまた清和のなかれ満仲公の子として天下は御兄頼みつなれとも今にても敵たふものあらは天晴出てはたらき父兄に弓引ものは御馬の先に立ふさかり打死いたしゆ々敷はたらきして名を得ん事こそ本望なりとのたまへはこさかしきいひ事や親師の命をそむき言葉をかへし罪のあるものを其まゝにさし置は政道はたくし有るに似たりといかり給ひ御太刀するりと拔はなし

(32オ)

打かけ給ふ刀の下をはやくもくぐりするく庭に下り高塀を苦もなく飛こへ逃給ふ満仲公にはみれんなりたとひ一たん逃るとてものかすべきやいそぎたつね出せと仰付られしに人々さま／＼なため申により奥の御殿へ入給ふ美女御前はそれより御家来兵庫のすけ仲光か方へかちはたしにて御出有りけるに仲光大におとるきいか成る御事にやと尋ね申せばわれ父の仰付られし出家をきらひ兵

(32ウ)

(33オ)

術を心かけしか父の御聞に達し今日召呼れもつての外の御いかり也しかども我心底の通り有りのまゝに申上る所親師の命にそむく不孝もの只一打とふり上給ひし御太刀の下をくぐり是まで逃来りし也かくまひくれよと仰ける仲光承りそれは父上の御いかりはなはた御尤なり恐ながら出家を御きらひ有る

(33ウ)

も一通りは御尤のやうなれとも此世の敵をふせぎ給ふは頼光公なり君には来世の敵を引うけ給ひ御出家のおほしめし然るべし君御出家をとげられ名僧とならせられ未来の敵を打はらひ給ふか是また一方の大將軍なり左様に思し召御出家遊はさるへしその上に父君の御機嫌をうか／＼ひよろしく申上へしまつ／＼ゆる／＼と是に御座遊はされ然るへしとて一子幸寿丸を呼出し若君へ御目見へ致させかれを御ときと遊はし御用仰付らるべしと申上る扱満中公はきひしく美女御前の御行衛

(34オ)

を御せんきある所にたかいふともなく仲光か方に御かくまひ申居る事御耳に入りさて、未練成るやつかかな命を惜みて家来にかくまわれ居る事見下け果たる事なり仲光は主人の子の事

(34ウ)

なれはかくまひも致すへきものなりとて仲光を召れける諸郎衆ならひ居られし申へ仲光をめされいかに仲光俵美女丸を汝しか方にかくまひ置て介抱するよしたしかに聞たり主の子の事なれはかくまひ置しもことわりなからかものは親師の命をそむく不孝不道の罪有るもの也我なみくの身ならば其儘にしてさし置事も有らん成れ共天下の政道くらくなれば六十六ヶ国のてうくわんの身不孝の俵助け置事然るへからす其子不孝は目に見へす其外の事はきひしく致すと人々もおもわんなれば美女丸か首をうつて出せよと仰付られける仲光かしこまり奉り候しかし御言葉をかへすはおそれなからいまた御年

(35ウ)

も十五才に成らせられすまた御諫め申候は、御得心も遊はさるへし三代相恩の御主打奉る事もつたひなし先々といわせもはてす仲光只今申渡す通り汝しも主人の言葉そむかは不忠もの七生まで勘当すへししかしなから主人のかたわれと心おくる、事もあらん是にて討へしとて御太刀を遣はされたり仲光も此上は中上べきやうもなく御太刀を受とりければ満仲公は奥の御殿へ入らせ給ふ仲みつ御太刀をもち立も得ずしてうつむき居る諸郎衆は仲みつになんきの役目うけ取られ心中さつし入なりとくやみのあいさつしてみな、立にける仲光もかくては濟すと我家にかへり御殿より下りしまゝにて手をくみくつたく顔ものをもいわす有ければ幸寿丸父の前に手をつかへけしからぬ御顔つき御殿の御首尾いかゝの事に候やとたつねければ仲光の運命も今をかぎりなり今日御前にめし出され御かくまひ申したる美女御前の御

(36オ)

(36ウ)

(37オ)

首を討奉れとて此御太刀をつかわさる  
 仲光も一通り申上しかとも不孝のもの  
 をその儘置ては政道立すと仰せられ是  
 には申上へきやうもなく其御言葉をかへ  
 せは七生までの御勘当との御事討との  
 仰も御主討奉るも御主なり仲光主殺し  
 の罪のかるへからすそれゆへにくつたく  
 する也とかく申てもせんなし其方は若君  
 を御供申て都にのほり御兄頼光公より  
 御託言仰上られ下さるゝやうに取はか  
 らひ申しへし若君の御姿人見に立さる  
 やうに致し早々御供せよと有れば何  
 と又御身替りといふ事はいかにやと申せ  
 はそれも心付ぬにあらねともあなたのご  
 とくうつくしき生れ付のものなし若君  
 をおとし申せし御とかめ仲光申分に切  
 腹し濟へしと有るにそれにては猶心元  
 なしもしそれにて御濟しなき時は若  
 君の御命のほと覺束なし若君御命  
 なければ父上は犬死なり若君とわたくし  
 さきと烏雲泥のちかひなれとも同年

(37ウ)

(38オ)

成ればわたくしの首を血にてよこし何と  
 そまぎらし御身替りに立ならば私しは  
 冥加にかなひ候ものと悦び申候といへは仲  
 光よくこそいひたり成ほど汝しかいふ通り  
 一たん御助け申といへともまた御たつねあり  
 て御命なれば某は犬死その方御身替り  
 にたち満中公をあざむき美女丸死して  
 なきものとおほしめさは若君もなかく御  
 しのびなされ其方も天晴のさいご武士  
 といふものふとんの上にて死するは本意に  
 非ず戦場にて高名して死するをねかふ  
 なり夫にまさりし御身かわりでかしたりく  
 去りなから此年月我身の事は祈らず  
 子孫はんしやう倅幸寿丸天晴の武士と  
 名を上る程にと神仏を祈りしに今更  
 父の手にかけんとて十四歳まで育てしに  
 あらず今をかきりなれば母にもいとまこひ  
 してなかきわかれの旅路に行へしと有  
 れは母殿にはもはや御いとまこひは致す  
 まし御なげきを見てはなかき別れと思へ  
 はわたくしのよみぢのさわりとも成り候へ

(38ウ)

(39オ)



は御目にかゝるましとて硯紙をとりよせ一  
首の和歌を書残しける

あたし野ついに置へき露草の

身はさいわゐの命なりけり

と我名を歌によみかけて是を母へのいと  
まこひとしてさてくわたくしは果報も

の父の御手にかゝりさて討るゝ太刀は主

君の太刀なりしかなから父母にさきたち

御なげきをかけ候事御ゆるし下さるへし

外におもひ残す事さらになしはやく首

を御はね下さるべしと健気成るてい我子

なからも天晴の武士と成るへきものおと

おもへは思ひ切たる仲光もさすか恩愛の

別れに手もふるひ持たる太刀をからり

と落しふし歎けば幸寿丸は似合ぬ父

の御みれん時刻うつればはやくといふに

実にまよふたり面目なやと立あがり

おもひ切てふり上終にくびを打落

しすなわちうつわに入御殿へ持参し

御前へ出ければ諸郎衆なみ居られける

に仲光ははるか末座におしなをり若

(40ウ)

君の御首討申候御覽に入れ候とにせく

びなれば少し程をへだてゝ我身を覆

ひに成して蓋を取れば満仲そと御覽

し仲光でかしたりしかしみれん成るさい

こにてはあらざりしやと仰せける中くいさ

ぎよき御最期にて御座候ひしと申上

れはうなつかせ給ひ仲光重ねて此御首

はわたくしへ下し給はるやう願ひ奉る恐れ

なから御供養仕りたしと申上れば其儀はい

かやうとも心まかせに致すへしといひすてゝ

奥の御殿に入給ふ並居る人々さてもく

満仲公おそろしき御心わか子の首を見

て少しもかわらぬ御顔色にてちらりと

見給ふはかりにて入給ふ誠に政務を正し

給ふ天はれの大将軍我子にてさへあの

通りまして外のもの道にそむかばた

ちまち首をはねらるへしとおのくふる

ひ恐れけり仲光は先仕済したりと我

子の首に犬死させざりしとよろこひ我

家にかへり美女御前の前に出ければ仲

光かけふは幸寿も来らずさひしかりし

(41オ)

(41ウ)

(42才)

何国へか参りしと御尋ね有るに倅幸寿  
これにまかりあり御あひ下さるへしとて彼  
首を出しければ若君大におとろき給ひ  
何事にてかくは成りしと不便の事やと  
仰せあれば御父満仲公御いかりつよくそれ  
かしを御前へめされ若君を御介抱申よし  
たしかに聞し召れたりとて御呵りの上  
君の首をうち奉るへしとの御事御言葉  
をかへし背かは七生まで御勘当なりと仰

(42ウ)

付られぬ討てと有るも御主なり討奉るも  
御主なり何とて御首の討るへき君を落  
し参らせ申訳にそれかし切腹と存し  
極めしに倅幸寿けなげに御身かわりに  
立申さんとて覚悟いたし候を某かし手  
にかけ満仲公へいつわり君の御首を給わり  
しといつわり御覽に入し処倅が誠の心  
さしにてや御あらためもなく若君の御首  
と御らん相すみたればそれかしの安堵倅が大  
死ならざれば幸寿も無悦ひおもふべし  
と申上ければ美女御前さてくふびんなる  
次第なりかゝる様子におよひし事ならば

(43ウ)

何とて美女か首を打はせてなさげなく  
も幸寿を討しぞやとひれふし歎きた  
まひしかかゝるなげきの出し元我あやま  
りにて父の仰をそむきしより事おこり  
しなり今まで出家はずましと申つれとも  
幸寿丸かほたひの為に出家とならては  
叶ふまし扱く不便是非もなき次第かな  
とて夫よりして比叡山の横川きやうこん院  
の恵心僧都の御弟子とならせ給ひ名  
を深源坊と付給ひしか御父満中公の  
御見立にちかわす深源坊廿一才の御年  
比叡山第一の学者と成給ふさて其後  
満仲公の御やかたにて法事有りしに横川  
の恵しん僧都を御まねき有りければ  
恵心僧都かの深源坊を弟子の中に付  
ませて多田の御屋かたへ御出あり御法  
事おわりて満仲公仰らるゝは恵心僧  
都には諸々方々にて御説法有りといへ  
とも我長官の身にて是まで終に聴聞  
仕らす有かたき座敷の説法一座御聞せた  
まわるへしと抑有りければ成ほといかほとも

(44才)

何とて美女か首を打はせてなさげなく  
も幸寿を討しぞやとひれふし歎きた  
まひしかかゝるなげきの出し元我あやま  
りにて父の仰をそむきしより事おこり  
しなり今まで出家はずましと申つれとも  
幸寿丸かほたひの為に出家とならては  
叶ふまし扱く不便是非もなき次第かな  
とて夫よりして比叡山の横川きやうこん院  
の恵心僧都の御弟子とならせ給ひ名  
を深源坊と付給ひしか御父満中公の  
御見立にちかわす深源坊廿一才の御年  
比叡山第一の学者と成給ふさて其後  
満仲公の御やかたにて法事有りしに横川  
の恵しん僧都を御まねき有りければ  
恵心僧都かの深源坊を弟子の中に付  
ませて多田の御屋かたへ御出あり御法  
事おわりて満仲公仰らるゝは恵心僧  
都には諸々方々にて御説法有りといへ  
とも我長官の身にて是まで終に聴聞  
仕らす有かたき座敷の説法一座御聞せた  
まわるへしと抑有りければ成ほといかほとも

(43才)

(44ウ)

御聞なさるへししかし今程はもはや齒もぬげ物言申にくし其うへ年つもり覚へし事わすれかち也さいわぬ弟子の内に我はさて覚へし事を残らすおしへ置たるものゝ候へは名代に是をのへさせ申候へしとて深源坊に是にて何なりとも有難

(45オ)

く勘当の父の前なから出給ふ満中公をはしめ御台所その外あまた並居給ふ中を深源坊はをくせず打通りて高座につかせ給ひ往生要集の末の所をのべたもふ満仲公その外皆くかんるいずいきして有かたく思召さてく若き僧成るに天晴の学者といひ弁舌恵心の御弟子程ありかゝる僧を手に持たる親はさそ悦こひにて有るへしと仰ける恵心僧都は仰のことく親の身にてはさそよろこひ申へしと思召候やとあれはいかでか悦び申さて有へきやと仰ける然らば其子細を申べし此深源坊と申は其御方の若君美女丸にて御座候ぞ只今御聞なさるゝ程の学者と成給ひたれば今

(46オ)

は御勘当も御ゆるし有へし然らば今日の御法事にもまさりし御功德にて候わんと御挨拶あれは僧は美女丸にて有けるか最早この世になきものとおもひ人にはいわねと長官の身なれば政道のはたくしをなさじと不便なから生害申付たりしかねやの涙は知るものなし師のかけとは申なからでかしたりくと仰ければ御台所はまるひ出させたまひ何美女丸がいま此世に有しとやよふぞやくと御よろこびのみたせきあへ給はず御台所は七年已前美女丸の御首を討しと聞しめしたるより明暮歎かせ給ひ御目も泣つふし給ひ今は物見る事もならねとも美女丸と聞給ひ見るにまさりし嬉しさ也と深源坊の御手をとりつむりより背中迄なでさてく成人いたされし事よとて御互に御悦ひかきりなし恵心僧都は横川へ御かへりあり深源坊多田の御屋かたに暫らく御滞留のうち母公にむかひ給ひわれ父の命に背むき母には御歎きをかけかく御目まで損せさせ申せし罪いつの世にか

(46ウ)

(47オ)

(47ウ)

のかるへき此御本算は師の御坊の御作にて  
 人々恵心ふつと尊敬いたし候御目みへさせ  
 給わずとも此御本尊をおかみ未来をねかひ  
 給へは成仏うたかひなしと有ればあらあり  
 かたや忝なや我子に出家を持たるゆへかゝる如  
 来を子の手よりもらふ事の嬉しさよと  
 御悦ひなゝめ成らす夫より持仏堂を御し  
 つらひ有て毎日昼夜御信仰有りしにあ  
 くる八月十五日夜拜み居給ひしに光明の光  
 り御目の内へ入るとひとしくあをむき給へは  
 御目開らき如来の尊像あり〜と見へさせ  
 給ふいよ〜夫より御信仰つよくけつかう成  
 る往生をとけ給ひしとなり是によつて  
 目あけの如来と申て中山にあり

御詠歌

(48オ)

野をもすぎ里をも過て中山の  
 寺へまいるは後の世のため  
 右となふる通りの御歌にて別に子細なし  
 しかしいつれの寺へ参るも後の世のため  
 外の寺へまいりては役に立ぬかとりくつ  
 有る此心昌阿和尚の存心これは歌のこと

(48ウ)

葉にてたいをしやうくわんしてよむゆへその  
 事はかりよみたるにて中山寺をおかみおも  
 によみたるもの也月をよめは月より外なし  
 とよみ花によめは花より外なしといひ  
 其類ひを称美したるなり

普陀洛伝記 卷の廿六

西国順礼  
三十三所 普陀洛伝記 卷ノ拾四

(1オ) 西国順礼 普陀洛伝記 卷の廿七  
三十三所

目錄

一 二拾五番播磨の国新清水觀世音

附りはいふか妻密通し悪事を工む事

はいふかいかい犬恩を知る事

觀音堂へ盜賊はいる事

松山の若侍觀音の利生を請命を助る事

(2オ) 普陀洛伝記 卷の貳拾七

二十五番播磨の国新清水觀世音

千手觀世音御長五六式す

開山法道上人

元亨釈書に犬寺とあり人皇三十二代皇極

天皇の御代に朝敵入鹿の大臣をは大職

官鎌足公退治有りし諸国御触有つて

弓馬に達したるものは都にのほりて

敵をほろほすへしとの御事にて諸国

(3オ)

より名ある武士とものほりしに播磨の国  
に一人当千の者と呼ばれしばいふといふ武士  
都にのほりて御味かた申三年の戦ひ  
にて終に入鹿を退治ありさてそれ

に御恩賞下し給わりばいふもはり  
磨にかへりくたる情なやばいふ三年の

留守のうち女房召つかふ小侍と密通を  
なし懐胎してすてに五月に成ければ夫

かへりたらは見付られては兩人とも命はあら  
し五日十日は隠されんかとてもかくしとけ  
らるゝ事成らず顯われぬ先に夫ばいふ

をたまし殺すへしと式人相談を成したとへは  
いふいかやうのちからにてもたます手なし

やすき事とはかり事を成し置けるぞ恐  
ろしき斯てばいふは国にかへり男の事

なれば女房の懐胎に気も付す六七日も  
過て後かの小侍はいふにむかひ申けるは御

留守の内にかねて御すきの事と存し山  
にかけ入ねくらを爰かしこさかしけたもの

多く有る所を見付置候都の戦ひにつかれも  
候はんに御氣ばらしに御出なされましやといふに

(3ウ)

(2ウ)

(4オ)

ばいふはずきの狛りぞうなればよくそ心掛こころかけ置おきたり  
なくさみに行ゆくへし用意よういせよと申まを付けるにいや大  
勢せい人を召よつれられさわかしく声こゑを上あた

らは都みやこの軍いくさやうくしつまり万民ばんみん安堵あんどうの  
おもひを成なす処ところに仰まう山さんにては又またもや事ことの

出来できたるかと都みやこへ聞きへても御ごためいかゝなれ  
はひそかにそれかしはかり御ご供く申まをて参まをるへし  
といへはさてく其方そのほう留る守すの内うちことのほか  
知ち恵へあかりたり汝なんしか申まを通り也なりと然しからは  
汝なんし吉人きちじん来きるへしとて弓矢ゆみやをもたせは

(4ウ)

いふは神かみならぬ身みのかなしさはかゝる工たくみは  
夢ゆめにもしらす小侍せうじは仕しすましたりと女房にようぼうに  
目めませして跡あとについて弓矢ゆみやを持もち行ゆけるか

はいふか常つねに狛りぞうをこのむゆへ黒竜くろりゆうとてまっ  
くろなる犬いぬと又また白波しろなみとてまっ白しろなるいぬと

二疋ふたひきちいさき時ときよりか置いていつとても狛りぞう  
につれ行ゆてさかし出でさせ弓矢ゆみやにてけた

ものを射いるべきため也なりその頃は鉄砲てつぱうはいま

たあらすみな弓矢ゆみや斗たう也なり鉄砲てつぱうは足利あしきの時とき  
代南蛮だいなんばん国くにより渡わたりしか日本にっぽんにて鉄砲てつぱうを  
打手練うちでんれんを知らず薩摩殿さつまどのの先祖せんぞ嶋津しまつ

(5オ)

(5ウ)

何かしたんれんありし夫つまよりして鉄てつほう  
ひろまりて大坂御陣おおさかごじんなどにはもつはら  
てつほうを取とつつかひ有りし也なりはいふ  
夫つまより山奥やまおくふかく入れれどけだものさら

に見みへす是これはいかにといへはいやまた五六  
町ちやうも奥おくなる山さんに居い申まを候こうとてつれゆく心

におもふは此こゝあたりにてもしや柴しばかりな  
どに見み付つられてはならずと段たんく奥山おくさんに  
入り今は人輪じんりんたへてせきばくたる山中やまなか  
弓ゆみやに矢やをはげ引ひしほりければ何なにを見

(6オ)

付つたるそといふにいや何も見付みたるにはあ  
らす此山こゝにて其方そのほうを殺ころさん為ためにつれ来きり  
たる也なりたまして殺ころすもがてんなれとも是これ迄  
恩おん有あるゆへにかくごさせて殺ころす也なりといふ是これは  
いかに天魔てんま破は旬じゆん悪魔あくま外道げだうの人ひとかわりて

主ちゆうに向むかつて弓引ゆひん事ことぞ然しかしはやまる事ことな  
かれ我われ播磨はりまにて一人ひとり当千とうせんとよはれ肩かたを

ならぶる者ものなし然しかるに我運命わがうんめい今日けふにつき  
果はたるかおのれ如ごときのものにはかられ斯か迄まで  
の事ことに及およべは尋常じんじやうに射殺いせつさるへし併しし  
いか成なる恨うらみ有事うごにやとあれは引導いんどうの

(6ウ)

ために聞せ申へし何の意根も恨もなし  
三年の留守の中に奥方密通し懐胎五

(7才)

月におよぶ此事顕わかれては二人共に命なし  
故に斯は斗らひ連れ来たり射殺す也といふ  
成る程左やう成る悪事あれば殺さすは成る  
まし今はしんしやうに死すべしとて黒竜白  
浪二疋の犬にむかひ二疋共にちいさき時よ  
りかいそだてぬれば今僕のためにはから  
れて死するなり此まるめしは食也その方  
共の食事に用意致せしか我手よりあ

(7ウ)

たゆる事是かぎりなり畜生なからもよく  
聞へし我程名に聞へし武士山中にてうたれ  
死したりと恥をさらす事口惜ければ我死  
骸を残らずくひて人に見せぬやうに致  
しくれよ頼むぞよと二疋の犬に申け  
るにめしくわす耳尾をたれて聞居る体  
成れば大によるこひ聞わけしかあらうれ  
しや最早是にていふ事なしさらはぞん  
ぶんに射よとて両手をひろげのたに成り  
てあてかひける彼小侍はしはしも心をゆるさ  
す弓に矢をはげ今をさいこと見得し所

(8才)

に二疋の犬は互に顔を見合黒竜はとび  
付弓の弦をくひ切白浪はかの僕がのどに  
くひ付しか二疋の犬だけりかゝりさん  
くくに喰殺すばいふは大きにかんじ倍く  
姿こそちくしやう成れども人にも増りし  
働らきかな我汝らをはつれ来らずは射殺  
さるへぎにてかしたりくとなてさすりいざ  
かへるへしとあれば二疋の犬は口もと血だら  
けにて尾をふりばいふに似たれさきに  
たちてもどればはいふか女房は密夫見  
へさるを跡より帰るやいかくと氣つかふて居る  
処を又二疋の犬おなしくとびかゝりくひ  
殺しけるゆへはいふいよく二疋の犬をふ便  
がりおとろぎ人たるはたきかくも物を聞  
わけからたこそ犬なれども犬にあらす心は  
人間もはつかし我は子もなければ今より

(8ウ)

二疋の犬を子のことくおもふへしとてそれ  
より朝夕の飯もばいふの通り三膳つゝ揃  
たゝみにふとんをきして二疋の犬にくわせ  
ふひんをくわへそたてしに其のち二疋とも  
に死しければはいふちからをおとし歎き

(9才)

(9ウ)

けるか二疋の犬のぼたいのため畜生道を  
まぬかるゝやうにと千手観世音をつくり奉  
り一字を建立し二疋の犬はすなわち爰に  
ほふむり犬のほたひをとむらひしゆへ  
大寺と元亨釈書にあり此山の峯に  
きれぬ成る清水有るゆへに清水と名  
付たれども都の清水にまきれぬかゆへ  
新清水といふなりさて犬の恩を知り

(10オ)

たる事はあまたあり其中にも近江の国  
いぬかみ郡に獵師有り犬かみ郡といふ名  
はのちくの名也さて此獵師山に行日も  
くれければ道の案内は知りたりけれとも  
くらし夜の事なれば木の根を枕として  
夜をあかし居るに連たる犬わんくくとほへ  
ける声寝耳に入り見れば犬は獵師にたけ  
りかゝり只わんくくとなき飛かゝらんとする  
けしきおのれうろたへもの我成るかわすれ  
たるかといへども飛つき追ちらしても猶のかす  
せん方なく山刀にて飛来る犬の首切れば  
犬の頭獵師のかしらの上に飛ぞと見へし  
かうへの方よりさつと血流れかゝるこはい

(10ウ)

かにとうへを見ればすさまじきうははみ  
松の木の上より次第く下るを犬は是  
を見て定めて我を起せしもの成らん左  
は知らずして首を切りに切られてもうは  
はみののどに飛つき我命を助けし也是  
によつて大神郡と名付神にいわひこめ

(11オ)

犬神大明神といふ也又唐土にそんくわぬ  
といふもの犬をかひてつれあるきしにそんくわぬ  
酒にゑいけるかある野山に寝て居たりしか  
山火事にして自然と下草よりたんくくと  
燒火もへ来る犬そんくわぬを起しけれども  
いたくゑひて起ざるゆへ犬はあたりの川  
へ行からだを水にてぬらしそんくわぬか  
寝て居るあたりをしは原をしめし又  
ぬれたるからたにて火をしめしゆきつ  
もどりつ精力もつきはてゝ犬は死し  
けるそんくわぬ目さめてみれば犬は死し  
あたり水だらけなり外はみなくくや  
けてありそんくわぬよくく思ひけるは大  
かくしてつかれ死したるもの也と感しける  
なり新清水の開山法道上人なり法道

(11ウ)



(12才)

上人は播磨の国書写山の開山なりこの

開山はさがあたごのあたりにもしばし居

給ふ今仙翁といふて草花あり此種此

開山あたし野にこほし置給ふかゆへに名付

しなり法道上人は多りかけの觀世音を

新清水にしはらく置給ふ也はいふか作り

奉る千手觀世音は口の院に有奥の院十一

面觀世音御長考丈六尺聖徳太子の御作

協立不動毘沙門は行基の作此所はしめは

今のことがらんにてはなし田むら將軍

の東夷を退治の後清水の觀世音の御

かけなれば爰も清水と有れば觀世音

の御利生同し事也とて京の清水をう

つす心にて口の院奥の院と惣たい似

せたる建やうにて建立し給ふ也已前は今

のこときの寺にてはあらす堂守の出家一

人有て麓へ齋非時におり觀世音を守り

奉るある時盗人七人來りて坊主をくゝ

りおきわつか成る衣のいととりあつめ

仏ぜんの道具残らす取もちゆく斗り

にしてさて空腹なりとて米をさし出

(13ウ)

し食をたき味噌油はなきかといひて

立さわく手前は里へ下り齋をもらひく

らすかゆへ左様成る用意なしといふ然らは何

にても菜はなきかといふに山椒のたきたる

か有りといふそれよからんと取出し食に取

そへくらへはふしきや七人なから山椒にむ

せひ目を白くろして苦しみ居る茶水吞

めとも直らす後にはひい／＼と丹いぎに成り

居る坊主もはしめはよき気味と思ひしか

後にはあまりの事に不びんにおもひし

か共くゝられて居ればせんかたもなく詠め

居るうちに夜も明けれとも一人も直らす

七人なから倒れいる麓には齋を振まわん

と此坊主をまち居るに五つ半頃迄も見へ

ぬゆへどこぞわるふはないかいか成る事ぞと

年寄ゆへよもやわすれもしられまし行

て見てこいと人を遣はしければ門口しめて

有るゆへまた寝て居らるゝやと門を明て内へ

入ければ坊主はしはられ居る是はと肝をつぶ

し見ればあふれもの七人たおれ居るいか成る

事そとたつねければかく／＼の次第とやうす

(14才)

(13才)

(12ウ)

(14ウ)

残らす語れは先々とて繩をとささて麓  
へ下りやうすをいひければ若きもの我一に樺  
をもつてよるこひはしりゆきて見れば中

くたゞきくらはす所にてはなくみなく  
くりて麓へくたり先介抱しやうく人心地

つきければたゞきころさんとてうてまくりし待

居るに七人の者とも申けるはさてくおそろしき

観世音なり盗みとりしに皆くしきりに

ひだるゝなり二三人は山椒にむせる事有る

へきに七人ながら動かれぬやうにむせるは観

世音の御諤なり我々か命をたすけ下さるへ

し今よりしては此所へ盗人まいらぬやうに

致し候間御ゆるし下されよと段くわひける

ゆへ然らば其言葉違へましたすけ帰すも慈

悲なりとて命を助け遣わしけるに七人の者

手を合せ若きものへ礼拝しにけ帰しし也

是怨敵退散の観世音なり元より此本

尊はばいふ怨敵の家来を犬一疋して退

治けるゆへ其功德の為に作り奉る所の

本尊なれば斯のごとく御利生は猶さら

此御本尊には有らせられ給ふ事なり

御詠歌

あわれみやあまねきかとは品くくと

何をか名のみ爰にきよみつ

爰に出す伊予の国松山の武士に奉公を

し居る若侍成るか日頃観世音を信仰し

毎日十句観音経を三十へんつとなへ奉公

も大切にいたし勤めけるか若気の至り

にて心の外の事とはいふものゝ主人の

奥方と密通いたし居るを知りある夜主

人伺ひ実舌をたゞし二人共手討すると

申付られしか此内に主人母おはしまし

けるか此老母に奥方至つて孝行をつくし

朝ゆふ心を付て大切に介抱し母も妻

女をふびんかり居られしか此たひはからざ

る事をは仕出し今宵式人ともに手討に

するといふを聞て何卒式人は日頃勤め

かたよろしき者共なればいかやうにしてもた

すけ遣わしたきものと夫より我子のま

へに出て申けるはさて此たひ式人夫主人の

目をかすめ密通せし事は悪けれともあの

嫁は日頃わらはを大切に致しくれ又其方

(16オ)

(16ウ)

(17オ)

(17ウ)

へも随分勤めかた宜しき女成れば何卒  
く了簡して二人の命助け遣わされ  
よといろくわひし給へは左やうならは  
今宵はまつ延しやるへし明日手討に仕  
るへしと夫より妻は母にあつけ若侍は居風  
呂の内へ入れ置て上より大き成る石をお

(18オ)

きてその夜はまつ其身もやすみけるが儲  
其夜桶の中にておもひけるは色の道は  
心の外とはいふものゝ現在主人の目をか  
すめ奥方と密通したるといふは有ましき  
事と我身ながら我身にあいそをつかし  
せめては未来成仏するやうにと思ひ明日死  
する身の上成れば今宵一夜日頃念ずる観  
世音の名号十句をは通夜の心にて唱へ居  
るに夜更七つまへに外よりたへなる声して  
のたまふやう此風呂の呑口より出へしわれ  
は其方が念ずる観音世也早々出て何国へ成  
りとも出行へし妻女も其方の信心に  
めでゝ助け得さすなりとの給ふて風呂の  
のみ口ぬければ扱々有かたやとおもふ内  
に呑口の穴段く広く成りければ其処

(18ウ)

より安くとぬけ出あたりをみれば何人も  
見へすまでもく有かたやと観世音を礼拜  
し出ゆきける道にてふと心付此俣ゆくも  
みれん成りと思ひ有りし次第を書主人  
へおくりそれより一生出家を相続し西  
国順礼を廻りしなり儲又奥方にはその夜  
老母の御臨居所に預けられ老母へ願ひ

(19オ)

けるやうはわらは事夫の目をかすめ密  
通いたし候たん女の身の是より上の罪は  
なし左すれば明日に成り両親へ歎きを  
かけわらはゝ恥辱をうけ候間何とぞ御慈悲  
に今宵中に自害いたし度存し候間此段  
御聞わけ遊はされ御見逃し死なしてたべ  
明日迄生て居ましては人々に面も合され  
す恥の上のはぢなりとひとへにねかひければ  
老母はいや生は得かたし死はやすしまたし  
あんも有るへしと聞入れなきゆへせんかた  
なく居けるか老母は何とそしてたすけた  
くおもひまたは嫁女たん気をしてはわらは  
か心ざし無に成るゆへ立居にも嫁に心  
付て居たりけるか早夜も明ぬれば主人は

(19ウ)

(20オ)

ふせ置し風呂場へゆきみれは其まゝに有り則石をのけるにふるの中に若侍は居す是はいかゞと思ひまつ何気なく隠居へゆき老母にむかひ女房をこれへ出したまわれと申ければ老母は我子にむかひのたまふやうは成ほと手討に致され候事は尤の事なれども我いふ所を聞わけたまわれよ嫁女にも両親あればさそや両親のなげきいかはかりまた嫁女も是まで我に孝行をつつくしこれられし事をおもへはどふも

(20ウ)

我いのちの有るうちは殺さるゝを見て居られぬといふ所へ召つかひの女来り只今此手紙を門口へ入れかへり候を申さし出す是をひらき見るに若侍の夜前よりのやうす一〇にかき日頃観世音をねんし居候処ふしきに有難き御めくみに預り一命助り候か此義御知らせ不申候ては逃かくれ候やう思召御立腹の上また罪をかさぬる道理なれば書中をもつて御わひ中上候さて拙者義事も是より発記任り諸国修業致し候間何事も是迄と思召御ゆるし遊はされ下され

(21オ)

度候亦奥方も拙者かやうに相成候間よろしく賢慮御成し下され候やうひとへにねかひ上奉り候先は心せくまゝあらゝ御ねかひ申上候以上とあり老母はよき折也と色々わひしければ主人も得心して妻女を老母にわたし命を助けけり是ひとへに観世音の御利生また日頃に二人とも密通はしたれとも心たて宜しく又かの侍毎日十句観音経三十篇つゝとなへしゆへかくは命たすかりけるなり

(21ウ)

普陀洛伝記 卷の廿七畢

(22オ)

西国順礼 普陀洛伝記 卷の廿八三十三所

目録

- 一 二十六番播磨国法華寺観世音 千手観世音開山法道仙人
- 一 二十七番播磨の国書写山観世音 開山性空上人神通を顕はし給ふ事 和歌三神の硯石の事

(22ウ)

并 中納言時朝卿御公達を手討に  
し給ふ事

忠太小三郎発記し諸国修業の事

(23オ) 普陀洛伝記 卷の式拾八

二十六番播磨国法華寺觀世音

千手觀世音開山法道仙人

當時を法華寺と名付たるは此山のみね

八つにわかれ法華經八軸のかたちといふに

より名付たり法道仙人は天より雲に

乗り此山を見てあまくだり此山に法花經

八葉のれんげのかたち成仏のうてなの

すいそう有る山と見てさいわひ岩窟有れ

は八つの峰のまん中の岩のほらに籠りて

飛鉢の行を成し給ふ飛鉢の行といふは

釈迦の御弟子らかなとつとめられし

行にてはちのこをたくはつせんとおもふか

たへなければおのれと鉢のこ中に飛行

人々たくはつを入れるなればわれと自然に

前にもどる是を飛鉢の行とはいふなり

(24ウ)

法道仙人も此事知るものなかりしや法花

山に居て鉢のこをはりま一回へ廻したまふ

日本にては加様の行を知らずして何やら

ん丸き物かとぶと棒などにてたゞきお

とさんと追まはるはちのこは迫廻されて

法花山にかへりある法道仙人の前に

すはる人々今の丸きものは峯へより

たりとてみなく山に上りて見れば岩く

つの内に俗とも出家とも見へぬもの籠り

居て其まへにかの鉢ありさてこそ此もの

の所為なりおのれ何もの成るそ正体を

顯わせこの峯にすんで鉢を播磨一國に

とひあるかせ國中をさわかすくせもの何

やつなるそ名のれくと呼わりて中く

たくはつを入るゝ所にてはなく打殺さんも

知れすとがめける法道仙人御目をひらき

日本国仏法いまだあまねくひろまらざ

れば知らざるに是飛鉢の行とて天

竺釈迦の御弟子羅漢たちつとめたもふ

行也日本には此行を勤むるものいまだ

なきゆへ知らざると見へたり我此法に

(25オ)

(24オ)

観念し千手観世音を本尊と成し

飛はつのはつはつをつとむるなり

心ざし有るものはたくはつを入れ申へし

と有れば扱は左やうの御事にて候か

有かたき御事かなとそれより人々婦

へし奉りける鉢のこまはればそれ飛鉢

のまわり給ふとてたくはつを入れける自

妙仙人にて持来り給ふものは金仏のちい

さき千手観世音と鉢のこすいしやうの

珠数斗り也其ころ人皇四十五代の

御時にて西国より禁庭へ御年貢米

をふねにつみ藤井何其と申もの付て

播磨なたをのほる処にこの藤井けん

とん邪見のもの成りしか船のへさきに

鉢のことひ米りとまると藤井是を見て

あやしみければ船頭申けるはこれはむかふ

の山にたつとき出家あり飛鉢の行

とてはちのこを飛したくはつ有る

成り御心ざしあらは入給へといふにあら

おるかやそのやうすいづな魔法の仕業な

りかやうの事にてたくはつするをたつ

(25ウ)

(26オ)

(26ウ)

とむはおろかなりたくはつならば自身

しやく杖にてもふりあるくはつ成るに居

なから取にまわすはおかしきしわざ也と

はちのこを足にかけて海中へ蹴りおと

せばはちのこは舟のくるりを二三べん

まわりて法華山へ上るこれにつゝきて御

年貢米のたわらことく山の峰に

あがる是はいかにと俵をつかまへても人

もにとぶゆへにせひなく皆く肝をつぶし

あきれはてゝぞなかも居るふし井も今

は大におとろき此米取られては申わけ

なく是我いたらざる身として法力を

さみせしあやまちなりとてくやみけ

れば舟頭ともしからはあの山へ御出有

てわひ給へと申につけ船をいかりにとめ

人々藤井を案内して山にあり見れば

岩窟のそばにつみかさねたる米ありふ

じ井法道仙人にむかひ手を合せて私の

我意にまかせ鉢のこを海にけ落し候たん

今さら後悔仕り候只今の神通ふしきを

見おとろき発記仕り候此米は御年貢米

(27オ)

(27ウ)

(28オ)

一俵ひとばらにてもうしなひては申まをわけ立たかたし  
御ご帰かへ下くだされ候まをは、有あかたく候まをわんとあ  
やまり入いねかひければ然しからは返かへし遣やわす  
べししかし所しよ存ぞんあれば内うち一俵ひとばらは残のこし置お  
べしとあれは藤ふじ井いはよろこひ船せん頭とうともに  
申まを付づはこひ帰かへさんとするに法ほう道どう仙せん人じんはいや  
く皆みなく舟ふねへ帰かへりてまつへしこれよりかへ  
すへしとてかの鉢はちのこ山やまに舞まさかりふね  
に來きれば俵たばらは是こゝにそひて鳥とりの如ごとくお  
ゐくつらなりてことく飛と來きりて船ふね  
につみける内うち一俵ひとばらは中なかほどにて落おたりこの  
落おたる所ところをよね田た村むらといふ文字もじにて書か時とき  
は米こめ落お村むらとかく藤ふじ井い何なにかし都みやこにのほり  
御ご年ねん貢ぐん米まいを納なめけるに請う取との役やく人じん改あらた  
けるに一俵ひとばらふそくゆへ藤ふじ井いにいかうといふに  
付づ舟ふね中なかのやうすかたりければ其その由よし役やく人じん  
申まを上あげれば関かん白はくの御ご耳みみに入りそれより  
帝みかどへ奏そう聞もんあれば日ひの木きに左ひだりやうの神かみ  
通つう方ほう便べんふしきの名な僧そう有あこそ有あかたけれと  
て其所そのところに一字いちじを御ご建けん立た立た有あるへしとて聖せい武ぶ  
天皇てんかうの勅しよく願がんとして開ひら山さん法ほう道どう仙せん人じん觀くわん世せ音おん

(28ウ)

(29オ)

は金かね仏ぶつちいさき千せん手て觀くわん世せ音おんを御ご腹はらにこめ  
てあらたに一ひと鉢はちを作り奉ほうり本ほん尊そんとして播はり磨ま  
の国くに第二だいに十六じゅうろくにはん法ほう華けし寺じと成なりける  
宇う治しの大だい納な言ごん隆りゆう国こく卿けいの作う宇う治し捨しや遣けん  
といふ書かきに志し貴きの里さと上人じやうじん飛ひ鉢はちの行ぎやう  
を成なしはちのこ藏くらの内うちにいりて  
藏くらともに飛ひける此こゝ藏くらのはしら材ざいもく  
後のちにくさりしか此こゝ木きを取とてちいさ  
き仏ぶつほさつをこしらへ志し貴きの仏ぶつ  
といひて人ひと々ごと信しん心しんいたしける  
御ご詠ぎやう歌か  
はるか花はな夏なつはたちはな秋あきの菊きく  
いつもたへせぬのりのはなやま  
二十七番にじゅうしちばん播はり磨まの国くに書しよ写ぎや寺じ觀くわん世せ音おん  
開ひら山さん性じやう空くう上人じやうじん神かみ通とを頭あたまはし給たまふ事こと  
和わ歌か三さん神かみの硯いし石いしの事こと  
并な中なか納な言ごん時とき朝あさ卿けい御ご公こう達だちを手て討うにし給たまふ事こと  
忠ちゆう太た小せう三さん郎らう発はつ記きし諸しよ国こく修しゆ行ぎやうの事こと  
如に意い輪りん觀くわん世せ音おん椽せん木ぼく御ご長ちやう一いち丈じやう六りく尺せき  
開ひら山さん性じやう空くう上人じやうじん

(30ウ)

は金かね仏ぶつちいさき千せん手て觀くわん世せ音おんを御ご腹はらにこめ  
てあらたに一ひと鉢はちを作り奉ほうり本ほん尊そんとして播はり磨ま  
の国くに第二だいに十六じゅうろくにはん法ほう華けし寺じと成なりける  
宇う治しの大だい納な言ごん隆りゆう国こく卿けいの作う宇う治し捨しや遣けん  
といふ書かきに志し貴きの里さと上人じやうじん飛ひ鉢はちの行ぎやう  
を成なしはちのこ藏くらの内うちにいりて  
藏くらともに飛ひける此こゝ藏くらのはしら材ざいもく  
後のちにくさりしか此こゝ木きを取とてちいさ  
き仏ぶつほさつをこしらへ志し貴きの仏ぶつ  
といひて人ひと々ごと信しん心しんいたしける  
御ご詠ぎやう歌か  
はるか花はな夏なつはたちはな秋あきの菊きく  
いつもたへせぬのりのはなやま  
二十七番にじゅうしちばん播はり磨まの国くに書しよ写ぎや寺じ觀くわん世せ音おん  
開ひら山さん性じやう空くう上人じやうじん神かみ通とを頭あたまはし給たまふ事こと  
和わ歌か三さん神かみの硯いし石いしの事こと  
并な中なか納な言ごん時とき朝あさ卿けい御ご公こう達だちを手て討うにし給たまふ事こと  
忠ちゆう太た小せう三さん郎らう発はつ記きし諸しよ国こく修しゆ行ぎやうの事こと  
如に意い輪りん觀くわん世せ音おん椽せん木ぼく御ご長ちやう一いち丈じやう六りく尺せき  
開ひら山さん性じやう空くう上人じやうじん

(30オ)

(29ウ)

性空上人は六根清淨の通力を得たもふ

程の知とう兼備の名僧なり大和の国

塔のみねに増賀上人といひて是も名僧

にしておはします塔の峯は高き山にて

ふゆはことの外にひへるゆへ増賀上人心の内

にて播磨の国性空上人の方へ序有るな

らははりま紙子をたのみ遣はして着て

居るならばあたゝかに有へしとおもひ給ふ

に六神通を得て居給ふ性空上人なれば

それを知りてはりま紙子をとゝのへ弟子

衆に申付て増賀上人のもとへ遣わし給ふ

増賀上人はおとろぎ給ふ成ほと紙子をと

とのへたくおもひ候へともいまた口にも出し

申さず六根神通を得給ふ性空上人なれ

は是を知り給ひて持せし給ふ有かたやと

おしいたゞき給ふ此事西行上人の書れし

せんしうという書にありまことに此上人神通

を得給ふ程の出家に成り給ふはことわり也

仏のおしへにて其方は出家せよとの御事

なりその由来は此性空上人の俗の時の

名は忠太小三郎といひて学文すぐれ手跡

(31オ)

(31ウ)

(32オ)

をよく書れしか閑院の左大臣藤はらの時

平公の御孫時ともの中納言に奉公しける

侍成しか手跡に達し学文に秀てしゆ

へ主人の若君の師範に仰付られ忝なく

も若殿の弟子と成せり然るに此御家には

御先祖かまたり公住吉和歌の三神に御祈

り有しは子孫繁昌長久の御願をこめ

給ふに任吉大明神御告に子孫はんしやう

のしるしとて硯石を進せられけるこれを

すなわち和歌の御神躰とあかめ何事

によらず目出度折からは取出し拜むへし

との仰にて和歌三神より授り給ふ御家

の宝なり然るに中納言殿大納言に御位

すゞみ給ふ御悦ひとて御硯を出し注連をは

り神酒御ぜんをさゞげて一間にかざり給ふ

所に大納言との禁庭へ上り給ふ御留主

のうち忠太小三郎おもひけるは此御家に

奉公はいたせともいまた和歌三神の御

神体を拝みし事なし何とぞ御留守の中

にとくとおかみ申たく思ひ其間へし

びゆき硯を袖にうつしつゝしんでいだゞき

(32ウ)

(33オ)



(33ウ)

居る所にばた／＼と足音のするにおとろき直しおかんとする時気をせきたるがゆへ取落して床ぶちへあたり二つにわれければ小三郎ははつと気ものぼりきへ入た

(34オ)

「ものゝ手にふれしゆへに三神の御とがめなるか神罰受たらばいか成る罪科におこなわるへきは非もなや御大切の御家のたからそんじたるはいか斗の事ぞや死してもまよひに成るへしと当惑する処に後に十二才に成らせ給ふわか君小三郎案する事なかれくるしからすそれを其方か割たるといふたははたいの事成らす我割たりといふへければかならず／＼何かとおもふへからす我いふ通りにして置べしとしほらしくも仰せける御こゝろさしは有かたけれともそれは餘りもつたひなしいかやう成る御咎めを請申ても若君に引うけさせましては罰にばちをかさぬる也といへはいやそれにては事むつかしく只われにまかせ置へしと仰ける其所

(34ウ)

へ大納言殿御掃りとて人々立さわぐに小三郎は心すまず覚悟し居る偕大納言とのにはそのまゝ硯の間へ御出あり礼拝して硯を御らんし是はいか成る事にて御われなされたるやと気も狂乱のごとくさわぎ給ふつき／＼の人々もおとろき是はいかなる事やらんとたかひに目と目を見合せ居るかゝる所へ若君は父君のまへに出させ給ひ御さわきなされましそれは御留主のうちには拝み申度手に取りし処へ御かへりと聞心せき床ぶちへ取おとしかくは成り申候と仰ければ大納言殿ははら／＼と御なみたを流し給ひ鎌たり公よりして代／＼伝わる所の和歌三神の御神躰我迄つゝがなく伝わりしにいか成る事にや其方は三神の御心になわすかく御神躰の成り給ふ事そや大納言に成りし悦こひ事の中なればとて和歌三神ならひに先祖への申訳其方か命を取らねばかなふましと仰ける小三郎是を聞今はたまられず飛て此硯を割たる

(35オ)

(35ウ)

へ大納言殿御掃りとて人々立さわぐに小三郎は心すまず覚悟し居る偕大納言とのにはそのまゝ硯の間へ御出あり礼拝して硯を御らんし是はいか成る事にて御われなされたるやと気も狂乱のごとくさわぎ給ふつき／＼の人々もおとろき是はいかなる事やらんとたかひに目と目を見合せ居るかゝる所へ若君は父君のまへに出させ給ひ御さわきなされましそれは御留主のうちには拝み申度手に取りし処へ御かへりと聞心せき床ぶちへ取おとしかくは成り申候と仰ければ大納言殿ははら／＼と御なみたを流し給ひ鎌たり公よりして代／＼伝わる所の和歌三神の御神躰我迄つゝがなく伝わりしにいか成る事にや其方は三神の御心になわすかく御神躰の成り給ふ事そや大納言に成りし悦こひ事の中なればとて和歌三神ならひに先祖への申訳其方か命を取らねばかなふましと仰ける小三郎是を聞今はたまられず飛て此硯を割たる

(36オ)

事はといふを打消し是く小三郎何をいふ事そ其方割たると申て我をかばひ身替りにも立んと思ふ心ざしは嬉しけれ

ども命を取らるゝ程にとて今さらわれで

なしと其方におふせらるゝものにあらず誠に割りしは私にちかひなしいかやうと

もなされ下さるへしと小三郎だまれく

と仰ける大納言殿今は是非なく恩愛

のなみた人々も只わつとふししづむ

(36ウ)

大納言殿は若君のうしろへまわり御太刀をもたせ給ひければ若君は今そさい

こと合掌あれは小三郎身もあられす

とまりかね又立出て恐なからしはらく

御まち下さるへしもはやおしたまつて居ら

れす私を御討下さるへしといふにわか君

は小三郎せひ夫ほとに替らんと師弟の

よしみを思ふそならは出家と成りて我

跡を甲らひくれよそれこそは何よりの

事たのむなりと仰ける大納言とのは

おもひ切て御いたわしや若君は振上給ふ

太刀の下に此世の息はたへにけり小三郎

(37ウ)

はすくに腹を切てさいの河原に追つき奉つらんともろはだぬぎしを大納言殿とゝめ給ひ左やうにおもふならば倅か申せしことくに出家に成りほたひを帯らひ得さすへしと有れば死ぬるにも死なれす其場にて髪をきりそれより若君の

御骨を首にかけ大納言殿に御いとま申

諸国修行に出けるか筑前の国せふり山

の峯に岩窟ありこれそ観音の住家と

それより十二年か問法花三昧ほつとふ

して天性の名僧と成り給ひ御跡をとむ

らひける俗のときより学文たたく性空

上人十二年の修行せふり山にて信心を

みかき六根清浄の身とときすまして六

神通を悉給ふ知道兼備の名僧とは

成り給ふある夜天童来り給ひて我は

梵天帝釈よりの御使なり正真の観世

音を拜まんとならは播磨の国書写山は

観世音浄土の霊場なりこれに行て修

行有るへししからは正真の観世音を

おかみ奉る也と御告有それより書写山

(38オ)

(38ウ)

(39オ)

に行柴のいほりをむすひ法花経おこた  
らす読誦し給ふにある夜さへわたる月の  
夜天人あまくたり庵りのそばの桜木  
にむかひ手を合せ四句の文を唱へ給ふ  
上人御覽しいかなれば天人あまくたり  
給ひ其木何ゆへに文をとなへおかみた  
もふそと仰ければ天人のたまふやうは忝  
けなくも此木は観世音のうつりましま  
すゆへ拜み奉る此霊木をもつて如意

(39ウ)

輪観世音をつくり奉り然ふして此処  
に安置有るならば未代衆生の利生を  
得有縁の観音霊場と成るへしいそぎ  
観音造立有るへしとの事なり上人有かた  
く天人の拜み給ふ所の霊木をもつて  
御本尊を刻み奉りし也上人はそれより  
人々の助力をもつて庵室を一字の堂  
を建たまふ所の書写山なり然るに上人の  
御ねかひにはわれせふり山にて是迄およ  
そ廿か年法花経三昧するといへ共正真の  
ふげんほさつを拜まず誠に信心てつとう  
して読誦すればふげんほさつ拜まれ給ふ

(40オ)

といへりねかわくは拜まれさせ給へと祈誓  
あれはある夜の御告に正真のふげん井  
拜まんと成らは江口の里へ行へしとの  
御事上人御つげに任せ江口の里遊所  
町へゆきて我は性空上人也普賢ぼさ  
つを拜みに来りたりといへごと尋ね

(40ウ)

あるき給ふに大きな家にけいせいあまた  
ならひ居しか内より男出て里のならひな  
れはいかにも普賢ほさつを拜ませ申へし  
まつ御あかり候て女郎衆を御かひな  
さるへしといふ然らはとて座敷へ通り  
給へは女郎出て酒肴を出し三昧せんひ  
き小歌をうとふ上人は此うちに普賢ほ  
さつも見へす何やらん知れぬ歌をうとふと  
思召て有けるかいやもし此うちにふげん  
ほさつましめても肉眼にてはおがまれま  
し六根清浄の真眼をひらきおがみ奉  
つらではほさつと見へましと観ねんし  
まなごをふさぎ居給ふにうたのしやうが  
は上人の耳には外の事にあらず実相  
むろの大海五ちん六よくの風はふかね

(41オ)

つを拜みに来りたりといへごと尋ね

(41ウ)

とすいゑん真如の浪のたゝぬ日もなし  
 我はふげんぼさつ也と白象にうち乗  
 居るばかりにて信するものなし助る縁も  
 なく其ゆへまことのすかたをかくし遊女  
 と成万客に枕をかまし色情より引  
 入て助けん為なりとの歌のしやうか上  
 人目をひらぎ給へは普賢ほさつと拜ま  
 れ給ふぞ有かたき江口のうたひに有処  
 の実相とは常樂の悟りをひらきたる所  
 を実相といふこれ沙論にありむろとは西  
 方極樂うろとはほんのふの迷ひ有る是  
 娑婆をうろといふほんのふの五ちん六よく  
 をはなれむろのせかい六こん清浄とし  
 けかれたるものあらは大海にはふ浄のもの  
 のへ水底へしづめす死人などはうつし  
 ありてけかれをうけずぼさつ不浄をは  
 らひ給ふこれを大海といふいんゑん業  
 報の四つあれば此四つの四浄を大海に  
 うけず此四つといふは心のうちにて有  
 れは殺したしとおもふがいんなり殺  
 せといひ付るかゑんなり殺しに行か

(42オ)

(42ウ)

業なりすてにそのものをおさへて殺す  
 か業と成る五ちんとは目に見て悪をつ  
 くり耳に聞て悪を作り鼻にてうま  
 き匂ひをかぎてくひたしと悪を作り口に  
 てさま／＼の悪を成す是五つの悪塵のご  
 とくといふに五つのちりとかく五塵と

(43オ)

よむ六欲とはほんのふのよく心にて六  
 角堂の觀世音の御詠歌に出すゆへ略  
 す六ぢんしやうといふて色声香味触  
 法の六よくなりこれ則ち五ぢん六よく  
 のけかれたる風はふかねども遊女と成り  
 てずいゑんとしたすけ給ふずいゑん真  
 如とあらわれ遣はして不浄成る所に居て  
 助くるなり普賢ほさつは我なりと仰  
 ける歌のしやう歌と聞へけり

(43ウ)

御詠歌  
 はる／＼とのほれば書字の山  
 おろしまつのひゝきもみのり成るらん

普陀洛伝記 卷の式拾八終

西国順礼  
三十三所 普陀洛伝記 卷ノ拾五

(1オ) 西国順礼 普陀洛伝記 卷の廿九  
三十三所

目録

一 二十八番丹後国成相寺観世音

本尊正観音開山西恩禪師

一 二十九番若狭国松尾寺観世音

并 惣太夫女護嶋へ吹流されし事

(1ウ)

観世音

附り慈覚大師眼病平癒の事

願礼のもの唐人参らざる事

(2オ) 普陀洛伝記 卷の廿九

二十八番丹後国成相寺観世音

本尊正観音開山西恩禪師

人皇四十二代文武天皇御代の時なり西

恩禪師は西国の人にて有りしか聖観

『西国順礼 普陀洛伝記』——翻刻と解題——

(2ウ)

世音を守奉り国々をめぐられしに丹後国成相に來りて景色をながめよさの海天の橋立の景せうくとしてまことに此処に居て心をすまし法花経をとくしゆするに随一の所なりと思ひまつしはらく爰にとまると庵をへしと庵りをむすひ給ふ此所は日本三景其ひとつなり禪師はたくはつに

(3オ)

出給ひしか後くは所のもの共たつとみて心さしを山にはこひけるゆへ麓に下りてたくはつにも及はず居ながら観世音を守り奉り観音の名号法華経普門品を常にとなへ給ひておわします出家の

(3ウ)

身はたくわへもなくといへとも事のかくるといふ事なしと如来の仰せありかたきものなり如来のひやくかう有うちはかつへる事なしと仰せ如来の御つむりに有るあかきはにくきといひひたひに白く有る白こうといふ然るに丹後国は雪国にてある年の冬昼夜七日の間とやみなく降つもる大雪にて山も里も一面に雪にてつゝみ二丈餘りも積りたりければある

(4オ)

く事も成らすせんたい雪国ゆへ上に穴を  
あげそれより出入する事也然れども七日  
もふりつゞきたる大雪ゆへ心にはかゝれども  
あゆむ事成らされは西おん禪師の方  
へゆくものなく庵室はゆきにうづ  
められ出る事もならずして三四日は  
物をもくわず居給ひしか次第に腹はへる

(4ウ)

大雪にてぞつこんひへぬく五日目ころには  
物を取るちからもなきほとひだるく成り  
出家の事なれば一日くらしにてあすの用意  
もなきゆへせん方もなく居給しか庵のか  
たわらに少しの空地有りしか其処に鹿  
一疋死して居たり西恩これを見ては  
てさてふひんやこれも雪にてゑじぎに  
かつゑて死したる也と見へたり如是ちく  
せうほつほたい心とゑかうして扱我  
身も此ごとくかつゑて死ぬる身也併し  
かつゑて死んでほたひの為にも成らす此  
鹿はころしたるにもあらずひとり死したる  
なれば殺生にもあらず三ごうにくとく肉  
食も命たすかる薬にはゆるし置給ふ

(5オ)

は爰成るべし我も殺さず殺したるもの  
も知れぬ死したる魚肉を買とゝのへ  
て食とはちがふつみにあらずしかしな  
から俗にても心有るものは四つ足を食  
せずまして出家の有へき事ならねとも  
死するよりかへつてこれを食し命を  
のばり人々を濟度するは何よりの事  
なればゆるさせ給へと觀世音にむかひ  
拜みそれより鹿のふともゝを切とりて  
なへに入れ煮とゝのへて一切食し給ふに  
たちまち元氣つきすこやかに成給ふ此上

(5ウ)

は今好んで食ふに似たれば今一切は  
残し置へしとて法花經普門品だら尼  
をとなへ仏へ御わび申また鹿の爲とて  
別に法花經をよみ給ひてとむらゐ有  
ればやう／＼八日目に雪はれて里より  
も見舞に來りていかゝなされて御しの  
ぎ有りしそ又は何をか食し給ひしや  
ととへはすてに死なんとするに付死し  
たる鹿を食せしと有のまゝにやうすを  
かたり給ふかくせは罪に成るゆへ食せしと

(6オ)

(6ウ)

のたまふに一切なへに残し置しとあるゆゑなへを見るに何もなく何やらんはくのつきたるかんなくすのやう成るもの有る斗也といふに有はづなりと見給へはいかにもはくの付たるかんなくすなり禪師ははつと心付おいの内なる聖觀世音

(7オ)

を出し見給へは觀世音の左りのもゝに二引ひきたる疵有りさてはかへつて死するをふびんにおほしめし鹿と見せて觀世音のもゝを切らしめあたへ給ふかあらもつたいなや其残りし一切を觀世音の疵にあて給へは元のことくになれあひ給ふ此事を見ていよく西恩をたつとみこの所に一字の寺を建立し此故有るを以てなれあひの山成相寺といふなり御本尊聖觀世音ほさつは西恩禪師おほひの内に入奉りし御仏なり

(7ウ)

曰斯の如くまことに心あれはまさしくまさかの時には現世にてもたすけ給ふは常々信仰の功なりかなしき時の神たゞきその時にけかにかゝる

(8オ)

きどくは非らず女のさんのやくとしよりは後世のねかひ第一なり男は外に七人の敵といふ常々眞実信仰あれは身かわりにも立給ふかねて御たのみ申せは其時かけ付給ふなり御詠歌

(8ウ)

波のおと松のひらきはなれあひのかせふきわたすあまのはし立三しようにくの事禪宗建仁寺国師の書給ふ書に吉野山にこうおん長老といふたつとき僧おはしましけるか病氣にて薬力もとゝかす人々弟子衆も燈し火の消ることくおもひしゆへ弟子衆医者といふにまかせかくして肉を進すへし三しようにくとてゆるしあれば弟子のはたらきなりとてかしこき子供にいひ付ふもとへ魚を買にやりずいぶん人にかくすへし心得たりとあゆの魚をとゝのへて箱に入山にあがるに汁ながれてなまぐさし知りたるものそれは何そと尋ねければ長老様の御つかひは法花経なりといふ御存

(9オ)

しもなき長老様にあさけりを受させて  
は氣のとくと子供心にまことを思ひ法  
花経といつわりければ其ものいよふし  
んしなまぐさき法華経也かやうの御縁  
有かたし拜まんとて引たくるこれ一封  
か有るといへと聞入れす其時藏王権現の  
行者諸天善神仏法守護し給へは此長  
老の御なんをすくひてしはらく法花経

(9ウ)

とてんじ給へとおかみけるか先のもの  
明てみれば法花経の八の巻なり是を  
見て大きにおとろきうたかひ心よりも  
つたひなくもかゝる事を成したりゆるし  
給へと戻しけるそれより帰りて此事を弟  
子衆にいひてひらき見ればあゆの魚なり  
此事を長老聞し召成ほと其魚を食ふ  
へしあゆにあらすまつたく法華経也とて  
食し給ふて本腹有りしなり是三しう  
にくとて吉野、山さへまことの事成れば  
法華経と仏神の見せ給ふなりとかく  
誠ほと有かたき物はなし是など子供心  
にて別して一途のまこと也功德は多少に

(10オ)

(10ウ)

よらさる事といふにつけ大王七堂からん  
を建立有りてたるま尊者に問給ふは此  
功德何程の事やと思ひ給ふ尊者のい  
わく功德なしむくとくとあり未来は  
いつくへゆくそ無間地獄と答へ給ふそ  
れをいかにといふに今まで代々あるし  
なれとも我こそからん建立せしといふ心  
有て其心にてはくどくさらになしといふ  
事なり

(11オ)

二十九番若狭国松尾寺觀世音  
附り惣太夫女護嶋へ吹流されし事  
馬頭觀世音三面六手の尊像也  
馬頭觀世音は畜生道をすくひ給ふ千  
手觀世音は地獄道をすくひ給ふ如意輪觀  
世音はかき道をすくひ給ふ十一面觀世音白  
き馬の頭を御つむりにいたゞき給ふか馬ば  
かりをちくせうとして外の畜生は左に  
あらずやなせ白き馬そといふにちくせう  
の内馬は人間にちかし其内白きはちく  
せう道のしまい也うしあるひは大にても  
毛色黒きはいまた業のふかき也白きは

(11ウ)



業薄きゆへ犬牛猫のたくひにても斯の

如し白きは業うすきゆへ犬にても黒き次に

あさきはかろししまいには白きなり馬の頭を

いたゝき給ふ釈迦如来もこんてい駒に召

れ聖徳太子は甲斐の黒馬にめされ

神くにも神馬を上るなり若狹のまつ

尾寺は浜辺にて獬師多く有りけるか

其中にゆふき惣太夫といふ獬師はつね

に観世音信心し観音の名号をおこた

らすとなへけるもの也獬師の所作に色

見といふ事あり獬師の内にてもたんれ

んのもの船にのりてこれよりそちら

はいわしむかふは雑魚と水のいろを

見て知ることなり今にてはまた網あれ

とも其ころは皆めいくとうあみかた

けて打たる事なり時に惣太夫色見

して七八人の獬師とも同船して出して

俄にあしき風吹来り此ふねをふきなす

大舟ならはいかりにてとゝめもすれとちい

さき舟のさゝぶねなり大船さへいかり

のなは大事にかけねはかせあるとき

(12オ)

(12ウ)

(13オ)

は船のふちにて繩すりきれてとてもな

き唐土の嶋へ吹流さるゝ事ありまして

さゝぶねの事三日三夜吹飛されなけれ

ゆく岩にあたるかひつくりかへれば夫

まてと舟板に取付て惣太夫は観世音

を念して居たりけるに舟はいづくまで

行やう知れすめつたむしやうにふき流せ

は一つの嶋につくまづは舟の魚ひをさ

ますへしとてあかり見るにすさまじき大

き成る嶋也けむりたつ所あれば人間の

住処なりとおもひその方へそろくへ行

は年の頃十七八より十八九斗の女五人つ

れにていつれもきりやううつくしき身には

弁才天のこどく成る美くしき衣装なり

さては唐土か又は朝鮮かいづく成るやと

思ひけるに此うつくしき女とも寄り来つ

て其方かたには吹流され給ふと見へたり

御いとおしや併ながら仕合と此嶋へつき

給ふ嶋により嶋人とも引さき喰ふ所も有

りこゝは女護嶋とて大王さまの御慈悲

深く流されしものには金銀を遣わされ

(13ウ)

(14オ)

(14ウ)

舟を仕立本国へ御婦しなざるゝ也先々案内  
申へしとて御殿へ御出候へと申ける思ひの外  
日本とはちかひ言葉のうつくしき事也  
殊にきりやうのよき女中はかりの取あつ  
かひ心もうちとけ御殿へゆくにすさまじ  
く女中のけつかうさいふはかりなし大王  
とおぼしくは十五六とも見へ衣装から一  
ぎは立ひかりかゝやき美しくしき其よそ

(15オ)

ほひいわん方もなし扱大王のたまふやう皆  
く吹流されてさそや難義にて為へししか  
し氣つかひ有まし日本へ帰すへしまつ  
く休足あれとて成し給ふそれより  
けつかうなる家具にて終にくわぬよき  
風味成る物ともくわせ酒をすゝめ其酒  
のあしわひとうもいわれぬいか成る名酒に  
ても此あしわゐはあらし色はまつかい也さて  
八人の獮師は若狭の浜辺にすめは着  
て居るものはつゝれなり美々しき女中追  
とりまきて舞つうたひつおもしろき  
事いふはかりなし吹流されしもよき  
仕合也と思ひける程の事也惣大夫は酒

(16オ)

(16ウ)

に酔しゆへすつと立て庭に下りてなか  
むるにさまゝの見しらぬ木なと有り向  
ふに亭とおほしき所もあり折しも月夜  
の事なれば亭へゆき四方を見れば大海  
の気色庭の風情いふにいわれぬ有  
さまなりさてまた橋ありわたりゆけは  
何やら家づくりあり是も美しくしきけつ  
かう成る所にて有るへし行て見んとあた  
りへゆくに俄に蚤もいわれぬ悪敷匂ひ  
むかゝとするゆへ何のにはひやらんと先  
その別家へゆきて見るに格子作りのことく  
してあり内をみれば多くの人を逆さま  
につりて下に壺をおきつられしものゝあた  
まよりはたゝと血したゝり落る惣  
大夫是を見るにぞつとして扱く恐ろしき  
所かな思ふに此中によくかれたる人もあれは  
いまたなまゝしきもありつりさけられて  
うめき居るも有り惣大夫は觀世音をおか  
み名号をとなへ居るにいつくともなくたへ  
なる御声にて此嶋は女護のしまといふて  
らせつ鬼とてみな鬼なりふき流されたる

(17オ)

ものあれはかくのことくうつくしき女の  
すかたと見せて酒を呑する事なりふねは  
もはや打わり来る跡をしむるゆへ帰る事  
ならず流されしものをそのごとくつりさげ  
置いて血しほをしほり生血をすゝりて  
鬼はのむなり汝らか呑し酒も此血也

(17ウ)

此所に居ればみなあのごとくなる身な  
り船は割てなしみなくいそぎ浜辺に  
来れよ其所に白き馬有るべしこの  
馬の手足尾にすかるへし命をたすけ  
得さすべしと御声聞へける有かたやしはし  
もとまると所にあらずと皆の物を見れば  
酒に匂ひ美しく女にうつゝぬかし居るを  
かたかけへまねき此所に長居ならす長居  
せは我の命なしとの御告有り此惣大夫  
につき浜辺へはやくと引立て連いづる

(18オ)

残りのものも何とやらん気みあしく  
なりて惣大夫につき其場をはつして浜  
辺へ出れば大きな白馬あり是御つけ  
の白馬なり皆く手足にすかり付よとい  
ふて惣大夫馬の首筋にしかみ付南無

(18ウ)

観世音ほさつ助け給へと皆く取つき念ず  
れば馬ははるかに飛上る嶋にては美しくし  
き女と見へしものとも恐ろしきおにの  
すかたと成り角あらはれ赤かしら眼  
は日月のごとく光りきばをかみ出しおそ  
ろしきすかたとなりいけるは口おしや  
これまで此嶋に来るものを取にがし  
たる事なし無念なりと大勢の鬼ども  
空をななめ立たる有りさますさまし

(19オ)

き次第なり有かたや波浪不能没観音力  
と斯のごとき悪鬼のさいなんを払ひ給ふ  
との御経はらふふもつともそくとくせん  
しよともあり大勢の中に観世音をは信  
するものあれはそれにつきて残らす其つ  
れまでもすくひ給ふとの御ちかひ惣大夫  
か信心にて皆く馬に取付はるかに上りて  
下におりると思へは馬はすわりける目をあき  
みれば我くか住家若狭の松尾なり有  
かたや此馬は観世音の変化の御馬かと一度に  
拜しかうへを地に付まつく我家に帰る  
内には妻子とも親夫の出たる日を命日

(19ウ)

(20才)

としてとむらひ居るゆへ大によるこひい  
かゝしてもとり給ふそうれしや其日の風は  
大船さへ吹流せしゆへ獵のさゝ舟などはた  
まるべきやうもなければみなく死し給ふとお  
もひ居たり何国に掛りて助かりたまふとい  
ふにわけを語れば事長しゆるくはなし  
すへしまつく浜辺に来るへしとてつれ  
行に彼の馬は居すして足跡あり有かたや  
是ひとへに観世音の御助け也とて女護  
の鳴にてのやうすくわしく物かたりさ  
ゐわひ馬頭観世音のまします事なれば  
馬の蹄の跡を本堂として本尊馬  
頭観世音を安置し奉り西国の札所

(20ウ)

二十九ばん松の尾寺となり西国するに  
駕籠には乗れとも馬に乗らぬと昔  
よりいふは此松の尾寺の観世音馬の頭  
をはいたゞき給ふゆへ其馬にうちまた  
かりて乗るへき事にあらすとて西こく  
するものは乗らぬなり惣太夫か多年  
の信心にて観世音の御すくひにあづか  
りしゆへ残りのものまでたすかりしそ

(21才)

有かたき事ぞかし  
御詠歌  
そのかみはいくよへぬらんためしには  
ちとせをこゝに松の尾のてら  
三十番近江国竹生嶋観世音  
本業寺

(21ウ)

まつる神は稲倉の魂の命そさのお  
の命の御子社僧天台社領三百石湖  
水南北は二十四里東西は七里せばき所  
にて一里海のかたち琵琶のなりに似た  
るかゆへに琵琶の海といふ人王七代孝  
靈天皇五年近江国地さけて斯の如く  
水海となる又同時に富士の山はしめて  
見ゆる三国一の山成るゆへ不二山といふふ  
たつなき山と書なり竹生嶋は弁財天  
の嶋なり福徳円満自在の弁天なり  
嶋のかたち八角にしてすい精りんこん  
ごうせきの嶋にて地震にもゆられずみづ  
もつかす観音の浄土ふたらくまやせん  
姿なり竹生嶋と名付たるは役の行者

(22才)

## (22ウ)

のはしめて此嶋に來り給ひ此嶋は  
 ふたらくきやせんうゑんの嶋と成るへし  
 とてつき給へる竹のつへを嶋につきさ  
 し給ふうゑんの嶋と成るものなり此  
 竹に根葉さかへしけるかゆへに竹生嶋  
 とかきて竹生しまと名付聖武天  
 皇天平三年に竹生嶋の弁財天帝

## (23オ)

の御夢に來り給ひわれは近江国竹生  
 しまの弁財天なり宝殿を建給わるべ  
 しと仰せけると御らんし御ゆめ覺に  
 けるか御側を御らんあれば白蛇するく  
 とはいゆきける白蛇はべん天の御つ  
 かわしめなり是に依て行基ほさつに  
 仰せて勅願とし弁財夫の宝殿を作り  
 ならひに恩穂耳の尊大己貴の尊  
 三社を祭り給ふ行基井は化益自在  
 のほさつにて竹生嶋弁財天と御物が  
 たり有りし也弁才天仰けるは此嶋は八  
 角のかたち水精りん南方ふたらくきや  
 せん観音浄土におなし行基ほさつ観世  
 音を作奉り此嶋に安置有へし然

## (23ウ)

らは未來は觀世音うゑんの利生をもつて  
 たすかり現世は弁才天福德自在怨敵退  
 散七難即滅七腹即生とまもり給ふへし  
 との御願なり弁財天は觀音二十八部

## (24オ)

よし御門へ奏聞ありて觀音堂を御建  
 立ありて弁才天の仰によつて行基  
 ほさつは千手觀世音を一刀三礼して  
 作り給ふを安置し給ふなり西国札所三  
 十番と成り給ふまことに南方の觀音淨  
 土ふたらくきやせんへ參りたると竹生嶋の  
 觀世音を拜むもおなし事也  
 今竹生嶋に安置する所の弁財天の像は  
 仁明天皇承和元年慈覺大師御年四十  
 一才のとき眼病久しく成らせ給ひし時化人  
 枕かみにあらわれて靈藥を与へ給ひて  
 いわくわれは是竹生嶋の弁天なりまさに  
 是を服用すへし久修法護神として依  
 て我本形を残す也と有て夢は覺かた  
 わらを見れば弁財天の小像あり大師は  
 かんたんして則藥を腹し給へは眼病立処

## (24ウ)

は

(25オ)

に直り後日にこの小像を竹生嶋に送り  
奉り今安置する所なり

相州江の嶋 奥州金華山 和州天の川  
安芸巖嶋 駿河富士 江州竹生嶋

右は弁財天靈仏なり

相つたへていわく但馬守経政琵琶を

竹生嶋におゐて弾す時に白狐出現し  
て社だんのうへにはしりさるうがのみ

たまのうへにはしりさるうかのみたまの

神は専女をもつて官者と成すゆへに

瑞応となすあるひはいふ白蛇けんしぬ

其とき琵琶を絃上となつく其は

ち什物として今にあり竹生嶋に生し

たる二また竹わたり杵尺今もつて什

物とす歎水水晶等宝珠多しまわり

に群蛇遊行す

都良香詣て作る詩に曰

三千世界眼前盡 十二因縁心裏空

都良香は都の腹赤の子にして当時

秀才の儒にして文人なり

二十八部衆とは所謂

(27オ)

那羅延堅固 神母天

大維功德天 五部淨天

密遮金剛 難陀龍王

大梵天王 迦楼王

摩醯首羅王 堅那羅王

帝釈天王 金大王

東方天 乾闥波王

婆迦羅王 金色孔雀王

毘楼勒叉 金毘羅王

摩和羅女 満仙王

毘沙門天 摩睺羅王

毘楼轉叉 散脂大将

満善車王 畢婆迦羅王

波蘇仙人 阿修羅王

風天 雷電

已下古札に准す

近きころさる和尚西国願礼して竹生嶋

にまいり給ふに舟一艘に西国願礼同行

十人乗りて竹生嶋へ舟をさす俄に浪

立風あしきゆへにいかにすれ共ゆかれす

是によつて後へもとり又舟に乗れば風

出で浪あらし時に舟頭申は何さまかてん  
のゆかぬ事也舟は何事もなく外の船

はみなくゆくに此舟にかきりて風出るは  
此うちは何ぞわけ有へし何れもさんげ有る  
へしといふにたかひにさんげすれは同行の  
うちにさんくのもの有りしか其方は爰に  
待居られよ札ばかりをおさめやるへしと札を  
うけとりその者を残し行は何事もなく

(28オ)

竹生嶋へまいり札を納めて下向致し舟に  
乗りもとの所へ帰りしに願札一まい  
風にちりて此所へ来る取あけ見ればま  
たせ置たるものゝ札なり此もの斯の如く  
げんぢうなる事なはいよく信心をこ  
らしめぐるへし

(28ウ)

行基ほさつ弁才天と御ものかたり有  
りし事知識のうへにてはめづらしか  
らす空也上人は松尾明神より念ぶつ  
の拍子わに口を半分にして遣はされ  
ける是は六波羅のゑんきにくわしく  
出し有る也げんひん僧都は三輪明神  
法をは聞給ひ毎日僧都にあかの水を奉

つりたまひしなりさて樹尾の明恵上人  
は住吉大明神春日大明神と毎日御物語  
り有りしに其頃たくま法眼といふ絵師

(29オ)

明恵上人に念頃にして上人の方へ毎日  
ゆきけるかある時明恵上人と両明神の御  
はなしの音はきこへけれども凡夫の日  
には御姿見へさるゆへ明恵上人にねかひ  
けるは何とそ両明神の御正躰を拝み奉  
り絵にうつし末代までも両明神の御姿  
はかくの通りなりと拜むへしと残し申  
度とねかひ下さるへしと申けるゆへこの

(29ウ)

おもむきを両明神へ上人御ねかひなされ  
凡夫にては候へ共仏法にきゑし毎度この  
所へまいり法義をうけ給わり居る者に候間  
御ねかひ申也とあれは両明神の仰には殊勝  
なるもの也然れども凡夫の目にてはすがた  
を見れば罰あたり死する也凡夫には姿を  
見せずと仰せられける則此通り上人たくまに  
仰ければいつまでも生るものにあらず大猫  
の死したるやうに死なんより神の御正躰を拜  
て我すく道の絵を書たし二つにはまつ

(30オ)

せに残し衆生におかませ度候へは我名迄  
申出し候左すれは我為にも成仏のたよ

りにも相成り候へはおかみ奉りて死す

るならば本望にて候間何とそ両明神

へ御ねかひ下さるべしと達てねかふゆへ上人

此通りをまたく御ねかひ有れば殊勝成る

ものかな然らば姿を見せてとらせんと神

勅ありてたくまは拝み居るにはるかに雲

に乗り給ひかすかに拜まれさせ給ふたく

ま有かたやかゆる上人の御側に居ればこそ

凡人の目に斯の如く神の御正体を拜

奉つる事の有かたざよとさらくと両明神

の御姿をうつし奉りそのうつし奉りし

繪姿を明恵上人にあづけ帰りけるか鳴滝

にて馬よりおちてたくまは死したりける

(30ウ)

(31オ)

(31ウ)

御詠歌

月ともに波間にうかふ竹生嶋

舟にたからをつむ心地して

普陀洛伝 卷の式捨九華

(32オ)

西国順礼 普陀洛伝記 卷の三拾

目録

一 三十一番近江国長命寺観世音

附り 推古天皇御脳御平愈の事

本堂焼失観世音水中へ入給ふ事

弘法大師御病氣平愈白髪大明神

の事

一 三十二番近江国神崎郡石寺村観世音

附り 聖徳太子人魚を助給ふ事

若狭国八百尼の事

一 三十三番美濃国谷汲華嚴寺観世音

附り 大くら信光榎木をもつて

観世音を作る事

(33オ)

普陀洛伝記 卷の三拾

三十一番近江国長命寺観世音

本尊聖観世音御長三尺柳の木

聖徳太子御作延命長久を守

り給ふ観世音ほさつなり



(33ウ)

人王三十四代推古天皇と申奉るは女  
帝にてまします聖徳太子の御伯母公  
なり時に推古天皇以の外御脳おもらせ  
給ふ事有しか典薬のかみさま一医  
療をつくし奉れとも御本腹あらさる

かゆへ聖徳太子なげかせ給ひ聖観世音  
の像を御手づから柳の木をもつて刻  
み給ひけるに太子は救世観音の御変化

にて観世音をきさみ給へはまことに  
正真の観世音なり偕太子は七日七夜

(34オ)

御いのりあればかたしけなや観音の御  
身より光明さし出御殿を照らし給へは御  
門の御脳たちまち御本腹ならせ給ふ事

なれば延命の観世音なりと思し召禁

庭に置奉つりては衆生の濟度にはなら

すと思し召太子御建立有りしてらの

うちに安置して衆生におかませ申べし

と勅定によつて近江国に十二ヶ所太子

御建立の内に安置し奉り帝の御脳

御本ふく有るにより延命を守り給ふとて

長命寺と名付給ひける太子御建立

(34ウ)

(35オ)

有りし寺は日本に四十八ヶ所あり忝なく  
も聖徳太子此仏を御祈一度あゆみを  
運ひしもの延命長久ちんみらいたす  
け給ふと御いのり有りし聖観音なり  
歳霜移りかわりて後村より出火有て悪  
風すさましく吹来りて村のこらす一ぢん  
のけむりと成り長命寺にも火かゝり  
しにかゝるあらたなる観音をのけ奉る  
坊主老人もなし其まゝわすれ置皆く  
逃けるか本堂は一面に火と成れば人々  
見て勿体なやけつかう成る観世音焼さ

せ給ふかと人々本堂の方をなかめいかに

観世音は松の木のかすへにとびあから

せ給ふをおかみ奉りあらありかたやと

手をあわせ居るうちに火は次第につ

よく此処にも居られすみなく逃ちり

けるそれよりまた其まつに火もへつきて

焼上れば観世音はそのあたりに池有り

しに此池にとびり給ふさてがらんはこと

くくやけ火しつまりて後観世音をさ

かし奉るに知るものなし松に上り給ひし迄は

(35ウ)

(36オ)

おがみしものあれともそれぎりにてにげ  
たれば堂も松もやけいづくへとび給ひし  
やら知るもの常人もなし其のち本尊も  
なきゆへ堂もたゝす跡は田地と成りてその  
中からん石の跡のみ残りて其まゝ中  
絶せしに弘法大師未だ空海と申て東寺  
にましませし時種物出来させ給ひ甚はだ

(36ウ)

いたみ大にこまり給ひてさまゝ薬を用  
ひられても平愈あらず段ゝにいたみて  
御難義成りしか惣髮の老人来りて加  
持たし直して進ずへしといふ弟子衆聞  
てはて扱とつけもなき事をいふ人かな  
和尚は真言第一の名僧なるに凡俗の汝  
加持などゝいふこそおかしけれと笑ひけれ  
は此翁いふやう成程真言第一の名僧み

(37オ)

なゝゝ大事におもわるゝは尤なれとよくゝ  
かてん有るへし薬といへば腹中へ入るものゆ  
へいかゝ氣遣ひも有らんか外よりまじ  
なひの事なればきかすはもとゝきけは  
仕合にて有ましやといへはいかさまにもと空  
海へ申上げれば何人にて直してくれうと

(37ウ)

あらは頼むへしとあれは弟子衆翁をよぶ  
おきなは空海和尚の前にて御身をなて  
さすりけるにこゝろよき種物のいたみも  
即座に直りすやゝと寝入らせ給ふ翁は  
退そきもはや御快気成るへしいとま申といひ  
て出行を先暫らくとゝむれとも振切て出  
行を然らはいづくの人にてましますそうけ  
給わりたしといへは近江国水海の浜辺に居る  
もの也と有るにより弟子衆浜辺は何と申  
所にて候やといふにはや翁は足早くあゆ  
み行姿を見うしなふ和尚御尋ねゆへ其  
通り申上げれば海辺と有れば尋ねて知  
れぬ事も有ましと仰ける扱二三日し  
て和尚は透と本腹なされける夫より  
空海は近江に行おきなをたつねゆき  
給ふにやす川に渡し舟二艘あり空海仰  
けるは修行の出家報謝に渡しくれよと  
仰ければ此高水に広き川をちんせんなし  
に渡して成るものかといへは一人の船頭出家  
の事なれば我舟にて渡し進すべしと  
て大師を渡しければよくこそ渡しくれ

(38オ)

(38ウ)

あらは頼むへしとあれは弟子衆翁をよぶ  
おきなは空海和尚の前にて御身をなて  
さすりけるにこゝろよき種物のいたみも  
即座に直りすやゝと寝入らせ給ふ翁は  
退そきもはや御快気成るへしいとま申といひ  
て出行を先暫らくとゝむれとも振切て出  
行を然らはいづくの人にてましますそうけ  
給わりたしといへは近江国水海の浜辺に居る  
もの也と有るにより弟子衆浜辺は何と申  
所にて候やといふにはや翁は足早くあゆ  
み行姿を見うしなふ和尚御尋ねゆへ其  
通り申上げれば海辺と有れば尋ねて知  
れぬ事も有ましと仰ける扱二三日し  
て和尚は透と本腹なされける夫より  
空海は近江に行おきなをたつねゆき  
給ふにやす川に渡し舟二艘あり空海仰  
けるは修行の出家報謝に渡しくれよと  
仰ければ此高水に広き川をちんせんなし  
に渡して成るものかといへは一人の船頭出家  
の事なれば我舟にて渡し進すべしと  
て大師を渡しければよくこそ渡しくれ

(39オ)

たり舟賃を遣わすへしと仰ければ銭は  
たゞ渡せとの事成りしに何をか下さるへきや  
といへは其方が為に成るものをやるべし  
と筆と持来れと仰けるゆへふしきながら  
出家の事ゆへ仰にしたかひ近き家にてか  
りて出せは空海其舟に字ふとく大にかな  
にてふねと御書なされければ舟頭かいわ  
く是は舟に知れたる事といへは是をけづ  
りて狐付乱心難産其外何にてものみ

(39ウ)

せよ直るへしと仰られて行給ひけるゆへか  
はつたる事をいふ出家しかし心見よとてさ  
るわひ乱氣のやうなる者あればのませ見る  
にたちまち直りけるそれよりたんく聞つ  
たへもらひに來りさきくよりたゞはもら  
はす心さしの礼をすれば此舟頭大に仕合  
いたしける空海はかやうにばち利生を成し  
て通り給ひしなりさて空海は近江の  
国浜辺所くにかやうの翁は此へんにな  
きやとたつねあるき給ふ事十日にも成りし  
かと知れさりけりかほと尋ねて知れされは  
もはや知れましと思召ける所に山中に

(40オ)

百才斗のおきなけんふを石にてこすり  
居るゆへ此翁に此あたりにまじなひをす  
る翁はあらずやと尋ね給へはいや其やうなる  
ものはなしと有る空海も今はせんかた  
なくこれほと尋ねあるくに知れずもはや  
知れまし帰るへしさて翁はそのげんのうを  
すりて何にするそと尋ね給ふに是をすり  
へらしはりにする也と有り空海おど  
ろきけしからぬことなり年わかき

(40ウ)

にてもなし年はいくつとあれはもはや  
百才余りと有るそれに此鉄をすりへら  
し針に成るまで日かす何ほとかゝるへ  
しとのたまへははて今年中にならねは  
針に成るまでいつまで成りともこすり針  
にする也いかに空海気みしかしく十  
日ばかり尋ねあわぬとて精をつかして  
は何の修行にてもとゝかすとあれは空  
海思召はさては此おきなたゞ人にてはなし  
とおほしめし御身はいかなる御方そ名のり  
給へとあれは其まじなひをせし翁は則  
我也我此所にすむ事年久し此水海

(41オ)

は

(41ウ)

山と成り海と成りし事七度までおほへ  
たれば八千年のよはひをたもつ我誠は  
白鬚明神なり其所の池に正真の観  
世音水底にしつみ給ふ事凡五十年  
なり此観世音は聖徳太子刻ませ給ふ所の  
観世音にして延命長久を守り給ふ長  
命寺の本尊也しにうつもれ有る事を  
かなしみ空海に知らせ此池より汝か法  
力をもつていのり出し申へしと有けるか神  
風さつと吹来れば翁ぞと見しは御へいと

(42オ)

成りはるかのそらへ飛上らせ給ふ空海御  
なみたを流しあら有かたやと御跡を伏  
おかみ給ふ処に中仙道にて翁鉄をすり  
針にせんといひしは白鬚大明神と弘法  
大師と御行合なされし所ゆへすり針峠  
といふ也それより大師は池にむかひいのらせ  
給ふ水中の魚へ川のゑんを切て空海か  
祈る所観世音の御心に通つうしあからせ給ふ  
末世の衆生をたすけ給へやといのり給ひし  
に観世音水底に光明をはなち給へは大師  
は水のいんをむすひ給へは水はさつと両方

(43オ)

へわかれ水底の観世音あり〜とおかまれ  
させ給ふおなしく空海の衣のそでに  
とまり給ひ大師の御かたに下りさせ給ふ  
それよりふたゝひ本堂を建立し中興開  
山弘法大師とするなり  
弘法大師は定に入らせ給ひて後送り  
号なり御存生の間は空海和尚  
と申せしなり  
御詠歌  
八千とせや柳になかき命てら  
はこぶあゆみはかさし成るらん

(43ウ)

一 三十二番近江国神崎郡石寺村観音寺  
本尊千手観世音御長三尺  
聖徳太子御作なり  
人皇三十四代推古天皇御代聖徳太子は  
甲斐の黒駒に召れ調子丸秦河勝跡  
見のいちいを召つれられ国々津々浦々  
まで御まわりなされ弘法をひろめ給ひ  
しに神崎郡にてあしはらの中より聖  
徳太子をよひねかわくは聖者大悲をたれ

(44才)

我くげんをすくひ給へといふ声有り何国  
成るそとさかさせ御らん有るにかつて姿を見  
せすふしぎや今の声する処はまさしく此  
あたりなりいかなる迷ひのものかその姿  
をあらはせよたすけ得さすへしと仰けるに  
御位におそれことに見くるしぎすかた成る

(44ウ)

ゆへ御目にはかゝらすともあいみん慈悲をたれ  
給へたすけ給ふといふにいやとよいかほと見  
苦しくともくるしからず姿を見せでは多かうし  
助け取らすへからすと仰ければ然らば御ゆるし  
をうけ申せしと出たるその姿三尺はかり  
頭は女のかほにてからたは魚也川勝市位は  
これを見ておとろぎけるか太子御らんし  
是人魚といふもの也めつらしきにあらす扱  
いか成る功德を成して助かるべきやと御尋  
ね有るにはつかしなから我前生にては堅  
田のうらにすむ彌師にて御座候か明け暮  
殺生をいとなみと仕るにより邪見に

(45才)

して仏神三宝をおかむ事なく安閑として  
一生をくらし其むくひの罪只今海中の  
魚やつと成つて此うらに鯉鮒よろづ

(45ウ)

の魚集まりて鱗の間より血を吸出され  
其くるしみたとへて申ものなし此苦し  
を聖者の御とむらひをうけて助かり度候と  
いへは太子いか成る法事をして得さすへし  
望みありやと御尋ね有れば千手観音の尊  
像を刻みわかばたひを御弔ひ下され此  
所に観世音を安置して未代殺生の見こ  
らしとも成り申候御とむらひの功力にて  
未来は観世音のけんそくとなり申へしと  
ねかひけるかすかたは其儘かくれけり夫よ  
り太子御長三尺の千手観世音をきざみた  
まふ人魚かために一字を御建立有りて  
寺号を観音寺と名付近江国太子建立

(46才)

の十二ヶ寺のうち利生うゑんの観世音に  
てあれば太子はすなわち救世観世音の御  
変化なれば正真の観世音なり扱太子の  
御とむらひにあい奉りし人魚仏果を得て  
その後太子の御夢に御弔らひの功力にて  
成仏し観世音のけんそくと成たりその印に  
是人魚のしかひ浜辺にうかみ有るへしと  
の御夢を御らんして則浜辺へ御出あつて

(46ウ)

御らん有るに違ひなく人魚の死がい波に  
うち寄られて浜に有るを取上させられ  
て此寺の証拠末代までの什物と成るべし  
と仰せられ観世音の宝もつとなり

しか年ひさしくそれより代々の兵火に  
て定めて今は有るましと成りなほほど  
大切のものにても時節にて滅する事也

(47オ)

西国の札所三十二は近江国いし寺むら  
観音寺と成給ふ人魚の節若狭の国  
の事国名風土記にあり若狭にて有  
徳なるもの集まりさまの珍物をほと

(47ウ)

とのへの料理しけるに人魚を料理いたしける  
人くすかたを見てたれも喰ふものなし  
七斗成る娘の子魚をくふとて子供こゝ  
ろに何のわきまへなくくひけるかとした  
ちて一家二門知音みなく死にはてし  
に此むすめばかり生て尼と成り八百年  
生てかほかたち年よらす十六七の姿  
なり三百年五百年まへを覚へ居るふしき  
成るものといふ事都に聞へ禁庭へ召れ  
五百年六百年さきの事を御たつね有るに

(48オ)

その時くの事く申上げるに禁庭のひか  
へに少しもたがわず八百年も生たるに  
かほかたちもかわらず年のわかさよと  
仰られけるより若狭の国と付たり人魚  
はよはいをたもつもの也

御詠歌

あなとふと道ひき給へ観世音

とふき国よりはこふあゆみを

三十三番美濃国谷汲華嚴寺

観世音

(48ウ)

十一面観世音象の木にて御長七尺五寸  
変化童子の作なり開山豊然上人

観世音の出来させ給ふ願主大くら

信光なり

開山豊然上人なり浄土宗の元祖法然

上人にてはあらず同名にして文字ちかふ也  
此豊然上人諸国あんきや執行有りしに  
此谷汲にて旅にくたひれ野伏して夜

(49オ)

をあかし給ふに夜中にあふらくさしいか  
したる事そと夜あけて見給ふに谷よ  
り流るゝ水にきらうきて油くさし是

(49ウ)

を汲てともし火に用ふるによく燈りける  
ゆへふしき成る土地なりいかさまやうすも有  
らんとしはし此所に居てやうすを見んと  
柴の庵りを結び居給ふにさん多一はつの  
けうがい也ころは人皇五十代桓武天皇の  
御代なり奥州に大くら信光といふもの有  
り奥州金売吉次といふものゝ先祖にて  
南海紀州熊野へまいり権現に大願をかけ  
三十三度参詣いたし申たと奥州の果

(50オ)

より紀州熊野まで一年二年三年五年と  
まいりてつゐに心願成就し三十三度まで  
参詣しけるが有かたやつゐにねかひは満た  
り此願むなしからすとて末世まで利生の  
有る観世音を一鉢霊木にて作り申へしさり  
なからいかゞして霊木をもとめんと奥  
州なが井文珠へ七日断食してこもり  
末代の衆生をけやく成し給ふ利生う  
多んの観世音の像に成るへき程の霊木  
いつくに御座候そおしへさつつけ下され  
候やうにとねかひしに七日に満する夜の  
あかつき方に十四五成る美しき見と成

(50ウ)

り給ひ御告有汝か帰るなか井の里田地の中  
に榎の木有るへし此木をもつて十一面  
観世音をささみ申ならはまことに正真  
の観世音末代済度の本尊なるへし此木  
をもらひかけなは心よくくれるなりとの  
御告なりありかたよくおもひ長井の里を  
さして帰る奥州なか井の文珠丹後

(51オ)

きれとの文珠大和あべの文珠是日  
本三文珠といふなり然るに果して榎の木  
ありしに其あたりかきゆひまわし注連  
をはりてあり其かたわらに百性老人有  
りしに此木いか成る木にて候そ持主はいづ  
くそととふに是は恐ろしき木にて枝た  
にても折るか葉にてもさわれば鼻血出るか  
ねつ病に成るか目を廻すかたちまちたゝり  
有る夫ゆへに斯の通りに置なり餘りそ  
はへより給ふな持主はずなわち我也といふ  
然らはこの木をもらひたしくれられよ  
といへは此まゝにして置のか又は持ゆくの  
かどとふにくれられ候は、切取りかへるなり  
といへはけしからぬ事をいふ人かな是程恐

(51ウ)

り給ひ御告有汝か帰るなか井の里田地の中  
に榎の木有るへし此木をもつて十一面  
観世音をささみ申ならはまことに正真  
の観世音末代済度の本尊なるへし此木  
をもらひかけなは心よくくれるなりとの  
御告なりありかたよくおもひ長井の里を  
さして帰る奥州なか井の文珠丹後

(52才)

ろしき所を切たらはさそやきびしくしたより  
有るへし取てもらへは処のものは悦申なり  
然れとも何として切らるへきやといふに然らば  
いよ／＼くれらるへし我この木を切とも  
たゝる事なしとて夫より柚あるひはぼん  
じやう地くるまをもち来りかの榎木をき  
るに人々集まり此おそろしき榎の木を  
切る人出来りいか成るたより有らんと見物  
のものおひたゝしくあり大くら信光は此  
木にむかひ草木国土悉皆成仏たとひ

(52ウ)

何ほどの靈木にてもこのまゝにては人々  
の信もうすく観音にきさみ奉り候  
間崇りなく切れ給へと十一面観世音と  
成し奉り末代の衆生濟度ましますた  
めなりと心のうちに念し皆／＼より  
てきるへし今はたゝりなしといへとも皆人  
／＼はおそろしく思ひよりつかず然らば  
信満切へしとて斧をふり上南無大慈大  
悲の観世音ほさつと唱へ二打三打斧  
目を入れけるに何事もなし斯のごとく  
成ればみな／＼よりて切へしといふそれよ

(53才)

(53ウ)

り大勢して難なく切たをし地車にて  
信光か方へ引取けるか然れとも此木をもつ  
て刻ます程の仏師あらずそれゆへ大そふ  
成る事なれとも都へのぼり仏師をもとめ  
んと榎の木を奥州より引きのぼり旅宿  
をとりて仏師をたつぬるに都にもよき  
仏師なくいかゝすへきと案し都より永  
井の文珠へよき仏師御知らせ下されよと  
いのる所に一四五斗成るそまつなるわつば  
来り大くら信光と申御方は是にて候やと  
尋ぬるにいかにも此方也といへは仏を御作り  
なされ度仏師を御せんぎのよしわれら  
きさみ進ずへしといふいかにもその通り  
なれども作る処の木靈木にてあれば卒尔  
にあつらへかたしといふ成るほとその事  
われよく知れりあつらへ給へきさみ進ず  
へしといふ信光心にかさまにも只人に  
あるましとおもひ成ほど御たのみ申へし  
十一面観世音をは刻み給われと頼みし  
かは心得たりと請合然らば別家をしつ  
らひ給はるべし三七日の間にきさみ立べ

(54才)



(54ウ)

しそのあいたかならずのそぎ給ふ事な  
かれ食事じしょくしも入申さずといふて別家べつやに入  
内うちよりしりぜんかけかねにて戸をしめ  
湯水ゆみづもいらすこもり居る信光は三七日  
をゆびおりして待遠まちとくくおもひしに三七日  
日の夜信光か枕元まくらもとにて今こそ願ねがひの  
観世音成就くわんぜいおんじゆじゆせりいでく拜おがみ給へと大おほく

(55オ)

へして呼よほわりける信光おとろきて起て見る  
に童子どうしは見へす有かたや十一面観世音誠まことに  
末世衆生まごしゆじゆ濟度利益じゆどりやくの正真しやうしんの尊像そんざう御長みぢやう  
七尺五寸たゞせ給ふ信光なみたを流ながしあら  
有かたやかたしけなしと拜まがみ奉り夫より  
嵯峨さあがにてけちゑんのため諸人におかませ  
貧ひんなるものには金銀をあたへそれより  
して生しやう國奥州くわうしゆへ御とも中て下るに美濃みの

(55ウ)

の国今の谷波たにくみの所にて観世音にわか  
に大ばんじやくのごとく重おもらせ給ふてか  
き上る事あたわすこれはいかにとふしん  
をなしいかる事にやと人くあき居る  
其ころ此所は奥州街道くわしゆかいだう也然るに信光は観  
世音うこき給はさるゆへ思し召有へしとお

(56オ)

もひ此所に野陣やぢんをとり一夜とまり観世音  
の御まへにて通夜つうやしていか成る事にて此  
所にて動うごかせ給わぬや凡夫ぼんぶの身成れは観  
世音の御心をぞんし奉らす思し召仰せ下  
さるへしと夜中御たつね申せしに明方あけかたに  
御声ごこゑ高く奥州はあまり辺土へんどゆへ西国  
のものともを濟度ざいどするにゑんなく此所  
に居れば東国とうこくまた西国さいこくよりもあゆみをは  
こびけるゆへ東西ともに濟度するに縁有  
れば此所に居るへしまた山に名僧めいそうある  
問たつねて我を渡すへし末代まつたひまで

(56ウ)

燈明とうめいのあぶらは先達まゐちて出し置たりとの  
御告ごつこなり信光はつとかなるいし扱さもく  
有かたき思し召と夫より山にゆき名僧  
をは尋ねしに庵いほに観念くわんねんし居らるゝ  
僧ありさては此御僧の事なるへしと思ひ  
信光始終しんじゆをかたればふしきや拙僧せつそうも今  
朝方夢あさかたむともなくうつともなく十一面観世  
音おん来らせ給ひ此所に一字の堂だうを建安けんあん

(57オ)

置せよ燈明とうめいの油あぶらは先達まゐちて出し置たる也と  
の給ひしか其尊像そんざうは十一面観世音にて候

(57ウ)

かと有る信光いよ／＼きゐの思ひを成し  
 観世音を渡せは豊然上人礼拝し給ひ  
 てたんこんみめうの尊像末世の衆生濟  
 度あり誠に正眞の観世音十一面の千手  
 なりと夫よりいほりを一字の堂と成しか  
 く有かたき尊像なればとて西国のまは  
 りおさめとおかみ奉る靈木の十一面観  
 世音もんじゆぼさつの御告作は變化  
 童子開山の豊然上人寺号は華嚴寺  
 也谷汲寺といふは谷より燈明のあぶら  
 を汲ゆへに名つくるなり扱また仏師な  
 きゆへ永井の文珠を念し童子の仏師  
 来り給ひしかはまた文珠の作とも申なり  
 西国順礼廻りたる人は十かの徳なり詠  
 歌を聴聞のともからも其十分一とも成  
 るへしとの事なれば随ふんとのふる人も  
 聞居る人も信心してねかふべきもの也  
 十かの徳とは  
 一つには大火大水横死の難盜賊の  
 難をのがるゝなり  
 二つには悪ちく悪難どくむし毛もの

(58ウ)

にあひ死する事なし  
 三つには毒薬むしつの難をのがる  
 四つには雷電落馬にて死せず  
 五つにはあつき病やくなんをのかる  
 六つには巨海ひやう船海川のふねに  
 乗けかする事なし  
 七つには寿命長久子孫繁昌を守  
 り給ふ  
 八つには諸神諸仏庇護に預る  
 九つには諸願成就せずといふ事なし  
 十には諸々の罪障滅して極楽  
 浄土へ向ふべしとの御ちかひ也  
 右十か条の徳かく有かたき事  
 うたかふへからす  
 御詠歌  
 けさまてはおやと頼みしおゐづるを  
 ぬぎておさむる美濃の谷汲  
 万代のちかひをこゝにたのみ置  
 みつは苔よりいつるたにくみ  
 世を照らす仏のちかひ有ければ  
 またともし火はきへぬ成りける

(59オ)

(59ウ)

(58オ)

(60オ)

肩にかけし三幅のきぬは慈悲の三体  
として中は阿弥陀如来両わきは觀世  
勢至としたるものにて始終背中に負  
奉りまわる事なりさすれば十種の功德  
有るへき事なりかならずうたかふへからず  
西国順礼同行なれば六人と書なり六人  
なれば七人とかく一人つゝ多く書事は  
おひづるを親とも師ともおもふこゝろにて  
銘々おめてまわるゆへ同行壱人つゝ多  
く書事なり

(60ウ)

普陀洛伝記 卷の三拾大尾

## 執筆者紹介

小山 正文

(客員所員 同朋大学非常勤講師)

ジョアキン・モンテイロ

(客員所員)

石川 洋子

(所員 同朋大学助教授)

黒田 佳世

(客員所員 愛知教育大学非常勤講師)

高橋 良政

(客員所員 日本大学助教授)

本論文の著作権は、筆者もしくは同朋大学仏教文化研究所に帰属しています。本論文に含まれる情報を、個人利用の範囲を超えて転載、もしくはコピーを行う場合には、仏教文化研究所による事前の承諾が必要となりますので、以下までご連絡ください。

【連絡先】 同朋大学仏教文化研究所

: 052-411-1373 e-mail: bc-inst@doho.ac.jp

### 同朋大学佛教文化研究所紀要 第十六号

平成 九年 一月 二十 日 印刷

平成 九年 一月 二十六日 発行

名古屋市中村区稲葉地町七一  
同朋大学佛教文化研究所

編集者 所長 織田 顕信  
編集代表 渡辺 信和

電話 ○五二一四二一一一一  
内線七九七

発行所 同朋大学佛教文化研究所

印刷所 有限会社三星印刷